ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉―閃光の刃―

睦月師走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉―閃光の刃―

【Ｎコード】

Ｎ５２５８Ｕ

【作者名】

睦月師走

【あらすじ】

女性にしか扱えない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」――通称・ＩＳを何故か起動させることができた男・織斑一夏は、ＩＳ操縦者を育成するための学校、ＩＳ学園に強制入学させられてしまう。当然、彼の周囲は女の子ばかり……と思いきや、二人目の「ＩＳを使える男」が見つかる！　しかもその少年は、一夏の幼なじみ――箒手川桐斗であった！豊かすぎる個性をもつ少女たちに囲まれ、一夏と桐斗の波乱万丈のスクールライフが幕を開ける！？

「クラスメイトは一部男」（前書き）

どうも。初投稿でございます。
妄想を押さえきれずに書いてしまいました。
どうか長い目で見てやってください。

「クラスメイトは一部男」

春の心地よい風を感じている暇など、今の僕にはない。
現在進行形で走っている足を今止めたら、今以上にイヤな目に遭うのは目に見えているからだ。

（ああもう。こんな日に寝坊なんて、ついてない）

こんなことになるんだったら、昨日（というか今日の早朝）の夜勤のバイトは少し早めに抜けさせてもらうんだったな。最後だからって張り切りすぎた。

とはいえ、過去のことを今更になって悔やんでも仕様がない。今は目的地に着くことを最優先に考えよう。

そのまま走り続けること数分。
ようやく目的としていた場所が迫ってきた。

「よしっ！　到着！」

開放されていた門を通り、ついにその場所に足を踏み入れる。
いや、踏み入ってしまった、という方が正しいのかもしれない。
ここには、別に自ら望んで来たわけではないから。

「……でっかいなぁ」

視界に広がる光景を見て、率直な感想を述べてみた。
その敷地の広さもそうだが、建物の高さや幅はもちろん、グラウンドや施設等もハンパなくでかい。

ここは本当に学校なのか？　いや、確かにそういった物は必要な場所ではある事は認めるが、これは相当なものだ。
改めて、校門にある立派な看板を眺める。

『ＩＳ学園』

その看板には、確かに、はっきりと、これ見よがしにそう刻んであった。
さて、なんで僕はここにいるんだったかな――？

「あぁー……。三月とはいえ、まだ寒いなぁ……」

三月初め、僕は中学三年生。つまり卒業間近だった。
大半の同級生が高校を受験するのとは違い、僕の進路は就職。
一時期の就職氷河期と呼ばれた時代が終わっていてくれて、本当に良かったと思った。

「なんでスタジアムの中なのに、こんなに寒いんだろ……。絶対に暖房壊れてるって……」

実際はちょうど暖房の風も届かない位置にいたから、という事に気

がついたのは、家に帰る直前だった。

新しく建てられたスタジアムは新設セレモニーというお祭り騒ぎを終え、僕は後片付けの真っ最中だ。何故そんなことをしているのかというと、答えは簡単。アルバイトだから。

人間、生きていくためにはお金が必要だ。

もちろん夢や希望も大切だと思うが、現代を生きるにはそれだけじゃ食べていけない。何をするにもお金は必要なんです、悲しいけど。

だからこそ、僕はこうやってスタジアムの清掃というアルバイトをして正当にその見返りを求めている訳だ。

「伯父さん達に迷惑かけるわけにもいかないし……」

僕には事情があって両親がいない。ここ数年は伯父夫婦が様子を見てくれていたが、迷惑をかけているのに間違いはないから気が引ける。

だからこそ、さっさと自立したい。それ故の進路だった。

アルバイトは昔からやっていたから、もう癖みたいなものだ。貧乏性と言われたらそれまでだけど……。

「あれ？」

その休み時間中に、僕はポケットの中の異変に気づいた。

清掃員の制服のポケットにさっきまであったものが、なくなっている。

「ヤバい……財布落とした……！？」

これは本当に困った。

ただでさえ広くて構造がわかりづらいスタジアムのどこかに、あの手のひらサイズの財布を落としてしまった。休み時間を財布探しに

潰してスタジアムを巡る。
このスタジアムを設計した人は頭がおかしい。
だって無駄に螺旋階段があるし一部屋でいいだろう場所を壁で二部屋、三部屋と隔てている。
「なんだ、この『やりたいことをやるために僕は作ったんだ』みたいな作りは……」
というのはめちゃくちゃな見取り図を発見した時の僕の感想。
おかげで無駄な体力と気力を使ってしまった。
「次……次でてこい……。ていうかもう、お願いしますマジで……」
二十部屋ぐらい回った僕は、重い扉を開く。
そこは何かの機械がたくさんあって、それとコードで繋がれていた『それ』を、僕は見つけた。
なんていうか、見た目は『派手な色の鎧武者』って感じだった。鎧は、忠誠を誓った武者が自らの主人に頭を垂れるようにして停止している。
でもそれはよく見たら甲冑じゃなくて、僕みたいな感想を持つかどうかも人それぞれだろう。
だけど、魂のなさそうな雰囲気は明らかにあった。
僕は『それ』の名前を知っている――。
「ＩＳ……？」

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかし『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた――所謂、飛行パワードスーツだ。
しかしこの『ＩＳ』には、致命的な欠陥がある。

「女性にしか使えない、か」

そう、女にしか使えない。女以外には、反応しない機械なのだ。
だから男の僕にとっては何の意味もない。ただそこにあるというだけ。
確かセレモニーの時にＩＳの空中演舞もあったらしいけど、きっとその時に使われたものだろう。
どちらにせよ、僕には意味のない。
しかし、その『意味のない物』の上に、ちょこんとなにかが乗っているのを僕は発見した。
手のひらサイズの黒い四角形。材質は布で、ちょっと厚めだ。
ていうか、もう間違いない。

「あ、あった！」

僕の財布は、何故かＩＳの上で鎮座していた。
何故ここに、という理由を考える事なく、僕は部屋に入って財布を取った。
そうすると、必然的に手がＩＳに触れる。
――その瞬間だった。

「！？」

キンッと金属音が脳を刺激する。
そしてすぐ、意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。
数秒前まで知りも、知ろうともしなかった『ＩＳ』の基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ｅｔｃ．……。
まるで長年付き添ってきたもののように、磨いてきた技のように、すべてが理解、把握できる。
そして視覚野に接続されたセンサーが直接意識にパラメータを浮かび上がらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「え……？」

僕は確信した。
動くのだ。女にしか使えない『ＩＳ』が。それも己の手足のように。
これが、『ＩＳ』という機械が僕にとって『意味のあるもの』となり、僕という男が二番目に発見された『ＩＳを使える男』となった日だった。

――さて、回想はここまでにして現状を再確認しよう。

今僕は高校一年、入学式当日。そのちょっぴり複雑な記念すべき日に数時間も遅刻してしまうという大ポカをやってしまった。入学式は確実に終わっていて、校舎らしき巨大な建物から聞こえてくるのは、全て女子の声。庭にある木には小鳥の巣箱が乗っかっていて、雀が可愛く顔を出す。……最後のは関係ないな、うん。
パアンッ！　ぼーっとしてるといきなり頭に衝撃が。

「いっったぁッ！？」

おそらく背後から何かで叩かれた。
何故わかったのかというと、この痛みには覚えがあったのだ。
切れの良い手首のひねり具合といい、相手を粉砕せんとする容赦の無さ。
軽く戦慄したほどだよ。
痛む頭を抱え、おそるおそる振り向いた。
黒のスーツにタイトスカートを纏い、すらりとした長身の身体は鍛えられているが決して過肉厚ではない。極めつけには、狼を思わせる鋭い吊り目。そう、その姿はまさに――

「ギャーッ、織田信長！？」

パアンッ！　また叩かれた。これ、すっごく痛いです。その音があまりにも響くもんだから、雀もびびって逃げちゃったよ。だが、その選択はある意味大正解だ。

「誰が戦国時代の鬼か、馬鹿者」

トーン低めの声。その声は昔と少し変わっているけど、口調とその人が放つ刃物のような雰囲気で予想は確信になった。

「……お久しぶりです、千冬さん……」

パアンッ！　もう一発、僕の頭に衝撃が。千冬さんの得物は黒い出席簿。

知らなかった。見慣れた出席簿がこんな破壊力を秘めていたなんて。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「まったく。初日から遅刻するとは、えらく余裕だな。何か言い訳はあるか？　え？　篭手川桐斗（コテガワ キリト）」

わあ。再会の挨拶も無しに殺すぞオーラ全開だよ。千冬さんらしいや。

「ほぅ……なるほど、私らしいか」

どうやら会わない内に読心術を身につけたみたいだ。僕がこの人にかなう日なんてきっとこない。

このＩＳ学園で教師をしているっていうのは聞いていたけど、まさかこんなに早く会うことになるとは。

「……バイトの夜勤明けで、寝坊しちゃって」

「この貧乏性め。まあいい。さっさと行くぞ馬鹿者。入学式はとっくの昔に終わったから、お前は教室に直行だ」

やっぱりそうなりますか。

カツカツ歩いていく千冬さんの後に着いて、校舎に入っていく。

しばらくの沈黙の後、声をかけてきたのは千冬さんだった。

「しかし、まさかお前までもがＩＳを使えるとはな。私の周りには厄介な事例を抱え込んだ者が多いようだ」

「……僕だって未だに信じがたいですよ。ＩＳなんて特に興味無かったのに、何ででしょうね？」

「知るか」

ばっさり切られた。わかってたけどね。

そう。何故男である僕がこの女の園と呼ばれるＩＳ学園にきたのかというと、ＩＳを動かせるからだ。男なのに。データ取りとかそういう理由で、内定を貰っていた就職先を蹴ってこの学園に半強制的に入学させられた。

ま、ちょうど良い取引ができたからいいけどね。

ＩＳの操縦者となる人材を育成を目的とする教育機関があるのは、世界にたったひとつ。つまり日本のここだけだ。

ＩＳが生まれたのは日本なんだから、当然といえば当然か。

ていうか、僕が本当に聞きたいのはそんな話じゃない。

「織斑先生。あの二人はどうしてますか？　二人共入学したって聞きましたけど」

「相も変わらず……といったところだ。まあ、他人に尋ねるよりもお前の目で実際に確かめるがいい」

カツッ、と千冬さんが歩を止めた。僕もそれに習って止まる。

どうやら目的地に着いたみたいだ。見上げた先に示された文字は、

『一年一組』。うん、幸先良さそうな数字だ。

「では篭手川。私が先に入るから、お前は私が呼んだら入ってこい。いいな？」

「了解です」

そう返すと、千冬さんは無言で教室に入っていった。

……いやー、ほんっと変わってないなぁ千冬さん。

確か最後に会ったときは高校生だったよな、あの人。そのまま大人になったって感じだ。

そこまで考えていたとき、パアンッ！　とさっきまで僕が聞いていた音が教室から漏れてきた。

『げえっ、関羽！？』

明らかに女子のものではない声の直後に、再び　パアンッ！　が鳴り響く。

これ、端から聞いたら若干引くなぁ……。

『キャーーーーッ！　千冬様、本物の千冬様よ！』

『ずっとファンでした！』

『私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！』

『あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！』

『私、お姉様のためなら死ねます！』

突然騒ぎ出した女子の黄色い声援には、本気で引いた。きっと扉の向こうにいる千冬さんはさぞかしうっとうしそうにしているんだろうな。ご愁傷様です。

『きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！』

『でも時には優しくして！』

『そしてつけあがらないように躾をして～！』

ドン引きだ。

数秒後に、パアンッ！　とまたあの音が響いた。

これで三度目、僕と同じ回数叩かれたということか。

こっちもご愁傷様。

「ぐ……」

ちくしょう。千冬姉に叩かれた頭が痛みやがる。俺、織斑一夏の脳細胞、一万五千個は確実に天に召されたな。

ていうかなんなんだあの出席簿。出席簿にあんな力があったなんて聞いてねえぞ。

隣に座ってる幼なじみの箒はといえば、俺のこと無視したり睨んだりばっかりだし。

しかも俺以外は全員女子の学園で過ごすなんて……前途多難だ……。

俺の実姉であり、第一世代元ＩＳ操縦者の元日本代表、織斑千冬は教壇の前に立つ。

「さて、ＳＨＲを終わらせたいところだが諸君に報告する事がある。さっき到着したばかりの遅刻者が外に控えているから紹介しておこう」

遅刻者？

確かに、この一年一組には誰も使っていない席がひとつだけあった。その席の位置は最前列の真ん中。つまりは、俺の隣だ。

どうやら千冬姉は俺の隣に座る、その遅刻した女子を連れてきたらしい。

「では。篭手川、入れ」

（コテガワ？）

千冬姉が呼んだその名前に、俺は引っかかりを覚えた。

コテガワ――、なんか覚えがあるような……。

「はい」

応えるように言われたその声は、女子にしてはハスキーなものだった。

しかしそいつが教室に入ってきたとき、俺はそれが間違いである事を、教室のクラスメイト全員と同時に知る。

そして、もうひとつ別の理由で驚いた。

驚いたのは俺と、おそらく箒だけ。

新たに教室に現れたその姿には、覚えのある面影が残っていた。

コテガワ――篭手川――――――篭手川桐斗。

「篭手川桐斗です。よろしくお願いします」

自己紹介をしたそいつが俺に向けて小さく言った言葉によって、それまでの予想は確信に変えられる。

「久しぶり、一夏」

三年前に別れたもう一人の幼なじみは、あの頃と変わらない笑顔を俺に見せた。

「金髪ロールはたいていお嬢様キャラ」（前書き）

桐斗の性格がハッキリしない件について……
うぅ、設定ちゃんとつくらないと……

文才が欲しいです……

「金髪ロールはたいていお嬢様キャラ」

「あー……」「うぅ……」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって今は昼休み。
僕は隣に座る、先ほど再会を果たした幼なじみで千冬さんの実弟、織斑一夏と同時にうめき声を漏らした。
だって、周りの視線が凄いんだもの。
『ＩＳを使える二人の男』に大層興味を持たれた女子はたくさんいて、教室どころか廊下にも他のクラスだけでなく、二、三年の先輩らが詰めかけている。
見せ物になったみたいで、あまりいい気分じゃないなぁ。

「な、なあ。久しぶりだな、桐斗」

その空気に耐えきれなくて気を紛らわそうとしたのか、一夏が話しかけてきた。
僕としてもありがたい。久々に話したいし。

「ああ。小学校を卒業してそれっきりだったから、だいたい四年ぶりだね」

僕と一夏の関係を表すなら、幼なじみというのが一番しっくりくる。
小学校の頃からつるんでいたけど、僕が卒業と同時に引っ越したから中学は一夏と別だった。

「いやあ。お前、昔とあんまり変わってないからすぐ分かったぞ。背が高くなったぐらいか？」

「そう？　一夏だって雰囲気が昔のままだよ」

そう。『雰囲気』は全然変わってない。変わったのは、昔よりも顔立ちが男前になっているというところかな。

きっと中学時代の一夏はフラグを立てまくったね。間違いない。

「……ちょっといいか」

「え？」「ん？」

周囲からの視線を忘れかけていた時、突然別の声に話しかけられた。

「……箒？」

「……」

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になるもう一人の幼なじみだった。

篠ノ之箒。一夏が昔通っていた剣術道場の子。僕たちが九歳の頃に引っ越してしまった女の子だ。

少し不機嫌そうに見える目つきは本人曰わく生まれつきらしいけど……僕たちが睨まれたのは間違いないだろう。名前で呼んだのは一夏なのに。

箒のことだから、きっと一夏に用事だろう。箒は一夏に惚れていたからな。

「廊下でいいか？」

教室では話しにくいことなんだろうか。

「それじゃ一夏、行ってらっしゃい」

「待て、お前もだ……」

睨みの鋭さが増したのは、きっと気のせいじゃない。
まあ、箒とも話したかったし別に断る理由もないけど。

「早くしろ」

「お、おう」

すたすたと廊下に行ってしまう箒に、そこに集まっていた女子がざあっと道を空ける。すごい、けどどこかシュールな光景だった。
そういうわけで廊下に出たんだけど、僕達から四メートルほど離れた所には聞き耳を立てた女子の包囲網が張ってあるし、なんだか一組の男女の仲を邪魔しているみたいでさっきとは違う意味でいづらい。
なんで僕まで呼ばれたんだろう……。

「そういえば」

「何だ？」

ふと思い出したという風に、一夏が話を切り出した。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「あ、そうだったね。おめでとう」

「……」

箒は僕達の言葉に、口をへの字にして顔を赤らめた。……あぁー。
一夏に褒められて照れてるよ。この娘ったら。
でも怒ってるみたいにも見えるって事は、まだ素直になりきれてないんだな。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし……」

「僕も同じ」

正しくは、配達中の新聞だけどね。ウチは新聞取ってなかったし。

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

箒。流石にそれは無茶振りだよ。
一夏もちょっと困っているみたいだし、助け舟でも出しておこう。

「あ、それから」

「な、何だ！？」

「……」

「あ、いや……」

流石に自分の剣幕に気づいたみたいで、ばつが悪そうにする箒。う

ん、えらいえらい。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったよ」

「え……」

「だってほら、髪型一緒だし」

そう言うと、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。どこか嬉しそうだし、うまく機嫌を直せたみたいだな。

「よ、よくも覚えているものだな……」

「そりゃ忘れないって、幼なじみのことくらい」

「……」

ギロリ。あれ。　なんで僕が睨まれるんだ？

「……それはそうと、なんでお前がここにいるんだ」

ムスッとしたまま、箒が訪ねてきた。

「いや、箒が来いって言ったんじゃ――」

「そういうことじゃない。なんでお前が、ＩＳ学園の生徒になっているんだ」

ああ。そっちか。まあ当たり前だけど。

「そうだ。俺も聞きそびれてたな。ニュースや名簿にもお前の名前は無かったのに」

「うん。まあ、いちから話せば長くなるから中略するけど――僕も一夏と同じでＩＳを動かせたんだ。でもそれがわかったのが二週間ぐらい前で、学園に入学するのが決まったのも最近だったから一般的に公開されるのはもう少ししてからなんだ」

僕としても顔や名前が公表されるのはいい気がしないので、これはありがたかった。もし一夏と同じだったら珍獣扱いされていただろう。今がまさにそうだけど。

「そうだ。桐斗のやつ、小学卒業するのと同時に転校したんだぜ。だから俺も会うのは久しぶりなんだよ」

「……そうなのか」

「うん。だからこんな所でまた会えるなんて思わなかったな。なんかさ、運命を感じるよ」

「なっ、う、運命……！？」

あれ？　言ってみただけなんだが、箒がやけに興奮してる。顔も真っ赤だし。

「確かにそうだな。俺たちって、切っても切れない仲だったりして」

「な、なな、何を言って――」

キーンコーンカーンコーン。

おっと、時間だ。二時間目開始をしらせるチャイムで、僕たちを遠巻きに見ていた包囲網が散っていく。

「さて、俺たちも戻るか」

「そうだな。ほら、行こ」

「わ、わかっている！」

ん？　箒、やけに興奮してるな。顔が真っ赤だ。

一夏がまたフラグでも立てたのかな？　だとしたら一夏の奴、腕を上げたなあ。プラスとマイナス、両方の意味で。

その一夏はというと、また変なことを考えていたののか箒に睨まれていた。

あ。一夏、危な――

パアンッ！

「とっとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

遅かった。

これで本日四回目だ。

◇

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読み上げていく副担任、山田真耶先生。
身長が低めなその人が着ている服はサイズが合っていないのかだぼっとしている。かけている眼鏡も大きめで若干ずれているから、『子どもが無理して大人の服を着ました』みたいな印象をうけてしまう。悪くいえば、ちょっと頼りない感じがする。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」
そんなことを考えていると、山田先生が一夏にわざわざ訊いてきた。

「あ、えっと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

少し自慢そうに胸を張る山田先生。ごめんなさい先生。僕、さっきまで貴女のこと頼りないかもとか思ってました。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

正直すぎる一夏のセリフに、山田先生の顔が引きつった。……どうやら、頼れる先生はどこかへ旅立ったみたいだ。

「え……。ぜ、全部、ですか……？　え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

挙手を促す山田先生。

手を挙げたのは、たった一人。

「こ、篭手川くんもですか！？」

ええ。恥ずかしながら、僕も全くといっていいほどついて行けなかったです。

ていうか何なの。あのアクティブなんとかやら広域ほにゃららって。全然わからん。

「……織斑、篭手川、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「燃やして暖をとり――嘘です読んでないです、だから角をこっちに向けないでください」

パンパアンッ！

小気味良い音が二発、連続で鳴り響いた。なんとか平たい所で勘弁してもらえたけど、やっぱりすごく痛かった。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿共。織斑の分はあとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ、篭手川もだ。いいな」

「い、いや、一週間であの厚さは……」

「少し無理が……」

「やれと言っている」

「「……はい。やります」」

ギロッと僕たちを睨む千冬さんは、悪魔の皮を被った人間だと思う。人間の限界を知っていて無理をさせる分タチが悪い。
僕自身、ある交換条件はあったものの、自ら進んでこの学園に来たわけではないし。

「……貴様ら、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

ギクリ。何故バレた。一夏も図星を突かれたみたいな表情をしている。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

相変わらず厳しいお言葉だ。現実と直面しろってことだよな。

「……」

それなら、ある意味で僕の得意分野だ。。やるしかないな。

「え、えっと、織斑くん、篭手川くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、がんばって？　ね？　ねっ？」

山田先生が両手をぐっと握って詰め寄ってくる。僕たちよりも身長が低いから、必然的に上目遣いになっていた。

「ありがとうございます、山田先生」

「それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

僕と一夏はそれだけ言うと席に着いた。

千冬さんも教室の隅へ戻って行く。

「ほ、放課後……放課後に一緒の教師と生徒……。あっ！　だ、ダメですよ、二人とも。先生、強引にされると弱いんですから。しかも二人同時だなんて……それに私、男の人は初めてで……」

いきなり頬を赤くしてそんなことを言い出した。山田先生、大丈夫なんだろうか。ＩＳ操縦者は男に免疫ないって話を聞いたけど、山田先生はきっと特殊なケースだ。ていうか、周囲の視線が痛い。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……篭手川くんも好みのタイプですし……」

「あー、んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

千冬さんの咳払いでようやく妄想から帰ってくる。

山田先生は慌てて教壇に戻って――こけた。

「うー、いたたた……」

（大丈夫なのか？　この先生……）

そう思ったのは僕だけじゃないはずだ。

「ダメだ、無理、ついていけない……」

「がんばれ桐斗、耐えるんだ。俺なんて脳細胞五千個は死んでる……」

「……何の話？」

二時間目の休み時間。僕と一夏は仲良くしゃべる屍になっていた。もちろん比喩で。

なんなんだ、あの意味不明な専門用語のオンパレード。そしてそれを理解してるみんなも凄すぎだろ。

こんなことになるんだったら、バイトの合間に参考書を読んでおけば良かったな……。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」「ん？」

すると、僕たちはいきなり声をかけられた。
話しかけてきたのは、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の青い瞳が、ややつり上がった状態でこっちを見ている。
わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。
今の世の中、ＩＳのせいで女性がかなり優遇されている。女＝偉いという女尊男卑の社会が形成されているほどだ。
つまり、悪く言えば『偉そう』な女子。しゃべり方とかから察するに、それなりにいい身分なのかもしれないが。
確か、自己紹介で色々言っていた女子だった気がする。

「訊いてます？　お返事は？」

「う、うん」

「ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「「……」」

正直、僕も一夏もこの手合いの女子は苦手だ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「確か……セシリア・オルコットさんだっけ？」

一夏と違い、僕はセシリアの名前を覚えていた。僕の直後に印象的な自己紹介をしたもんだから、当然だろうが。

「あら、そちらの方はまだマシな頭の作りをしているようですわね。そのとおり、わたくしがイギリスの代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコットですわ」

む。今のは温厚な僕でもちょっとムカついたな。確かに一夏はどうしようもなくニブくて馬鹿正直でいっつも千冬さんに頭が上がらないけど、いいところだってたくさんあるぞ。

しかし大人な僕はそれを抑えてセシリアを見る。

「ねぇ。ちょっと質問いいかな？」

「あ、俺も質問」

「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「「代表候補生って、何？」」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子が、僕と一夏のハモった声にずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなた方っ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

「うん。全く」

「……」

セシリアは怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまでして未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

あるけど基本的に見ないし、コンセントも抜いてます。節電になるからね。

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……単語から想像したらわかるでしょう」

「あ、本当だ」

「そういわれればそうだ」

簡単なことほど見落としやすいよな。

「ていうことは、キミはイギリスのエリートってことか」

「そう！　エリートなのですわ！」

わあ、復活した。さすがは代表候補生。いや、知らんけど。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

ものすごい上から目線だなぁ。

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

一夏の平坦な言葉にセシリアの眉が傾いた。そりゃ今の反応は怒るよ。

「大体あなた方、ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園にはいれましたわね。ＩＳを操縦できる二人だけの男性と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺たちに何かを期待されても困るんだが」

ちょっと待て一夏。なんで僕までその枠に入れられているんだ。

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなた方のような

人間にも優しくしてあげますわよ」

十五年生きててはじめて見るタイプの優しさだね、そりゃ。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、をものすごく強調された。――って、ん？

「入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？　俺も倒したけぞ、教官」

「は……？」

一夏が言ったことが相当ショックだったのか、セシリアの目が驚きで見開かれた。

「わ、わたくしだけだと聞きましたが？」

「女子では、ってゆう意味じゃない？」

ピシッ。いやな音が聞こえた。しまった、今のは失言だったか。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あ、あなたはどうなんですの！？」

びしっ、と彼女の人差し指が僕に向けられた。

僕の場合は……まあ、ＩＳを動かしてたら操作ミスして、それがそのまま体当たりになって壁に衝突。そしたら相手が気絶したってだけだから、勝った……のか？

「あー、倒した。……たぶん」

「たぶん！？　たぶんってどういう意味かしら！？」

「ま、まあまあ。落ち着いて」

「これが落ち着いていられ――」

キーンコーンカーンコーン。

話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。今の僕たちにはありがたいことこの上ない。

「っ……！　またあとで来ますわ！　よくって！？」

いいえ、逃げます。でもそう言ったら怒るだろうから、無言で聞き流す。一夏が頷いているから、あとは任せることにしよう。

教室に千冬さんと山田先生が入ってきた。さあ、全くついて行けない授業のはじまりだ。

「スイッチと昔のあいつ」（前書き）

まだまだクオリティーが低いですが、頑張ります。

「スイッチと昔のあいつ」

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。――ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

一、二時間目とは違って、山田先生にかわり教壇に立っている千冬さんが、ふと思い出したように言う。

うん？　クラス対抗戦？　代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が騒がしくなる。つまり、面倒な仕事をする役を決めるっていうのはわかった。うん、やりたくないな。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「なら私は篭手川くんを推薦します！」

「私も篭手川くんに一票！」

そりゃそうなるよな。だっていやでも目立つもん。

ていうか、一夏。絶対『織斑ってこのクラスにもうひとりいるのか』みたいなこと考えてるだろ、その顔は。

「では候補者は織斑一夏、篭手川桐斗……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

今ごろになって一夏が現実を直視して立ち上がった。

さて、どうやってクラス代表になるのを回避するか。この状況だと一夏に押し付けるしかないんだけど――。

思案を始めた僕の意識は、突然、甲高い声とバンッという音で引き戻される。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

立ち上がった声の主は、あのセシリア・オルコットさんだ。これは使える。うまくいけば、彼女が勝手に代表になってくれるぞ。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

うわあ。そこまで言いますか。隠す気が微塵もない侮蔑の言葉にムカッときたが、我慢する。

「実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくししはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ついに人間扱いされなくなったか。ていうか、イギリスも島国じゃ

なかったっけ。

「いいですか！？　クラス代表はトップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

言葉を連ねる毎に勢いを増す、セシリアの怒涛の剣幕。
それを聞く一夏が不機嫌そうになったのを、僕は見逃さなかった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

カチン。
あ、ヤバ。確実に聞こえた。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

あーあ。言っちゃった……。
セシリアの顔が真っ赤に染まり、怒りを露わにした。

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？　決闘ですわ！」

バンッとまた机を叩くセシリア。なんか厄介な流れになりそう――いや、もうなっているか。一夏は怒ると必ずと言っていいほど面倒事を持ってくる。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど俺たちは腐っちゃいない。な、桐斗！」

――今、明らかにおかしいところがあった。

「……おい、なんで僕まで決闘するみたいな流れになってるんだ？」

「あそこまで言われたんだ。ここでやらなきゃ男が廃るぜ」

「ちょうどいいですわね。あなたも一緒に叩きのめして差し上げますわ！」

おいおい、あちらさんも乗り気なんですけど。

「で、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺たちがどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

一夏がそこまで言ったとき、クラスからドッと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

みんな本気で笑っている。
今の時代、男は圧倒的に女より弱い。何故かと問われれば、理由は簡単だ。単純にＩＳを使えるからだ。もし男女差別で戦争が起きたら男は三日も持たないと言われるほど、ＩＳは最強の超兵器なのだから。
――でも、それで一夏が笑われるのに僕は納得がいかなかった。

「……じゃあ、ハンデはなくていい」
「ええ、そうでしょうそうでしょう。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

セシリアが浮かべている表情には、さっきまでの激昂は消え、明らかな嘲笑が張り付いていた。
「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？　セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

僕の後ろの女子が一夏に気さくに話しかけた。けれど、その表情は苦笑と失笑の混じったもので、また、カチンと音がした。
さっきよりも鮮明なそれは、僕の頭の中から響いた音だった。

「男がみんな弱いだなんて誰が決めたんだよ。大体、一夏がＩＳを動かせる時点で立ってる土俵は同じだろ」

「え……」

全員が驚いて沈黙している。しかし千冬さんだけは、無表情でそれを眺めていた。
それに構わず、僕の口から言葉が放たれる。

視線の先には、高圧的な代表候補生。

「代表候補生だかなんだか知らないけど、こいつを見くびるなよ。上から目線で自分の足下も見えていないと、本気を出すことになるぜ」

「なっ……！？」

セシリアの顔が、再び怒りで赤くなる。

……しまった、つい言ってしまった。これじゃあ一夏の二の舞じゃないか……。

みんなまだシーンとしてるし。セシリアも何か言いたそうに僕を睨んでいる。何か言い返してくれ、その方が気が楽だ……。

気まずさで逃げたくなったそのとき、ぱんっと手を打つ音が教室に響いた。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。三人ともそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

手を重ねた千冬さんが、話を締める。数年振りに、この人に助けられたな。

それにしても、面倒事を自分から作ってしまうなんて……。不覚だ……。

◇

「う〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あぁぁぁぁぁぁ……」

セシリアから決闘の宣戦布告をうけた後の、休み時間。俺の隣で桐斗は机に突っ伏して頭を抱えていた。時々その手が頭をかきむしっている。

「……やっちゃった。完全に敵として認識されたよ……」

休み時間に入ってからというもの、ずっとぶつぶつとそう呟いていた。

どうやら、三時間目でクラスの女子に向かって言ったことを引きずっているらしい。

こういう他人の目を気にし過ぎているわりにたまに感情でものを言ってしまうところは、全然変わっていない。

ちなみに、セシリアは授業が終わると怒った様子でさっさと教室から出て行った。有言不実行だな。

（そんなに気にすることじゃないと思うけどな……）

実際、桐斗の言葉を聞いた女子の何人かが放心状態になっていた。女顔でおとなしそうな桐斗があんな挑発的なことを言ったから、というだけの理由ではないだろう。その言葉に心をうたれたからからだ。

その証拠に、ほら。

「お、織斑くん。その……さっきは笑っちゃってゴメンね？」

「私たち、言い過ぎだったよね」

あのときに俺を笑っていた数人の女子が、謝りに来ているぞ。
だからさっさと顔を上げなさい。
「いや、別に気にしてないから。そういうのは、俺よりも桐斗に言ってあげてくれよ」

「あ、うん。ホント、ゴメンね織斑くん」

そう何度も謝るな。俺が悪いことしたみたいじゃねえか。
桐斗はといえば、まだ後悔の念の圧力で呻いていて女子たちが謝りに来たのに気づいていない。彼女たちはさっきよりも気まずそうだった。無理もない。

「あ、あの……篭手川くん……？」

「……え。あっ、な、なに、どうしたの！？　あぁっ、さ、さっきはごめん！　なんか僕、頭に血が上ってたっていうか……」

「え……。いや、そうじゃなくて……」

「と、とにかくごめん！　それじゃ！！」

「あっ、ちょっと篭手川くん！？」

女子の話も聞かないまま、桐斗は教室の外へと駆け出してしまった。
逃げたな……。

あいつ、昔から女が苦手だったからな。この学園で過ごすのにも一苦労だろう。ていうか、ヘタに教室から出たら逆に目をつけられることに気づいてないのか……？
俺にはそういう苦手意識が無くいので、少し良かったと思っている。

「行っちゃったね、篭手川くん」

「でも、なんだか可愛いわよね。純情ってカンジで」

「あっ。わかるわかる。顔も可愛いしね。でも、あの台詞のときは格好良かったなぁ～」

「『上から目線で足下も見えてないと、本気を出すことになるぜ』って、織斑くんのことを信じてるみたいだったわよね！」

「そういえば、織斑くんと篭手川くんって仲いいよね。知り合いだったの？」

桐斗がモテだしたと思ったら、俺に話題をふられた。
隠す理由もないし、正直に話しても大丈夫だろ。

「ああ。桐斗とは小学校が一緒だったんだ。中学に上がるのと同時に、転校しちまったけどな」

俺がそう答えると、彼女たちは「やっぱり」という顔をして色めき立った。女子ってこういう話好きだよな。
俺としても、桐斗が来てくれたのは嬉しかったけど、まさかこんな場所でこんな形の再会を果たすとは、誰が予想できただろうか。

「昔の篭手川くんってどんな子だったの！？」

「私も詳しく知りた〜い！」

昔どころか今の桐斗のこともよく知らないだろ。

「今と変わらないな。俺も久々に会ったけど、昔のまんまだよ」

女子たちの「へぇ〜」という声が見事にハモる。

桐斗は本当に昔のままだ。雰囲気が全然変わっていない。女顔という特徴も昔からそうだったから、きっと中学生のころはモテていたんだろうな。

小学校でも女子に人気があったし。

「むぅ……」

桐斗の話題できゃいきゃい盛り上がる女子たちを見て、不機嫌そうにするやつがひとり。

そいつ——箒は、口をへの字にして女子を横目で睨んでいた。

（そういえば、箒って桐斗のこと好きだったっけ……？）

箒が引っ越す前のころ、箒はよく桐斗の世話を焼いていた記憶がある。あまり強気になれない桐斗の手を引っ張る箒の姿は、まるで姉のようだった。

まあ、明らかに好意は持っているだろう。

でも、きっと桐斗は直接告白したりしないと自分が想われてるってことに気づかないだろうな。鈍感だから。

そんなことを考えていたら、休み時間終了を告げるチャイムが鳴った。

帰ってきた桐斗がさっきよりも疲れているように見えたのは、言うまでもない。

「部屋割り。そしてハプニングへ」（前書き）

今回は書いていて楽しかった回です
フフフ、筆が進むって素晴らしい……

「部屋割り。そしてハプニングへ」

「覚悟はできてるな……？　桐斗……」

「そっちこそ。やっぱナシはきかないからね、一夏……」

わけのわからない授業を全て終えた放課後。僕は一夏と向かい合っていた。
一夏は不適に笑っているつもりだろうが、その額には脂汗がにじんでいて強がっているのが見てとれる。
かくいう僕も、握った手に汗を感じていた。
こんな展開は不本意だが、やるしかない。これは絶対に避けては通れない道なのだ。
どちらともなく、互いに拳を上げていく。
張り詰めた空気でわかる。ここから先は、真剣勝負だ。
一夏の瞳が鋭く光った。
今だッ――！

「「じゃんけん、ぽんッ！！」」

素早く、一度振り上げた拳を前に突き出す。同時に繰り出された僕たちの手は、それぞれ違う形を作っていた。
僕の手はさっきと同じ握られた拳のまま。対する一夏は、その拳から人差し指と中指だけがまっすぐにのばされたものだった。
つまり――

「ふっ。……勝った」

「ばっ、馬鹿な……！？桐斗は最初はパーを出す癖があったはずなのに……！？」

「おあいにく様、中学のときになおしたんだよ」

そういう一夏は、力んだときにチョキを出すのは変わっていない。
戦略の勝利だ。
さて、僕たちが何故ジャンケンごときでこんなに本気になっているかというと、理由は困り顔でこちらを見る山田先生――――の、手に握られたふたつの鍵にある。
ＩＳ学園は全寮制の学園だが、当然男子寮など無い。入学してから一週間は自宅から通学してくれと言われていたが、政府が急遽、無理やり寮に部屋を用意したらしい。
僕の家は学園とかなり離れているので、ありがたかった。
しかし、問題がひとつ。
大至急用意されたひとつの部屋、１０２６室。二人部屋として設計されたのだが、数の問題上、一人部屋として使用されることとなったらしい。そして、問題の１０２５室。前者の部屋の隣となるこの部屋にはすでにひとりの生徒が入っている。その生徒が男子であるはずがなく、強制的に女子と相部屋というわけだ。
女が苦手な僕としては、それはなんとしても避けたい。一夏も同じ気持ちで、僕たちは正々堂々、フェアな戦いを行った。その戦い――ジャンケン勝負を制したのは、僕だ。

「ぐっ……仕方ねえ、負けは負けだ……」

一夏が苦々しい顔で、山田先生から１０２５室の鍵を受け取った。
うむ。潔くてよろしい。
僕も残った１０２６室の鍵を受け取る。
ちなみに、荷物は千冬さんが持ってきてくれた。

あらかじめ用意した荷物を置いていたけどさ……それを勝手に家に入って、勝手に持って来るってのはどうよ、千冬さん……。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに、各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんと篭手川くんは今のところ使えません」

そりゃそうだろうな。大浴場って好きなんだけど、こればっかりは仕方ない。

「え、なんでですか？」

おいおい、隣の馬鹿がとんでもないことを言ったよ。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

当たり前でしょ。論理的に。

「ええっ！？　女の子に興味がないんですか！？　そ、それじゃあ、篭手川くんに！？」

「待ってください先生、なんで僕が出てくるんですか！」

ダメだ、この人あまり人の話を聞かないタイプだ。
山田先生のそんな発言を耳にして、廊下では俗に言う『婦女子談義』とやらが花咲いていた。

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「じゃあ幼なじみの篭手川くんも？　あの反応はフェイクってことかしら」

「織斑×篭手川……いい……いいわね」

「待って、篭手川くんがヘタレ攻めの可能性も……」

「ふたりの中学時代の交友関係を洗って！　すぐにね！　明後日までには裏付けとって！」

危険なワードが飛んだ気がしたが、無視しよう。きっとその方が身のためだ。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。ふたりとも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

校舎から寮までの五十メートルの間でくう道草なんて、そうそうないと思います。
千冬さんと山田先生が教室から出ていくのを見送って、一夏はため息混じりに立ち上がった。

「ふー……そんじゃ、行くか」

「そうだね」

僕も頷いて旅行鞄をふたつ、肩にかける。
朝から続いてきた女子からの質問攻撃で、正直もう限界だ。今日はもう寮でゆっくり休もう。

「えーと、ここが１０２５室だな」

「で、１０２６室はここ、っと」

僕たちは部屋番号をそれぞれ確認して、部屋に鍵を差し込んだ。
僕の鍵は回すと味よい音とともに、錠をはずした。

「あれ？　俺の方開いてるじゃん」

「先に相部屋の人が帰ってるんだね。ちょうどいいから、僕も挨拶していくよ」

どこであろうと、ご近所付き合いは大切だからね。
抱えていた旅行鞄を玄関から中に放り込む。ついでに鍵も再びかけておいた。

ガチャ。

「お邪魔しまーす」

「うわ。すげぇ……」

１０２５室に入ると、まず目に入ったのは大きいベッド。ベッドで寝た事なんてないが、たぶん一人用だ。だって窓際にも同じものがもうひとつある。見ているだけで浮き足立ってしまいそうな部屋だ。ああ。今までずっと貧乏生活だったから、なにもかもが眩しいよ。これが、国立ってやつか。

「……おおおお、なんというモフ感。これは間違いなく高いベッド＆羽毛布団だ」

「え、マジ？　……うわぁ、ホントだ。超快適だよ」

ああ、ヤバい。なんかかなり感動……。

男二人でで同じベッドに顔を埋めている姿は、端から見たらきっとキモいことこの上ない。誰にも見せられないよ。

って、あれ……？　そういえば、一夏と同室の女子は？

「誰かいるのか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。ドア越しなんだろう。声に独特の曇りがある。そういえば全室にシャワーがあるって言ってたっけ。

――ん？

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

あれ、すごい、いやな予感が、こう、ぞわぞわと。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之――」

「「――箒」」

シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たしたもうひとりの幼なじみだった。

同室の相手が女子だと思って出てきたのだろう。箒の姿は、体にバスタオル一枚を巻いただけだった。濡れた長い髪はポニーテールではなく、そのままおろされている。

白いバスタオルは箒の体をギリギリで隠していて、端からは瑞々しい太ももが出ている。健康的な白さをした滑らかな肌の上を、水玉が滑り落ちていく。

張り付いたタオル越しでもはっきりとわかる腰のくびれは、引き締まっていてさらに女性らしさをかもし出す。

しかも、タオルを押さえる手の下には、かなり大きな胸の膨らみが。確か体を最後に見たのは小四の頃の水泳授業だった。あのときの面影なんて微塵もない。箒って着やせするタイプだったんだね。――以上、〇・三秒の思考でした。

「……」

きょとんとした顔の箒に、きょとんとした僕と一夏。全国きょとん大会、狙えるかもね。

「い、い、いちか……きき、きりと……？」

「お、おう……」「あ、ああ……」

頷くと、箒はボッと一瞬で顔を真っ赤にする。
そのまま体を隠すように、タオルで自分を抱きしめた。

「っ……！？　み、見るな！」

「わ、悪い！」「ごご、ゴゴメンっ！」

慌てて顔を逸らす僕と一夏。しかし、一瞬だったけど、見えてしまった。抱きしめることで押し上げられた、あの胸の谷間が。そのせいもあって、心臓がバクバクうるさい。
ちらっと一夏を横目で確認してみると、顔が真っ赤だ。僕の顔も、そうなっているに違いない。

「な、な、なぜ、お前たちがここに、いる……？」

「いや、俺もこの部屋なんだけど――」

「ぼ、僕は隣だから、挨拶に――」

それからの箒の行動は早かった。さすが全国剣道大会優勝者。箒は壁に立てかけてあった木刀を取ると、一回転して上段打突の構えに。
そこから基本的だがきれいな低腰短歩で一気に間合いを詰めてくる。
――ってあぶなっ！

「うおおっ！？」

「わああっ！？」

ベッドから離れてその一閃をどうにかよける。

一夏はといえば、

「スマン桐斗！　生き残れよ！」

「裏切り者ぉぉぉっ！」

バタン！

ベッドから飛び降り、ドアから外へ逃走した。

残念ながら、僕のいる場所は壁と箒に挟まれていて、完全に退路を塞がれている。

一夏め、あとで覚えてろよ。

「はあああっ！」

「うわっ！？」

箒の容赦ない追撃が繰り出される。しかも連続で、さっきよりも鋭く感じられた。

「ギャーッ！！」

情けない悲鳴をあげて、必死でそれをよけていく。

髪にかすった時、いくらかの毛先がはらはらと散ったのはきっと気のせいじゃない。

「ほ、箒、ストップ！　マジで死んじゃうから止めて！！」

「えぇぇぇい、うるさいうるさいッ！！」

どうしよう、聞く耳を持ってくれない。

ていうか箒さん。そんな格好で動いたら危ないよ！　さっきから揺れまくったりチラチラ見えそうになったり、僕の精神がガリガリ削られていくよ！
疲れている身体でそのままよけまくっていたら、当然体力の底は見えてくるわけで、とうとう僕の足がもつれた。

「あっ……！？」

「なっ！？」

ぐらっ、と体が傾いていく。――箒に向かって。
ドサッ、と僕は箒を巻き込んで床に倒れこんだ。なんというか……
箒を押し倒す形で。

「ッ……！！」

シャワーを浴びた直後だからか、ほんのりと朱を浮かばせた肌がすごく色っぽくて、更に今の衝撃で少しはだけたタオルからは大きな胸が見えるか見えないかの瀬戸際で脳内にあふれる小さい僕がギャーギャー騒いでて地球の中心がふたつのプリンでああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

（こういうのは一夏の役割だろ！　ていうかなに幼なじみをそんな目で見てんだよ僕！　だいたい、箒が好きなのは一夏であって――――）

「な、ななっ、なにをするか、馬鹿ぁっ！！」

ゴツンッ！

「ぐおっ！」

真下にいる箒の頭突きは、思いのほかクリーンヒットした。
ありがとう箒。おかげで変な思考から抜け出せたよ。どんどん意識が遠くなっていくけど……。

◇

「きっ、桐斗っ！？　どうしたんだしっかりしろ！？」

部屋の前でドア越しで箒に殺されそうになったり、露出の多い女子たちに迫られたりした俺は、なんとか箒に部屋に入れてもらうことができた。
もちろん、今の箒は服を着ている。身にまとった剣道着の帯は、大急ぎで着たためか締め方が緩い。
そして、部屋に入った俺が見つけたのは、ベッドの上で倒れたまま動かない桐斗だった。気絶しているのか、目を覚まさない。なぜか、その額にはぶつけたような赤い痕があった。

「……箒。一体何があったんだ……？」

ギロリ。真っ赤な顔で睨まれた。すみません、なんでもないです。どすっと桐斗のいない方のベッドに腰掛ける箒。あ、こら、奥側は俺が狙っていたんだぞ。

「……」

むすっとした顔で、まだ濡れたままの髪を素早くポニーテールにまとめる。

「お前が、私の同居人で、そいつが隣人だというのか？」

「お、おう。そうらしいぞ」

「ど、どういうつもりだ」

「へ？」

「どういうつもりだと聞いているっ！　男女七歳にして同禽せず！　常識だ！　大体、何故男ふたりで同室ではないんだ！」

いつの時代の常識だよ、それは。いやでもしかし十五の男女が同棲――じゃない、同居するのは確かに俺も問題があると思うぞ。それに急遽って言っても、これは無理あるだろ。

「お、お、お……」

「お？」

「お前たちから、希望したのか……？　私の部屋か、隣がいいと……」

「そんな馬鹿な」

次の瞬間、木刀が飛んできた。

「あ、あぶねえっ！」

ギリギリ。本当にギリギリのところで木刀をキャッチして止めた。
いわば真剣白刃取り状態。

「馬鹿……馬鹿だと？　そうかそうか……」

ああ、顔が怖い。すげえ怖い。
箒は俺に木刀を止められたまま、それでも押し切ろうと体重をかけてくる。やばい、これはやばい。真剣じゃなくても真っぷたつにされそうだ。目の前にいるのは鬼神だから。

「うぅ……頭痛い……」

眠っていた桐斗が、むくりと起き上がった。助かった！

「き、桐斗！　助けてくれ！　このままじゃ死んじまう！」

「……」

しかし、助けを求める俺に返されたのは冷たい視線だった。
桐斗は俺を見たままため息をつくと、ベッドから降り、いろいろあって風穴の空いたドアへ向かう。

「僕はそろそろ部屋に戻るよ。また明日ね、ふたりとも」

「ちょっ、ちょっと待て！　まだ話は終わってないぞ！」

「おやすみー」

バタン。

箒の呼び止めにも応えず、ひらひらと手を振って出て行った。

……さっきの仕返しか。

その後、結局俺は木刀の一撃を受けた。

身につける物の変化を介して幼なじみの成長をしみじみと実感しただけなんだが、何故だ……？

「天才の姉を持つ少女」（前書き）

なんとか軌道に乗ってきました

「天才の姉を持つ少女」

「なあ……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもない。

今は入学式翌日の朝八時。一年生寮の食堂だ。
俺は箒と同じテーブルで食事を取っているのだが、昨晩からまともに会話が成立しない。

本当は桐斗も誘いたかったんだが、部屋に誘いに行ったらすでにいなかった。先に食堂に来ているのかと思ったが、右を見ても左を見ても女子しかいない。どこ行ったんだ、あいつ。
それはともかく、俺がいま食っている和食セットが結構うまい。
ちなみに箒も同じメニューだ。日本人ならやっぱり朝食は白米に限る。いやパン食も好きだが。

「箒、これうまいな」

「……」

無視かよ。

昨日の「ブラジャー、付けるようになったんだな」がそこまでダメだったのか？俺が何年千冬姉の洗濯物を扱ってきたと思っているんだ。今更女子の下着一つで騒げるほどウブじゃない。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな」

そしてこれも昨日から変わらない。周りでは女子が一定の距離を保ちつつも『興味津々ですよ。でもがっつきませんよ』というむず痒い気配の包囲網。

「じゃあ、あの後ろの可愛い子は？」

「篭手川って言ってたけど、そんな名前のＩＳ関係者っていたかしら？」

もしこれが沖合漁業だっらさぞかし――って、ちょっと待て。今気になるワードが耳に入ったぞ。

「篭手川くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「……僕、結構食べないと落ち着かないたちだから」

耳をすませば、複数の女子と会話する男子の声が聞こえてきた。真

後ろから。ていうか、すぐそこと言ってもいいくらい、はっきりと。

「って、すぐ後ろかよ！？」

「……おはよう、ふたりとも」

俺と箒が座る席と背中合わせに配置されたテーブルでは、三人の女子と一緒に食事をしている桐斗の姿があった。桐斗の表情は、気づかないでほしかったのか、助けてほしいのか、いまいちわからないものだった。

◇

（う、迂闊だった。まさかこんなことになるとは……）

昨日の一件で箒と顔を合わせずらい僕は、早めに朝食を取りに食堂へやってきた。だって、あんなこんなことがあったらさぁ……。濡れた箒の姿を思い出してしまって、顔が熱くなる。ああ、くそっ。消えろ煩悩！

それにしても、さっきから感じる視線がハンパじゃない。そこらじゅうからひそひそ声が聞こえてくる。

昨日と変わらぬ珍獣扱いだが、正直かなりキツい。

「こ、篭手川くん、隣いいかなっ？」

「え？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三人。僕の座るテーブルの近くに来ていた。

「う、うん……構わないけど」

うぅっ。今日も今日とてこの扱いか……。いつになったら落ち着いてくれるんだろうか。

僕の了承に三人のうち声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをしている。まだ数少ない生徒が、ざわめきだした。

「ああ～っ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」

「なんですって！？」

……ああ、うん、来たよ。一年生が八名、二年生が十五名、三年生が二十一名自己紹介に来たとも。追い返すわけにもいかないから、ちゃんと対応した。名前とか、ほとんど忘れてしまったが。ていうか、今時の十代女子はハンパない行動力を持っているよな。

それで、今日は朝から三名覚えないといけないようだ。

三人組は素早く席に着く。しまった、挟まれた。これでは、さっさと食事を終えて食堂を出て行くという作戦が非常にやりづらい。

和食セットの味噌汁を大盛にしてもらったのは間違いだったか。
さらに、僕の受難は続く。
食堂のざわめきが一層大きくなった。

「なあ、箒。何食う？」

「……」

「あ、和食セットか。やっぱり日本人は米だもんな。俺もそれにしよう」

「か、勝手にしろ……」

一秒もしないうちにその理由を理解した。
一夏と箒が、食堂にやって来たのだ。しかも、ふたり揃って。
一夏の性格上、箒と一緒の食事に僕を誘いにくるのがわかっていたから、早くに部屋を出たのに。これじゃ意味がない。
しかも、僕と背中合わせになるように背後の席に腰を下ろした。
幸い、どちらもこっちに気づいていない。
こっちの三人組も僕に注目していて、一夏たちが来たことを察していないようだ。良かったのやら、良くないのやら。どちらにせよキツい。

「そういえば、篭手川くんって織斑くんと小学校同じだったんだよね？」

「ま、まあね。卒業と同時に僕が転校したけど」

「そ、そうなんだっ！」

「へー。運命の再会ってやつだねー」「なあ……」
「そ、そんなところ」
「……」
「なあって、いつまで怒ってるんだよ」
「そういえばさ、織斑くんって篠ノ之さんと仲がいいの？　篭手川くんも昨日篠ノ之さんと話してたよね」
「お、同じ部屋だって聞いたけど……」
「……怒ってなどいない」
「顔が不機嫌そうじゃん」
「ま、まあ……いろいろあってね」
「生まれつきだ」
「え？　どういうこと？　詳しく教えてよ」
「箒、これうまいな」
「……」
「……あぁー、鮭が美味しい」
「あははっ。篭手川くんったら、オジサンみたーい」

そりゃそうもなる。なんだこれ。わざとやっているわけじゃないよな。全然落ち着けない朝食になったぞ。
しかも昨日鈍い音が隣から響いてきていたから、一夏のやつが箒の機嫌を損ねるようなことをしたようだ。ますます近寄りがたい。
しかし、この状況も苦しい。
できることなら、今すぐ食堂から逃げたい気分だ。
「篭手川くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「……僕、結構食べないと落ち着けないたちだから」

ちなみにこれは本当だ。バイト前などはしっかり食べておかないと、長時間の作業で身が持たない。体型にも健康にも影響は全くないため、この食事体制は長い間続いていた。
ていうか、この女子たちは逆に少なすぎる。
三人ともそれぞれトレーに乗ったメニューは違うものの、飲み物一杯にパン一枚、おかずが一皿（しかも少なめ）というものだった。
女性は実は結構食べるって聞いたけどな。
そんなことを考えていたら、背後から声が飛んできた。ていうか、今更だ。

「って、すぐ後ろかよ！？」

「……おはよう、一夏」

とりあえず、挨拶をしておいた。
きっとこのときの僕はすごく複雑な顔をしていたのだろう。

「お、おう……」

「あっ！　織斑くんだ！」

「おはよー」

「お、おはようございます」

三人組も、一夏と箒に気づいた。
ギロリ。
その三人を見て、箒が鋭い目で僕を睨んできた。やっぱ、昨日のこと怒ってるんだな……。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？　ああ。また後でな」

食事をすませた箒は席を立ってしまう。

「あっ……」

ヤバい。謝らなきゃ。わざとでないとはいえ、あんなことを……いや、思い出で恥ずかしがってる場合じゃない。悪いことをしたんだから、箒に謝らないと。せっかく再会できたのに、これじゃ気分が悪い。「ちょ、ちょっと待って、箒――」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……」

名字で呼んだら、立ち止まった箒はむすっとしていた。名字嫌い、相変わらずなんだな。まあ、確かにこの名字は訳ありだから――て、そうじゃない。

僕はちゃんと席から立ち上がって、箒に向き直った。

「あー……昨日は、ごめん。おでこ、大丈夫？」

“昨日”というワードで、箒の顔が真っ赤になった。

「……問題ない、じゃあな！」

早口でそう言い、きびすを返して食器を返却すると、食堂を出ていってしまった。

ダメだ。完璧に怒ってる。

「織斑くんと篭手川くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「ああ、まあ、幼なじみだし」

一夏がさらりと答えると、周囲が大いにどよめいた。誰かの『え！？』という声が聞こえたほどだ。

「え、それじゃあ――」

僕の隣の女子……えっと、谷本さん？　が質問をしようとしたところで、突然手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

現れた千冬さんの声がよく通る。途端、食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った。なにせこのＩＳ学園のグラウンド、一周が五キロあるときたもんだ。

僕は残っていた最後の味噌汁をすすった。

ちなみに千冬さん一年生寮の寮長も努めているらしい。相変わらず、文武両道だ。一体いつ休んでいるのかわからない。千冬さんはタフだから、あまり心配はいらないかもしれないが。

（それより、問題が山積みだなぁ……）

箒と仲直りしたいし、セシリアとの決闘もある。決闘の件は来週なので、それまでに操縦の技術を物にしなければならない。

（箒に教えもらおうかな。仲直りのついでに）

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはーい、質問しつもーん！」

「今日のお昼ヒマ？　放課後ヒマ？　夜ヒマ？」

「いや、一度に訊かれても――」

二時間目の休み時間。昨日の様子見は終わりを告げ、一夏の前には女子のが長蛇の如く列をつくっていた。

『もう出遅れるわけにはいかないわ！』とか聞こえたのは、きっと気のせいじゃない。モテモテだな、一夏。

「っていうか、桐斗！　なに整理券配ってるんだよ！？　しかも有料で！！」

「甘いな一夏。人生とは常に商売なんだよ。あ、一人一枚、百円ね」

塵も積もれば山となる、ってね。高校生の財布にも痛くない値段だから、結構売れる。

「篭手川くんの券はないの？」

残念、品切れです。もともと出してないけど。

「……」

一夏を囲む集団を少し離れた位置で見ているのは、僕らの幼なじみこと箒だ。怒っているみたいに見えるのは、きっと今は実際に怒っているからだ。いや、怒っているというより、妬いているのか。

「愛されてるな、一夏」

小声で呟いたから、一夏には届かない。それよりも質問に答えるの

に忙しそうだった。
「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」
「え。案外だらしな――」
パアンッ！
「休み時間は終わりだ、散れ」
おお、いつの間に。噂をすれば影ってやつか。
さて、さっさと席に――
パアンッ！
「篭手川、それは没収だ」
だからいつの間に背後に。しかし僕は潔く儲けた小銭を差し出す。
これ以上叩かれたくないし。
「ところで織斑に篭手川、お前らのＩＳだが準備まで時間がかかる」
「へ？」「え？」
「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
各生徒にお金を返し終えた千冬さんの言葉に、教室中がざわめいた。
「せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に、二機も！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」

みんなが羨ましがるなか、言葉の意味を理解できずに置いてきぼりの僕と一夏。どういうことかさっぱりだ。

すると、千冬さんが見るに堪えかねたという感じでため息混じりにつぶやく。

「織斑、教科書六ページ。音読しろ」

一夏は教科書をめくって、内容を音読した。

その内容を要約するとこうだ。

1．ＩＳは世界に４６７機しか存在しない。

2．ＩＳの中心たるコアは、ＩＳ開発者である篠ノ之博士にしか作れない。博士はコアをもう作っていない。

3．各国家・企業・組織・機関では限られた数のコアを使う。

4．コアを取引することは禁止されている。

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前たちの場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

つまり、実験体ってわけか。理解できた。ちなみに篠ノ之博士とは――

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者な

んでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと千冬さんに質問する。……まあ、篠ノ之なんて珍しい名字だし、そりゃあバレるか。

――篠ノ之束。ＩＳをたったひとりで作り、完成させた世界一と言われる天才。千冬さんの同級生で、そして箒の実姉だ。僕も何度か会ったことがあるが、完全に僕らとは違う世界で生きているみたいな人だった。

しかも、ＩＳを世界に公開してからすぐに行方をくらました。おかげで今は世界中から絶賛手配中。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おい、教師。そんなあっさりと爆弾発言していいのか。

「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度ＩＳの操縦教えてよっ」

おー。一夏の二の舞だ。箒の元に女子がわらわらと集まっている。

「……なあ、桐斗」

それを見ていた一夏が、少し真面目な顔を僕に向けてきた。

「なに？　一夏」

「箒って束さんのこと――」

「あの人は関係ない！」

突然の大声。箒から発せられたそれに、僕たちは動きを止めた。
箒に群がっていた女子に至っては、何が起こったのかわからない様子だった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことはなにもない」

そう言って、箒は窓の外に顔を向けてしまう。
女子はそれぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。

「……箒って束さんのこと、嫌いだったっけ……？」

「……少なくとも、あのふたりが一緒にいたところは見たこと無いね」

互いにしか聞こえない声で一夏と話す。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ」

千冬さんの一声で、教室の空気がわずかだが変わった。

「あとで箒に話を聞いてみようぜ……」

「さりげなく、ね……」
そう言葉を交わして、教科書を開いた。

「幼なじみ＝三角関係？」

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

そうですか、セシリアさん……。

休み時間、早速僕らの席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう言った。やっぱり苦手だ、こういう人。

一夏も相手にするのに疲れているみたいだ。

「まあ？　一応勝負は見えていますけど？　さすがにフェアではありませんものね」

「？　なんで？」

人を見下したセシリアの発言に、一夏が反応した。

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし――」

「あ、そっか。オルコットさんはもうイギリスの代表候補生だから、もう専用機を持っていてもおかしくないな」

「ああ、なるほど」

「……あなたねぇ……」

あ、しまった。自分から言いたかったのか。

「じゃあ、すげーんだな。どうすげーのかはわからないが」
「馬鹿にしていますの！？」
ババン！　うわっ。両手で机を叩かれた。あ、一夏のノートが落ちた。
「……こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」
「そ、そうなのか……」
「そうですわ」
「人類って今六十億超えてたのか……」
「そこは重要ではないでしょう！？」
ババン！　あ、今度は教科書が落ちた。セシリアさん、ツッコミはもう少し加減をしないと。
「あなた方！　本当に馬鹿にしていますの！？」
ちょっと待って。なんで僕まで。
「いやそんなことはない」
「なんで棒読みなのさ……」
さすがにツッコミを入れた。

これ以上机を叩かれたら僕の筆入れまで落ちそうだ。

「なんでだろうな、箒」

ギンッ！　という音付きで視線が飛んできた。この間０．８秒。『私に振るな！』と無言で告げている。新記録かな。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

セシリアの矛先が箒に向き、鋭い視線で応戦する。

「妹というだけだ」

怖っ。セシリアが「う……」て怯んでいるほどだ。こら、やめなさい。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっ髪を手で払ってきれいに回れ右、やっと立ち去ってくれた。

やっぱり、ああいう人は苦手だ。

それを見計らって、一夏が席から立った。

「箒」

「……」

「篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」

「他に誰か一緒に行かないかな？」

僕も席を立つと、適当に振ってみた。
ちょっと恥ずかしいけど、幼なじみのためだ。
「はいはいはいっ！」
「行くよー。ちょっと待ってー」
「お弁当作ってきてるけど行きます！」
おお、見事に食いついた。やっぱり一夏をエサにすると大漁だな。
箒には悪いけど。
「……私は、いい」
「まあまあ、そう言わずに。一夏、そっちお願い」
「おう。ほら、立て立て。行くぞ」
「お、おいっ。私は行かないと――う、腕を組むなっ！」
僕は箒の左腕を、一夏は右腕と無理やり組んで席から引き剥がした。
ふふん。箒が拒否することは予想していたから、対策は万全だ。前の休み時間に一夏とたててていたからな。箒はこうやって強引に動かせば正解だ。
「歩きたくないの？　じゃあ、僕がおんぶしてあげようか？」
「なっ……！」

ボッと顔を赤くする箒。よし、ここまでやればイヤでもついてくるだろう。

「は、離せっ！」

「学食についたらな」

「い、今離せ！　ええいっ――」

次の瞬間、一夏の体が浮いた。しかしそれは一瞬で、その体は腰を軸にきれいに回転を始めるが、一夏は重力と力の流れに従って背中から床の上に投げ飛ばされた。

箒の視線が、今度は僕に向いた。

あ、ヤバい。と思ったのは、強烈な足払いを受けたのと同時だった。

結果、僕も背中を床に思いっきり打ちつけた。

「「……」」

ああ、めちゃくちゃ痛い。遅れて、蹴られた脚と背中に激痛が走った。周囲の女子は、ぽかんとそれを眺めている。

「腕上げたなぁ」

「うん。全く見えなかった」

「ふ、ふん。お前たちが弱くなったのではないか？　こんなものは剣術のおまけだ」

それはそうと、集まってくれた女子はそれを見てドン引きしてますが。

「え、えーと……」
「私たちやっぱり……」
「え、遠慮しておくね……」
あー。女子が蜘蛛の子を散らすように退散していっちゃった。せっかく恥ずかしいの我慢して頑張ったのに。
一夏は床から起きあがると、服についたほこりを払う。
「箒」
「な、名前で呼ぶなと――」
「飯食いに行くぞ」
がしっ。箒の手を強引に掴んだ。
「お、おいっ。いい加減に――」
「ほら、桐斗も早く立てよ。行こうぜ」
まったく。すごいよ、一夏は。
「あはは。ごめん、一夏……」
「へ？」

「脚痛すぎて立てない」

「えぇっ！？」

僕の言葉に動揺した箒だが、はっとすると「私は悪くないぞ」といいたげにそっぽを向いた。
いやあ、ホントに見事だったよ。あの蹴りは。
僕は苦笑をこぼし、上体だけを起こす。

「学食はふたりで行ってきて。僕は休んどくから、購買でパンでも買ってきてくれるか？」

「あー……わかった。ひどいようなら保健室に行けよ？」

「ああ。了解」

苦笑しながら言う僕を、一夏は少し名残惜しそうな顔で見ていた。
箒は、さっきからちらちらとこちらに視線を移していた。

「大丈夫だってば。大したことないよ。だからいっておいで」

箒の表情が、少しばつが悪そうなそれになる。
次にはあ、とため息をついたのは、一夏だった。

「ああ……ほら、行くぞ箒」

「あ、ちょっと、待てっ……！」

「待たん」

床に腰をついたままひらひらと手を振って、その背中を見送る。
ふたりは廊下に出て、その姿は見えなくなった。
さっきまでの後ろ姿は、あの頃と変わっていない。毎日が楽しくて、苦しいことなんて塗りつぶしてしまえる、懐かしい日々。
今の僕は、あの頃からどれだけ変わったんだろうか。
少なくとも、僕は変わった。何が変わったのかはわからないが、確実に変わったんだ。
そして、箒も変わってしまった。時折見せる表情は、昔のままなのに、それを隠しているみたいだ。
でも、一夏は変わっていない。なにも隠さず、何にも屈さず、なによりも強い。大人らしくなったものの、子どもの頃に見てきた織斑一夏は三年経ってもそのままだった。
（ホント、一夏はすごいな）

「こ、箒手川くん。大丈夫？」

見れば、傍観していた女子が僕に駆け寄ってきていた。心配そうなその顔には、わずかに箒への非難を感じた。

「ああ、大丈夫。ちょっと出てくるから、一夏たちに訊かれたらそう伝えてくれるかな？」

「う、うん。いいけど、脚……」

「大丈夫だって」

女子の言葉を制して僕は立ち上がった。あっさりと。

「え……」

「それじゃ、よろしく」

ぽかんとする女子をおいて、僕は廊下へ出た。さて、箒がちゃんと一夏に甘えられているか心配だけど、屋上で時間を潰しとくかな。駆け足で、僕は屋上へ向かった。

◇

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

「僕は、なんとも……」

時間は放課後、場所は剣道場。そこで、俺と桐斗は箒に怒られていた。

昼食のとき、箒にＩＳのことを教えてくれ、と頼んだら剣道場に来いと言われた。腕がなまってないか見てやる、ということらしい。せっかくなので桐斗も一緒に、と思って連れてきたとき箒は複雑そうな顔をしていた。

とにかく、俺と桐斗は箒と手合わせをしたが、結果は惨敗。俺は開始十分で一本負けし、桐斗は五分で一本負け。面具を外した箒の目

尻はつり上がっている。
「どうしてここまで弱くなっている！？」
「受験勉強してたから、かな？」
「……バイトばかりやってました」
「……中学では何部に所属していた」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」
「右に同じく……」
桐斗、やっぱりお前も俺と同じくバイト仲間だったんだな。
「――なおす」
「「はい？」」
「鍛え直す！　ＩＳ以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」
「え。それはちょっと長いような――ていううかＩＳのことをだな」
「だから、それ以前の問題だと言っている！」
「あの、そもそも僕は剣道素人なんだけど」
「昔は私や一夏のまねをして手合わせ程度はしていただろう！　あ

のときのカンを取り戻せ！」

うわあ。すげえ怒ってる。桐斗に無茶ぶりまでしやがった。

「情けない。ＩＳを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか、特に桐斗！」

「僕かよ！？　だから僕はド素人だって――」

「そういうことではない！　男として、悔しくはないのかと訊いているのだ！」

いや、お前全国大会で優勝とかしてるじゃん。力の差とか歴然としてるだろ。

「そりゃあ……確かに格好悪いとは思うけどさ」

「格好？　格好を気にすることができる立場か！　それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか？」

おいおい箒。それはちょっと言い過ぎだろ。いくら温厚な桐斗でもさすがに怒るぞ？

予想通り、桐斗はむっとした表情になった。

「そんなわけないだろ！　こちとら痛い目にあってばかりじゃんか！　昨日なんて、気絶するほどの頭突きを――あ」

そこまで言って、桐斗の動きが止まった。続いて一瞬で顔が赤くなり、目だけが動く。その視線は、箒の体をなぞるように見ているよ

うだった。
それに気づいた箒の顔も、何故かボッと爆発したように真っ赤になる。

「う、うあああああああああああああッ！」

バシーン！　間一髪、振り下ろされた竹刀を、桐斗は竹刀で受け止めていた。しかし、とっさの反応で握ったからか、桐斗は竹刀を逆手に持っていた。
うわ、待て馬鹿。今防具外してるんだぞ、死んじまうって！

「ご、ごめん箒！　今のはその、男として当然の反応といいますか、えっと……」

「わ、忘れろ！　忘れろぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

「ひぃぃっ！？」

会話の内容はさっぱり見えないが、桐斗は逆手一文字のまま箒のむちゃくちゃな攻撃をなんとかさばいていた。
あれ？　なんか、正しい構えより上手くやれてね？

「い、一夏！　見てないで助け――」

「うあぁッ！！」

あ。これは当たるな。

バチーン！　箒の横なぎに振るわれた竹刀が、きれいに顔面に入った。

篭手川桐斗。ＩＳ学園での通算三回目のノックアウト。
桐斗、よそ見は禁物だぜ？

「はーっ、はーっ、はーっ！」

興奮のしすぎで肩で息をしている箒に、俺は近づくことをはばかられた。俺だって命は惜しい。

「織斑くんと篭手川くんてさあ」

「結構弱い？」

「ＩＳほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと聞こえるギャラリーの落胆した声。
こんな有り様じゃ、何かに勝つなんて――それどころか、誰かを守るなんてできるはずもない。
久々に味わう、底辺の気持ちだった。

「……トレーニング、再開するか」

底辺なら、最底辺なら、あとはあがるだけしかない。これ以上は落ちようがない。
――よし。やろう。
ただし、今の箒は怖いから素振りからだ！

◇

（またやってしまった……）

剣道場の更衣室で着替えをしながら、箒はさっきから同じことを考えていた。
六年ぶりに再会した二人の幼なじみ。変わっていない子どもの部分と変わった大人の部分。ふたりのその成長は、箒の鼓動を高鳴らせるものだった。

（い、いや。あれくらいがちょうどいいのだ。大体、たるんでいる。一夏は明らかに一年は剣を握っていないし、桐斗には雑念が多すぎる）
桐斗の雑念。つまり、昨日の事件だ。

「〜〜〜ッ！」

今思い出しても死ぬほど恥ずかしい。ふたりにあんな姿を見られたうえに、桐斗とあんな事態になるとは。何故、よりによってあんなときに、着替えを鞄から出し忘れていたのだろうか。箒は自分のうっかりを呪った。

（どこか変に思われたりしなかっただろうか……？）

視線を下げ、自分の体を確認してみる。当然だが、六年前とは全然違う。だからこそ少し不安になる部分もあるのだ。

同時に、ふたりの姿が思い出された。

（ま、まあ、それは、その、なんだ。格好は……うむ、わ、悪くないと思うぞ）

これも当然だが、ふたりも六年前より大人びている。ただ生意気なだけだった瞳はわずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていたし、少女のようだった少年の雰囲気も若干だが好青年に近いそれをはらんでいた。

（それにしても――）

頭に巻いた手拭いをほどき、髪に触れる。それは後ろでくくってもまだ腰に届くほど長い。

（よく私だとわかったものだ）

六年。それも九歳からの六年である。彼らと同じく自分も成長しているというのに、かつての幼なじみたちは名前を聞く前からわかっているようだった。

「ふふっ」

それが、妙に嬉しい。

一夏の名前をニュースで見た時に、写真も一緒に公開された。正直、名前がなかったら気づかなかったほど男らしい顔立ちになっていた――正直に言えば、『格好いい』とさえ思った。

桐斗に気がついたのは、一夏の呟きが耳の届いたからだ。本人に自覚はないだろうが、桐斗が初めて教室に現れたあのとき、一夏はその名前を呟いていたのだ。

そうすると、あの女顔の少年の面影が確かに残っていた。実際、今も女顔である。その桐斗の姿にも、胸が高鳴ってしまったほどだ。そのふたりが、一目見ただけで自分に気づいた。気づいてくれた。

（髪型を変えなかった甲斐があったというものだ）

嬉しくなって、ポニーテールの毛先を弄ぶ。箒も十五の春を迎えた少女である。色を知るとしても、なんら不自然な点はない。

「……はっ！？」

ふと、浮かんだとある疑問で我に返る。「ほぅ……」っと恋のため息をつく自分に軽く引くのは後回しだ。

（わ、私は……どちらに会えたから嬉しいのだ……？）

織斑一夏に箒手川桐斗。ふたりとの再会は確かに嬉しい。しかし、この甘酸っぱい感情はどちらに対してのものなのだろうか。これは、大問題だ。ピンク色感情の測定器があったら今すぐ手に入れて測定したいほどに。

（い、いや。そんなはずはない！　私はそんな節操のない女では……！）

ない、と言い切れないのがこわかった。

箒は慌てて頬をパチリと叩き、頭を切り替えさせた。

（と、とにかく！　明日から放課後は特訓だ。せめて人並み程度に使えるようになってもらわなくては困る）

どう困るのか、どこくらいが『人並み程度』なのかは自分でもあまり整理がついていないようだったが、箒は腕組みしてうんうんと頷いた。

（それに――）

それに、放課後にふたりを独占できる口実が出来た。

「いや！　そ、そのようなことは考えてはいないぞ！」

純粋に同門と級友の不出来を嘆いているだけなのだから、不埒なことも下心もないし、ましてや不節操でもない。そして同門と級友ゆえに面倒を見てやる。おかしなところなどどこにもない！

「故に正当だ！」

だだっ広い更衣室で一人、握り拳を作って声を荒げる箒だった。

「クラス代表決定戦！・白の初陣」（前書き）

ＶＳセシリア。まずは一夏の番からです

「クラス代表決定戦！・白の初陣」

そして翌週、月曜日。セシリアと一夏、そして僕との対決の日。対戦順は一夏対セシリア、僕対セシリア、最後に僕対一夏となっている。昨日のうちにクジで決めていたのだが、……なんで僕まで一夏と戦わないといけないんだ。いや、クラス代表を決めるためっていうのはわかっているけど。

「――なあ、箒」

「なんだ、一夏」

入学から一週間、僕たち三人は名前で呼び合う仲に戻っていた。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。ならばきのせいだろう」

解決していない問題が、もう一つ残っていた。

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目　を　そ　ら　す　な」

「……はあ」

思わずため息が出た。

あれから六日、箒は僕と一夏に剣道の稽古をみっちりと付けてくれた。僕の場合は付け焼き刃にかならなかったが、それ以上の問題は、それしかしてくれなかったというところだ。

「し、仕方がないだろう。お前たちのＩＳもなかったのだから」

「……まあ、そうなんだけどさ。もっとこう、知識とか基本的なこととか、教えてほしかったんだけど」

「……」

「箒、こっち向きなさい」

つまりはこうだ。僕たちふたりの専用ＩＳとやらは何かごたごたしていたらしく、結局どちらも来ていない。そう、今もまだ来ていない。

「……」

「……」

「……」

僕と一夏と箒、沈黙。

「お、織斑くん篭手川くんっ！」

第三アリーナ・Ａピットに今にも転びそうな慌ただしさで駆けてきたのはおなじみの副担任、山田先生だ。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」

一夏の提案に、山田先生は素直に深呼吸。

「はい、そこで止めます」

「うっ」

なんとなくノリでそう言ってみたら、本気で息を止めた。すると酸欠でみるみるうちに顔が赤くなっていく。

冗談の通じない副担任を見ながら、僕と一夏は互いに小さくサムズアップ。

「……ぶはあっ！　ま、まだですかあ？」

はい、止めるタイミングを見失っただけです。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿共」

パンパァンッ！　いつもと同じ、響く打撃音が僕と一夏の頭に炸裂した。もう何回くらったか覚えていない。

「千冬姉……」

パァンッ！　とりあえず一夏は一回プラス。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

実の弟にも容赦ないよな、ほんと。この性格だと絶対に彼氏とかつくれないよな。

「ふん。馬鹿な生徒が面倒を運んでこなければ、見合いでも結婚でもすぐできるさ。私には、もらい手が多くて困るくらいだからな」

うわあ、読心術。僕のプライバシーはどこへやら。

「そ、そ、それでですねっ！　来ました！　織斑くんと篭手川くんの専用ＩＳ！」

「え？」

おお、やっとか。間に合わないかと思った

「まずは織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

「はい？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「あの？」

「期待して待っておくからな。負けたりするなよ。一夏」

「あれ？」

僕たちの言葉に、一夏はさっきから間抜けな反応だ。

「え？　え？　なん……」

「「「「早く！」」」」

山田先生、千冬さん、箒、僕の声が重なった。

ごごんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。その先には、鉄のコンテナが２つ。

そのコンテナも、２つ同時に思い駆動音を響かせながら中を晒していく。

そこには、『白』と、『紫』が、いた。

飾り気のない、それぞれの単色を纏ったＩＳが、装甲を解放して並んでいた。

何かに惹きつけられるように、僕は『紫』のＩＳの前に立つ。

「これが……」

隣を見ると、一夏も僕のように『白』の前に歩み寄っていた。

「はい！　織斑くんのＩＳ『白式』と、篠手川くんのＩＳ『紫燕（しえん）』です！」

『紫燕』――それが、こいつの名前。

それはまるで、僕を待っていたかのように佇んでいた。そう、ずっと、ずっと前から、こうやって。
手を伸ばし、『紫燕』に触れる。
初めてのときのような痺れる感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが自分のためのものだと。身にしみる感じ。

「おい、篭手川」

「あ……はいっ」

急に千冬さんに呼ばれて、変な声を出してしまった。

「お前は裏の格納庫でフォーマットとフィッティングを済ませておけ。また、勝負をフェアにするため、一夏とオルコットの試合を見ることは禁ずる。わかったな」

「はい。了解です」

一夏のことを名前で呼んだことに気づかず、千冬さんはピットの準備を始めた。なんだかんだで、心配しているみたいだ。

「それじゃあ、篭手川くん。格納庫に行きましょう。私がお手伝いしますね」

山田先生に促され、僕はそれについて行く――とっ、その前に。

「一夏」

手にしたばかりの専用機、『白式』に乗り込もうとする一夏がこちらを振り向いた。

「さっきも言ったけど、負けるなよ」

「……ああ、任せとけ！」

互いの拳をぶつけ、その手を開いて、打ち合った。パンッ！　と小気味のいい音がAピットに響く。

これでいい。昔と変わらない、僕と一夏の合図。意味なんてない。あるとすれば、絆の確認だ。

視界の端に、懐かしがるような目をする箒と千冬さんを見た。

僕たちは背を向けて、歩き出す。

◇

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また腰に手を当てたポーズが様になっている。

けれど俺の関心はそんなところにはない。そもそも、セシリアに全ての関心が向いているわけじゃない。

この勝負の先には、桐斗が待っている。桐斗の戦う姿が見てみたい。

できるならば、闘ってみたい。

「最後のチャンスをあげますわ」

セシリアの声が、俺を現実に引き戻す。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』を纏った姿で二メートルを超す長銃、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ：》が握られていた。さらに背に従えた四枚の特徴的なフィンアーマーは、どこかの王国の騎手のような気高さを感じさせる。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのはあなたでもあとの方でも同じ、自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、あなただけでも許してあげないこともなくってよ」

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

「そういうのはチャンスとは言わないし、桐斗を見捨てる気もねえよ」

「そう？　残念ですわ。それなら――」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュインッ！　耳をつんざくような独特の音。それと同時に、閃光が俺に向かって走り出す。
闘いが、始まったのだ。

◇

「始まった、かな」

かすかに、歓声が聞こえた。
第三アリーナの格納庫。僕は千冬さんに言われたとおり、紫燕のフォーマットとフィッティングの準備をしていた。設置されている観戦用のモニターも、今は全部電源を切っている。
今は山田先生に教えてもらったとおりに、紫燕を装着している状態だ。
紫燕が自動的に最適化（フッティング）処理を行い、その前段階の初期化（フォーマット）を行っているのだ。

正直、一夏とはあまり戦いたくない。自分でも、その理由はあまりわかっていない。
でも――負けてほしくはない。セシリア・オルコットにも、誰にも。
もし戦うのなら、強いままの一夏と戦いたい。
それだけは、確実にいえる。

（でも、やっぱり一夏と戦うっていうのはなんだかなぁ～……）

「あれ……？」

紫燕のデータを空中投影型ディスプレイで確認していた山田先生が、首をひねった。

◇

――穫った！

試合開始から二八分。
セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした近接ブレードで放たれたビット兵器『ブルー・ティアーズ』の三つ目を撃墜。そのままＩＳ独自の無重力機動で四つ目に回し蹴りをして吹き飛ばす。
ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだっ

た。

「――かかりましたわ」

にやり、と。セシリアが笑うのが見えた。――まずい！　本能的に危険を感じて距離を置こうとするが、それこそ間に合わなかった。

ヴンッ――。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは『弾道型（ミサイル）』だ。

ドカァァァンッ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた。

◇

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた箒は、思わず声を上げた。
その画面は、爆発によって黒煙に埋まっている。

「――ふん」

黒煙が晴れたとき、千冬は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

煙が弾けるように吹き飛ばされ、あの純白の機体が表れた。
そう、真の姿で――。

◇

「これは……」

最初の工業的な凹凸の消えたそれは、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）！？　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの？」

確かに、体にしっくりくるような感覚が倍増しされているのがわかる。

何より変わったのは、その武器だった。

――近接特化ブレード・《雪片弐型》。

妙に機械的な太刀となったそれの名前は、かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ装備の名称と似通っている。刀に型成した形名。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは――

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？　あなた、何を言って――」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟が不出来では、格好がつかない。そう、あの格好いい千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。しかも、笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ。あいつに」

そう。あいつに笑われてしまう。俺が一番の相棒と認めたあいつは、きっと俺を笑うだろう。

そう、あいつに――桐斗に、笑われない男になってみせる。

「さっきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

ビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直角機動だ。しかも射撃型ビットよりも速い。だが――

（見える……！）

横一閃。ビットを両断する。爆発の衝撃を感じるより速く、俺は再度セシリアへと突撃する。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさっきまでの比じゃない。

「おおおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していく。

刹那、雪片の刀身が光を帯びた。

（いける……！）

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

――が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

……え？

たぶん俺は、全力で「なんで？」という顔をしていたことだろう。

「クラス代表決定戦！・紫の目醒め」（前書き）

桐斗の初戦闘です
なんだか、一夏のときと同じ内容になってしまったような……
と、とにかく、どうぞ！

「クラス代表決定戦！・紫の目醒め」

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

山田先生とAピットに戻ると、一夏のランクがアップしていた。ダウンでないのが千冬さんらしい。どうやら一夏は負けてしまったようだ。

「お、織斑先生……。ただいま戻りました……」

「ああ。ご苦労だった、山田くん。篭手川、フォーマットとフィッティングは済んだな。早く準備しろ」

千冬さんが何気なく言った。その言葉に山田先生は「うっ……」とたじろぐ。

「それが……その……」

山田先生が困ったように口をどもらす。仕方ない。僕が報告するか。

「……なんか、できないみたいなんです。フォーマットもフィッティングも」

「……篭手川、もう一度言ってみろ」

あ。ヤバい。雰囲気がちょっと怖くなったぞ。

ここは怒らせないようにつとめなければ。

「い、いや……僕もよくわからないんですけど……正確には、シス

テムが何かで阻まれてて、正常に起動してない、って……出てきて……」

僕の説明に嘘はない。実際、ロックされているような力によって、『紫燕』のフォーマットもフィッティングのシステムが機能できていない、みたいなことが『紫燕』のウインドウに表示されていた。このままでは、一次移行というものができないらしい。

「……何か、変なものでも弄ったのではないだろうな？」

ギロッ！　怖っ！？　千冬さん、めちゃくちゃ怖いです！

千冬さんはすっ、と静かに己の得物、あの真っ黒な出席簿を手に取った。今まで封印していた、角を僕に向けるように。

「ちっ、違います！　本当なんですよ。僕もなにがなんだかさっぱりですし！」

「桐斗。お前も俺と一緒に説教されようぜ」

そんなことで友情を深めるなんて、ゴメンだ。

大体、僕は無実だ。知らないものは本当に知らないし、今まで一緒にいた山田先生が証人だ！

「あ、あの……織斑先生？　……いいですか？」

「……どうした」

その証人、山田先生がおずおずといった感じで千冬さんに話しかける。

そうだ、山田先生。僕の無実を証明してくれ。

「……あのＩＳは、おそらく今のままの篭手川くんでは、正常に動かないと思うんです。実際に数値を見てみたんですが、何故か、操縦者の心拍数や脳波を大きく受信していて……」

「……ふむ。つまり、起動しない原因は今の状態の篭手川にある、ということか」

「はい」

ちょっと待て。よくわからないが、どちらにせよ僕が悪い、みたいな会話になっているような気がする。

というか千冬さん、その出席簿をおろしてください。それをくらったら、頭蓋骨が陥没してもおかしくない気がする。

しかし千冬さんはそれを振り上げるわけでもなく、何かを考えるように腕組みをした。

「……よし。篭手川、初期設定でも構わん。一夏と同じく、フォーマットもフィッティングも実戦で行え」

「はあっ！？　なに言ってんだよ千冬姉！」

千冬さんの言葉に声をあげたのは、意外にも一夏だった。箒も驚いたように千冬さんを目を見開いている。もしかして、一夏の『白式』はすでに一次移行を終えたのかもしれない。そのありがたみを身を持って体感したというところだろうか。

呆れたように息を吐く千冬さんの出席簿が揺れ、――

パァンッ！　いつもの打撃は、僕ではなく一夏へと放たれた。

「織斑先生だ」

「で、でも……一次移行しないと、めちゃくちゃ使いづらいじゃねえかよ。　起動しなかったら、確実に負け――」

「ああそうだな。しかし、今はそれしかできん」

痛みをこらえる一夏を制し、千冬さんは僕を見た。

「篭手川、さっさと準備をしろ。オルコットももうじき出てくる頃だ」

「え。いや……でも……」

一夏の言っていた一次移行に、ちょっと魅力を感じてしまった。待っていれば、いつか終わるのではないだろうか。

しかし、目の前の鬼教官がそれを許すはずがなかった。

「やれ。命令だ」

「……了解です」

だから、その出席簿をおろしてください。

さっきと同じように、紫燕に体を預ける。受け止めるような感覚がしてから、すぐに僕に合わせて装甲が閉じた。

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。その直後に感じる、融和するかのような一体感。ずっと一緒にいたかのように、『紫燕』が『繋がる』。

解像度を一気に上げたかのようなクリアーな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているかのように理解できる。

そこに現れる、一つの項目。

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

「ハイパーセンサーは問題ないようだな。桐斗、気分は悪くないか？」

いつもの千冬さんに見えるけれど、今ならその声の震えまで知覚できる。いつもの千冬さんに見えるけれど、今ならその声の震えまで知覚できる。――名前で呼んだってことは、心配してくれているのか？

「はい。でも、やっぱり正常じゃないみたいです」

そう。さっきから視界の隅にちらつく目障りな項目。

――システムにエラーを確認。フォーマットとフィッティングが起動出来ません――。

（何が足りないって言うんだよ、『紫燕』……）

フォーマットとフィッティングができない。それは同時に、『初期（スタート）操縦者適応（アップ・フッティング）』すら不可能ということを意味していた。

そのことが、どこか歯痒い。

後ろにいる一夏と箒に意識を向ける。

目を向ける必要はない。自分の周り３６０度全方位が『見えている』から。

「……」

ふたりとも何かを言いたそうな顔をしていた。これも、おそらく普

段ならわからないレベルなんだろうか。

「一夏、箒」

「あ、ああ」

「な、なんだ？」

「……まあ、その……行ってきます」

「……おう。油断するなよ」

「……ああ。勝ってこい、桐斗」

ふたりは、笑って応えた。

なんだか妙に照れくさくなって、僕はピットゲートへ進む。

かすかに体を傾けるだけで、紫燕はふわりと浮かび上がって前へと動いた。

ゲート開放まであと一・四七三〇六二六九秒――この向こうに、『敵』を待たせているのだ。

◇

「ふう……ま、飛ぶには飛んでくれたか」
訓練機よりもスペックが高いのは、飛行の速度で理解できた。
僕は向かいにいる相手、セシリアを見る。専用ＩＳ『ブルー・ティアーズ』を纏い、中空に佇んでいた。
「ん……？」
その様子に、何か違和感を覚えた。武装を展開していないこともそうだが、もっと別のところに疑問が浮かぶ。
高圧的なセシリアのことだから、ここで挑発の一つや二つが飛ばしてきてもおかしくない。いや、むしろしない方が不自然に感じる。
しかもさっきからうつむいて何かぼやいているみたいだ。
「……一夏。……織斑、一夏……」
「……」
紫燕のハイパーセンサーがその声の熱っぽさまで拾った。
ああ。大体わかった。ていうか、あからさまだろ。
一夏め、まさか決闘した相手まで惚れさせてしまうとは。罪づくりにもほどがある。しかも本人に自覚がない上に、その気持ちに全く気づいてかないのだ。
そんな一夏に与えられた称号、その名も『唐変木・オブ・唐変木ズ』。ん？　ズってなんだ？　まあいいか。
まずはこの状況をどうにかしないと。もう試合始まってるし。
「あのー。オルコットさん？」

「いち……え。あっ、き、来ましたわね！　遅いですわよ！」
今更僕に気づいたらしい。慌てて取り繕っているのがバレバレだ。
しかしセシリアはすぐに気を取り直して長大な銃器、《スターライトｍｋ？》を展開する。さすが代表候補生。立ち直りも早い。
「さあ、準備はよくって？　篭手川さん？」
「……初めて名前で呼ばれたのに、素直に喜べないな」
「あら、何故ですの？」
「だってキミ、一夏に惚れ――」
キュインッ！
「おわぁっ！？」
いきなりライフルから光が飛び出し、僕は『紫燕』のオートガードで直撃を免れた。だが、完成するかも怪しい右腕の装甲の一部が削られる。直後、遅れてやってきた衝撃波に体が引っ張られて、神経が電撃のような痛みを走らせる。
瞬時に自動姿勢制御を行う『紫燕』に振り回されて、背中に冷や汗を感じた。ブラックアウト防御があるので気絶はしなかったが、かなり気持ちの悪い重力がのしかかった。
――バリアー貫通、ダメージ３９。シールドエネルギー残量、５３２。実体ダメージ、レベル低。
（これは、きついな……。『紫燕』の反応に追いつけていない）

ＩＳバトルは相手のシールドエネルギーを０にした方が勝ちだ。ただし、今のようにバリアーを貫通されると実体がダメージを受ける。そっちは数値かされているシールドエネルギーと違って、破損個所などは大なり小なり後の戦闘行為に影響を与える。

「お、オープンチャンネルなのだから、そういう話は控えてください！」

「ああ、うん。ごめん」

セシリアが抗議の声をあげるが、実実際こっちはそれどころじゃない。

一夏は、これを乗り切って一次移行まで進んだっていうのか……。

「それでは気を取り直して――いきますわよっ！」

射撃、射撃射撃射撃。光弾の雨が降り注ぐ。しかも、それらすべてが的確にこちらを狙ってくるため、凌ぐのはかなり難しい。シールドエネルギーはガリガリ削られ、『紫燕』からのアラートが響く。

「何か、何か武器は！？」

僕の問いに答えて、現在展開可能な装備の一覧が出現する。――え、一覧？

「一個しかないんですけど……」

表示されたのは『近接ロッド』と書かれた装備のみ。おい、この下に余ったスペースはどうするつもりだ。

「あああもう、やるしかないだろっ！」

素手よりはマシだ！　僕は近接ロッド《名称未設定》を呼び出し（コール）、展開する。

キィィィン……。

高周波の音とともに、僕の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。

「……」

それを見て、げんなりする。

現れたのは、確かにロッド――そう『棒』だ。長さが一メートルにも満たない無骨な機械の……『棒』……。警棒に見えないこともないそれが、僕の武器。

「な……なんですの？　……その装備は……？」

「訊かないでくれ。泣きそうになる」

さすがの代表候補生も度肝を抜かれたようだ。悪い意味で。

「と、とにかく。続けますわよ！　……覚悟！」

再びセシリアの射撃が降り注がれる。身をひねってかわすが、さすがに攻めなければマズい。

これは、アレだな。ヤケクソ、ってやつだな。

「やってやる……！」

引きたくない。腹を決めた。

◇

「なんなんだ。あのＩＳは……」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた一同の気持ちを、千冬姉が忌々しいものを見るような顔で代弁した。いやだって、あれはないだろ。フッティングできない上に、唯一の装備がただの棒って。

「あの馬鹿者め……ふざけたものを……」

「えっ？　どういうことですか？」

「いや……何でもない」

千冬姉は眉間を押さえて深いため息を吐く。どうしたんだ？

「……」

箒もなぜかすごい剣幕で俺を睨んでいる。桐斗とセシリアがオープ

ンチャンネルで話していた辺りからずっとこれだ。俺が何をした。

「はぁぁ……。でもすごいですねぇ、篭手川くん。オルコットさんの攻撃を紙一重でかわしていますよ」

山田先生がため息混じりにつぶやく。確かに、桐斗はセシリアの射撃を当たる直前でなんとか回避して、隙を見て接近しては近接ロッドで殴りつけようとしていた。完璧とはいかないが、それでもなかなかの反応速度だ。

「ここのところ俺たちと剣道の稽古をみっちりとやっていましたからね。たぶん、そのおかげですよ」

「ふん。所詮は付け焼き刃だ。保険にもならん」

厳しいなあ、千冬姉。相手が全国大会優勝者の箒だったのだから、多少は鍛えられたと思うんだが。

「……さて、そろそろオルコットも動く頃だな」

「え？　――あっ！」

モニターに映る競技場に、小さな影が飛来した。俺もさんざん苦しめられたあの機体の第三世代兵器、『ブルー・ティアーズ』だ。

「さて桐斗。どうやってこれに立ち向かう？」

「……」

いつの間にか、箒の視線はモニターに向いていた。無言のまま、どこか険しい表情で。

（頑張れよ、桐斗……）

俺がそう願ったとき、桐斗は行動に出た。

◇

試合開始からすでに一九分と二秒が経過した。

シールドエネルギーの残量７２。実体ダメージ中破。もともと頼りない武器は、かろうじて使えるというところだ。『紫燕』がフォーマットとフッティングを行う様子も、未だみられない。正直、結構ギリギリだの状況だ。

だが、――――攻略法は見つけた。

「このっ！」

（来たな）

セシリアの放つビット、『ブルー・ティアーズ』が飛んでくる。

僕は軽く腰を落として、ロッドを握る。

飛翔するビットは、予想通り多角形を描きながらこちらに迫ってきた。

距離、二〇〇メートル……一八〇メートル……一四〇メートル……一〇〇メートル……八十メートル。

「……そこだっ！」

飛び上がって加速すると、一瞬で距離が詰まった。目の前にあるのは、その銃口を下にむけるビット。

「だあああっ！！」

ドコンッ！　鈍い音に手応えを感じる。ロッドを素早く振り抜き、ビットは形を大きく歪ませて落ちていった。

「くっ……！」

さらに右手を振るってビットを二つ飛ばしてくる。

「この兵器にも射程圏がある。どれだけ飛び回っても、必ずそこに入る！」

上昇し、すれ違いざまにビットを一つ叩き落とす。

「しかもキミは、その時それ以外の攻撃ができない。だったら軌道を先読みして、射程圏ギリギリまで一瞬で近づけばいい！」

八十メートルギリギリまで近づいたもう一つのビットに一瞬で接近し、スラスター部分を叩き壊した。

攻略法をつかめば、あとはこっちのものだ。

しかも、セシリアには必ず相手の隙を突く癖がある。つまり、ちょっとでも隙を見せてやれば、そこを狙ってビットを飛ばしてくるはずだ。

それを待ち伏せていればいい。

「……日本でいう『居合い切り』ですか。なかなか洒落た技ですわね」

「え？　いや、別にそういうのは意識してないけど」

「なぁっ……！？」

セシリアの表情が、今度は羞恥で歪んだ。
まあ、別にいいけど。実際似たようなものだし。
（あとは、こっちが距離を詰めればいい）

さっきからの戦闘から察するに、セシリアは中距離射撃型だ。格闘戦で、あのライフルは役に立たない。それに、見ている限りでは近接用の装備がない。『待機状態』にしているとしても、間合いを詰められてからでは遅いはずだ。
僕は勝機の見えてきたこの戦いに、密かに心を躍らせていた。

「まだまだ、終わりませんわ！」

負けじと、セシリアのビットが向かってくる。
しかし、もう軌道は読めた。

「はああっ！」

すれ違いざまにでビットを殴り飛ばし、全速力でセシリアとの距離を詰める。
ライフルで撃つとしても、この距離では間に合わない。

――入った！
しかし、
「――今ですわ！」
勝利を確信したような、セシリアの笑みが見えた。
ヴンッ――。
セシリアの腰部にあるスカート状のアーマー。その突起が、飛び出した。
「ブルー・ティアーズはまだ残っていましてよ！」
さっきまでのビットとはちがう。『弾道型』だ！
「やら、れて」
奥歯を噛み締め、『紫燕』のスラスターに全力で命令を送る。
「たまるかあああぁぁぁぁぁぁっ！！」
いつもなら言いもしない台詞が、大声で出ていた。
ブォンッ！！
全開となったスラスターからのエネルギー射出で、その場から離れる。
今までで一番の速度で、背筋がぞっとした。
「ぐぅっ！」

自動制御が働いて、なんとか地面スレスレの位置で止まる。しかし、直後にきた神経の痛みに、動きを止めてしまう。
その隙をセシリアが見逃すはずがなかった。

「フィナーレですわ！」

僕を追う『弾道型』のブルー・ティアーズと、挟むようにして狙いをつけるセシリアの《スターライトｍｋ？》。
完璧な挟み撃ちにかけられたのに気づいたとき、ライフルの銃口が光った
――ああ、くそ。勝ちたいなぁ。本気で。

ドカァァァァンッ！！

◇

「桐斗っ！」

「……桐斗っ！」

俺と箒は、思わず声を上げていた。

（くそっ！　俺がアドバイスしていれば……！）

しかし、それはできない。千冬姉が最初に言ったように、それではフェアな勝負にならない。

「――ふん」

千冬姉が、鼻を鳴らした。

そのときの表情にはっとした俺は、急いでモニターに視線を戻す。

黒煙が、晴れていた。

「まったく。空気を読みすぎだ、馬鹿者め」

煙を払うように現れたのは、あの紫の機体。

その姿は、先ほどとは大きく変わっていた――。

◇

――フォーマットとフッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（これって……まさか……）

意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れたウインドウ。その真ん中には「確認」と書かれたボタンがある。
いつの間にか、端にあった目障りのウィンドウは消えていた。
「確認」のボタンを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んできた。

キィィィィィン……。

耳鳴りのような金属音。けれど、それがなぜだか心地良く感じられた。

刹那、僕のＩＳが光の粒子に弾けて消え、また形を成す。

「ふぅ……」

その安心感に、小さく息を吐く。
それを見ていたセシリアが驚いていた。

「ま、まさか……あなたもたった今一次移行を！？　織斑さんと同じように、初期設定で戦っていたというの！？」

そうか。一夏も同じだったんだ。それがなんだか、嬉しかった。
一夏と同じ壇上に上がれたことがなんだか誇らしい気さえしてくる。
これでやっと、僕は一次移行を終えたのか。
改めて機体を見ると、最初の無骨なデザインはきれいさっぱりなくなり、流れるような曲線が細身の装甲を作り出している。背中のスラスターも、折りたたみ式で翼のようになっていた。言うなれば、

空を翔る鳥人。
何より変わっていたのは、武器だった。
ただの近接ロッドだったそれは、さっきよりも大分細身になっていた。
今なら、わかる。
この武器の本当の姿が。
その武器を左手に持ちかえ、柄に右手を添える。
そして、一呼吸したあと、それを――抜いた。
鋭い金属音と共に姿を現したのは、ＩＳ装備にしては短めの、金色の刃。
日本刀のような刀身には細く長い溝がジグザグに刻まれていて、そこから呼応するように光が漏れている。
――近接特化ロッド・《天蕾（あまつぼみ）》。
それが、鞘と一体であるこの刀の名前。
僕は感覚的に、《天蕾》逆手で構えた。

「……オルコットさん」

「……なんですの？」

セシリアの声は、明らかに僕を警戒している声音を含んでいる。でも、それでいい。だからこそ、やりがいがある。

「ここからは、本気でいかせてもらうぞ」

「……っ！　いいでしょう。受けてたちますわ！」
弾頭を再装填したビットが飛び出した。その数、計四機。さっきよりも複雑な軌道を描き、速さを増す。だが――

（いける……！）

握りしめた《天蕾》が、低い機械音を鳴らす。それを一度鞘に納め、ハイパーセンサーで迫るビットの軌道を見切る。

ジャギンッ――！

一閃、一閃、もう一閃、更に一閃。《天蕾》を抜刀するのとほぼ同時に、計四度の斬撃を回転しながらビットに放ち、再び刃を鞘に納める。

慣性に従って飛ぶビットは全て僕を素通りして、そして爆発した。背後のスラスターから、重い機械音が聞こえてくる。僕は敵をとらえるための力が集まるのを、直感的に感じ取ってた。

「だあああっ！」

セシリアに向かって飛び出し、たどり着くまでに素早く抜刀する。開いていたはずの距離は、一瞬のうちにゼロまでちぢんだ。

「なっ……！？」

ガキィンッ！　鋭い音と飛び散る火花。

セシリアはとっさの反応でライフルを盾にして《天蕾》の斬撃を防いでいた。

まだだ。足りない。一撃必殺の力がないと、この勝負には勝てない。

《天蕾》を再度納刀すると、今度はその《天蕾》から機械音が鳴り出した。

今度こそ、いける。そう確信できた。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）！？　あなた、なんでそんなものを……！？」

「えっ……？」

なんのことだ？　聞いたことのない言葉だった。
本気で驚いているセシリアの発言に混乱していると、また距離を取られる。
しまった、集中しないと。

「逃がすかっ！」

僕は《天蕾》を抜き放ち、セシリアへと飛び込む。
その刀身が光を帯びているのに気づくのと、《スターライトｍｋ？》のトリガーがひかれたのは、ほぼ同時だった。
「りゃぁぁぁあああっ！！」
構わずに振るった光の刃が、レーザーを切り裂いた。

「……っ！？」

セシリアが息を飲むのがわかったが、僕は無視して突っ込む。この一撃を決めるために。目の前の敵に勝利するために、僕は加速し続けた。

（いける……！）

セシリアの懐にたどり着いた僕は、右から左への一閃を繰り出す。
――が、その刃が当たる直前で試合終了を告げるブザーの音が鳴り響いた。

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

……へ？

「はいい……？」

あれ。　これって、一夏の二の舞……？

「反省会開始。もっとがんばりましょう」（前書き）

いいサブタイトルが思いつきませんでした……

ああ、文章力が欲しい……

「反省会開始。もっとがんばりましょう」

「二人揃って、あんな似たり寄ったりの試合を二度も続けてやってくれるとはな。何か言うことがあるか？　え？　大馬鹿者共」

試合が終わってから、僕は全くめでたくない一夏の仲間入りを果たした。うん。これって言われるとちょっと傷つくよ。

ちなみに、今は一夏と並んで千冬さんの前で正座中です。床が鉄製だからめちゃ痛い。

「武器やＩＳの特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「「……はい」」

二人揃って頷く。頷くしかないよね……。あんな大見得切ってて負けたんだから。

「えっと、ＩＳは今待機状態になってますけど、ふたりが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさどさっ。おいおい、今どさっていったぞ。目の前に置かれたこの本はなに？

「……『ＩＳ起動におけるルールブック』？　『アナタの街の電話帳』じゃないのか……？」

「うわ……これ、分厚い上に一枚一枚がすっごいペラペラだ……何ページあるんだろ。知りたくないけど……」

これを読んで覚えろと言いますか、山田先生。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

……あれ？　おしまい？おかしいな。

「あの、織斑先生。俺と桐斗の試合はどうなったんですか？」

そうだ。三回戦目は僕と一夏の試合になっていたはずだ。予定に厳しい千冬さんが、そのことを忘れたとは思えない。

「お前らの戦いはめちゃくちゃすぎる。素人っぷりがにじみ出ていて、見てるこっちが呆れてくるほどだ」

「「ぐぅっ……」」

これはグサッときた。そりゃあ、確かに危なっかしいところも多々あったけどさあ……。

「そういうわけで、お前らの試合は無効だ。悔しかったら、さっさと精進することだな」

やっぱりそこに行き着きますか。

ていうか、頑張ったんだから少しくらいねぎらいの言葉くらいは言ってほしい。半分が思いやりで出来ているという化粧品を見習うべきだ。

「帰るぞ」

はい、出ました。思いやりの少ない幼なじみ、名前は箒。

「行こうか、一夏……」

「ああ……」

僕たちは重たい腰を上げて、寮への道のりを歩いた。

「……」

「ど、どうした？　箒」

一夏、僕、箒の順で並んでいると、さっきからじろじろと箒がこちらを見てくる。なんだ？　一夏を見たいのなら言ってくれ、位置変わってあげるから。

……はっ！　今、自然にシャレが出てきた！？

「負け犬」

ぐはぁっ。こいつぁ効いたぜ。箒の放った言葉は僕のハートをざっくりと日本刀で斬りつけた。さすがは全国優勝者。言葉の刃物もたいそう鋭利でいらっしゃる。弱った相手に情け容赦なくとどめを刺しにかかるとは、肝も据わっているようだ。

これはもうあれだ。世界を狙えるほどじゃないのか。がんばれ剣道美少女、日本中の武士の夢は君に任せた。――いや違うだろ！

「任せんなよ！」

「その通りだ！」

って、あれ？　なんか、一夏がこのタイミングでこの台詞を叫んだから勢いで同意してしまった。

「なに？」

「「何でもない……」」

偶然なのか、一夏とハモった。また何かくだらないことを考えていたな。僕もだけど。

「桐斗、一夏」

「ん、なんだ？」

珍しく、箒から僕たちに話しかけてきた。初日以来ツンツンしてたのに、喜ばしい変化だ。

「その、なんだ……負けて悔しいか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ。なあ、桐斗？」

「え？　あ、うん。そうだね……」

僕の場合、二割否定、八割肯定といったところだ。元々不本意な決闘だったし、最初は負けても仕方がないと思っていた。

でも、セシリアと戦っているうちに、僕の考えは真逆の物に変わった。負けたくない。どうすれば勝てるのか、必死で糸口を探していた。

自分の気づかないところで、男の意地ってやつが出ていたのかもしれないな。

「そ、そうか。それなら、いい……あ、明日からは、あれだな。あ、ＩＳの訓練もいれないといけないな」

確かに、千冬さんにも言われたからＩＳ操縦の訓練もしなければいけないのだ。サボったりしたら後が怖い。千冬さん、どこで見てるかわからないからな……。

しかも、箒のこの妙にそわそわした態度は明らかに一夏を意識している。

僕の方にもちらちらと視線がくるけど、きっと僕がふたりの間にいるからだろう。

「で、結局箒は教えてくれるのか？　ＩＳの操縦。まあ、箒がイヤだって言うなら他を当た――」

「い、イヤとは言っていない！」

そんな突然大きな声を出さなくても、わかってるよ。一夏とふたりっきりで訓練したいのだろう。好きな人とは少しでも一緒にいたいはずだ。

「そ、その……コホン。ふ、ふたりは私に教えて欲しいのだな……？」

あれ？　今“ふたりは”って聞こえたけど。なんで僕まで？

「いや、僕は――」

「おう、そうだな。桐斗も他の女子から教わるより、箒に教わったほうがいいだろ？」

いきなり一夏の腕が僕と肩を組んできて、言葉を遮られた。
ていうか一夏、なにそのドヤ顔。

「そりゃあそうだけどさ、箒は――」

「そ、そうかそうか。なるほどな。ふふっ、ふたりとも仕方がないな」

なんで箒は嬉しそうにしているんだろうか。
確かに僕も他の女子よりも箒の方がいいが、箒は一夏とふたりっきりになりたいはずだ。なぜ僕も一緒なんだ？

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

特に、をとても強調された気がする。
でもまあ、実際ありがたい。せっかくの専用機なのだから、鍛えないのは損だ。ここはお言葉に甘えておこう。

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「おう」「わかった」

そのとき、僕は自分が自然と強くなりたいと思っていることに気が付いた。

「ところで箒」

「うむ、なんだ一夏？」

「さっきからトイレに行きたいのか？」

バシーン。竹刀の音が響いた。

一夏、今のはお前が悪い。

◇

日付が変わって少しした時間。教員用の自室で、織斑千冬はノートパソコンのディスプレイに映った映像を見ていた。

ひとつは、弟である一夏が駆る一次移行を終えた白きＩＳ、『白式』。それが光を帯びた《雪片弐型》を振り、セシリアに肉薄している映像だ。

そして、もうひとつは同日に行われたもうひとつの試合のもの。

不自然なタイミングで一次移行を迎えた、桐斗とその専用ＩＳ、『紫燕』。その手に《天蕾》を逆手に握り、一瞬でセシリアに接近する姿。そのときの『紫燕』のスラスターからは、金色の閃光が尾を引いているように延びていた。さらに、今度はセシリアに向かって刀を抜く姿が再生される。桐斗の握る《天蕾》はセシリアの放ったレーザーを切り裂き、刃に纏う凝縮された金色の光がまた尾を引いていた。

「……なるほど。やはり、『零落白夜』とは似て非なるものだな。これが『紫燕』の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）ということか」

今回の試合、一夏と桐斗の敗因は同じエネルギーの過度な使用である。

《雪片》の特殊能力。『バリアー無効化攻撃』。相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる。すりとＩＳの『絶対防御』が発動して、大幅にシールドエネルギーを削ぐことができる。だが、この能力は自身のシールドエネルギーをも攻撃エネルギーに変換させて行うため、使う本人も危険に晒される。

千冬のかつての専用ＩＳが使っていたその能力を、『雪片弐型』はその名とともに受け継いでいた。

そして、桐斗の『紫燕』。この機体の単一仕様能力も、バリアー無効化攻撃といってもいいが、少し違う。ただエネルギーを打ち消すだけならばレーザーは弾けて消えるが、桐斗の場合は真っ二つに斬ったのだ。

つまり、エネルギーを切り裂く研ぎすまされた刃を作る。

『エネルギー圧縮能力』。

鞘を充填装置とする《天蕾》にエネルギーを充填、圧縮させて放つ。それならば、レーザーを斬ったことにも納得できた。

さらに、武器だけでなくスラスターにもエネルギーを充填させられるようだ。でなければ、セシリアに接近した際の『瞬時加速』並のスピードは出せない。しかし、この能力もシールドエネルギーを犠牲とするものだ。

「『雷光演武（らいこうえんぶ）』……」

ディスプレイの端に表示された項目には、『零落白夜』と並ぶその名前があった。

それと、気になることがもうひとつ。
『紫燕』のフッティングの遅さについてだった。
通常のＩＳなら、三〇分かからないうちにフォーマットとフッティングは完了される。山田真耶は、ＩＳ自体に特殊なロックがかけられていると言っていた。そして、操縦者の脳波や心拍数を、大きく受信するということ。
千冬は、『紫燕』は操縦者である桐斗にあるものを求めていたと考えていた。
それは――『戦闘意欲』ではないか。
勝ちたいと強く願う、生き物が強くなるには必要不可欠ともいえる感情。
桐斗には、それが少なすぎた。それを引き出すための仕掛けが、もともと施されていたのだ。桐斗の戦闘意欲を目覚めさせるために、ある人物の手によって。

「まあ……あいつにはいい薬になるか……」

思い出してみれば、弟の一夏と違って自分から戦うことはめったにしない少年だった。相手とも、自分自身ともだ。
きっとあいつもそれを見越して、こんなロックをかけたに違いない。

「さて、これからどうなるかな。お前たちは……」

ふたりの少年を映すディスプレイを眺めながら、千冬はふっ、と小さく微笑んだ。それは普段は滅多に見せない、優しい笑みだった。

◇

翌日、朝のショートホームルーム。僕にとっては、ありがたい事態が起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

「おめでとう、一夏」

嬉々として喋る山田先生に、盛り上がる女子。僕も一夏に心からの拍手を送った。暗い顔をしているのは、一夏だけである。

一夏の手が挙げられた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたし、桐斗とも戦っていないんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

山田先生の声を遮って立ち上がったのは、セシリア・オルコット。

見慣れた腰に手を当てるポーズは、やっぱり様になっている。違うところといえば、昨日までの怒っている感じは消えてえらく上機嫌になっているところだ。

「まあ、勝負はあなた方の負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

言い方が若干グサリとくるが、今回は許す。事実負けたし。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして、“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

お。今一夏のことを名前で呼んだ。早速アピールか。

「だったら桐斗でもいいだろ！？　なんで俺が！？」

「僕のＩＳはまだまだ謎が多いからな。もしものことがあったら大変だろ？」

「わたくしも、一夏さんを強く推薦いたしますわ」

「ぐぅぅ……」

僕たちの屁理屈という言い分に押し黙る。性格が単純だから騙しやすいんだよな、一夏は。

実は昨日、僕はセシリアの部屋まで行ってあるお願いをしていた。

その内容は、『一夏をクラス代表にしてほしい』というものだった。

ありがたいことにセシリアは快く、というかノリノリで引き受けてくれたので、交渉材料を使わずにすんだ。
ちなみに、交渉材料とはベストアングルから撮った一夏の写真だった。これは撮るのに苦労した。

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度、二粒で四度おいしいね」

あれ？　いつの間にか僕まで売られている。

「そ、それでですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ――」

なるほど。これがセシリアの狙いだったのか。練習にかこつけて一夏とふたりっきりになろうとしているんだな。
しかし、それを許さんとする人物が一人。
バン！　と机を叩いて立ち上がったのは、箒だった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を強調した箒は、殺気立った瞳でセシリアを睨んだ。これだけ鋭かったら大根でも切れそうだ。
先週はひるんでいたセシリアも、ちょっと誇らしげに正面からそれ

を受け止めている。

「あら、あなたは桐斗さんにも教えていらっしゃるのでしょう？
それでは手が足りないのではなくって？」

「そんなことはない！　頼まれたのは私だ。ふ、ふたりがどうしても言って、土下座までするからだ」

してませーん。

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いてセシリア、箒の頭をぱしんと叩いた千冬さんが低い声で告げる。呻いたふたりは、しぶしぶと席に座った。やっぱり痛いよなあ、あれは。

「それでは、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

はーいと一夏を除くクラス全員が声を合わせて元気に返事をした。
団結するっていいね。
ただ、僕の隣に座る一夏は、遠い目をしていた。ご愁傷様、一夏。

「気になるアイツ」（前書き）

課題があるのに投稿します
今回は自分が出したかったあの子がちょっとだけ現れます

「気になるアイツ」

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、篭手川、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、相変わらず授業はわからないが、僕も一夏もなんとかやっている。今日もこうして鬼教官こと千冬さんの授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて、待機状態の『紫燕』――左腕に巻かれた紫色の錠前のあるチェーンに、意識を集中する。

ちなみに、セシリアの『ブルー・ティアーズ』はイヤーカフス、一夏の『白式』は右腕のガントレットだ。……一夏の『白式』、完全に防具じゃん。

そんなことはともかく、僕は左腕を顔の高さまで持ち上げ、チェーンに右手を添える。色々と試してみた結果、このポーズが一番しっくりきた。

（出ろ、紫燕）

心の中で呼び出す。刹那、左手首から全身に光の粒子が広がり、ＩＳ本体を形作る。

ふわりと体が軽くなると、各種センサーが意識と繋げられて視界の光景がぐんとクリアーになった。

同じく、一夏は『白式』を、セシリアは『ブルー・ティアーズ』の装備を完了させていた。もっとも、一夏は僕と同時に展開を終わら

せたのだが。

「よし、飛べ」

千冬さんの指示で、上空へ飛び上がった。しかし先を越されていたらしく、セシリアが僕よりも高い位置を飛んでいた。それをのろのろと追いかけてくるのは、取り残されてドベの一夏だ。

「何をやっている。スペック上のスピードでは、紫燕の方がブルー・ティアーズよりも速いぞ。織斑、貴様もちんたらするな」

通信回線から早速聞こえてくるおしかり。それに一夏は苦い顔をした。

「つってもなあ。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』って、一体どうやってやりゃあいいんだよ」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「こういうのは教科書や参考書どおりにやっててても、あまり意味がないいってことだね。そういうイメージは何かないのか？」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「あー。それは僕も毎回思う」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？　反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「僕たちの場合、絶対に理解できるような内容じゃないと思う」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むセシリア。その表情には嫌味も皮肉もなく、本心から楽しいという笑顔だ。

あの試合以来、セシリアは僕たちに親しく接してくれている。一夏のコーチも自分から買って出てくるほどだ。

恋は女性を変えるというが、まさかここまで変化するとは。恐るべきは一夏のフラグ能力か。

でもまあ、コーチをしてくれるのは助かる。箒だけでは二人に同時に教えるのには限界があるからな。……ていうか、箒の説明って

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずがーん、という具合だ』

という擬音だらけのものばかり。もしかしたら、教わる人を間違ったのかもしれない。

「じゃあせめて、ふたりがどういうイメージで飛んでいるのか教えてくれよ」

「わたくしは教えられたとおりのイメージで出来ましたわ。桐斗さんはどうですの？」

「ん？　そうだなぁ。身近にあるものからイメージしていったかな。紙飛行機とか、小鳥とか」

実際、僕の場合はそうした方がイメージを掴みやすかった。しかしまだまだスピードを出しきれていないので、改善が必要だ。

ん？　何故だろう。ふたりが妙に生暖かい目で僕を見ている。

「うん。お前らしくていいな、それ」

「おい一夏。どういう意味だよそれ」

「可愛らしくていいと思いますわよ、桐斗さん」

「褒めてないよな。それ絶対褒め言葉じゃないよな」

「いえいえ、とんでもありませんわ」

じゃあふたりのその笑うのをこらえたような顔はなんだよ。ハイパーセンサーではっきり過ぎるくらい見えているぞ。

「い、一夏さん。よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふたりきりで――」

「一夏っ！　桐斗っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

いきなり通信回線から箒の怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では箒が山田先生のインカムを奪って目を吊り上げていた。

この望遠鏡並みの視力もハイパーセンサーの補正のおかげである。
ていうか、なんで僕まで怒られたんだ？

「三人とも、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「僕からやります。それじゃあふたりとも、先に行くね」

言って、僕はすぐさま地上に向かう。
半ば勢いでやったものの、これはかなり怖い。
精神が持つ限りの地点で、スラスターを逆噴射させた。

「おわっ、とと……」

「篭手川、びびりすぎだ。もっと飛び込めるようにしろ」

なんとか地面にぶつからずにすんだが、確かに地表からは大分離れている。これじゃ合格はほど遠いなぁ……。
続けて挑戦したセシリアは、綺麗に降下して難なく地表から十センチの地点で停止した。

「うまいなぁ。さすが代表候補生」

じゃあ最後は一夏だけか。

ギュォォォォォォ――。

ん？　なんだ、この音。まるでこっちに向かってきているみたいな――

「うわわわわっ！　きっ、桐斗！　どけえぇぇぇぇぇぇ！！」

「え？」

ズドォォンッ！！！

いきなり襲いかかった衝撃。
悲鳴をあげる暇もなく、押しつぶされるようにして地面にでかいクレーターが生まれた。
どうやら、一夏も地上に着いたようだ――――――墜落して。

「す、すまん桐斗……。大丈夫か……？」

「……いいから早くどけ。重い……」

ＩＳのシールドバリアーのおかげ怪我はしていないが、ＩＳは待機状態に戻ってしまった。
ていうか一夏、いつまで僕の上にに乗っかってるんだ。一夏の方が重いんだぞ。

「一夏っ、桐斗っ、無事――なっ……！？」

「「「「キャァァァ

「やっぱり！　織斑×篭手川なのね！」

「くぅっ……篭手川君のヘタレ攻めを期待してたのに……！」

「決まりよ！　今年の夏はこれでいくわよ！」

はあ！？　ちょっと待て、なにを言っているんですか君らは！？
ていうかそこの女子、カメラを取り出さない！　撮影料請求するぞ！
事の重大さを悟ったのか、一夏は急いで僕の上から退いた。
しかし、その背後にはすでに修羅が立っていた。

「……一夏。貴様、女だけでは飽きたらず男にまで、しかも桐斗に手を出すとは……」

「ひっ！？　ちょっ、ちょっと待て箒、今のは完全に事故だし、手を出した覚えもない！」

怒髪、天を突く。ゆらりと揺れた箒の影は、鬼のように見えた。
うん。めちゃくちゃ怖い。

「問答無用だ……ふんっ！」

「ぐおっ！？」

容赦なしの蹴りが鳩尾に入る。そのまま次は肘鉄につなげられ、さらにとどめと言わんばかりのアッパーカットが決まった。
気を失ったのか、その場でドサリと体が崩れ落ちる。

一夏、K．O．

見事な三連コンボをみせていただいた。思わず、背筋がゾッとしたぜ。
セシリアや他の女子も、「今のは仕方ない」という残念そうな顔をしていた。
「桐斗、大丈夫だったか？　もう心配いらないぞ。悪漢は私が成敗したからな」
怖いくらいの微笑みを浮かべて歩み寄ってきた箒は、僕の頭を優しくなでる。イカン。ショックで正気を失っているようだ。小学校の頃に似たようなことをやっていたのを思い出す。
「あ、あはははははは……」
もう、乾いた笑いしか出てこない。
後に、千冬さんが授業を再開させてくれたおかげで無事に授業は終わった。
ちなみに、あの大穴は僕と一夏で埋めました。なんで僕まで……。

◇

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。
まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んである。肩にかかるかかからないかくらいの髪は、金色の髪留めが似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

文句を言っても、紙は返事をしない。少女は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いている。

――ったく、出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切過ぎるんじゃない？　政府の連中にしたって、異国に十五歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？

この少女は中国人であるとはいえ、少女にとって日本は第二の故郷であり、思い出の地でもあり、因縁の場所でもある。

（あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……）

一瞬、「それは名案！」と思った少女だったが、あの『アナタの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、やめる。

（それにしても、まさかアイツ等がＩＳをねぇ……）

とある二人の男子を思い出す。そのうちの一人は、少女にとって日本に帰ってくる最大の理由になっている思い出だ。

――元気かな、アイツ。

まあ、なんとかやってるんだろうけど。たいていの環境には順応してしまうようなやつだったから。

「だから……でだな……」

ふと、声が聞こえる。視線をやると、女子がＩＳ訓練施設から出てくるようだった。どの国でもＩＳ関係の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

――ちょうどいいや。場所聞こっと。

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

「そうそう。もうちょっと具体的な例えがあればできるんだって」

不意を突かれて、少女の体はびくんと震えてその足が止まる。

男の声がふたつ――片方は知っている声にすごくよく似ているし、

もう片方にも覚えがある。いや、おそらく同一人物。
予期しなかった再会に、少女の鼓動が急ピッチでペースを上げる。
今話しかければ、アイツは自分に気がついてくれるかもしれない。
大丈夫だと自分に言い聞かせるが、けれど自分だとわからなかったらどうしようという不安が同時進行で押し寄せきて、思考が乱れる。
――大丈夫。大丈夫！　それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし！
超ポジティブ思考にスイッチを入れて、少女は再び歩みを再開する。
「一夏も桐斗も、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」
「箒の説明が独特すぎるんだよ。なんなのさ、『くいって感じ』って」
「……くいって感じだ」
「だから、俺たちはそれがわからないって言って――おい、待てって箒！」
すたすたと足を速める女子を、男子二人が追いかけていく。
――誰？　あの女の子。なんで親しそうなの？　っていうかなんで名前で呼んでんの？
さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立ちがなだれ込んでくる。
それからすぐ、総合事務受付は見つかった。アリーナの後ろにある

のが、本校舎だったからだ。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音さん」

愛想のいい事務員の声もどこか遠くにあって意識に届かない。少女――鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「男子のいるクラスって、何組ですか？」

「ああ、噂の子たち？　二人とも一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そういえば、どっちかが一組のクラス代表になったらしいけど。どっちだったかしらねぇ」

首をひねる事務員の姿を冷ややかに見ながら、鈴音は可能性を追って質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？　ええと……聞いてどうするの？」

鈴の態度にすこしおかしなところを感じたのか、事務員はすこし戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって――」

にっこりとした笑顔には、ばっちり血管マークがついていた。

「再会の代表候補生」（前書き）

今回は桐斗と一夏があの少女と再会します
彼女のフラグはどちらに立っているのか……わかりますか？

「再会の代表候補生」

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

ぱん、ぱんぱーん、ぱんぱーんぱーん。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗ってきた紙テープは、その実質重量よりもはるかに重く俺の心にのしかかっていた。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員そろっていた。各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。

「いやあ、めでたいね。一夏」

「……」

めでたくないぞ桐斗。ちっともめでたくない。なんなんだこのパーティーは。

ちらりと壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。しかも、桐斗の筆跡で。

「お前が一番ノリノリかよ……」

「ああ。お祭り騒ぎは嫌いじゃないし、僕も面倒な役職から逃げ切れたからな」

裏切ったな、相棒。

ていうかお前の字、デカく書いても筆跡がわかるぞ。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」
「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」
「うちにも一人欲しいなー」
おい、今他のクラスの生徒がいたぞ。というか、明らかに三十名以上はいるぞ、ここ。
「篭手川くん、うちのクラスに移りなよ」
「いろいろサービスしちゃうよ～？」
「えっ？　い、いや。遠慮しとくよ……」
他クラスの女子からセクシーポーズを見せつけられ、赤くした顔を逸らす桐斗。困ってやがる。
いいぞ他クラスの人。もっとやれ。
「人気者だな、お前たち」
「……本当にそう思うか？」
「……どちらかというと、助けてほしいんだけど」
「ふん」

箒は鼻を鳴らしてお茶を飲む。なんでこいつは機嫌が悪いんでしょうね。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と篭手川桐斗君に特別インタビューをしに来ました～！」

オーと一同盛り上がる。さすがに予想外だったのか桐斗は、頬をひきつらせた。ざまあみろ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って、その名前を見る。画数の多い漢字だ。書く本人は大変に違いない。

「ではまず、ずばり織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずずいっと俺に向けてきた。

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

えらい前時代的な台詞だな。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

なんだと、日本の誇る名優をブジョクする気か。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして、ではでは次に篭手川君！　君は織斑くんと戦わなかったそうだけど、そのときの心境は！？」

ねつ造は良くないです。と言いたかったが、桐斗のインタビューが始まったのでやめる。

「え、えっと……まあ、ＩＳの操縦にも慣れてなかったんで、ホッとしました」

「えー。普通すぎる～。愛する彼と戦わずに済んでよかったよ、とか言ってよ！」

「「ありえません」」

俺と桐斗のツッコミが見事にシンクロした。これ以上婦女子会の方々を騒がせないでくれ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

嘘つけ。ずっと近くで控えてたろうが、お前。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

ボッと赤くなるセシリア。きっと怒り心頭なんだろう。よし、ここは援護射撃だ。

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですわ！　何をもって馬鹿としているのかしら！？」

え、あれ？　なんでセシリアが俺に怒るの？

「この朴念仁」

なんで桐斗まで呆れたような視線を向けてくるんだよ。意味がわからない。

「はいはい、とりあえずさんにん並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

「写真、ですか？」

「注目の専用機持ちだからねー。さんにん一緒のもらうよ。あ。握手とかしてるといいかもね」

「そ、そうですか……。そう、そうですわね」

なぜかモジモジとし始めたセシリアは、ちらちらと俺を見てくる。なんなんだ。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛先輩がせかすので、俺は手っ取り早く桐斗と握手した。黛先輩もセシリアの手を強引に引っ張ってその手に乗せる。

「……」

セシリアが不満なような嬉しいような、おかしい表情で俺と桐斗をじろじろと見てくる。何か用でもあるのか？

「ごめん、セシリア」

「べ、別に、構いませんわ！　これくらい」

なぜか、桐斗がセシリアに謝った。本当に意味がわからないぞ。俺だけ置いてけぼりをくらっている気分だ。

「……」

「……なんだよ、箒」

「何でもない」

箒までこっちをじろじろ見ていた。なんだよ、紛らわしいやつだ。

「それじゃあ撮るよー。４２×６６÷５１は～？」

「え？　えっと……２？」

「残念不正解、５３．３０８でしたー」

なんだそりゃ。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……って、おい。

「なんで全員入ってるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの周りに集結していた。しかも、桐斗はいつの間にか俺たちの手から離れ、箒を俺の隣に押し込んでいた。すごいな桐斗。あの一秒未満の瞬間でそこまでやるとは。

「あ、あなたたちねぇ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

苦虫をかみつぶしたような顔をしているセシリアを、クラスメイトはにやにやとした顔で眺めていた。なんで？

「な、なっ……」

「ツーショット、とまではいかないか……」

「……ふんっ！」

桐斗がつぶやくと、ズドンと箒のかかとが桐斗の爪先を踏み潰した。

「～～～～～～ッ！！」

声にならない悲鳴を上げてうずくまった桐斗に、箒は「ふん」と鼻を鳴らして顔を逸らした。……なんで？

この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続くこととなる。

結論。女子のエネルギーを侮っていました。

◇

「篭手川くん、織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。一夏や箒と一緒に教室に入って席に着くなり、クラスメイトに話しかけられた。入学からの数週間で、顔を覚えた女子とならなんとか話せるようになったのは、僕にとって大きな前進だ。ああ、成長って素晴らしい。

「転校生？　今の時期に？」

今はまだ四月だ。なんで入学じゃなくて、転入なのだろう。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

代表候補生ということは。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。それはないと思うぞ。

「どんな人だろうね」
代表候補生というからには、やはりそれ相応の実力を持ち合わせているんだろう。だったら一度見てみたい。他のクラスだから、少し難しいかもしれないが。
「む……気になるのか？」
「ん？　ああ、まあね」
「ふん……」
素直に答えたら、なぜか箒の機嫌は悪くなった。表情だって明らかにむすっとしている。なんだろう、昨日のパーティーで無理やり一夏の隣にさせたのがいけなかったのだろうか。余計な世話をするな、ということなのかもしれない。
「お前は女子のことを気にする前に、あの剣の扱いをなんとかしろ。逆手一文字など邪道だ」
「いや、僕的にはあれが一番使いやすいんだけど……」
またこれだ。剣道を極める箒には、たとえＩＳだろうと僕の剣の扱いが気になるらしい。訓練中も何度も突っ込まれた。しょうがないじゃんか。あの構えの方がしっくりくるんだから。
「そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機持ちはまだクラスでわたくしと一夏さん、桐斗さんだけなのですから」

こっちもこっちで朝からアピールだ。……でもまあ、確かにそうか。他のクラスメイトじゃ、訓練機の申請と許可、設備に丸一日はかかってしまうから、手っ取り早く模擬戦をするなら僕やセシリアに相手をしてもらうのがいい。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

そう、幸せだ。

このクラス対抗戦では、やる気を出させるために一位のクラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。甘党の僕としても、これは嬉しい。

「一夏。絶対に勝てよ。今回はみんなの期待を背負ってるんだから」

「……お前、目がすげえ生き生きしてるぞ」

そりゃそうだ。デザートがかかってるからな。

「織斑くん、頑張ってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

やいのやいのと楽しそうな女子一同に、一夏は適当に「おう」と返事をする。

「――その情報、古いよ」

ん？　教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、昔聞いたことがあるような懐かしい声なんだけど……。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは、小柄な少女。その特徴的なツインテールの髪型が、僕のある記憶と一致した。

「鈴……？　もしかして、鈴なのか？」

「本当だ。鈴だ……」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす鈴。あの頃と比べて、声も少し変わっている。

「何格好つけてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ一夏っ！　桐斗、なんか言

ってやりなさい！」

「あー、ごめん。僕も鈴はそういうキャラじゃないと思う」

「えぇっ！？　な、なんでよ！？」

お、やっと普通に喋った。あの気取ったしゃべり方は高校デビューかなにかかな。

いやあ、でも見る限りだとあまり変わってないなあ。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！　聞き返した鈴に痛烈な出席簿打撃が入った。――鬼教官がお出ましになったのだ。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

すごすごとドアからどく鈴。明らかに千冬さんにびびっている。確か昔から千冬さんのこと苦手だったよな。気持ちはよくわかる。

「またあとで来るからね！　逃げないでよ、桐斗！　ついでに一夏！」

なんで僕が逃げるんだよ。ていうか一夏はついでか。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。うん、やっぱり変わってないな。

「ていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか」

「僕も初めて知ったよ」

この一夏と僕の素直な感想が、引き金となった。

「一夏、桐斗、今のは誰だ？　知り合いか？　えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？　あの子とはどういう関係で――」

ふたりの他にも、クラスメイトからの質問の雨あられ。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども」

千冬さんの出席簿攻撃が炸裂した。

そして、今日もＩＳ訓練と学習が始まる。

「転校生はセカンド幼なじみ」（前書き）

今回、あまり話は進んでません
しかし、鈴のフラグがはっきりしていると思います

（さっきの女子は何なのだ……ずいぶん親しそうに見えたが……）

朝の一件が気になって、箒は授業中にそう考えていた。

こみ上げてくる怒りを抑えながら、ちらりとふたりの方をうかがう。

これ以上失敗を冒したくないのか、真面目にノートを取っていた。

（私は授業に集中できないというのに、お前らはっ……！）

ますます腹が立った。少しくらい、私を気にしたらどうだ。

（だいたい、あの女子は一夏と桐斗……どちらに会いに来たんだ……？）

鈴と呼ばれたあの女子はふたりのどちらとも面識があるようだった。

ということは、どちらかに気がある可能性があるのだ。むしろ、あの男子ふたりは無意識に女を惚れさせてしまう才能を持っているから、確実といってもいいだろう。

それを思い出して、握ったシャーペンが悲鳴を上げた。

「……」

しかし、まあ、冷静に考えてみればたいしたことではない。

何せ、自分は一夏とは同じ部屋、桐斗とは隣の部屋なのだ。今では毎日桐斗の部屋へ行っていて、ちょっとした通い妻気分を味わっている。

（しょうがないやつらだ。またＩＳのことを教えてやるか）

ふふんと上機嫌で腕を組む。そう。相手が誰だろうと、自分の今の立場は揺るぎないのだ。

（今日の放課後はまた特訓だな）

うんうんとどこか楽しげに頷く箒。頭の中では己を磨くために切磋琢磨する一夏と桐斗の姿と、それを気持ち良く指導する自分の姿が浮かんでいた。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ！？」

突然名前を呼ばれて、箒は素っ頓狂な声を上げる。――そうだ、今は授業中。それも山田先生ではなく織斑先生の時間だった。

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

ばしーん！　と、もはや名物となってきている打撃音が響いた。

◇

「お前たちのせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、箒とセシリアは開口一番で僕たちに文句を言ってきた。

「……だってさ、一夏」

「いや、お前もだろ……」

だって一夏は箒とセシリア両方に怒られてるけど、僕は箒にか怒られてないし。

このふたり、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれたのだ。

まあ、原因は明らかに鈴のことなんだろうけどなあ。でもなんで僕まで怒られるんだ。

「まあまあ。話ならご飯食べながらにしようよ。僕もお腹へったし」

「おう、そうだな。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前たちがそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

意地張っちゃってまあ。

そのほかクラスメイトが数人付いてきて、僕たちは学食に移動した。僕は券売機でサバ味噌定食の券を買う。結構好きなんだよね、サバ味噌。
ちなみに箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、一夏は日替わり定食。なんか、みんな前にもそれ食べてなかったっけ。僕もよくサバ味噌食べてるけど。

「やっと来たわね。待ってたわよ！」

どーん、と僕たちの前に立ちふさがったのは噂の転校生、凰鈴音その人だった。僕と一夏は略して鈴と呼んでいる。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「うるさいわね。わかってるわよ」

一夏の注意に鈴はふくれっ面で返す。ちなみにその手にはお盆を持っていて、ラーメンが鎮座していた。

「鈴。ラーメンのびるよ」

「わ、わかってるわよ！　だいたい、アンタを待ってたんでしょうが！　なんで早く来ないのよ！」

なんで僕だけ？　一夏のことも待ってあげればいいのに。

「それにしても、本当に久しぶりだね。ちょうど丸三年ぶりになるのか。元気にしてた？」

「元気にしてたわよ。アンタたちこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

相変わらず、鈴はたまに変なことを言うな。まあ、後ろのふたりもだけど。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！　おふたりとも？　注文の品、出来てましてよ？」

箒とセシリアのわざとらしい咳で会話は中断される。あ、一夏のは鯖の塩焼きか。こんがりとした焼き色が見事だ。

鈴を含めた全員で、空いている席に着く。十人ぐらいで行動しているから、空席が見つかったのはラッキーだった。

僕を挟むようにして隣に着いたのは一夏と鈴だ。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？」

「え？　鈴、中国に帰ってたのか。どうして？」

一夏の質問に僕は疑問を持った。僕が鈴と最後に会ったのは小学六年生の頃なので、その間に何かあったのだろうか。

「こいつ、中二のときに中国に帰ったんだよ。だから俺も会うのはそれ以来だな」

「へぇ、そうだったんだ。ねぇ鈴、おばさんたち元気？　いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタたちこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

やっぱり、一夏だけでなく僕のこともすでに一般に公開されているらしい。公開直前に入学していなかったら、マスコミやらなにやらにさんざんつつかれていただろう。助かった。

「一夏、桐斗。そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

疎外感を感じてか、箒とセシリアがトゲのある声で訊いてくる。他のクラスメイトも興味津々とばかりに頷いていた。

「馬鹿言わないでよ！　あたしには好きなやつが、その……ほ、他に……」

力いっぱい否定した鈴がちらっと僕を見てきた。フォローしてくれということだろうか。よし、任せなさい。

「そうだよ。なんでそんな話になるのさ。鈴は僕とたちにとって、ただの幼なじみだよ」

「……」

「え。何睨んでるの？」

「なんでもないわよっ！」

いきなり鈴が怒った。おかしいな。フォローしたはずなんだけど。

「幼なじみ……？」

怪訝そうに聞き返してきたのは箒だった。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？　鈴が引っ越してきたのは小五の頭で、桐斗が引っ越したのは小学校の卒業後だから、俺は一年ちょっとぶりで桐斗は三年ぶりの再会だな」

一夏が箒とセシリアに説明をする。

そういえば、箒と鈴は面識が無かったな。ちょうど入れ違いで引っ越してきたし。

「で、こっちの子が箒。ほら、前に話しただろ？　僕たちの小学校からの幼なじみで、一夏が通ってた剣術道場の娘さんだよ」

「言ってみれば、箒はファースト幼なじみ。鈴はセカンド幼なじみってところか」

「なんだよそれ。大体、僕はどうなったのさ？」

「ん？　桐斗は相棒だろ」

一夏が何を今更みたいな顔をしているが、初耳だ。でも、相棒か……。なんかいい響きだなぁ。

「ファースト……」

箒も最初を表す称号が嬉しいようで、頬をほんのり赤くしていた。実に幸せそうだね。

「ふうん、そうなんだ」

そんな箒を鈴はじろじろと見る。箒も負けじと睨み返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人の間で、なぜだか火花が散ったような気がした。え、なにこれ。空気が異様にチクチクしていて怖いです。

「ンンンッ！　よろしくお願いいたしますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

介入してきたセシリアの顔には、安堵のようなものが混じっていた。たぶん、鈴が一夏に気があると思っていたから安心しているのだろう。

「……誰？」

「なっ！？　わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ……」

おお。怒りをこらえた偉いぞ。

「ああ、ごめん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

セシリアの顔が怒りで赤くなっていく。相変わらず歯に衣着せないなあ、鈴は。

それに対して、鈴は何食わぬ顔でラーメンをすする。本当にたくましいようで。

「そういえばアンタたち、どっちかがクラス代表なんだって？　やっぱり桐斗？」

「ちがうよ。代表になったのは一夏」

「ま、まあ。成り行きでな」

「……そう。ふーん……」

アテが外れたからか、鈴はちょっと不服そうになった。そのままどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。前にレンゲを使うことをすすめたが、『女々しいからイヤ』と言われた。……女々しいって、女が言う言葉か？

「あ、あのさぁ桐斗。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

「僕？　僕よりも一夏を――」

ダンッ！　ダブルでテーブルが叩かれた。箒とセシリアがその勢いのまま立ち上がる。

「桐斗に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私だからな」
「あなたは二組の人間でしょう？　敵の施しは受けませんわ！」
うわ、ふたりとも顔が怖いよ。少し落ち着いてください。
ていうか、僕別にクラス代表じゃないから施しも何もないと思うけど。でも、一夏と一緒だったら別か。
「あたしは桐斗に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」
「か、関係ならあるぞ。私が桐斗にどうしてもと頼まれているのだ」
どうしてもとまでは言ってない……。
だから、僕よりも一夏を鍛えた方がいいと思うんだけど。
「でも、あたしの方が付き合いは最近だし」
「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！　それに、桐斗は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」
「うちで食事？　それならあたしもそうだけど？」
「きっ、桐斗！　どういうことだ！？　聞いていないぞ私は！」
「えっ？　どういうことって……よく鈴の実家の中華料理屋でご飯を食べてたんだけど。一夏も一緒だったし」
鈴の家は中華料理屋だった。僕のうちはほとんど誰もいない状況だったので、鈴の家の店には良くお世話になっていた。

しかも、うまいし安くて量が多い。週に四、五回は行っていた。
ていうか、箒や鈴の家に行くときはほとんど一夏と一緒に行ってたんだけどな。
僕が正直にそう言うと、さっきまで余裕の表情だった鈴がとたんにむすっとふてくされる。
対照的に、箒はほっとしたような顔をした。

「な、何？　店なのか？　そうか。それなら別におかしな点は何一つないな」

クラスメイトの女子も同じように緊張と緩和を繰り返している。どうしたんだ？　さっきからのこの落ち着きの無さは。

「親父さん、元気にしてるか？　まあ、あの人こそ病気と無縁だよな」

「あ……。うん、元気――だと思う」

うん？　一夏の質問に鈴の表情が陰った気がして、僕は妙な違和感を覚えた。

「そ、それよりさ桐斗。今日の放課後って時間ある？　あるよね。久しぶりにどこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れちゃったし、せっかくだから一夏も――」

「あいにくだが、桐斗は私や一夏とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

強制ですか。もはや僕には放課後の過ごし方さえ自由にできないの

かよ。それより一夏の特訓を優先させようぜ。なんたってクラス代表なんだから。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、桐斗、一夏！」

ごくんとラーメンのスープを飲み干して、僕たちの答えも待たずに鈴は食器を片づけて食堂を出ていってしまった。

（返事を聞かないってことは、絶対待ってろってことですか……）

「桐斗、一夏。当然特訓が優先だぞ」

「おふたりとも、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

こっちも断れるような状況ではなかった。だって、ふたりとも顔が怖いから。多忙だなぁ。はぁ……。

「約束は覚えていた方が身のため」（前書き）

鈴のデレは書いてて楽しかったです
それでは、どうぞ

「約束は覚えていた方が身のため」

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「お、おう……」

「あ、ありがとうございました……」

ぜえぜえと息が切れてる僕と一夏に対し、箒とセシリアはけろりとしている。

今日は箒に訓練機、『打鉄』の使用許可が下りたらしく、男子対女子の二対二で模擬戦を行った。だが、正直かなりキツかった。

箒が近接ブレードを使って僕たちに切り込み、隙ができたところをセシリアの正確な射撃に追い詰められていく。このふたり、実は結構相性いいんじゃないか？

「何をしている、早くピットに戻れ」

「お、おう。……って箒？　なんでこっち側に来るんだ？」

「あれ？　ほんとだ。どうかした？」

「私もピットに戻るからだ」

「いや、セシリアの方に――」

「ぴ、ピットなどどっちでも構わないだろう！」

そりゃそうだけど。まあ、別に止めるほどのことでもないだろう。

僕たちは三人でピットに戻った。

「ふう……」「はあ……」

一夏と同時に展開解除。ＩＳの補助が無くなって、今までの疲れがのしかかってきた。

同じくＩＳの展開状態を解いた箒が、汗に濡れた髪を結いなおしながら話し始めた。

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるしお互いのサポートが遅れるのだ。もっと自然体で制御できるようになれ」

ご指導ありがとうございます……。でも、もうちょっと優しくお願いしたい。

「はあー。シャワー浴びたい」

「俺もだ。そこで箒、ものは相談なんだが……」

「なんだ、言ってみろ」

「今日、先にシャワー使わせてくれよ。っていうか箒、剣道部に入るんじゃなかったのか？」

「あ。そういえばそうだったな。毎日僕たちに付き合ってたら、他の子に出遅れたりしないの？」

「そ、それはお前たちが気にする必要はない。……こっちの方で出遅れる方が問題だ……しかも、二人……」

「え？　ごめん、よく聞こえなかった」

「な、何でもない！」

何でもないらしい。気にしないことにして、僕はピットを出ようと出口に向かった。

「桐斗っ！」

「うわっ！？」

目の前でバシュッとスライドドアが開いて、鈴が現れる。突然出てきたものだから、少しびっくりした。

「なによ、その反応」

「い、いや。ごめん。少し驚いちゃって」

「ふーん。ま、いいわ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクと麦茶があるけど、どっちがいい？」

おお。さっきまでハードな特訓を受けていたせいか、鈴の優しさが心にしみる。

「ありがとう。じゃあ麦茶もらうよ」

「はい。ついでに一夏。スポーツドリンクあげるわ」

「俺はついでの上に残り物かよ。でもま、サンキュ」

タオルで汗を拭いて、麦茶で少しずつ喉を潤していく。あー、生き返る。
一夏もスポーツドリンクに満足しているようだ。
「変わってないね、桐斗。若いくせに変に節約するとことか」
鈴の言うとおり、僕の持つペットボトルの中身は四分の一の量も減っていない。
「あとから飲めるからな。そうやったほうが、なんだか得した気分になるだろ？」
「オバサン臭いよ」
「……ほっとけ」
にやにやと笑う鈴の目は見透かすように僕を見てくる。それが、なんだか落ち着かなかった。
（っていうか、鈴ってこんなに可愛かったっけ……？）
最後に会ったのは小六の春直前。それから三年も経っているのだから、当然といえば当然だろう。実際、箒だって美人になっていた。容姿だけではなく、ふたりにはあの頃にはなかった『女の子らしさ』が態度から感じられる。この変化は僕の男心をちょっとだけ揺さぶった。
「桐斗さぁ、やっぱ私がいないと寂しかった？」
「ん？　まあ、そうだな。一夏も箒もいなかったし、引っ越し先に

馴染むのは大変だったよ」
「そうじゃなくってさぁ」
にこにことしている鈴は、いつになく上機嫌で話を続ける。なんだか、何かを期待しているような感じだ。
――あ。もしかして、アレか？
「鈴」
「ん？　なになに？」
「ほれ」
鈴の頭に手を伸ばし、できるだけ優しく撫でる。
「ぁ……」
鈴の目が気持ちよさそうに細められる。猫のように頭を僕の手に押しつけてくるのは、きっと無意識だろう。
「――って、ちがうわよっ！」
ハッと我に返って、顔を赤くした鈴は僕の手から逃れた。
「えっ？　でも鈴、頭撫でられるの好きだったじゃん」
「すすっ、す、好きじゃないわよ！」
ああ。昔と同じ反応だ。頭を撫でるといつもこうやって隠したがる。

もう一夏も知ってるけどね。
鈴は気を取り直したように髪を整えるが、少し名残惜しそうに毛先をいじっていたのがわかった。
「あ、アンタねぇ……久しぶりに会った幼なじみなんだから、いろいろと言うことがあるでしょうが」
言うこと……はて？　何も思いつかないぞ。
「例えばさぁ――」
「あー、ゴホンゴホン！」
箒のわざとらしい咳払いで鈴の言葉は遮られた。この咳払い、今日だけで何回聞いたっけ？
「桐斗、私は先に帰る。遅くならないように帰ってこいよ」
「ああ、わかった」
「ほら行くぞ、一夏。では、また後でな。桐斗」
「お、おい。ちょっと箒？」
箒は一夏を引っ張ってスライドドアから出て行った。
『また後で』をやけに強調された気がするが、たぶん気のせいだ。
今夜も一夏と部屋に来るんだろうし。
「……桐斗、今のどういうこと？」

一夏と箒がピットを出て行ってから、鈴のさっきまでの上機嫌はどこかに行って不機嫌を隠したような、引きつった笑みで聞いてくる。その声はさっきより2トーン低い。

「え？　いや、毎晩僕の部屋に来てくれるからさ、今日も夜に来るんだろうなって。あ、でも最近は朝起こしに来てもらったりもしてるな」

「まっ、毎晩部屋に！？　夜に！？　朝起こしに！？　き、桐斗、アンタあの子とどういう関係なのよ！」

「いや、昼に言っただろ？　幼なじみだって」

「おお、幼なじみが毎晩来るとか、朝起こしに来るとか、一体いつのラブコメよ！」

言ってることがおかしい。

あ。そういえば言ってなかったな。

「僕、今一夏と箒の隣の部屋なんだよ」

「……は？」

「いやあ、なんか急ぎで用意されたらしくてさ。僕はひとり、一夏と箒はふたり部屋で――」

「そ、それじゃああの子は一夏と寝食を共にしながら、毎晩桐斗の部屋に来てるってこと！？」

「ん？　まあ、そうなるね」

部屋には一夏と一緒に来るけど。

「でもまあ、隣人が幼なじみでよかったよ。困ったことがあったらすぐに呼べるし、変に気を遣わなくていいし。何より、緊張しないですむからな」

「……そっか。そういう手があったわね……」

「え？　何て？」

「ふふ、ふふふふふっ……。いいわ。あっちが隣の幼なじみポジションなら、あたしは直球でやってやるわよ……」

「あ、あのー。鈴、さん？　何を言ってらっしゃるんでしょうか……？」

思わず敬語になる。

うつむき加減で、なんだかダークな笑いを漏らしながら意味不明なことをぼやいている鈴はなんだか怖い。一体なにがあったんだ。

「つまり、幼なじみならいい訳ね！？」

「えぇっ！？」

いきなりガバッと顔をあげる鈴に、また驚く。

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

なぜか今度はひとりで納得を始めた鈴は、何度も何度も頷いている。

なに？　何がわかったんだ？

「桐斗っ！」

「は、はいっ！？」

「幼なじみはふたりいるってこと、覚えておきなさいよ」

「え。いや、一人足りな――」

「じゃあ、後でね！」

僕の言葉を聞かず、そう言い残してピットを飛び出していった。『後で』と言ったということは、また来るのだろうか。

「え、えーと……」

やっぱり、幼なじみでも女子の考えていることはよくわからない。

◇

「というわけで、あたしもここに住むね」

「いや、何が『というわけ』なのかわからないんだけど……」
寮の部屋、時刻は八時過ぎ。夕食も終わって僕と一夏、箒はのんびりとお茶にしようとしていると、いきなり部屋に鈴がやってきて、この状態に。
言ってることがわかりません。
「いやぁ、だって桐斗ひとりじゃ大変でしょ？　アンタ、結構寂しがりやだし。女子の押しかけがあったら大変そうだし。だから、あたしが面倒見てあげようかなって思ってさ」
僕はペットかよ。確かに女子の対応は苦手だが、そんな心配をされなくてもやっていける。……たぶん。
「ちょ、ちょっと待て！　なぜお前が桐斗と一緒の部屋になるんだ！？」
そんな鈴に突っかかってきたのは箒。ちなみに、今着ている寝間着の帯が前と変わっていた。
「だって幼なじみなんだから世話は焼くべきでしょ？」
「ふざけるなっ！　わ、若い男女が同じ部屋で生活など、許されるわけがなだろう！」
「でも、篠ノ之さんも一夏と同室じゃない。だったら問題ないよね」
「そ、それは私と一夏の問題だ！　それに、先生方が決めた部屋割りなのだぞ！」

――すいません。じゃんけんで決めました。

「大丈夫。あたしも幼なじみだから」

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

そして今知った。このふたり、相性最悪だ。さっきから話が噛み合っていない。鈴はさっきから自分の主張ばっかりだし、箒は頑固にそれを押し返している。

というかこのケンカ（？）、どちらが勝っても別に得も損も無いと思うんだが。箒が言っているのは規律の問題か？　箒は人一倍頑固だからなぁ。

「鈴」

「ん？」

「それ、荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはボストンバッグひとつあればどこでも行けるからね」

一夏が尋ねたように、鈴が持ってきた荷物はボストンバッグひとつだけ。

少なすぎだろ。昔一夏がいつでも家出が出来るようにかと冗談で言ったら本気で怒っていたので、僕も注意している。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！　出ていけ！　ここは桐斗の部屋だ！」

「篠ノ之さんの部屋じゃないでしょ？　関係ないじゃん」

「わっ、私は幼なじみだっ！」

「あたしも幼なじみだし。ねぇ、桐斗」

そう言って同意を求めるように僕の方を見る。箒も、鈴に出て行けと言えと僕に視線で訴える。ていうか、睨む。

「はは……だってさ、一夏」

「俺に振るなよ……」

助けて相棒。マジで頭が痛い。

「とにかく！　出て行け！　自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ、桐斗。約束覚えてる？」

「む、無視するな！　ええい、こうなったら力づくで……」

箒は僕に正しい構えを教えるために持ってきていた竹刀を握る。夜ぐらいは休もうって言ったじゃん。

「あ、、馬鹿――」

「ちょっ、箒――」

一夏と僕が止めに入ろうとするが、その瞬間に竹刀は振り下ろされた。

バシィンッ！

ものすごい音が響いた。って、ぼけっとしてる場合じゃない！

「鈴、大丈夫！？」

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは――代表候補生なんだから」

いつもより強気な鈴の声。

見ると、確実に頭にヒットしたと思われた打撃は、ＩＳが部分展開した右腕によってしっかりと受け止められていた。

「……！」

驚いていたのは、誰より箒だった。いくらＩＳの展開が速くても、その判断を下すのは操縦者――生身の人間だ。つまり、ＩＳの展開速度は人間の反射限界を超えない。

そしてさっきの打撃は、およそ素人が土壇場で対処できるレベルのものではない。つまり、鈴自身ががかなり強いという単純かつ明朗な答えがそこにあった。

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ？」

「う……」

怒りに任せて自制心を失ったという指摘が何より効いたのか、箒はバツが悪そうに顔を逸らす。

「ま、いいけどね。それで桐斗。さっきの続きなんだけど」
細かいことは気にしないとばかりにからっとした態度で、鈴はＩＳの部分展開を解き僕に向き直った。
「え、えーと……」
かなり気まずい。箒はさっきの失態を引きずって無言だし、一夏はさっきの出来事にまだきょとんとした顔をしている。
ん。約束って、もしかして――。
「鈴、約束って言ってたよな？」
「う、うん。覚えてる……よね？」
急に顔を伏せて、ちらちらと上目遣いで僕を見てくる。心なしかその姿は恥ずかしそうに見えた。
「えーと、もしかしてあれ？　鈴の料理の腕が上がったら――」
「そ、そうっ。それ！」
「――おごってくれるってやつ？」
「……はい？」
「だから、鈴が料理出来るようになったら、僕にタダでごちそうしてくれるって約束だろ？　いやあ、貧乏人の僕にはありがたい――」

――パアンッ！

「……え？」

いきなり、僕の頬に鋭い熱が感じられた。

「幼なじみの激突と灰色の乱入者」（前書き）

本格的に暑くなってきましたね
我が家には扇風機がないのでかなりつらいです
ですが、夏に負けないように頑張ります

それでは、どうぞ！

「幼なじみの激突と灰色の乱入者」

――パアンッ！

俺に耳にかわいた音が入った。

「……え？」「……へ？」

いきなり頬をひっぱたかれた。桐斗が、鈴に。

突然のことで何が何だかわからなくて目をぱちくりさせる桐斗が気まずそうな表情になる。その視線を追うと、桐斗を睨む箒の姿が。

「……」

そんななか、鈴は肩を小刻みに震わせ、怒りに満ちた眼差しで桐斗を睨んでいる。

しかもその瞳には、うっすらと涙が浮かんでいるように見えた。

やばい。これはやばいぞ。

「え、あ、あの、鈴……」

「最っっっ低！　女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　犬に噛まれて死ね！」

むかっ。

「おい鈴。いくらなんでも死ねはねえだろ。ちゃんと話してやればいいじゃねえか」

気づいたら口が動いていた。だが、いくらなんでもそこまで言っていいことと悪いことがある。鈴はそれにふれたのだ。

「うるさい！　桐斗が悪いんじゃない！」

「そうかもしれねえけど、ちゃんと説明しないお前も悪いだろ！」

「ちょっ、ちょっと待てよ、ふたりとも。喧嘩するな！」

俺と鈴の間に桐斗が仲裁に入るが、鈴の怒りはおさまっていない。

「もとはといえばアンタが原因でしょ！　謝りなさいよ！」

「えっ！？　えっと……」

「いや、謝る必要は無いぞ桐斗。鈴がちゃんと怒ってる理由を説明するなら、話は別だけどな」

「せ、説明したくないから言ってるんでしょうが！」

どういうことだよ。まったく意味がわからん。

「もぉ～～っ！　なんで一夏だけでなく桐斗までこうなのよ！　桐斗がこうなったのもアンタのせいじゃないの！？」

「はあ？　なに言ってんだよ」

本当にわからんぞ。俺のせいで桐斗がどうなるっていうんだよ。
視界の端で箒が「あー、なるほど」という顔をしたのは、たぶん気のせいだ。
そこからは、単純に売り言葉に買い言葉だった。

「だから、なんでそんな怒ってんだよ」

「言いたくないって言ってんでしょ！」

「なんでだよ馬鹿！」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！　この朴念仁パートツー！　間抜け！
アホ！　馬鹿はアンタよ！」

むかむかっ。

「うるさい、貧乳」

「あっ、一夏――」

――あ。やばい。

ドガァァンッ！！！

いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋全体が、いや、きっと寮全体がかすかに揺れた。見ると、鈴の右腕は再び指先から肩までがＩＳ装甲化していた。
思いっきりテーブルを殴ったような――けれど、拳はテーブルには全く届いていない――そんな衝撃だった。

「い、言ったわね……。言ってはいけないことを、言ったわね！」
ぴじじっとＩＳアーマーに紫電が走る。
――これは、まずい。本気で、怒っている。
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」
冷や汗を流を感じて、弁解をしたが意味はない。鈴の鬼のような表情を見ればわかる。
「うるさいっ！　決めたわ、まずはクラス対抗戦でアンタをギッタンギッタンにしてやる！　その後で――」
振り返った鈴の視線を受けて、桐斗がびくっと震える。さっきよりも怖い顔をしていたのだろうか。桐斗の表情は、凍り付いていた。
「桐斗。アンタに無理やりにでも約束を思い出させてやるわ。覚悟してなさいよ――全力で、叩きのめしてあげる」
今までに聞いたことのない冷たい声音でそう言うと、床に落ちていたボストンバッグを拾って鈴は部屋を出て行った。ガチャン……と閉まったドアの音まで、なんだかおびえているように聞こえる。それくらい、今の鈴の気配は鋭かった。
ちらりとテーブルを見る。鉄製の頑丈なテーブルは見る影もないほど潰れて、鉄クズとなっていた。
「ああ……やっちゃったよ……」
桐斗はうつむいて、こめかみを押さえていた。

いや、最後のは明らかに俺が悪かった。

（よりにもよって胸のことを言ってしまうとは……）

鈴が一番気にしている、真剣に怒るポイントだ。

「桐斗」

「え。なに、箒」

「馬に蹴られて死ね」

「なんで！？」

なぜか追い討ちをかけた箒に、俺は思わずつっこんでいた。

桐斗はその言葉がとどめとなったのか、どさりと膝から崩れ落ちてしまった。ダメだ、かける言葉が見つからない。

（しかし、参ったな……）

まさか今日再会した幼なじみと、こんな形で喧嘩することになるとは。

だが、クラス対抗戦で当たらなければいいだけだ。直接ぶつからなければ、鈴の機嫌もおさまるかもしれない。

――その考えが、甘かった。

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。
表題は『クラス対抗戦日程表』。
一回戦の相手は二組――鈴だった。

◇

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。
俺の視線の先では、鈴とその赤みがかかった黒色のＩＳ『甲龍』が試合開始のときを静かに待っている。肩の横に浮いたとげ付き装甲（スパイク・アーマー）が、やたら攻撃的な自己主張をしている。……あれで殴られたら、すげえ痛そうだな……。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向かい合う。その距離は五メートル。俺と鈴は開放回線（オープン・チャンネル）で言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわ

よ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それは脅しでも何でもなく、本当のことだった。それは『殺さない程度にいたぶることは可能である』ということだ。そして、代表候補生クラスはそれがおそらく可能なんだろう。俺がセシリアにきわどいところまで迫ったのは、本当に奇跡としか言いようがない。そして奇跡は、二回と続かない。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。

ガギィンッ！！

瞬時に展開した《雪片弐型》が物理的な衝撃ではじき返される。俺はセシリアに習った三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）をどうにかけなして、鈴を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

鈴が手にした異形の青竜刀をバトンでも扱うかのように回す。両端に刃の付いた、というより刃に持ち手が付いているそれは鈴の手によって自在に角度を変えながら切り込んでくる。しかも、高速回転している分、俺は刃をさばくのにも苦労した。

（まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離をとって――）

「――甘いっ！！」

ばかっと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

一瞬ぐらりと暗闇に傾きかけた意識を慌てて取り戻す。けれど、当然ながら鈴の攻勢は止むことがない。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる。

ドンッ！！

「ぐあっ！」

見えない拳に殴られて、俺は地表に打ちつけられる。ダメージもいきなり七六食らっている。

これは、かなり、まずい。

◇

「なんだあれは……？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやいたのは、今の僕が思っていることを代弁したものだった。
それに答えたのは、同じくモニターを見つけるセシリア。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余暇で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す――ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

しかし、セシリアの説明は僕の頭にはあまり留まらず、ひたすらモニターを眺める。
苦戦する一夏は、次々とダメージを受けていた。

「やっぱり、『零落白夜』がないと勝てないでしょうね。問題は、それをどうやって当てるかですわ……」

『零落白夜』。白式の持つ《雪片弐型》の唯一にして最大の能力。相手のシールドエネルギーを一撃で大幅に削り取るあの攻撃力ならば、代表候補生とはいえひとたまりもない。
だが、セシリアも言ったように、その攻撃をどのようにして当てるかだ。近接ブレードである《雪片》の間合いは短い。見えない弾丸を放つ『衝撃砲』が相手では分が悪いのだ。
だが――――

「なら、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使えば懐に入り込めるんじゃないか？」

攻略法が、ない訳じゃない。
『瞬時加速』――後部スラスター翼から放出したエネルギーを内部

に一度取り込み、圧縮して放出することで得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。少々難しいＩＳの加速方法だ。
それを、一夏は体得している。ここ一週間、血が滲む思いで特訓してなんとかものにしたのだ。
ちなみに、僕も一緒に特訓していたので同じくこれを覚えていた。

「確かに。あれなら凰の隙を突いて一気に懐に入り込める。だが、問題は出しどころだ。それにチャンスは一度だけ、それも完全な奇襲攻撃を決めなければならん。でなければ負けるだけだ」

会話に入ってきた千冬さんは、いつものように腕組みをして立っていた。

「でも、一夏らしくていいでしょう？　余計なことを考えないで、ただ敵だけを見る」

一度、僕と一夏は射撃武器を使いたいと千冬さんに相談したことがあった。だが、反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、弾丸の特性、大気の状況、相手武装による相互影響を含めた思考戦闘など、僕たちの頭では理解できない知識を要求されたので潔く諦めた。意味不明すぎる。
それからは近接格闘と急加速急停止といった基礎移動技能の訓練を徹底的に行ったのだ。

「一つのことを極める方が、アイツには向いているのさ。なにせ――私の弟だからな」

そう言った千冬さんの声音は素っ気ないものだったが、表情はどこか嬉しそうに見えた。

「一夏――」

隣にいた箒が、苦しそうにモニターを見つめながらつぶやく。その心の痛みの理由を僕は知っている。責任の一端は僕にあるのだ。

「大丈夫。アイツは勝つよ。なんたって、一夏なんだから」

こちらを向く箒の瞳は一瞬きょとんとしていたが、すぐに小さく苦笑した。

「――ああ。そうだな」

「織斑が仕掛けるぞ。篭手川、しっかり見ておけ」

千冬さんに言われて、僕たちは再びモニターに視線を移す。そこにあったのは、たったいま加速姿勢に入った一夏の姿だ。

『うおおおおっ！』

開放回線を通して一夏の雄叫びが響くのと、その姿が高速の加速状態に入るのは同時だった。

――これなら、いける！

ズドオオオンッ！！！

「！？」

鈴に《零落白夜》の刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

◇

「な、なんだ？　何が起こって……」

俺がいるステージの中央からは、もくもくと黒煙が上がっている。
さっきの爆音は鈴の衝撃砲ではない。範囲も威力も桁違いだ。
その衝撃は、『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたことによるものらしい。
状況がわからず混乱する俺に、鈴から秘匿通信（プライベート・チャンネル）が飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

何をいきなり言い出すのか。そう思った瞬間、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。警告！　ロックされています！

「なっ――」

間一髪、俺は瞬間的に加速してその場から離れる。直後にその空間

が熱線で砲撃された。

「あ、あぶねえ。ビーム兵器かよ……。しかもセシリアのＩＳより出力が上だ」

ハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知った俺は、背中に冷たいものが伝っていく思いだった。

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

開放回線（オープン・チャンネル）で聞いた俺に合わせて、鈴も普通に喋った。

「逃げるって……女を置いてそんなことできるか！」

「馬鹿！　アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

思いっきり遠慮なく言われた。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾――」

「！　来るぞ！」

そうしているうちに、侵入者が動き出していた。煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。

俺と鈴はそれをどうにかかわすと、その射者たるＩＳがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

姿からして異形だった。深い灰色をしたそのＩＳは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首というものがない。肩と頭が一体化しているような形をしている。腕を入れると二メートルを超える巨大は、肌が一ミリも露出していない『全身装甲（フル・スキン）』だった。

「お前、何者だよ」

「……」

当然――といえば当然か。謎の乱入者はこちらの呼びかけに答えない。

『織斑くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより声に威厳がある。

「――いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

あのＩＳは遮断シールドを突破してきた。ということはつまり、今ここで誰かが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性があるということだ。

「いいな、鈴」

「――ったく。しょうがないわね。足引っ張るんじゃないわよ？」

「ああ。それじゃ桐斗に顔向けできないからな」

「ばっ、馬鹿！　なに言ってんのよ！」

いきなり顔を赤くして怒鳴る鈴。だって、普通幼なじみに何かあったらいけないだろ？

『織斑くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――』

言葉はそこまでしか聞けなかった。敵ＩＳが体を傾けて突進、それを避けるのに集中する。――成功。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

俺と鈴は横並びになってそれぞれ得物を構える。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

キンッと互いの武器の切っ先を当てる。それが合図。俺と鈴は即席コンビネーションで飛び出した。

「意地っ張りは直しづらい」（前書き）

今回はちょっと内容が薄いです
あれ……一番の見せ場なんだけどな……？
と、とにかく、どうぞ！

「意地っ張りは直しづらい」

「もしもし！？　織斑くん聞いてます！？　凰さんも！　聞いてますー！？」

ＩＳの秘匿通信は声に出す必要は全くないのだが、山田先生はそれを失念するくらい焦っているみたいだった。
ちなみに、周囲から見ると軽く危ない人みたいになっている。
でも、焦っているのは僕も同じだ。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「千冬さん、そんなこと言っても――」

「織斑先生だ。まあ落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……千冬さん。それ、塩だけど……」

「……」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を大きく『塩』と書かれた容器に戻す。
やっぱり、なんだかんだ言ってて心配してるんだな。
ギロリ。あ、やばい。心を読まれた。

「篭手川、ほら、コーヒーをやろう」

「え？　い、いや、でもそれ塩が入ってるやつじゃ……」
「この私が用意してやったんだ。ありがたいだろう？」
ずずいっと押し付けられるコーヒー（微塩）。それを押し返す術を、僕は持っていなかった。
「い、いただきます……」
「熱いので一気に飲めよ」
悪魔だ。いや、前からそう思ってたけど。
火傷しそうなほど熱くてにがしょっぱい液体を、なんとか僕は喉に通した。激マズだ。
――あれ、箒？
涙をこらえた僕が見つけたのは、気配をひそめてピットから出て行く箒だった。気になって、それについていく。
開いたスライドドアから見たものは、すでに走る箒の後ろ姿。そして、僕は悪い予感が的中したことを思い知る。
箒を追いかけて、僕も走り出した。
「おい、箒！　待てよ！」
「……」
鍛えているだけあって、箒の脚は通常の女子よりも速くてなかなか距離が縮まらない。
箒が駆け込んだ先は、このアリーナ全体に放送を流すための中継室。

そこに入ると同時に、審判とナレーターのうなじにバシンと一撃をくらわせた。そのふたりは小さなうめき声をあげて、すぐに眠りの世界へ突き落とされる。当分目を覚まさないような倒れかたをした。うわぁ…。

「ちょっと箒……！」

僕の制止も聞かずに中継室の機械をいじり、すぐさま窓に向かった。その先には、あの異形のＩＳと対峙する一夏と鈴の姿がある。

「一夏ぁっ！」

大音量に設定された箒の声が、キーン……とハウリングで尾を引く。

『なっ！？　……箒？　桐斗！？』

驚いた一夏の声が、開放回線越しに伝わる。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

また大声。はぁはぁと肩で息をしている箒のその横顔は、怒っているような焦っているような不思議な表情だった。

『箒、逃げ――』

――やばい！　気がつくと、乱入者であるＩＳがその砲口のついた腕を箒に向けようとしていた。

このままだと助からない。だったら――やるしかない！

「下がってろ！」

箒に叫ぶと同時に、ＩＳ『紫燕』とその武器《天蕾》を一瞬で展開させて窓ガラスをぶち破り、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）を発動させる。

（雷光演武――発動！！）

瞬間的に最大の出力まで高めたエネルギーを、《天蕾》に充填させた。

充填が終わり刀を抜いたところで、敵ＩＳの腕から巨大なビームが放たれる。金色の刃がスライドするようして開き、光刃が作られる。

「だあああああああっ！！！」

遮断シールドを貫通してきた閃光に向かって、《天蕾》を振り下ろした。凝縮したエネルギーによって作られる『反エネルギー』能力。その刃は向かってきたビームを、縦から真っ二つに切り裂いた。灼熱の光が僕の体を包もうとしてくる。右腕を押し返そうとする力に、歯を食いしばって対抗した。

じりじりと空気中のチリがどんどん燃えカスに変えられて、その異臭が鼻につく。

――終われ。さっさと終われ……。

そう思いながら、塗りつぶされた視界のなかでビームを切り裂く『雷光演武』の刃の切っ先を見つめた。

「あああっ！」

やがて、熱線が止んだ。

後ろにいる箒や審判、ナレーターに怪我はないようだが、中継室の

壁は少し溶けかかっている。
しばらくは出入り禁止になるだろう。
そして、目の前の遮断シールドにはさっきのビームによって風穴が空いていた。

「き……桐斗……」

「――行ってくる。だから、もう危ないまねはするな……」

「え……ま、待てっ！」

今度は僕が、箒の制止を振り切った。
遮断シールドの穴を通ってステージに飛び出し、一夏たちの元へたどりつく。

「ふたりとも、無事！？」

「こ、こっちの台詞よ！　アンタ、あんなことやって平気なの！？」

「なんとかね。エネルギーはだいぶ減っちゃったけど」

最大出力で発動させた雷光演武はエネルギーの半分以上を持っていった。使えるのはあと一、二回が限界だ。

「桐斗、箒は？」

「そっちも大丈夫。怪我はないよ。もうあんなことはするなって言っといたから、たぶん心配ない」

「そうか。なら安心だ」

「ふたりとも、来るわよ！」

敵ＩＳが再びビームを放つ。僕たちはそれぞれ別方向に散ってそれをよけた。

「このっ！」

鈴が衝撃砲を展開、砲撃を行う。――がしかし、敵の腕はその見えない衝撃を叩き落とす。その砲口が鈴に向けられた。

「鈴、危ないっ！」

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさらう。背後を熱線が通過した。

「あ、危なかったぁ……」

「ちょっ、ちょっと、馬鹿！　離しなさいよ！」

「うわっ、暴れないでよ。――っておい、殴るなよ！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！　だ、大体どこ触って――」

「桐斗、ちょっと聞いてくれ！　あいつ、たぶん無人機だ」

鈴の言葉を遮って、一夏から開放回線で話しかけられた。

「無人機……？」

そう言われて、敵ＩＳを注意深く見てみる。

確かにおかしな点が見つかった。敵のＩＳが、僕たちを攻撃してこないのだ。まるで、なにか興味がある対象を観察するように聞き耳

をたてているみたいに。
ＩＳは人間が乗らないと絶対に動かない。それは教科書に記されていたことだが、絶対にそうだとは限らない。たとえ無人機が開発できてたとしても、その事実を黙っていればいいのだから。

「じゃあ、手加減の必要はないな。一夏」

「おう。俺も同じことを考えてたぜ」

そう、手加減はしない。僕の心が静かに燃えているのが自覚できた。

「一夏、鈴。エネルギーはどのくらい残ってる？」

「ひゃ、一八〇……」

「俺は六〇を切っちまった。零落白夜はあと一回しか使えないな。桐斗、同時に突っ込むぞ。それなら間違いなく決まる」

「ああ。それじゃあ鈴、衝撃砲で援護射撃をしてくれる？」

「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより下ろしなさいってば！」

「ああ、ごめん」

僕が手を放すと、鈴は自分の体を抱くような格好で離れる。あれ。そこまでイヤだったのか。ごめんなさい。

「それじゃ、行くぜ」

「ああ」

僕と一夏は短いやりとりの後、同時に飛び出した。敵ＩＳは空に上昇しながら僕と一夏に向けられた両腕の砲口を開く。しかし、

「させないわよっ！」

鈴の全力の衝撃砲が放たれ、その攻撃を阻んだ。敵ＩＳはそれをはじき、あるいはかわしていく。だが、そこには明らかな隙が生まれていた。

「桐斗！　出し惜しみ無しでいくぞ！」

「わかってる！」

《天蕾》を逆手に抜刀する。展開された刃からは、凝縮した光が姿を現した。

――【雷光演武】を使用可能。エネルギー転換・充填率九〇％オーバー。

全身から湧き立つような、力が溢れてくる。

「だあああああっ！」

「はあああああっ！」

僕と一夏の雄叫びが重なり、同時に得物を振るった。

目の前にあったその深い灰色の両腕は、肩から切り落とされた。

しかし、その反動で僕たちは敵ＩＳから繰り出された回し蹴りをモロに受ける。さらに背中から現れたのは、隠し銃。ビーム兵器らしきそれの銃口は、壁に叩きつけられた一夏に向けられていた。

一夏の口の端が、にっと不適に持ち上がる。

「……狙いは？」

一夏の呟きが、開放回線を通して聞こえてきた。

刹那、客席からブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵ＩＳを打ち抜く。

そう、遮断シールドはすでに破壊した。

ボンッ！　と小さな爆発を起こし、敵ＩＳは地上に落下する。シールドバリアーがない状態であののレーザー狙撃を一斉に浴びたら、ひとたまりもないだろう。

人間に予測できても機械には予測できない、認知外からの攻撃行為。

機械と違い、人間は狡猾に裏をかけるのだ。

ほっと息をついて、僕は《天蕾》を鞘に納めた。

『桐斗、大丈夫だった？』

『ああ。心配ない。ありがとね、鈴』

覚えたばかりの秘匿通信を使って、鈴と会話をする。

『な、なによいきなり！？』

そんな発言が意外だったのか、返ってきた言葉は狼狽していた。

『いや、援護してくれなかったら僕も一夏もあそこまでやれなかったよ。鈴ならやってくれるって思ってたけどな』

『そ、そうかな……。……。あ、あったりまえでしょ！　なんたってあたしは代表候補生なんだから！』

うん。やっぱりこう元気な方が鈴らしいな。

「ふう。何にしてもこれで終わ――」

――敵ＩＳの再起動を確認！　警告！　ロックされています！

「！？」

残された隠し銃。それを、最大出力形態（バースト・モード）に変化させたＩＳが地上から無防備な僕を狙っていた。

その銃口が光る。

そこに飛び込んだのは、雪片を振る一夏。

直後、一夏の姿は爆発の炎で覆われて見えなくなった。

「仲直りはふとしたきっかけで」（前書き）

今回で一巻分はおしまいです

それでは、どうぞ！

「仲直りはふとしたきっかけで」

「はぁぁ〜〜〜〜。お、終わった……」

教室の窓から見える空はすでに茜色に染まっている。もう放課後なのだから、当たり前だが。

「お疲れ様です。これでもう罰則は終了ですよ」

山田先生が僕の書いた反省文、原稿用紙五枚分を受け取りながら柔らかく言った。

それを書いた理由は今日の行動にある。無断でＩＳを使用した上に中継室のジャック。前者はともかく、後者に納得がいかないのは僕だけじゃないはずだ。

「そういえば、一夏の様子はどうですか？」

「織斑先生がついているから大丈夫ですよ。もうすぐ目を覚ます頃じゃないですか？」

今まで頼りないと思っていたが、このときの山田先生は間違いなく教師の顔をしていた。これからはもう少し敬うことにしよう。

「でも、すいません。後片付けもまだ終わってないのに、僕につき合ってもらっちゃって」

「え……い、いえいえ、いいんですよ！　な、なんたって私は先生なんですから！」

少し慌てて胸を張る山田先生。遠慮されるのに慣れていないんだろうか。夕日に染められた顔が、さらに赤くなったように見えた。

「じゃあ、僕はそろそろ行きますね。一夏の様子も気になりますから」

「あ、は、はい。篭手川くん、また明日」

「はい。また明日」

まだ仕事が残っているであろう山田先生に手を振り、僕は教室を後にした。

保健室へと続く廊下を歩いていると、向かい側から見なれた女子が歩いてくるのが見えた。

「箒」

「……」

箒は僕が近づくのを待つように立ち止まったので、箒の正面に着いたところで歩を止めた。

アリーナでの一件の後、僕と箒、それにセシリアや鈴は別々に事情聴取をされていたので実に数時間ぶりの再会だ。

「箒、一夏のお見舞いに行ってきたのか？」

「う、うむ」

ポニーテールの幼なじみは腕組みをしてふんと鼻息を漏らす。

なんだろう、少なくとも上機嫌ではなさそうだ。

「あ……あのだな。今日のことだが……」

「ん？　ああ、あの中継室の？」

「う……うむ……」

そこから数十秒間、箒は沈黙した。なんだか視線がちらちら泳いでいるし、ときどき眉間にシワがよったりしていて、なんだか気まずくなってくる。

「そ、その……あのときは……すまなかった……」

「えっ？」

珍しく、謝罪された。あの意地っ張りで人一倍頑固な箒に、だ。らしくない。らしくないぞ箒。

「私が、感情に任せてあんなことをしたから……お前まで危険なめに遭わせて……」

「なんだ。そんなことか」

「そ、そんなこととはなんだっ！？」

謝られたと思ったら次はいきなり怒られた。なんでだよ。

「たぶん、箒がしてなくても僕は飛び出してたぞ。だから何も気にすることないって。あ。ごめん、もしかして心配かけたか？」

「えっ……。し、していないしていない！　誰がお前の心配などするか！」

いや、そこはしてくれてもいいんじゃないでしょうか。

まあ、箒が心配してるのは僕より一夏だろうしな。

「と、とにかくだ！　今日はすまなかった！　明日からもまた訓練に来い。わかったな？」

「あー、うん。了解」

「わかればいい。……では、私は部屋に戻る」

一夏を待っておけばいいのに。セシリアに遅れをとるぞ？

「……。桐斗」

「ん？」

「その、だな。あのときのお前、たちは……か、かか、かっ」

カッパ巻きみたいだったぞ、とか？　いや、ないか。

「格好良か……な、なんでもない！」

最初のあたりが聞き取れなかった。まあ、本人がなんでもないと言っているので気にしないでおこう。そうしよう。

「で、ではな！」

箒は逃げるように廊下を駆けていった。
おいおい、廊下は走るなって貼り紙があるんだが。

「ま、いっか……」

気を取り直して、再び保健室に向かう。

「あ、桐斗……」

「鈴。何やってんの？」
保健室の前。鈴はそこで壁に背を預けて立っていた。

「い、いや。まあ、一夏のお見舞に来たんだけど、一夏のやつが寝てたから出てきたのよ。べ、別にアンタを待ってた訳じゃないからね！」

そりゃそうだろ。ていうか中で待っててても良かったんじゃないか？

「あー、そういえば試合、無効になったんだってね」

「まあ、そりゃそうでしょうね……」

そういえば、鈴にはちゃんと言っておかなければならないことがある。気づけばもう1ヶ月近く先延ばしにしていた。

「鈴」

「な、なによ」

「えっと、その……。ごめん。色々と。悪かった。一夏まで巻き込んだし」

僕は素直に頭を下げた。経緯がどうであれ、鈴を傷つけたことにかわりはない。自分なりにけじめは必要だ。

そんな僕を見て、鈴は一瞬面食らったような顔をしたが、すぐに取り直した。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

どうやら許してもらえたようだ。

「あ。思い出した」

ふと、いきなり鈴と約束したときのことが脳裏によみがえってきた。たしか、小六の頃。ふたりだけの教室で、今みたいに夕暮れの時間だった。

「『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ。うん、たしかそうだ。で、どうだ？　上達した？」

「え、あ、う……」

なぜかしどろもどろになって、鈴は視線を泳がせたあと、うつむいた。心なしかその顔が赤い。

「ねえ、思ったんだけどさ、その約束ってもしかして意味が違った？　てっきりタダでご馳走してくれるんだとばかり思ってたんだけど――」

「ち、違わない！　違わないわよ！？　だ、誰かに食べてもらったら料理って上達するじゃない！？　だから、そう、だから！」

いきなりまくし立てられてちょっと気圧される。

「だよな。いやあ、てっきり『毎日味噌汁を～』みたいな話かとおもったけど。へんに期待しすぎだよな、僕」

「……」

「鈴？」

「へえっ！？　そ、そうね！　期待しすぎじゃない！？　あは、あはははは！」

なぜだか笑い出した鈴は、なんだかヤケクソになったみたいに見える。そこまでやるほど避けたい話題なら、これ以上追求することはないだろう。

「そういえば、おじさんのお店、この近くにあるのか？　おじさんの料理美味しいし、今度食べに行ってもいいかな？」

「あ……。その、お店は……しないんだ？」

「え？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

……え？　あんなに仲が良さそうな夫婦だったのに、なんで？

鈴の表情が暗くなっていくのを見て、なんと言葉をかければいいのか迷った。

「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいなんだよね。一応、母さんの親権になってて……父さんとは一年会ってないの。たぶん、元気だとは思うけど」

家族がバラバラになる。それは絶対にいいことじゃない。けれど、そうせざるを得ないくらいの、ことがあった。何があったんだろうか。

けれど、僕はそれを鈴には聞けない。一番つらいのは、鈴のはずだから。

「家族って、難しいよね」

僕は、無言で頷いた。数年前まで家族がいた僕には、その言葉の意味が重くのしかかった。

いたたまれなくなって、僕は鈴の頭に手を乗せ、優しく撫でる。珍しく、鈴は反発しなかった。ただ、目を細めて僕の手を感じている。

「……桐斗……」

「うん？」

「……ちょっと、目ぇつむっててくれない……？」

「ん？　別にいいけど」

その要求の意図はわからなかったが、鈴の希望にはできるだけ応えてあげたかった。僕は素直に瞼をとじた。

それから数秒後。なんだか、顔の間近に気配を感じる。落ち着かないような息遣いまで聞こえてきた。なんだ？

「桐斗……」

「あ、あなたたち、なにをやってますの……？」

「へっ？　――――きゃあああああああああああああっ！？」

突然あげられた鈴の大声に、思わず瞼を開く。そこには、僕から二メートルほど距離を取る鈴と、いつの間にかそこにいた怪訝そうな顔のセシリアが。

「あ。セシリアも一夏のお見舞いか？」
「ええ。というか、桐斗さん……。今のを見られていて、何か感じたりしませんの……？　それも廊下で……」
「今の？　ああ。僕、目ぇつむってたから何があったか……はっ！　もしかして、顔に落書きでもされるところだったか！？」
だとしたらかなり恥ずかしいぞ！　どこか鏡はないか！？
「……いえ。わからないのならいいですわ。そうでしたわね。あなたは一夏さん並でしたわね」
セシリアはなぜか納得したように僕と鈴を交互に見る。
へ？　なんの話？
「もう！　なんでよ、なんでこんないい場面で来るのよアンタは！？」
なぜかさっきから頭を抱えている鈴。
さっき一夏の見舞いに来たって言ってただろ。
ガララッ。
「騒がしいと思ったら、やっぱりお前らか」
「あ。一夏」
保健室のドアが開かれ、中から一夏が現れた。
「い、一夏さん！？　お体の方は……？」

「ああ。もう大丈夫だ。爆発に巻き込まれただけだったからな。これから寮に戻るとこだ」

その証拠に、一夏はすでに制服を着ている。
それを見て、セシリアはショックを受けたのか、固まった。おおかた、一夏をつきっきりで看護したかったんだろう。哀れだ。
そのセシリアの目が、キッと鈴を睨んだ。

「あ……あ、あなたのせいですわよ！　なんで別の場所を選ばなかったの！」

「うっ、うるさいうるさいうるさーい！　アンタだって来るタイミングが悪すぎんのよ、この馬鹿！」

「ばっ……！？　フン、これだから品のない方は困りますわ」

「気取ってるばっかのやつよりマシよ」

「何ですって！？」

「何よ！？」

なぜかはじまるセシリアＶＳ鈴の喧嘩。ああ、このふたり相性超悪いじゃないか……。ていうか箒といいセシリアといい鈴といい、もうすこし仲良くする気はないのか。――ないから揉めてるんだが。

「か、帰るか。桐斗」

「そ、そうだな」

「「そこにいなさい！！」」

「「はいっ！？」」

どうやらタダでは帰してはくれないらしい。ふたりの言い合いが終わるまで、僕と一夏はその場で正座させられた。

（ああ……早く部屋に帰って休みたい……。ていうかお腹すいた……）

ぎゃあぎゃあと言い合うふたりの間で、僕の腹の音と一夏のため息は空しく木霊した。

◇

学園の地下五十メートル。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したＩＳはそこで解析を開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのＩＳの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。織斑くんの睨んだ通り――無人機です。どのような方法で動いていたかは不明です。織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか。やはりな」

どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ――な」

そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。
かつて世界最高の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

◇

「遅い！」

寮に戻ってくるなり、部屋の前で立っていた箒からの開口一番がこの言葉。それだけで僕と一夏はかなり疲れた。

「何をしていたのだ、お前たちは……。私は空腹を我慢して待っていたのだぞ」

「待っていたって――え、なに？　まだ晩飯くってないのか？」

「だから、待っていたと言っている」

別に先に行っててもよかったのに……。と思ったが口にはしない。
これは、おそらく口にすると箒が怒るパターンだ。一夏も学習した

のか、僕に目配せしてくる。
「じゃあ早く食堂に行った方がいいな。もう時間ギリギリだし」
「おう」
「ま、待て！」
自分の部屋に荷物を置こうとする僕と一夏を、箒が止める。なんだ？　食堂は八時で締め切るのに。
「と、とにかく、部屋に入れ。桐斗、お前も……」
「え？　あ、ああ」
箒に招かれるまま、素直に隣の１０２５室に入る。
「ん？　なんか食べ物の匂いがするな」
「あ。テーブルの上に何かある。……おお！　チャーハンだ！　どうしたの、これ」
いい香りがすると思ったら、チャーハンのごま油を炒めた匂いだ。空腹なので、いつもより三割り増しで食欲をそそられる。
「わ、私がだな……。つ、作った」
「え？」
「そうなのか？」

「なんだ、ふたりしてその意外そうな顔は！？」
いや、だって、意外だったから……。
特に和食じゃない点が驚きだ。一体どういう風の吹き回しだろうか。
「た、食べるのか食べないのか、どっちだ！？」
「た、食べる。食べるけど……」
「……お前、何で怒ってるんだ？」
「お、怒ってなどいない！」
『怒ってるよな。確実に』
『ああ、絶対に怒ってる』
ＩＳの秘匿通信を使って一夏と会話する。ちなみに、ＩＳを動かしていないときに使うのはこれが初だったりする。
「じゃあ、とりあえず食べてもいいのかな？　僕、お腹すいちゃって……」
「手を洗うのが先だ。それに、うがいもだ」
さすが箒、しっかりしている。
ぱっぱっと手洗いとうがいを済ませた僕たちが洗面所から出ると、さあ座れとばかりに箒がテーブル横で待ちかまえていた。おとなしく席につき、手を合わせて一礼。

「「いただきます」」

「うむ。遠慮なくたべるがいい」

「……」

「どうだ、うまいだろう」

ふふんと得意げに訊いてくる箒。

一夏に視線をやると、向こうも同じことを思っていたのがすぐにわかった。この会話に、秘匿通信は必要ない。

僕たちは一度だけ頷き、

「「……味がしない」」

見事にハモった。

「な、なにっ！？」

見た目だけは普通のチャーハンなのに、味がしない。おそらく調味料が足りていない――いや、おそらくまったく入っていない。それなのにこのこんがりとしたきつね色はどうして出てきているのだろうか。何かの最先端技術か？

「た、たまたま……そう、たまたま忘れたのだ！」

「いや、調味料をたまたま忘れるのはそうそうないと思うぞ」

「ええい、うるさい！　私が食べればいいのだろう、食べれば！」
「いいや。ちゃんと僕たちで食べるよ。せっかく作ってもらったんだし」
ムキになる箒はさておいて、僕と一夏はチャーハンをがつがつとむさぼる。
たとえ味がなくてもありがたい手料理だ。それに、食材ももったいない。
「「ごちそうさま」」
ほぼ同時にチャーハンを平らげ、レンゲをおく。合掌して一礼するのも忘れていない。
「……」
「な、なんだよ？」
「どうしたのさ？」
箒は無言で僕たちを見ながら、なにやら言葉で表現できないようなすごい表情をしている。できるとしたら、変な顔としかいえないだろう。
「か、勘違いするな！　今日は、その……偶然、まれに、低確率で、失敗しただけだ。いつもは成功する」
そうですか。それは良かった。信じておきましょう。……しかし、箒が料理するっていうのは初めて知った気がする。まあ、最後に会

ったのは小四だったし、箒だって恋する十五歳だからおかしくもないか。

「し、しかし、まあ、なんだ。お前たちがどうしてもと言うのなら、また作ってやらないこともないこともないが」

「ん？　いや、いいよ。箒の手間になるだろ。なあ、桐斗」

「僕も別にいいよ。食堂に行けば食べられるしな」

「わ、私の手料理を食べたくはないのか！」

「いや、そこまで言ってないけど……って、どうしたんだよさっきから。何か変だよ？」

「……ま、毎日食べさせてやると言っているのだ……」

さっきまでの威勢はどこへいったのやら、急に縮こまってもごもごと口を動かし始めた。なんと言ったのかはまったく聞き取れなかった。

「だ、大体、お前が悪いのだ！」

「え。僕？」

いきなりビシィッ、と指を差された。なんで？

「あんな約束をして、一体どう責任を取るつもりだ！？」

「約束って……鈴のこと？　あれならもう解決したぞ」
「な、なに……？」
「おお。よかったな桐斗。鈴と仲直りできたのか」
「ああ。僕が謝って許してもらえたよ」
「……」
素直に喜んでいる一夏とは対照的に、箒は疑わしそうに僕を見る。
失礼な。真実だぞ。
「そのようなことで解決するはずがないだろう！」
「いや、したんだって！　ほんとに！」
「そもそも一生のことを簡単に――」
まだまだ続きそうな箒の怒声マシンガンは、気の抜けたノックで止められた。
「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」
このふにゃふにゃした声は山田先生だな。
がちゃりとドアを開けて本人が入ってくる。
やっぱり山田先生だった。
「あ、篭手川くんもいたんですね。ちょうどよかったです」

「どうしたんですか、先生」
「あ、はい。お引っ越しです」
「はい？」
引っ越し？　山田先生が？　どこへ？
「……先生、主語を入れて喋ってください」
「は、はいっ。すみませんっ」
箒が鋭く睨むので、山田先生は小動物のようにびくっと身をすくめた。先生、やっぱり夕方の頼れるって思ったのは撤回します。
「えっと、お引っ越しするのは篠ノ之さんと箒手川くんです。部屋の調整が付いたので、今日から移ってください」
へえ。ようやくか。ということは、僕がこの部屋に移るんだな。
「えっと、それじゃあ私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」
「ま、ま、待ってください。それは、今すぐでないといけませんか？」
箒の口からそんな言葉が出る。まあ、一夏と一緒にいたいだろうから当然だろうな。
山田先生は意外そうにぱちくりと目を瞬かせていた。
「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活を

するというのは問題がありますし、篠ノ之さんもくつろげないでしょう？」

「い、いや、私は――」

まごついた言葉を返しながら、箒はちらっと僕と一夏を見る。――やれやれ。仕方ない。せめて後味が悪くないようにさせるか。

僕は秘匿通信を一夏のＩＳに繋げた。

『一夏、箒があることを心配してるから、心配するなって言ってあげな』

『へ？　心配って、何をだ？』

『そこは自分で考えなよ』

そこまで伝えて、通信を切った。余計なことまで教える必要はない。これはふたりの問題だし、きっと僕の必要以上の干渉をふたりは望まないだろう。

一夏ははっと思いついたようにして、口を開いた。

「そんな気を遣うなって。俺たちのことなら心配するなよ。箒がいなくてもちゃんと起きれるし歯も磨くぞ。な、桐斗」

……やばい。僕、余計なこと言ったかも。

「――！！」

カチン！　……ああ、なんか最近よく聞くな。この誰かが切れたかのような音……。

「先生、今すぐ部屋を移動します！」

「は、はいっ！」

いきなり箒にせかされて、また山田先生はびくっと身を震わせる。

「え、えっと……じゃあ、篭手川くん。お手伝いしましょうか？」

あまりにもキレた状態の箒が怖かったのか、僕の方に寄ってきた。やっぱり頼りないかも。

「いや、僕の方は――」

「あっ！　だ、大丈夫ですよ！　そういう、本とかあっても気にしませんからっ！　こ、篭手川くんだって、若い男の子ですからそういうものに興味を持つのは当然ですよねっ！　あっ、で、でも……その、女性教師系のものがあったら、それはちょっと期待してしまうというか――」

「そういうものは一切ありませんが山田先生は箒の方を手伝ってください」

なんだろう。山田先生が話し続ける毎に背後にグサグサと視線の槍が突き刺さってくるぞ。僕の背後では箒が身支度を整えているが、怖すぎて振り返ることができなかった。

……誓っていうが、そういう類のものは本当に持っていない。マジで。

「うーん……」

引っ越しを終え、僕も箒も部屋を移った。

「……なんか、今までいた人がいなくなると不自然にかんじるな」

とくに、さっきまで同居人が女子だった一夏にとっては違和感がありまくりだろう。

「……まあ、寝るか。考えても仕方ないし」

「そうだね」

シャワーもしたし、歯磨きもした。寝間着にはとっくに着替えている。というか、僕たちにとっては部屋着＝寝間着だ。

一夏は一足早く布団に入ってしまった。

コンコン。

ベッドに入る直前にノックが響く。ちなみに、このベッドの前使用者は箒。――って、あれ？　使っちゃって、いいのか……？　このベッドは今まで箒が使っていた物であって、つまり箒は毎晩この上で眠っていた訳で……。やばい。顔が熱いぞ。

ドンドン！

うわっ、びっくりした。でも今の音のおかげで現実に戻ってこれた。

結局、一番布団に入った一夏が起きてドアを開ける。

「はい、どちらさまで――」

「……」

むすっとした顔で立っていたのは、今さっきまで寝姿を想像してしまっていた箒だった。

「あれ？　な、何か忘れ物？」

「……」

箒は答えない。顔は益々不機嫌そうで、その危うさやいなや残り五分を切った時限爆弾のようだ。まさか、ベッドを見ていろいろ想像していたのがバレたか？

「どうかしたのか？　まあ、とりあえず部屋入れよ」

「いや、ここでいい」

「そうか」

「そうだ」

「……」

「……」

「……」

沈黙かよ。
しかし、数秒後には箒が口を開いた。
「ら、来月の学年別トーナメントだが……」
六月末に行うそれは、クラス対抗戦とは違い完全に自主参加の個人戦らしい。学年別で区切られている以外は特に制限もないそうだ。
しかし、専用機持ちが圧倒的に有利なことは変わらない。
「わ、私が優勝したら――」
頬を紅潮させ、箒が言葉を続ける。その目の前にいるのは一夏。おいおい。まさか、まさか……。ついにか……？
「つ、付き合ってもらう！」
「……はい？」
言った。ついに、ついに言った。あの、人一倍頑固で素直じゃないあの箒が、一夏に告白に近い、宣言をしたのだ。十年近い時間を費やして、やっと。
頭のどこかで、鐘の音が鳴り響いた。
しかし、次の言葉に僕の脳は一瞬フリーズすることとなる。
「ふ、ふたりともだっ！」
「……あれ？」
――――これは、一体どういうことでしょう？

「仲直りはふとしたきっかけで」（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございました。
読んでくださった皆様のおかげで無事一巻分を終了させることができました。大変嬉しいく思っています。
よろしければ、これからもお付き合いお願いいたします。

第二巻では、桐斗の過去が明らかに！？　お楽しみに！

「もーかってまっか？」（前書き）

今回から第二巻に突入です
いつもより少なめなのは、たぶんオリジナルだから……
ああー、文才欲しい……

とにかく、どうぞ！！

「もーかってまっか？」

六月頭、日曜日。
俺は久々にＩＳ学園の外――というか、実家のある街にいた。
国民的休日の昼過ぎということで、遊びに向かう子どもや並んで歩く若者たち、デート中のカップルなどか多く道を行き交っている。

「――ったく、蘭のやつめ。なに思い切った決断をしちまってるのやら……。おい。聞いてるか？　一夏」

「ん？　おう。聞いてるぞ。エアホッケーは俺の十六連勝だったな」

「ちっとも聞いてねえだろ！　蘭の話だよ！」

ああ、そうだった。いかんな。ぼーっとしてた。
隣を歩きながら声を荒げたのは、俺の中学からの友達、五反田弾。
入学式当日に知り合って以降やたらと馬があって三年間鈴と揃って同じクラスだった。
ちなみに、蘭というのは弾の一歳したの妹だ。なんでも、その蘭が来年ＩＳ学園を受験するらしい。俺の未来の後輩というわけだ。

「ほんと、なんでお前がＩＳを動かせたのかわからん。どうせ女の園でもいい思いしてんだろうが、このヤロウ」

してねえっつの。さっきお前の家でもゲームしながら説明しただろうが。
しかも、男は俺だけじゃねえよ。

「ああ。桐斗って言ったっけ？　小六の時に引っ越したっていう。

でもよ、やっぱり楽園にかわりねえだろ。なにそのヘヴン」
「アホか。毎日毎日、ふたりそろって珍獣扱いだぞ。つうか、アレだ。桐斗もだけど鈴が転校してきてくれて助かったよ。桐斗も喜んでたみたいだしな」
「ああ、なるほど。確か鈴のイイ人ってそいつだったな」
「うん？」
「いや、何でもねえ」
何でもないなら、そのにやにやとにこにこの中間みたいな顔はなんだよ。
「で、話は戻るが、蘭のことは――」
「ん？　おい弾。あれなんだ？」
弾が何か言い出した気がしたが、俺は目的のものを見つけてそれを指差す。弾はばつが悪そうな顔をしたが、俺の興味はもっと別にあった。
俺の指す方向にあったそれは――屋台だった。木製でできているそれには両脇に車輪が取り付けられていて、少し古びているがなかなかに味が出ている。しかし、この時代の街中にでん、と置かれたそれは異彩を放ちまくっていて、正直かなり浮いていた。
「……知らん。つーか、今時あんなのがこの近辺にあったなんて、大発見じゃねえか？」

確かに。他の地域では知らないが、俺も屋台なんて物を生で見たのは十五年生きてきて初めてだ。今の時代、屋台で商売をする人間がいるというのもほとんど聞いたことがなかった。
しかし――

「はっ――こ、この匂いは……！」

俺の鼻腔をくすぐってくる、芳醇な香り。クセになる甘辛さを含んだそれは、和風ベースに作られた、たこ焼きソースの匂いだ。小腹を空かせていた俺の胃が刺激されて食欲を訴える。
その匂いは、間違いなくあの屋台から漂っている。
誰が作ってるか知らないが、ただ者じゃないぞ……。

「ちょっと行ってみるか。ちょうど小腹も空いてきたところだしな」

「おう。行くぜ」

「……一夏、なんだその討ち入りに行く武者みたいな顔は」

「いや。ちょっと覚悟をな……」

「大げさな奴……」

なんとでも言え。
ともかく、俺と弾はそのたこ焼き屋の屋台に歩み寄る。近づけばソースの匂いと一緒に、さっきまでは感じなかった生地の焼ける匂いがしてきた。やっぱり、うまそうな匂いだ。
さっきまでの覚悟は七割ほど頭から離れ、俺はわくわくしながらその暖簾をくぐった。

「いらっしゃーい♪」

出迎えてくれたのは、店員の気持ちのいいスマイル。
しかし――――その顔には、見覚えがあった。
黒のエプロンを身につけ、たこ焼きの鉄板に調理用の油を塗っていたのは――女顔が爽やかな印象を与える、俺と同い年か年下くらいの男。

「あれ？　一夏じゃん。よく来たな」

俺の相棒、篭手川桐斗だったのだ。

「桐斗っ！？　な、何やってんだお前！？」

「何って、たこ焼き屋。前に言っただろ？　人生とは商売だ、って」

いや、言ってたけどさ……。まさかたこ焼き屋でも商売してるとは思ってもみなかった。しかも屋台で。

「一夏。もしかして、こいつが……？」

と、軽く置いてけぼりをくらっていた弾が、俺の肩をつついてくる。
どうやら、桐斗の正体に気づいたようだ。
弾もニュースで顔は知っていたらしいが、いざ本人を前にして目をぱちくりさせている。

「あ、ああ。こいつが俺と同じでＩＳを使える男、篭手川桐斗だ」

「お、一夏の友達？　桐斗です。よろしくお願いします」

「あ。こ、こちらこそ……」

「こいつは俺の中学からの友達で、五反田弾。同い年だ」

俺の紹介を聞いた桐斗は爽やかな顔を崩さない。

桐斗のやけに態度のいいあいさつに、珍しく弾も少し戸惑っている様子だった。桐斗め、完全に商売人モードだな。

ちなみに、俺は今日桐斗も誘って弾を紹介しようと思っていたのだが、朝食後からずっと姿を見ていなかった。やっと同室になった寮の部屋にも帰ってこなかったのは、これが理由だったのか。

「一夏、せっかくだから食べていきなよ。サービスしとくよ？」

「おお、いいのか？」

「もちろん。一夏にはいつも稼がせてもらって――世話になってるからな」

ちょっと待てい。今稼がせてもらってるって言おうとしたろ。桐斗のやつ、また俺の写真やら昔の話やらを学園の女子に売ってるんじゃないだろうな。最近女子が『篭手川商会』とかいう名前をひそひそと話しているのを聞いたぞ。

「まあまあ。ほら、初回サービスってことでタダにしとくから、これでひとつ……」

俺の考えていることを察したのか、桐斗はたこ焼きの入ったパックを2つ突き出してきた。やはり、うまそうなソースの香りが食欲をそそる。

やばい。手が伸びてしまう……。

「……しかたないな。それにしても、バイトなんかしてたんだな。千冬姉がオーケーしたのか？」

俺がパックを受け取って尋ねると、桐斗はちょっとだけ視線を横に流したた。

「まあ、一日限りのバイトだけどな。なんか、店主のおじいさんがぎっくり腰とかで。あと、学園にはバイトの話はしてないぞ」

確実に屋台を引っ張っていたのが原因だろ。無理すんなよじいさん。あと桐斗、学園の許可もらってないのかよ。まあ、別にバラすつもりはないが。

「ほら、さめないうちに早く食べなよ」

「お、おう。いただくぞ」

俺と弾は邪魔にならないよう屋台の隣に移動し、パックを開ける。出てきたのは、ソースのかかっている程よい焼き色のたこ焼き。まだ温かく、かつお節と青海苔がゆらゆらと踊っていた。

これは期待できそうだ。

６つならんだそのうちのひとつを、備え付けの爪楊枝にさして口へ運ぶ。

すると――――

「「うまい！」」

俺と弾の声が重なった。

実際、かなりうまいのだ。ソースは甘辛くて深いコクがあるし、ぷりぷりのタコを包む生地はふわふわだ。かつお節や、生地に練り込まれたショウガの風味も効いていて、見事な出来となっている。

「すげえな桐斗。ここのたこ焼き、こんなにうまいのか」
「うん？　あー、いや。実はそれ、ほとんど僕がいちから作ったんだよね」
「いちから！？　桐斗がか！？」
「マジでかよ！？」
俺だけでなく、弾も驚きの声をあげた。
「なんかソースとかちょっと残ってなかったし、レシピも無いらしくてさ。店主もなんか投げやりで『好きにやってくれていい』って言ってた。たぶん、この店近いうちに潰れるな」
鉄板で焼かれるたこ焼きをくるくるとひっくり返しながら、桐斗は「商売人としてたるんでるな」と続けた。
それにしても驚いた。まさか桐斗がここまで料理上手だったとは。小学時代は知らなかった事実だ。料理が結構得意な俺としては、少なからず対抗心のようなものが湧いてしまう。
しかし、まずはこのたこ焼きだ。こんなにうまいのだから、温かいうちに食べてしまわないともったいない。
よく見ると、俺たちが食べてる間に屋台にはちらほらと客が来ていた。やはり、このうまそうな匂いにみんなつられたのだろう。うん。盛況そうでなによりだ。
俺たちはすぐにパックの中身を平らげる。
「桐斗、おかわり」

「俺も」

「はいはい。ひとパック三百円になりまーす♪」

俺と弾は躊躇うことなく、財布を開いていた。恐るべし、桐斗特製たこ焼きの魔力。

「ボーイズ・ミーツ・ボーイ」（前書き）

最後の部分でいよいよあの二人が登場です
ああ、早く活躍させたい

それでは、どうぞ！！

「ボーイズ・ミーツ・ボーイ」

「いやー。儲かった儲かった♪」

自分でも知らず知らずのうちに鼻歌を歌いながら、僕は寮のベッドに倒れ込んだ。

今日のバイトはかなり盛況だった。特に、偶然店によった一夏とその友達の弾はたこ焼きを６パックも買ってくれた。弾の方は一つ家族へのはお土産にするらしい。

店主のおじいさんも売り上げに喜んでくれて、バイト代を少しアップしてくれた。やったぜ、僕。

それに、弾と仲良くなれたのは嬉しい。このＩＳ学園に通っている間は男友達などできないと思っていたが、まさか一夏の友達と親しくなれるとは。弾の実家は定食屋らしいから、暇があったら今度寄ってみよう。

時計に目をやると時刻は六時を過ぎていた。一夏はまだ帰っておらず、この部屋には僕しかいない。

（そういえば、学年別トーナメントは今月だったな……）

ふと、そんなことを思い出した。

学年別個人トーナメント――。

一週間かけて行われる、学年別のＩＳ対決トーナメント戦。

特に三年生の試合は大がかりで、ＩＳ関連の企業のスカウトマンはもちろん、各国のお偉方が見にくることもあるらしい。

（まあ、やれることはやるか。こいつを宝の持ち腐れにするわけにもいかないし）

そう思って、僕は左手を持ち上げて、自分の顔の前まで持ってくる。袖をまくって現れたのは、手首に巻かれた紫色の錠前のついたチェーン。
僕の専用ＩＳ『紫燕』。
せっかく手に入れたのだから、何もしないのはもったいない。
というよりも、僕自身、ＩＳの操縦を好きになり始めていた。最初こそ戸惑ったものの、あの空を駆ける感覚は自分自身に翼が生えたような気持ちよさがある。それが楽しくなっていた。

（そういえば箒のやつ、あんなお願いをしてくるとは……）

学年別トーナメントで思い出したのは、先週の箒の言葉。あれから僕なりにお願いの意味を考えた結果、その理由を理解することができていた。
そこまで考えていると、僕の腹の虫が低く鳴く。そういえば、バイトの間はあまり食事をとっていなかったな。

（夕飯、食べに行くかな）

一夏はまだ帰っていないが、先に食堂へ行くことにした。
ゆっくりとベッドから起きると、立ち上がってドアに向かう。
ノックの音がしたのはそのときだった。

「桐斗、いる？」

「ああ」

聞き覚えのある声を聞いて、三拍子ほどおいてからドアをガチャリと開いた。予想通り、そこにいたのは鈴だった。

「どうしたの？　僕になんか用事？」

「ふふん。アンタのことだから、そろそろお腹空かしてるころだと思って食事に誘いに来てあげたのよ。雨の日に捨てられている犬をかわいそうと思うくらいの優しさは、持ち合わせがあったからね」

僕は犬かよ。

「はいはいどうもありがとね。一夏もまだいないから、ちょうど良かったよ」

「あら、そうなの？　じゃあさっさと行きましょ」

なぜか少し嬉しそうになった鈴と並んで歩き出す。ちょうど夕飯の時間だからか、所々ドアが開いている。

「う……」

相変わらず、ラフな格好をした女子が多い。一夏と違い、僕にはこういったものの免疫がないので目のやり場に非常に困る。下がショートパンツで上がタンクトップ。お願いだから下着はつけてください、とはもちろん言えない。

「お。篭手川君だ。やっほー」

「ええっ！？　こ、篭手川君！？」

ひとりののほほんとした子が僕を見つけてぶんぶんと手を振っている。ちなみに名前はのほ……えっと、のほほんさん（一夏命名）だ。

寮にいるときはどんな時間帯でもダボダボのパジャマを着ている。デカいナイトキャップがずり落ちては、それをだいぶ袖の余った手で直してよろめいているのが印象的だ。

「やー、こてやん～」

「そのあだ名はもう決まりなの？」

たしか一夏は“おりむー”と名付けられていたな。

「決りなのだよー。それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」

のほほんさん（一夏命名）はいつも身長差十センチ強はある僕の体にひっついてくる。その姿は構って欲しそうな小型犬を連想しさせて、毎度和んでしまう。

「残念、桐斗はあたしと夕飯するの」

「わー、りんりんだー。勇気が出そうだね～」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

軽くトラウマを刺激された鈴は声を荒げるが、のほほんさんはどこ吹く風だ。

ちなみに小学校の頃、鈴は名前のせいでクラスの男子からよくからかわれていた。その日僕は一夏と一緒に四人を相手に大立ち回り……というか、ほとんど一夏がのしてしまってこっぴどく怒られた。

「ところで、そのかなりんさんとやらはどっかに行っちゃったみた

いだけど？」

「おわー。ほんとだーいないー」

ラフな格好を見られたのが恥ずかしかったのか、廊下の先には自分の腕で体を抱くように隠しながら走り去るかなりんさんの後ろ姿が。

「あー……待って～」

そしてのほほんさんもどこかへぺたぺたと走っていく。うわ、遅い。だがどこか和む。

「……」

「どうした？」

「桐斗さあ、何？　モテてんの？」

「なんで？　それはないって。男が少ないから、ただ珍しがってるだけだろ。それに、モテるとしたら一夏の方がモテそうじゃん」

「ふーん……。ま、いいけどね」

そうは言っているが、あまりよくなさそうな顔で、鈴は早足で食堂に向かう。あ、ちょっと。置いてくなよ。

◇

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と篭手川君の話よ」

「いい話？　悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？　絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？　女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

来る度に思うが、十代女子がつまった食堂は騒がしい。特に奥の方で十数名がスクラムを組んでいる一団は、妙なざわつきを感じさせていた。

「なんだかあのテーブル、えらく盛り上がってないか？」

「トランプでもやってんじゃない？　それか占いとかさ」

それでも今日の騒ぎ方はいつもと違う。なんだかよくわからない熱気さえ感じるほどだ。

「えええっ！？　そ、それマジで！？」

「マジで！」

「うそー！　きゃー、どうしよう！」

いきなり黄色い声が散りばめられ、ざわめきは一層騒がしくなった。もしこの場に千冬さんがいたら、百パーセント怒られるな。

「そういえば桐斗。アンタ、今日は一日中外出してたみたいだけど。どこに行ってたの？」

鈴がアサリの白味噌汁の茶碗を持ち上げて尋ねてきた。ちなみに僕の夕飯のメニューはチキンの香草焼きと山芋と野菜の煮物、だし巻き卵、ほうれん草の赤だし味噌汁。カツオ節がいい味だしてるな。

「ああ。今日は……まあ、ちょっとぶらついてきた」

「ぶらついてたって、まさか先生に内緒でバイトでもしてたんじゃないでしょうね？」

ギクリ。なぜバレた。

「アンタ、隠し事があるといっつも鼻が赤くなるのよ」

なに！？　マジでか！？

「嘘よ。……鼻を隠したってことは、図星ね」

「う……」

しまった……。僕としたことが、こんな古典的な手に引っかかってしまうとは。

「べ、別に怪しい仕事とかじゃないぞ。昼間に一夏と会ったから、訊いてみればわかる」

「わかってるわよ。アンタが悪いことできるとは思えないしね」

褒められてるのかけなされてるのか、いまいちよくわからない。そこで、一夏と一緒にたこ焼き屋に来た弾のことを思い出した。たしか、鈴と中学が一緒だったって聞いたな。せっかくだから教えてやろうかな。鈴も中学の友達の話を聞きたいだろう。

「あーーーっ！　篭手川君だ！」

「ねえねえ、あの噂ってほんと――もがっ！」

例の一団の一部が僕に気づき、こちらにやってきた。しかし、その内の一人の女子が何か話そうとしたときに、他の女子に取り押さえられる。――噂？　何のだ？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あはははは……」

「――バカ！　秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

一人が僕の前で大の字になって通せんぼをしているが、その陰にいる二人はなにやら小声でしゃべっている。

「噂って？」

「う、うん！？　なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね！」

違います。ていうか長すぎだろ。

「な、何言ってるのよミヨは！　四十九日だってば！」

それも違います。正解は七五日。ていうか――

「もしかして、何か隠してる？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ！？」

見事に繋げて走り去っていった。わずか二秒間でここまでされると、さすがにぽかんとするしかない。

「――桐斗ってさぁ」

「ん？」

「やっぱり、モテてんの？」

だから、それはないっての。

◇

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的にみてミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子はみんなカタログを片手に、あれやこれやと賑やかに談笑していた。どうやら、ＩＳスーツのことで意見を交換し合っているようだ。

「そういえば織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？　見たことない型だけど」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる。桐斗のはどうなんだ？」

「うん？　僕のも特注品で一夏のと同じストレートアームモデルらしいけど、たしかカンナギ社製って聞いたな」

僕のＩＳスーツは形こそ似通っているものの、その色には結構な違いがあった。一夏のは濃紺で縁の方に白いラインが入っているのに対し、僕のは濃い灰色に黄色いラインが入っている。
ちなみにＩＳスーツというのは文字通りＩＳ展開時に体に着ている特殊なフィットスーツのことだ。別にＩＳスーツなしでもＩＳを動かせるらしいが、それだと反応速度がどうしても鈍ってしまうらしい。細かい理論は忘れたが……。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらと説明をしながら現れたのは、我らが副担任、山田真耶先生。おお、すごい先生っぽい。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申込開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

山田先生にはすでに８つくらい愛称がつけられていた。慕われている証拠なんだろうが、本人としては微妙らしい。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなぁ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？　マヤマヤの方が良かった？　マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

珍しく語気を強くして山田先生が拒絶の意を示す。鈴同様、そのあだ名にトラウマでものあるのだろう。

イジられているせいか、山田先生は顔を少し赤くして目を潤ませていた。さすがにちょっとかわいそうだな。

「そんなに気にしなくても大丈夫ですよ。山ちゃんとかまーやんとか、可愛いじゃないですか」

少なくとも、僕のこてやんよりは数倍マシだ。

「かっ……可愛い……！？」

「へ？　は、はい」

どうしたんだ。いきなり山田先生の顔がさっきの数倍赤くなって、なんだか慌てているようにも見えるぞ。テレビの録画予約でも忘れたんだろうか。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

教室に響いた声で、ざわついていた空気が一瞬で引き締められたそれに変換させられる。一組担任織斑千冬先生の登場だ。

（あ、一夏の出した夏用のスーツ着てる）

昨日一夏に聞いたが、家に帰ったときに千冬さんの夏用のスーツを出しておいたらしい。早速使っているようだ。見た目はいつもの黒でタイトスカートとあまり変わりないが、クリーニング店でバイトをした経験のある僕にはその生地の薄さがわかった。

「全員、席に着け。ホームルームを始めるぞ。……山田先生」

「可愛いだなんて、そんな、困ります篭手川くん。最近の子は口が上手だとは聞いていますけど、そんなストレートに言って……。お、大人をからかっちゃ――」

「山田先生」

なにやらぶつぶつと呟く山田先生の目と鼻の先で、パンッ！　と千冬さんがねこだまし。それによって、山田先生はようやく現実世界に引き戻された。

「ひゃわっ！？　……お、織斑先生？」

「おはようございます、山田先生。教壇へ移動してください」

「は、はいっ！」

山田先生は最後に僕をちらっと見て教壇へ。うーむ、可愛いって言ったのがいけなかったんだろうか。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや構うだろう！　と、心の中でツッコんだのはきっと僕だけじゃないはずだ。だって僕と一夏は男なんだから、下着姿はいかんだろ。

「では山田先生、ホームルームを」

「……」

なんだろう。山田先生がこっちを見たままぼーっとしている。千冬さんの言葉も、右から左の耳へするっと抜けているようだ。

「あ、あのー。何か……？」

「あっ、い、いえ！　何でもないです！　本当ですよ！？」

いや、そんな否定しなくていいですから。でも、両手をぶんぶん振って否定している姿は、なんだかごまかしているようにも見えた。

「んんっ！　山田先生、ホームルームをお願いします」

「は、はいっ」

千冬さんの咳払いでやっとホームルームが始まる。お疲れ様です。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「え……」

「「「えええええっ！？」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいっきにざわつく。やはり噂好きの若い女の子だから、いきなりそんな宣言をされたら驚きもする。しかもふたりだ。

（ていうか、なんでまとめてうちのクラスなんだ？　こういうのっ

て、普通分散させるんじゃないの？）

そんなことを考えていたら、教室のドアが開かれた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわついていたみんなはぴたりと静まり返った。

当たり前だ。

だって、そのうちのひとりが――男子だったんだから。

「二人の転校生。でも性格は真逆」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔で告げて一礼する。

それまでぽかんとしていたのは、僕や一夏だけでなくクラスの全員だ。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が二人いると聞いて本国より転入を――」

人なつっこそうで中性的な顔立ち。髪は濃い金髪で、それは首の後ろで綺麗に束ねられている。礼儀正しいたち振る舞いに、華奢でいて伸びた脚が格好いい。

その印象は、まさしく『貴公子』のそれだ。嫌味のない笑顔が眩しく見える。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああーーーーっ！」

とんでもない音波が鼓膜に突き刺さった。痛い。マジで痛いです。
歓喜の叫びとはここまでの威力を持つものだったのか。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～～～～！」

うちのクラスの女子は今日も元気です。ちなみに他のクラスもＨＲ中のはずなんだが、彼女たちにはお構いなしのようだ。教員の皆様、お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

本気で鬱陶しそうに千冬さんがぼやく。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

そう。転校生はもう一人いる。シャルルの隣に立つその転校生は、かなり変わった容貌をしていた。
輝くような銀髪。それを腰近くまで長くおろしているが、整えている感じはない。そして、左目の眼帯。医療用とは程遠い、軍人がつけていそうな黒眼帯。露出している右目は赤色だが、その視線は冷たかった。
若干背の低いその女子の印象は『軍人』。全身から放たれている鋭い気配は、僕を少なからず戦慄させた。

「……」

当の本人は未だに無言で、腕組みをした状態で教室の女子たちを下らなそうに見ている。しかし、その視線はすぐにある人物……千冬さんにだけ向けられていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり千冬さんに異国の敬礼をした転校生――ラウラにクラス一同がぽかんとする。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ぴしっと背筋を伸ばして答える姿は、まさしく軍人。しかも、千冬さんを『教官』と呼んでいるあたり、なにかの関係者であることがわかる。

（後で一夏に訊いてみるか……）

ラウラの冷たい視線が、千冬さんから生徒たちに向けられた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイトたちの沈黙。名前を口にしたらまた口は閉じられて、開く様子はない。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなって笑顔で尋ねた山田先生だったが、ラウラの即答はばっさりと突き出された。ああ、山田先生泣きそうな顔になってるし。

すると、いきなりラウラの右目がカッと見開かれた。その先にいるのは、僕の隣に座る一夏。

「！　貴様が――」

あれ？　つかつかと一夏のところへやって来たぞ。

バシンッ！

「……」

「う？」

いきなり、一夏の頬が平手で殴られた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

あっけにとられていた僕たちをよそに、一夏が食ってかかるがそれを無視してラウラはすたすたと立ち去っていく。空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ、だんまりを決め込んだ。

なんだアイツ？　一夏のことを弟って言ったってことは、やっぱり千冬さんの関係者で間違いないよな。それかまた一夏が無駄に女性を口説き落としたかだ。

「あー……ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんが行動を促す。一夏は腑に落ちないという表情だったが、すぐに席から立ち上がった。なにせ、このまま教室にいれば女子と一緒に着替えなくてはならなくなる。それは困る。ていうか少なくとも僕には無理。

「おい織斑に篭手川。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

ああ、そうか。ちょっとうっかりしてた。

「織斑君に篭手川君だよね？　初めまして。僕は――」

「ああ、挨拶はあと。とにかく移動しないと。女子が着替え始めるよ」

「おう。急ごうぜ」

説明すると同時に、僕はシャルルの手を取ってそのまま教室から出た。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替えることになってる。実習のたびにこの距離を移動するから、気をつけてね」

「う、うん……」

あれ？　なんかシャルルの反応が妙に落ち着かなそうだけど。緊張してるにしても、さっきまでは平気そうだったのだが。

「トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

「一夏、なんでもかんでもそれに繋げるのはやめようぜ」

「へ？　そうか？」

まったく。だから箒やセシリアの怒りを買うことになるんだよ。

一夏のデリカシーのなさはともかく、僕たちは階段を下って一階へ。

しかし速度は落とせない。なぜなら――――

「ああっ！転校生発見！」

「しかもあの男子二人と一緒！」

そう、ＨＲが終わったのだ。早速各学年各クラスから情報先取のために女子が駆けだしてくる。その俊敏さは鎖の外れた猟犬並だ。いや、実際に見たことはないけど。しかし、その波にのまれたら最後、質問攻めの嵐に決まっている。そして最後には、遅刻の罰としてあの鬼教師の特別カリキュラムで殺される。それだけは絶対にいやだ。

「いたっ！　こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

いつからここは武家屋敷になった。今にも太鼓でも叩きそうな雰囲気ですよ。

「織斑君の黒髪や篭手川君の茶髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！　見て見て！　篭手川君と転校生！　手！　手繋いでる！」

「織斑君ったら両手に花じゃない！」

「日本に生まれて良かった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

いや毎年ちゃんとしたプレゼントしろよ。お母さん絶対泣いてるぞ。

「な、なに？　何でみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めていないのか、シャルルは困惑顔で走りつづける。
「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」
「……？」
あれ？　一夏の説明じゃ足りなかったのか、シャルルは「意味がわからない」って顔をしている。そんなにわかりづらかったか？
「まあ、かなり珍しいよな。ＩＳを操縦できる男って、今のところ僕たち三人なんだからさ」
「あっ！　――ああ、うん。そうだね」
「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」
「ウーパールーパーって……」
「ウー……何？」
「二〇世紀の珍獣。昔日本で流行ったらしい」
ちなみに、北欧の地域ではシチューに入れたりして食べられているらしいが、そんなことはどうでもいい。今はこの包囲網を突破しなければ。
やっと校舎を出たそのとき、シャルルが段差に足を引っ掛けた。
「うわっ！？」

「おっと」

シャルルと手を繋いだままの僕は急いで体をひねり、倒れそうなシャルルの肩をなんとか受け止めた。ってうわ。身体細っ。見た目からわかってはいたが、触ってみると男にしてはかなり華奢なのが理解できる。ちゃんとご飯を食べているのか、ちょっと心配になってきたほどだ。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫。デュノア君も怪我とかない？」

「う、うん。あ、ありがとう……」

ん？　なんかシャルルの顔が真っ赤なんだけど。もしかして花粉症か？　もう五月も終わったはずなんだが、油断できないな。

「だったら早く行こうぜ。時間がなくなっちまう」

「そうだな。行こうか、デュノア君」

「あ……。しゃ、シャルルでいいよ。せっかく仲良くなれたんだし」

「わかった、シャルル。じゃあ僕のことは桐斗って呼んでくれ」

「俺も一夏でいいぜ。よろしくな、シャルル」

「うん。よろしく、桐斗、一夏」

シャルルはいいやつだ。

にっこりと笑う顔を見て、僕はそう直感した。
そのまま走りつづけること数分。今日も無事に第二アリーナにたどり着くことができた。

「よーし、到着！」

一夏の景気の良い宣言に合わせるようにスライドドアが斜めに開く。

「うわ！　時間ヤバいぞ！　すぐに着替えないと」

時計を見るとかなりギリギリだ。
とにかく、僕と一夏は急いで制服のボタンを一気に外す。それを適当なロッカーの上に乗せてTシャツもすぐに脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

「「？」」

え、なになに？

「どうしたシャルル？　忘れ物？　急いで着替えないと遅れるよ」

「そうだぞ。うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で――」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「？？？　まあ、別に他人の着替えをジロジロ見る気はないけど。わかった。じゃあ、後ろ向きながら着替えとくよ。ほら、一夏も」

「おう。……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！　別に見てないよ！？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。男同士の着替えが珍しいのか？　フランスの文化ってよく知らないけど。

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない――というか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

「ああ……。まったくだ……」

学園生活初日から遅刻した僕は、一夏の言葉にひどく共感できた。あの出席簿アタックは本気で痛かった。しかも不意打ちで。あの鬼教師・織斑千冬先生には優しさが欠けているんじゃなかろうか。もう少し優しくしてくれたって、バチは当たらないと思う。

「……」

なんだろう、視線を感じるぞ。

「えーと、シャルル？」

「な、何かな！？」

その若干裏返った声が気になり僕と一夏が視線を向けると、シャルルは慌てて視線を壁に向けながらＩＳスーツのジッパーをあげていた。

「うわ、着替えるの早いな。なんかコツでもあんのか？」
「い、いや、別に……ってふたりとも、まだ着てないの？」
僕たちはといえばまだ下着を脱いでＩＳスーツを着込んでいるところだ。ちなみに一夏は腰まで、僕は上の部分に腕を通したばかり。毎度のことだが、着替えるのにいちいち裸になるのが面倒だ。
「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなぁ。引っかかって」
「一夏。言い方が下品だぞ」
「そうか？　でも、桐斗も同じだろ？」
「んー……。まあ、否定はしないけどさ」
「ひ、引っかかって？」
「おう」「ああ」
「……」
気のせいだろうか、シャルルの顔が昨日見た茹でダコのように赤いぞ。
「よっ、と。――よし、ふたりとも行こうぜ」
「ああ」

「う、うん」

少し遅れて一夏が着替え終わり、揃って更衣室を出た。グランドに向かう途中で改めてシャルルのＩＳスーツを見てみる。

「そのスーツ、見たことないタイプだね。なんだか着やすそうだし、どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？　デュノアってどこかで聞いたような……。なあ、桐斗？」

「シャルルの名字と同じだよ。さっき聞いたばっかじゃん」

一夏はそうだったと手をぽんと叩く。それくらい覚えとこうぜ、相棒。

「そう、僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「え……。じゃあシャルルって、社長令息ってやつなの！？」

なんと、貧乏人の僕とは一八〇度どころか三五九度も違う世界の存在だったのか。道理で気品を感じるはずだ。

「社長令息……ね」

ふと、シャルルが視線を逸らす。もしかしたら触れられたくない話

だったのかもしれない。複雑な表情を浮かべている。
しまったな、なんだか気まずくなってしまったぞ。

「い、急ごうか。時間もヤバいし」

「うん。そうだね」

「千冬姉の鉄槌は恐ろしいからな」

歩くスピードを速めたときに横目で見たシャルルの表情は、さっきまでの明るいものに戻っていた。

「ハプニング再び。受難の実習」（前書き）

明日からテストが始まってしまいます
勉強しなければ補修ものなので、二・三日更新をお休みさせていただきます
数少ない読者様方。申し訳ありませんが、次の更新までは少しお待ちください

とにかく本編を、どうぞ！！

「ハプニング再び。受難の実習」

「遅い！」

第二グラウンドに着いたとき、やっぱり遅刻していた。ああ、魔王が腕を組んでいらっしゃる。

ばしーん！　と一夏の頭に指導という名の打撃が落とされた。またくだらないこと考えてたのか。

僕たち男子三人は一組整列の一番端に加わる。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

何の因果が働いたのか、一夏の隣はセシリアだった。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

ちなみに一般的なＩＳスーツはすべて女性専用なので、見た目はワンピース水着やレオタードに近い。肌の露出が多かったり体に張り付いていたりするので、僕は毎度毎度目のやり場に困っている。

「道が混んでいたんだよ」

「裁判官。被告人は嘘をついています」

「ありがとうございます、検察官。いつも間に合いますものね」

一夏から「バラすなよ」という視線を向けられたが、気にしない。

嘘はイカンぞ。しかもバレバレだし。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？」

だよな。あの転校生に叩かれていたし。その理由については、僕も気になっていた。

「なに？　一夏のやつまたなんかやったの？」

はっ、誰もいないのに声が聞こえる――まさか怪奇現象か！？　おのれ悪霊、退治してくれる！

「後ろにいるわよ、バカ！」

ああ、うん。わかってますよ。後ろは二組の列だし。たまにはボケてみたくなっただけです。ツッコミばかりじゃ疲れるからな。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「うわっ。一夏、アンタってなんでそうバカなの？　桐斗にそのバカをうつさないでよね！？」

「――安心しろ。バカは私の目の前に二名もいる」

ギギギギッ……ときしむブリキの音で首を動かすセシリアと鈴。視線の先ではもちろん当実習の鬼教官が待ちかまえていた。

バシーン！

出席簿アタックが響いたときの空は、清々しいほど青かった。

◇

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

合同実習なのでいつもの倍の人数が返事を返すなか、ぶつぶつと呟いているのはセシリアと鈴。

叩かれた場所がズキズキと痛むのか、涙目になりながら頭を押さえていた。

ていうか、鈴の言ってることが呪いの呪文みたいで怖い。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！　オルコット！」

「「ええっ！？」」

「専用機持ちはすぐに始められるからな。さっさと前に出ろ」
ふたりとも、諦めた方がいい。千冬さんには大体の理屈は通用しない。従わなきゃ物理的な攻撃が来るぞ。
「だからってどうしてわたくしが……」
「一夏のせいなのになんでアタシが……」
「お前ら少しはやる気を出せ。――アイツらにいいところを見せられるぞ？」
うん？　いま千冬さんがふたりに小声でなにか言ったみたいだが、聞こえなかった。
「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」
「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」
なんだかいきなりふたりともやる気マックスモードに突入したぞ。千冬さん、一体なんて言ったんだ？　女子を動かす魔法の呪文とかか？
「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィン……。

あれ？　なんか最近聞いたような音が聞こえるぞ。なんだったっけ――

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

へ？　僕？　――って、ひぃっ！？

ドカーン！

謎の飛行物体の衝突され、僕はそのまま数メートルの距離を吹っ飛ばされたあとゴロゴロと地面を転がった。

なんとかギリギリのタイミングで紫燕を展開させられたが、途中で集中が切れてＩＳアーマーは光となって消えてしまった。

「あ、危なかった……。それにしても、一体何事――」

むにゅ。

「む？」

なんだ？　この手のひらに感じる柔らかくて気持ちいい感触は。地面がこんなプリンみたいに柔らかいはずがないし。誰だよ、こんな所にプリン捨てたのは。って、そんなわけないか。

「あ、あのう、篭手川くん……ひゃんっ！」

へ？　なんか下から声がしたぞ。――ま、まさか……。

おそるおそる、僕は自分の手の先を見てみる。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！　場所だけじゃなくてですね！　私と篭手川くんは仮にも教師と生徒ですね！　ああでも、禁断の恋っていうのはなんだかロマンチックですよね――」

プリンの正体は山田先生――いや、山田先生はプリンだった。……うわ、この発想に自分で引いたぞ。

しかし、山田先生の胸の膨らみははかなりデカかった。

いつも着ているサイズの合っていない服ではわからなかったが、今着ているのは露出の多くてぴっちりのＩＳスーツ。故にその大きな胸の美しい曲線は隠されることなく現されていて、僕の手はさっきからその胸を鷲掴み状態でしかも今の体制は山田先生を押し倒しているみたいでなんだか前にも箒とこんなことになったなぁってデジャブじゃあああああああああああああっ！！

「ごごごごっ、ごめんなさ――」

急いで山田先生から体を離した直後、背筋に冷たいものを感じた。ある感情が自分に向けられているのがわかる。長年の歴史で人間は忘れてしまったらしいが、これは――殺意と呼ばれるらしい。

「……」

ガシーンと何かが組み合わさる音が聞こえた。あ。今のはアレだ。鈴の武器、《双天牙月》を連結したときの音だ。そのまま視線に入ってきたのは、その両刃状態にした武器を投擲するため振りかぶった鈴――

「ぎゃあああっ！？」

ためらいなく首を狙ってらっしゃる！
ぐるぐると回転しながら飛んでくる《双天牙月》。……ヤバい。これは当たる。

「はっ！」

ドンッドンッ！
短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は的確に《双天牙月》の両端を叩き、その軌道を変える。
その弾丸を放った僕の命の恩人は、なんと山田先生だった。
両手でしっかりとマウントしているのは五十一経口アサルトライフル《レッドバレット》。
何よりも、山田先生に驚いた。命中精度もさることながら、そのときの山田先生の雰囲気はいつものバタバタした子犬のようなものとはまったく違い、落ち着き払っている。

「……」

驚いたのは僕だけではなく、セシリアと鈴、それに一夏や女子たちも唖然としたままだった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だ。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

ぱっと雰囲気がいつもの山田先生に戻る。ずれた眼鏡を両手で直したのを見て、ああ、この仕草はやっぱり山田先生だなぁ――と一安心。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「え？　あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴は再び瞳に闘志をたぎらせた。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も飛び上がった。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

口調こそいつもの山田先生だったが、その目はさっき見た鋭く冷静なものへとかわっている。先制攻撃を仕掛けたのはセシリアと鈴だったが、それは簡単に回避された。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい。山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラ

ファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後期を機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので――――」

すらすらと説明を続けていくシャルル。すご……。優等生だ。

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

シャルルの説明に聞き入っていた僕は、戦闘のことを完全に忘れていた。見てみると、山田先生の射撃がセシリアを誘導、鈴とぶつかったところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中からふたつの影が地面に落下した。勝負あったか……。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！　なんですぐにビットを出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

仲悪いなぁ、このふたり。

似たもの同士のくせに、馬が合わないことが多いのだ。同族嫌悪ってやつなのか？

さすがに他の女子からくすくす笑いが聞こえたら、ふたりはいがみ

合いをやめた。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんがみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、箒手川、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では七人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

千冬さんの指示が終わるや否や、僕と一夏、シャルルに一気に二クラス分の女子が群がって来た。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「わかんないところ教えて～」

「よろしくね、箒手川君！」

「じっくり教えてね！」

「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループにいれて！」

ああ……ちょっとキツい繁盛ぶりだ。僕ら男子もどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけ。

その状況を見かねたのか、千冬さんは面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声を出す。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！
順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

それを聞いた女子たちは、蜘蛛の子を散らすように移動してグループを六つ、二分とかからずに作り上げた。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

助かりました、千冬さん。
千冬さんに心から感謝した瞬間だった。

◇

どうしたもんかな……。
俺は実習で同じ班になった箒に話しかけたかったのだが、それより早く同じ班の女子に取り囲まれてしまう。しかも一応俺が班長なので、適当にあしらうこともできない。それがやっかいだった。
あの約束をした日以来、箒とはまともな会話をしていない。しまいには呼び捨てにできなくなりそうな気さえしてくる。だから、同じ班になったのを機に関係の修復をしたいのだ。

桐斗の方も同じようで、いざ会話をしても逃げられてしまうらしい。
なぜだ。
とりあえず、授業も進めなければならない。その間に箒と話そう。
俺の班はすでに一人目の女子がＩＳの起動と歩行を行っていた。はじめの辺りでお辞儀＆握手待ちの手を並べられたのにはまいったが、それからは特に問題なく進んでいる。
時間をはみ出すと居残りらしいが、このまま進めば大丈夫そうだ。
一番手の相川さんは無事に歩行までの練習を済ませて訓練機から飛び降りた。

「よし。じゃあ次の人は――」

「私だ」

「お、おう」

返事をしたのは、いつの間にか俺の背後にいた箒だった。なんか、ちょっと不機嫌そうなんだが。
とにかく、さっさと始めないとな。

「それじゃあ、まずはＩＳに乗り込んでくれ」

「……」

俺が促すが、箒はＩＳの前で腕を組んだまま棒立ちになっている。

「……どうした？」

「コックピットに届かないのだが……」

「あ！　あ～……」

いかん。しまった。自分が専用機持ちだからすっかり忘れていたが、訓練機を使う場合は装着解除時に絶対にしゃがまないといけないのだ。

「どうしました？」

おっと山田先生登場だ。ＩＳの方はすでに装着解除しているが、その服装は胸のラインを大きく開放したＩＳスーツのままである。やっぱり、視線のやり場に困るよな。

「え、えーと、ＩＳをしゃがませるのを忘れていまして……」

「あー、織斑くんのところもコックピットが高い位置で固定されてしまったんですね」

「はあ……って、俺のところも？」

ということは、俺以外にもミスをしてしまったやつがいるということだろうか。だったらそいつと同じようにすれば、問題は解決だな。

「はい。ほら」

山田先生が指差した先には、黄色い声ではしゃぐ女子たち。その中心にいるのは、覚えのある紫色のＩＳだった。

「桐斗？　な、何やってんだ、アイツ……」

専用ＩＳ、『紫燕』を展開させた桐斗は立ったまま停止した訓練機

に女子を乗せていた。――女子を横抱きに運んで。
女に若干苦手意識を持っている桐斗にはつらいだろうな。その証拠に、顔が赤くなって視線もぐるぐるとさまよっている。
頑張れ、相棒。

「むぅ……」

そんな桐斗を見つけて、睨みをきかせるのは箒。
その冷たい視線を感じたのか、桐斗の肩がびくっと小さくはねた。

「じゃあ織斑くん。篭手川くんみたいに、篠ノ之さんをだっこしてください」

「えっ！？　な、なぜですか！？」

おお、箒が食ってかかった。俺は平気だが、やっぱり男に抱えられるのはイヤなんだろう。

「ＩＳは飛べますから、安全にコックピットまで人を運ぶのに向いています」

「し、しかし、桐斗のまねということは……その……あの抱え方で……？」

「ええと、そうなりますね」

箒はちらちらと俺と桐斗を交互に見てくる。

「仕方ないな……」

俺は右腕のガントレットに意識を集中させた。

「空回りなランチタイム」（前書き）

お待たせしました
テスト期間終了ということで、再開です
ああ……ストックがもう少ない……

それでは本編を、どうぞ！！

「空回りなランチタイム」

（ああっ、もうどうしろというのだ！）

箒はさっきから心の中で地団駄を踏んでいた。

理由は一夏に抱えてもらいたいがそれを桐斗に見られたくない、という単純でいて複雑な乙女心によるものである。

まず目に入れたのは、クラスメイトの岸里を横抱きにして運んでいる桐斗の姿。箒からすれば、見ていてムカムカしてくる光景だった。

（桐斗のやつめ、なんなのだ。あんな風にくっつく必要がどこにある！　踏み台にでもなればよかったのだ、踏み台になれば！）

とはいうものの、実際他の女子が桐斗を踏んづけるというのは、それはそれで面白くない。

じゃあどうしろと言われても、箒だって自分で感情を持て余しているので、自分自身がどうしたいのかもわからない。しかも、箒の場合は相手が一人ではないのだ。

（一夏も一夏だ。さっきは山田先生を見てばかりいたし……ああもう、軟弱者どもめ！）

正直に言えば、箒は剣術で鍛えていることもあって自分のプロポーションにはちょっと自信がある。

いつもは邪魔に感じる発育のいい胸も、魅力になるのならそれはそれでいいと思っていた。だが、先月まで続いていた同居生活でも一夏の態度に特別代わりはなかったし、毎晩部屋に通っていた桐斗にも気にしているような様子はなかった。

（私のときは、別段意識しないというのか……！）

本当のところは、ふたりとも意識していなかった訳ではない。特に桐斗の方は、箒の寝間着姿に内心では少しドキドキしていたくらいだ。それをわざと何気ない態度にしていたのは、そう振る舞っていると箒が疲れるだろうと思っていたからである。

実際、桐斗はそれで二度も気絶させられたのだから。

「仕方ないな……」

そうこうしている間に、一夏は右腕のガントレットを持ち上げていた。次の瞬間には、一夏の身体に『白式』が纏われていた。

「じゃあ箒。運ぶぞ」

「う……」

正直、嬉しくないはずがない。意中の相手の一人に抱きかかえてもらうのだから、さっきまでのイライラが消えて今すぐ飛び跳ねたくなるほどだった。

しかし、ここではしゃぐのは柄ではないし、一夏に節操のない女と思われたくもなかった。

――コホン、と心の中で咳払いをして気持ちを整えると、箒はなるべく平静を装うことに務めた。

「いいだろう。私はあまり望まないが、安全面を考慮すると仕方がない。私はあまり望まないが、仕方がないな」

「はいはい。それじゃあいくぞ」

一夏のため息が聞こえたが、箒の耳には届いていなかった。何はともあれ、抱きかかえられるのである。さっきから顔が変にゆがんでしまいそうで、それをこらえるのに必死の箒であった。

「よっ、と」

「きゃっ――ゴホンゴホン！」

抱えられてつい反射的に出てしまった声を必死に隠す。

（これが伝説の、『お姫様だっこ』というやつか……！）

自分を抱きかかえる一夏の腕のたくましさ、直接肌で感じられるような体温、密着しているせいで自分の呼吸や鼓動が伝わってしまわないかという期待と不安の入り交じった感情が胸の中に広がる。そのとき、別の班で指導をしている桐斗と、目があった。桐斗は箒の姿を見て、苦笑気味にはにかむ。「そっちもか」と言いたいのだろう。

それを見て箒の浮ついていた気分が、わずかに下がった。

（私は、ここまで節操のない女だったか……？）

一夏と桐斗。ふたりのことを、どちらも意識している。だからこそ問題なのだ。

自分が抱いているものは、世間一般では認められていない想いだ。どちらかを選ばなければならない。それは箒にとって難しい問題だった。

「箒」

すぐ近くから聞こえる一夏の声で、箒はハッと現実に引き戻された。
同時に自分が抱きかかえてもらっていることも思い出す。

「な、なんだ！？」

「いや、なんだもなにも、ＩＳに移らないと実習が進まないだろ。もっと近づいた方がいいか？」

「い、いや！　これ以上近づかれるとさすがに私も平常心を――」

「な、なんでもない！　と、とにかく、大丈夫だ」

その言葉通り、箒は一夏の体から手を離すと、打鉄へさっと乗り込む。
しかし内心は冷静とはいえなかった。

（どちらか、選ばなければならないのか……？　……うむ。な、ならば、自分の気持ちをちゃんと確かめなければ。まずは……）

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「そ、その、だな。今日の昼は予定があったりするのか？」

平静を装ってはいるが、その声はいつもよりわずかに高く、どこかしら不安を含んでいるかのようだった。

「いや、特にはないぞ」

「そ、そうか！　で、では、たまには昼食を一緒に取るとしよう。うむ、それがいい」

「ん？　おお、別にいいぜ」

（まずは、一夏への気持ちを確認しよう……。しかし、これで一緒に、二人きりで食事ができる……）

決意を固めたものの、やはり嬉しいものは嬉しかった。それに、今回は秘策もある。

その後打鉄での実習をすませた箒は、浮かれていてＩＳを立たせたまま降りた。

残りの女子も一夏が抱えて運んでやったのは余談である。

◇

「……どういうことだ」

「ん？」

ＩＳ学園の屋上は花壇に咲き誇る季節の花々に囲まれ、欧州を思わ

せる石畳が見事だ。それぞれ円テーブルにはイスが用意されていて、晴れた日の昼休み、つまり今日のこのような天気の時間には女子たちで賑わう。
しかし今日はみんなシャルル目当てで学食に向かったようで、屋上には僕たち以外誰もいない。
そう。僕たち、以外……。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな……！」

（そういうこと言ってんじゃねえんだよこの朴念仁……！）

心の声とはいえ、思わずキレ気味になってしまった。
ちらっと横に視線をやる。そこにいるのはセシリアに鈴、それにシャルルだ。そして、僕の正面には箒と超鈍感な相棒、一夏が腰掛けている。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

ぐぬぬ……と何か言いたげにしながら持ち上げた拳を握りしめる箒。
その手には、包みにくるんだ明らかに一人分ではない量の手作りの弁当が。
ゴメン。箒、マジでゴメン。
僕が一夏に『みんなで昼飯食おうぜ』って誘われて、考えなしにオーケー出しちゃったからこんなことに……。実習後の箒がやけに上機嫌だったから、こんなことは予想できたはずなのに。話馴れてい

ない女子と予想以上に接した後の疲れが原因か……。

「はあ……」

「き、桐斗、どうしたの？　ため息なんて吐いて」

「いや、大丈夫。ちょっと自分の考えの回らなさを恨めしく思っただけだから……」

「一体なにがあったの……？」

ああ、シャルルの優しさが身にしみる。優しいやつが転校してきてくれて助かったよ。

「桐斗も大変ねえ……。はい、アンタの分よ」

そう言って僕にタッパーを放る鈴。ってこら、食べ物を投げちゃダメでしょうが。

「あっ、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

ここにもいいやつがいた。しかしご飯なしの酢豚オンリーという発想なのはなぜなんだ。ちなみに鈴は自分の分のご飯だけ食堂で買ってきていた。僕も用意すればよかった。

「コホンコホン。――一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければどうぞ」

「お、おう。あとでもらうよ」

一夏の返事はいささか引いている。僕と鈴は顔を合わせ、うわあ……って顔になった。

出ちゃったよ、セシリアの料理が。

実はこのイギリス代表候補生セシリア・オルコット、料理がからっきしダメなのだ。見た目はものすごくきれいなのだが、味は激マズ。なぜ自分の知らない調味料を適当にいれるのかわからない、と一夏が言っていたが、きっとこの先セシリアにそれを問うことはないだろう。……なんか、聞いたらひどいことになると思うんだ。なぜか。

まあ、実家が由緒正しい名家――つまり超お金持ちのご令嬢なのだから、食事はお抱えのシェフに任せていたのだろう。

なんたって、「本と同じになればいいのでは？」と言っていたのだ。あのねセシリア、それはね、「本と同じ」じゃなくて「写真と同じ」って言うんだよ？

「はっきり言わないからずるずるいっちゃうのよ。バーカ」

そうは言うけど、鈴。君がかつて殺人料理を作ってきたときにも僕と一夏は同じような反応をしたんだけど。あのときは「おいしいって言わないと殺す」って顔に書いてたから、大変だったよ。

まあ、それは置いておいて、一夏が女の子に正面から不味いと言えるとは思えない。誰かが作ってくれるだけでも感無量、とか思ってそうだしな。

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

僕の隣でシャルルがそんなことを言った。さっきからだが、とんで

もなく遠慮深い性格のようだ。逆にこっちが困ってしまうほどに。

「いやいや。同じ男子なんだし、仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ――特にＩＳ関係は桐斗に」

「僕だけ苦手分野か！？」

「俺だって苦手なんだよ」

「アンタたち、もうちょっと勉強しなさいよ」

いや、してるんだけどさ、覚えることが多すぎるんだよ。僕と一夏以外のみんなは、中学のころから専門の学習をはじめていたらしい。僕たちはＩＳを動かせるという、極めて特異なケースなのだから、ＩＳ学園に来るまでそんな勉強はまったくやっていなかった。

「まあ、困ったことがあったら言ってくれ。できることはやるから」

「ありがとう。桐斗って優しいね」

ドキッ。

いきなり無防備な笑顔で言われたので、相手が男だとわかっているのに変な感じを受けた。

しかし、ドキッとしたのと同時に、冷たい何かが背中を走った気がした。

なんだ、これは？

そんな僕の疑問はさておき、昼食は進んでいく。僕と鈴は酢豚、シャルルは購買のパン、セシリアも自分の分はしっかり購買で買ってきたようで、あのバスケットいっぱいのサンドイッチは全部一夏が

食べるハメになるみたいだ。報いだな、相棒。

「……」

そんな中、箒だけは弁当の包みすら広げないで黙ったままだ。

「箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが――」

「……」

無言で、箒は一夏に弁当を差し出す。やっぱり、あの弁当のうちの一つは一夏の分だったらしい。本来ならここで独占的にポイントを稼げるはずだったのに、僕たちが邪魔してしまったようだ。さっきから怒ったように眉間にシワが寄っている。

そんなことは露知らず、当の本人は弁当を開いていた。

「じゃあ、早速。……おお！」

「うわ。すごい……」

その弁当をのぞき込んで、思わず声が出た。鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草のゴマ和えという見事にバランスの取れた和風の献立が並んでいた。

「これはすごいな！　どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。あくまで私が食べるために時間をかけただけだ」

「そうだとしても嬉しいぜ。箒、ありがとう」

「ふ、ふん……」

何でもないようにしているが、心底喜んでいるのがわかる。
よかったな箒。一夏に喜んでもらえて。
それにしても、本当に美味しそうな弁当だ。これはかなり手が込んでいるな。少しうらやましいぞ。
僕はご飯なしの昼食を抱えながらも、箒特製の弁当をまじまじと眺めた。

「ほ、ほら。桐斗」

「へ？」

箒の声に振り向くと、箒が僕に向かって弁当を突き出していた。
え？　なんで？

「す、少し作りすぎてしまってな。せっかくだから、お前にも分けてやる。酢豚だけでは食が進まんだろう」

酢豚の下りで鈴の表情がむっとしたのは言うまでもない。
よく見ると、もともと三人分あったらしく、箒の手元にも一人分の弁当が置かれていた。

「え……。い、いいのか？」

箒が一夏のために作ったはずのものを食べるというのは、余りものだとしても少し気が引ける。

「そう言っているだろう。そ、それともなんだ。私の料理は食べた

くないと言うのか？」

「い、いいや！　食べる！　もらっとくよ」

これ以上反対したら、絶対に怒られる。目を吊り上げる箒を見てそう思った僕は、おとなしく弁当を受け取った。それを開くと、当たり前だが一夏のと同じメニューがあった。

「あれ？　箒。これ、なんだか余りものにしてはえらく丁寧に盛りつけてないか？」

「う……。あ、当たり前だろう！　雑な盛りつけ方など、私の主義に反するからな」

なぜか語調を強くしてそう主張された。怒って、ないよね？
やっぱり女子って、そういうのにこだわるんだろうか。

「ありがと、箒」

「ふん……」

照れ隠しか、またもやそっぽを向いた箒にちょっと笑ってしまいそうだった。
とにかく、新たに転校生の男子、シャルルを加えて僕たちの昼食は始まったのだ。

「ブロンド貴公子追加です」（前書き）

なんだか書いてて楽しかった話です

それでは、どうぞ！！

「ブロンド貴公子追加です」

ああ、幼なじみって素晴らしい。
余りものとはいえ、昼食の面倒を見てもらえるとは。これは今度お礼をしなければなるまい。

「ほんと、ありがとうな。箒」

僕がもう一度感謝を伝えると、またもやそっぽを向いて箒は自分の弁当を開ける。……って、あれ？

「箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ？」

「！　こ、これは、ええと……」

一夏の言ったとおり、箒の弁当には唐揚げが入っていない。箒はなぜか視線を泳がせている。どうしたのだろうか。

「わ、私はダイエット中なのだ！　だから、一品減らしたのだ。文句あるか？」

「いや。文句はないけど……なあ？」

「ああ。別に太ってないだろ？」

このとき、この発言は起爆剤となるということを僕と一夏は知らなかった。目の色を変えた鈴とセシリアの猛攻撃が開始される。

「あー、男ってなんでダイエット＝太っているの構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわね」

「いやでも実際ダイエットなんて必要ないように見え――」

一夏は隣に座る箒に目をやった。――と思ったら、すぐに顔を思いっきり手で押し返されていた。

「ど、どこを見ている、どこを！」

「どこって……体だろ」

まあ、確かに見る限りでは必要なさそうに見えるよな――いたっ！

「なに女子の胸を横目で見てんのよ。ア・ン・タ・は！」

鈴が思いっきり足の甲にかかと落としをしてきた。しかもそのあとに四回力を込めてくる。痛い、痛い、やめてくれ。僕が一体何をしたっていうんだ。

「お二人には紳士として不足しているものがあまりに多いようですわね」

失敬な。一夏はともかく、僕は女性が苦手なだけで決して紳士的でないわけではないぞ。

「き、桐斗。大丈夫？」

心配してくれたのか、シャルルが声をかけてきた。ああ、貴公子って素晴らしい。この人こそ真の紳士だ。

「大丈夫。一夏のせいで痛いめに遭うのは日常茶飯事だから」
「どういう意味だ、桐斗……」
「自分で考えろ、この唐変木」
「あはは。一夏と桐斗って、面白いね」
「「なんでだよ」」
ツッコミがばっちりシンクロ。それを見て、シャルルがまた柔らかく笑った。
「コホン。さて、与太話はこのくらいにして昼食にしよう。いつまでも談笑していられるほど昼休みは長くない」
ひどくまっとうな箒の意見。ていうか、さっきのを与太話扱いかよ。
「じゃあまあ、いただきます」
「いただきます」
とりあえず唐揚げをいただく。
「おお、うまい！」
「ほんと、美味しい！」
弁当なので時間が経っているし冷えているのだが、それでも箒の唐

揚げはうまかった。

「これって結構仕込みに時間かかってないか？　ええと、混ぜてあるのはショウガと醤油と……んぐんぐ。なんだろうな。絶対食べたことある味なんだけど」

「んー……もしかしてニンニクか？　それに、コショウも入ってるよね？」

「ああ、正解だ。それと、隠し味には大根おろしを適量入れてある」

「へえ！　なるほどね。僕も今度やってみよう」

あまりに美味しいので、思わず驚いた。先月味のないチャーハンを作って出したのと同一人物とは思えない。

「いやでも、本当にうまいな。箸、食べなくていいのか？」

「……失敗した分は全部自分で食べたからな……」

「ん？」

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ……。美味しかったのなら、いい」

……おいおい、聞こえちゃったよ。小さくて他のみんなには聞こえなかったみたいだが、僕にはかすかに聞こえた。たしかに、今のは一夏には聞かれたくないよな。

「本当にうまいから箸も食べてみろよ。ほら」

「っ！？」

そう言った一夏の行動に、僕は危うく口に運んだご飯を吹き出しそうになった。

だって、一夏のやつ……唐揚げを箸で持ち上げて、箸に差し出しているんだもの。

「な、なに？」

「ほら、食ってみろって」

「い、いや、その、だな……」

しどろもどろになって、頬を赤くする箸。当たり前だ。恥ずかしいに決まってるだろ。

「はいあーん」

「……あ、あーん……」

まさかの『はいあーん』だ。これはとどめだな、この旗建築士（フラグメーカー）め。

多少ぎこちないがらも、箸は唐揚げを頬張る。その瞳はどこか幸せそうだった。

「い、いいものだな……」

うん。そうだろうな。

「だろ？　うまいよな、この唐揚げ」

そっちじゃねえよ。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？　仲睦まじいね」

シャルルの納得したようなその言葉が、虎仙人と戦女神を目覚めさせた。

「き、桐斗！　はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！　わたくしのサンドイッチもどうぞ！　一つといわずにどうぞ全部！」

ずずいっと鈴は僕に、セシリアは一夏に押し寄せてきた。いきなりなんだ！？

しかも鈴は僕に料理を差し出してくるところを見ると、どうやら「はいあーん」のようだった。なんでだよ！？

「ちょ、ちょっと待ってくれ鈴。僕はもう自分の分の酢豚があるから、それは別に――」

「……」

あ、ダメだこりゃ。有無を言わさぬ顔だ。

一夏の方も、セシリアの無言の主張に諦めたらしい。

「「い、いただきます……」」

男とは、無力だ。きっと有史以来、男はずっと女に頭が上がらない存在だったのだろう。うん、きっとそうだ。

ともかく、僕は鈴の酢豚を食べる。

う……。すごい恥ずかしいぞ、これ。

「う、うん、美味しい。……っていうかさ、鈴。なんで鈴の酢豚は温かいんだ？」

「ご飯を買ってきたときに電子レンジで温めなおしたからよ」

僕の分もしてくれたっていいじゃないか……。いや、冷めてても美味しいけどさ。

一夏はといえば、満面の笑みを浮かべるセシリアにずずいっとバスケットを押しつけられていた。

ああ、また真実を言えなかったのか。かわいそうに。

「ばーか」

鈴がパックのウーロン茶を飲みながらそう言う。容赦ないなあ。

「き、桐斗。何か食べたいものはあるか？」

はて、いきなり箒がそんなことを言い出す。

「し、仕方ないので私も食べさせてやろう」

「えぇっ！？　い、いいよ！　大体、唐揚げ以外は同じおかずなんだから、箒の分がなくなるだろ？」

「むっ……。それはそうだが……」

ふう。一体何を血迷ったのか。ていうか、恥ずかしくて僕にはこれ以上できないよ。

安堵の息をついて、僕は自分の分の酢豚を箸で持ち上げる。

「そっ、それだ！」

はい？

いきなり箒は僕を――いや、正確には僕の酢豚を指さしてきた。え、どしたの？

「そ、その酢豚……。ええと、その……私も……欲しい……」

顔を真っ赤にした箒は、ぼそぼそとそう言った。

「え？　そ、そうか。じゃあ、ほれ」

僕は素直に酢豚の入ったタッパーを差し出す。

「……」

「……は、はい、あーん……」

ああ、うん。勝てませんでしたよ。箒がすごい睨んでくるんだもの。それで出てきた答えが『はいあーん』って、どういうことだよ。

「あ、あーん……」

一夏のときと同じく少しぎこちなさそうそう言って口を開け、酢豚をほおばる箒。頬がわずかに赤くなっている。恥ずかしいならやらせるなよ。恥ずかしいならやらせるなよ。僕だって恥ずかしいんだから。

「う、うむ。いいものだな……」

「そ、そう……」

箒、そういう感想は作った鈴に向けて言った方がいいんじゃないか？
ああ、まだ顔が熱いぞ。
ここは別の話題を出して乗り切るとしよう。

「そ、そういえば、シャルルの部屋はどうなるんだろうな。転校したばっかりで一人部屋、っていうのはちょっとつらいだろうし」

僕は入学して最初のころは一人部屋だったが、シャルルはどうなるのだろうか。実はちょっと気になっていたことである。

「うーん。俺たちのどっちかが一人部屋になるっていう可能性もあるけど、あの部屋なら三人住んでても大丈夫そうだよな？」

「そうね。寮の部屋は広いから、ちょっとスペースを分ければ平気だし」

そうか。そういうやり方もあるよな。そっちの方が男子三人、気兼ねなく過ごせるし。

「え？　あの部屋、二人でも少し狭くありませんか？　わたくしの部屋なんて、寝具を置いただけでいっぱいでしたのに……」

「「「……」」」

セシリアの発言に、その場の全員が沈黙する。シャルルは訳が分からないという感じだが、僕たちは知っている。前に招待されて行っ

たセシリアの部屋。あれはひどかった……。まず、セシリア本人も言ったようにベッドがかなりデカく改造されていた。ホテル並のベッドの更に一回りも大きなそれは、ひらひらの天蓋のついた所謂お姫様ベッドというやつだった。それに加えて部屋に設置されていた鏡台、テーブル、イスは全部特注品のインテリア。あれは――正直ちょっと引いた。スペースのほぼ全部を強奪された同室の女子がかなりかわいそうだったよ。

ちなみに、最初に一夏の写真（休み時間中に居眠りしていたのをこっそり撮影）を売ったとき、指を二本立てたら桁違いの金額を出されそうになってびびった。ちゃんと二百円で売ったけど。

もっと慎ましやかに生きようぜ。イギリス代表候補生。

「ま、まあ……それは置いといて、今度こそちゃんとした部屋割りをして欲しいよな」

「そうだな。シャルルも、もし女子と一緒になったら休みづらいもんな？」

「え？　……あっ。う、うん。そうだね」

一夏の問いかけに妙な間を空けて頷くシャルル。どうしたんだ？

「いやあ。そう考えると、男同士っていいよな」

「……」

一夏。気持ちは分からないでもないが、その言い方はやめてくれ。変な誤解を生むぞ。

「そ、そう？　よくわからないけど、一夏がいいなら良かったよ」

照れているんだろうか、シャルルの言葉がさっきとは違う意味でぎこちない。
その後、一夏は一日中ずっと女子トリオから白い目で見られていた。
もちろん自業自得なので、僕はフォローしなかった。

◇

「ほれ、お待たせ」

「おう。サンキュー桐斗」

「いただきます」

夜。夕食を終えて僕たちは部屋に戻ってきた。食堂では三人目の男子転校生ということで相変わらずの女子包囲網から質問攻めにあい、延々と続きそうなそれを適当に切り上げて逃げてきたのだ。
シャルルは、僕と一夏と同室になった。さすがは国立、ＩＳ学園。同じ失敗は二度と繰り返さない。というか、それ以前に最初からやれよ。
それで今は食後の休憩をかねて僕が日本茶を淹れてきたのだ。一夏

にやらせてもよかったのだが、なんでも一夏曰わく「僕が淹れた方がうまい」らしい。ちょっと微妙だが、やはり褒められるのは嬉しいものだ。
シャルルは湯のみを持ち上げ、日本茶を口に含んだ。それを少し味わうと、静かに飲み下す。やっぱり、行儀がいいよなあ。
「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でも美味しいよ、桐斗」
「ありがとう。気に入ってくれたんなら良かったよ」
「桐斗の淹れたお茶はうまいからな。今度機会があったら抹茶でも飲みに行こうぜ」
「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよね？　特別な技能がいるって聞いたことがあるけど、ふたりはいれれるの？」
「抹茶は『たてる』って言うんだぜ。いや、俺も略式のしか飲んだことない。今は駅前に抹茶カフェっていうのがあるんだよ。コーヒーみたいな感覚で飲めるやつな」
へえ、そんな店ができていたのか。僕は学園に来てから駅前に行ったことがあまりなかったので、一夏の話は初耳だった。
「じゃあさ、今度みんなで行こうよ。ついでにシャルルに色々案内もしたりしてさ。せっかくだし今週末の日曜にでも出かけない？」
「いいな。そうしようぜ」
「本当？　嬉しいなあ。ありがとう、桐斗、一夏」

柔らな笑みを浮かべるシャルル。全体的に中性的な印象があるからか、男とわかっていてもその笑顔にはドキッとしてしまうものがあった。しかし同時に、またもや背中に冷たい何かを感じてゾクリとしてしまった。

「ま、まあ、僕も抹茶カフェっていうのに興味あったから、ちょうどいいんだよ」

「おいおい桐斗、照れてるのか？」

「そ、そんなわけないだろ……」

ニヤリと笑う一夏を一睨みして、僕は熱が上昇してきた顔をふたりからそらす。半分とはいえ、あの一夏に内心を悟られるなんて一生の不覚だ。

「ふふっ、ありがとう」

照れているのを見透かしているのか、シャルルがまたどこか優しげな雰囲気で笑んだのを横目で確認した。
そのときにわかった。シャルルの笑顔は、いわゆる『家庭的な笑み』というやつなんだ。
誰もが安心するはずのその笑みは、訳あって家族のいない僕にとっては苦手とするものなのかもしれない。見てみると、一夏の方もなんだかそわそわとしているようだった。とりあえず、話をそらすか。

「えっと……。シャワーの順番とかどうしようか？　三人もいたらちょっと混んじゃいそうだし」
ちなみに、寝るときは一夏とシャルルがベッド、僕は床に布団を敷

いて寝ることにした。理由は僕が布団の方が馴れているからだ。それに、シャルルもベッドの方が落ち着くだろうし。

「あ、僕が後でいいよ。桐斗と一夏が先に使って」

「う？　うーん、そう言われると逆に使いづらいというか……。シャルルも実習終わってすぐにシャワー浴びたい日だってあるだろ？」

「ううん、平気だよ。僕ってあんまり汗かかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にしないし」

「そう？　じゃあ一夏も、僕の先でいいよ。でもシャルル、別に遠慮とかしなくていいからな。一緒の部屋になったんだから」

「そうだぜ。なにせ男同士なんだしな」

「うん。ありがとう」

そしてまたにこっと笑顔を見せる。ふと思ったが、シャルルってお礼の言い方がすごく自然だよな。絶妙なタイミングで見せられる笑顔には、きっと誰でもドキッとしてしまうに違いない。ある程度慣れたのか、背中に感じていた冷たさはだいぶやわらいでいた。

「そういえばふたりともいつも放課後にＩＳの特訓しているって聞いたけど、そうなの？」

「ああ。俺たちは他のみんなから遅れているから、地道に訓練時間を重ねるしかないからな」

今日はシャルルの引っ越し（といっても全然荷物が無かった）があ

ったので、放課後の特訓は休みにしたのだ。しかし明日からはまた再会される。なにせ今月には学年別トーナメントがあるのだから。

「僕も加わっていいかな？　何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「おお、そりゃありがたい。お願いするよ、シャルル」

「うん。任せて」

こうして学園生活で心強い味方を得た僕は、その日は安心感からかぐっすりと眠りにつくことができた。

「シャルル先生のＩＳ講座。実技編」（前書き）

遅れました
実は研修のために他県で泊まりがけで働いています。今月いっぱいはロクに更新できません
読者様には申し訳ありませんが、来月からはましになると思いますので、少しの間待っていてください

それでは本編を、どうぞ！！

「シャルル先生のＩＳ講座。実技編」

「こう、ずばーっとやってから、がきんっ！　どかんっ！　という感じだ」

「なんとなくわかるでしょ？　感覚よ感覚。……はあ？　なんでわかんないのよバカ」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度回転ですわ」

とご教授してくれているのは、俺と桐斗の自称コーチである三人。シャルルとラウラが転校してきてから五日が経って、今日は土曜日だ。ＩＳ学園では土曜日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっている。とはいえ土曜日はアリーナが全開放なのでほとんどの生徒が実習に使う。それは俺たちも同じで、今日もこうして特訓中なのだが……。

「「全然わからん」」

ぴったりとハモった俺と桐斗の簡潔な感想がこれだ。現在、俺たちはいろんな意味で行き詰まっていた（そして息詰まっていた）。

「なんでわからん！　だから、どんっ！　ずばっ！　ずどんっ！　という感じでだな――」

「ちゃんと聞きなさいよ！　いい？　要は感覚なんだから――」

「もう一度説明しますわよ！　防御の時は右半身を斜め上前方へ――」

またあの意味不明な講義が始まるのか。

教えてくれるのはありがたいが、三人とも言ってることが偏りすぎてるんだよ。どうやって整理しろと言うんだ。

（誰か助けてくれ……）

こいつらによるＩＳ戦闘に関するレクチャーは、俺たちには荷が重すぎる。

「桐斗、一夏」

「ん？」「へ？」

二人そろってかけられた声に振り向くと、そこにはオレンジ色にカラーリングされたＩＳを装備した、シャルルがいた。

「どっちか僕と模擬戦してみない？　噂の白式や紫燕と戦いたいんだ」

はっ！　これは――チャンスだッ！

「じゃあ僕――」

「俺からいくぜ！　じゃあそういうわけだから、また後でな！」

桐斗の言葉を遮って、俺はシャルルの前に出た。

「う、うん。それじゃあ向こうでやろうか」

「えぇっ！？　ちょ、ちょっと一夏！？」
悪いな相棒。残念ながら俺の脳はもう限界なんだ。だからそんな雨の日の子犬みたいな目で俺を目で見るのはやめろ。良心が痛む。
「し、仕方ないわね。じゃあアタシが教えてあげるわよ。桐斗、あっちでやるわよ」
「むぅ……。ま、待てっ！　それは私の仕事だ。勝手に仕切るな！」
「え？　いや、みんなでやれば……」
「「……」」
「……なんでもないです」
なんだか箒と鈴が無言で桐斗を睨むという予想外な展開が繰り広げられていたが、俺は振り返ることしない。なんだかセシリアも呆れたように桐斗を見ている。
俺はシャルルとアリーナの広いスペースへ移動した。
「――さて、反省会の時間です」
冷たい目で、桐斗がそう告げる。こいつ、根に持ってやがる。

シャルルとの模擬戦は、俺の惨敗だった。だから今はこうして、桐斗も交えてシャルルからのレクチャーを受けているのだ。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？」

「うーん。知識として知っているだけって感じかな。これについては、桐斗も同じだね」

「え。ぼ、僕も？」

虚を突かれたように、桐斗がシャルルに聞き返した。結局お前も反省する側じゃんか。

「うん。ふたりとも、射撃武器が相手だとほとんど間合いを詰められないでしょ？」

「うっ……、確かに……」

「僕も……『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』とかすぐに読まれるし……」

「ふたりのＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方が

いいよ。空気抵抗とか圧力の関係で期待に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするから。桐斗はその点によく気をつけてね」

「き、肝に命じておきます……」

桐斗のＩＳ、紫燕は白式よりも機動力が上らしい。桐斗はそれを活かそうとしているのか、瞬時加速の軌道を僅かに変則的にさせているのだ。

それにしても、シャルルの説明は非常にわかりやすい。あの女子トリオも見習って欲しいものだ。

「ふたりのＩＳって後付武装（イコライザ）がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域（バススロット）が空いてないらしいんだよね。だから量子変換（インストール）は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

シャルルの話した聞き慣れない言葉に、俺は首を傾げる。

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？桐斗」

「んー。どっかで聞いたような気がするんだけどなぁ……」

「言葉通り、唯一仕様（ワンオフ）の能力（アビリティー）だよ。各ＩＳが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと」

「ああ、そうだった。でも、普通は第二形態（セカンド・フォーム）から発現するから僕た

ちの場合は特殊なんだったっけ？」

「じゃあ、白式の唯一（ワンオフ）仕様は『零落白夜』で紫燕のは『雷光演武』ってことか」

エネルギー性質のものであればそれが何であれ無効化・消滅させる白式の最大の攻撃能力である『零落白夜』と、エネルギーを機体の一カ所に充填・凝縮させて放ち対抗する紫燕の『雷光演武』。しかしどちらもその発動には自身のシールドエネルギー、つまりは自分のライフを削るという呪われた仕様であり、文字通り諸刃の刃なのだ。

「どっちも第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事例だよ。しかも、白式の能力って織斑先生の――初代『ブリュンヒルデ』が使っていたＩＳと同じだよね？」

そうなのだ。どうやら、千冬姉と同じなのは武器だけではなく、その仕様までもが同じらしい。なんとも因縁めいている。

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「姉弟だからって……そういうものなの、シャルル？」

「ううん。それだけじゃ理由にならないと思う。さっきも言ったけど、ＩＳと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的にできるものじゃないんだよ」

「そっか。でもまあ、今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ」

「あ、うん。それもそうだね。じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

そう言って俺に渡してきたのは、さっきまでシャルルが使っていた五五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「え？　他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾（アンロック）すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。――今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

シャルルの説明をなんとなく理解した俺は、初めての銃器を受け取――――

「ちょっと待った」

――ろうとしたところで、桐斗からのストップが入った。なんだよ、いきなり。

「一夏はさっきシャルルと模擬戦やっただろ？　だから今度は僕が先にやる」

ふくれっ面に見える表情でそう言う。実際男がやるとかわいくない表情だが、女顔の桐斗がするとなんだか自然だ。

「それもそうだね。それじゃあ、まずは桐斗から。――はい、どうぞ」

新たに桐斗と紫燕に使用許諾を発行したのか、シャルルはアサルトライフルを桐斗に差し出した。
桐斗は機嫌良さそうにそれを受け取り、ちらりと俺を見る。『さっきの借りは返すぞ』と言いたそうな目をしていた。なるほど、まだ根に持っていたのか。

「それじゃあ早速。――構えはこんな感じでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

ひょいっと桐斗の後ろに回ったシャルルは身長差がそれなりにあるものの、ＩＳの特性で浮いていることから自由な動きで桐斗の体をうまく誘導する。
勉強になるな。俺もじっくり見学させてもらうとしよう。
桐斗の背中にくっついて、シャルルはわかりやすい説明を続ける。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはＩＳが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

「うん。大丈夫。問題ない」

「それじゃ、狙いを定めてみて。とりあえず撃つだけでもだいぶ違うと思うよ」

「わかった。――じゃあ、行くよ」

「うん」

感覚というのはやってみなければ絶対にわからないものなのだから、シャルルの言うとおりなんだろう。桐斗は一度深呼吸してから、表情を引き締めた。
バンッ！！

「うわっ！？」

突然響いた火薬の炸裂音に桐斗が驚いた。火薬銃だから当然なのだが、桐斗は結構びっくりしたようだ。

「なにビビってんだよ、桐斗」

「い、いや。コレ、実際に撃ってみるとかなり音が大きいんだよ。それになんか、アレだね。なんというか、とりあえず『速い』っていう感じだった」

そのまんまだろ。

「でもそのとおりだよ。ふたりの瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になる。特攻するときに集中しているけど、それでも心のどこかではブレーキがかかるんだよ」

「だから、簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「なるほどねぇ……」

そうだったのか。だから格闘メインの箒はともかく、鈴やセシリアと戦うと一方的な展開になるときがあるのか。桐斗も納得したよう

に、こくこくとうなずいている。うん、勉強になった。

「だからそうだと私が何回説明したと……！」

「って、それすらわかってなかったわけ？　はあ、ほんとにバカね」

「わたくしはてっきりわかった上であんな無茶な戦い方をしているものと思っていましたけど……」

離れた場所から聞こえるのは、自称コーチである三人娘の声。

『……一夏』

『桐斗。俺たちはあいつらともっと話し合うべきだったんだ。いまはそれでいいじゃないか……』

『……そうだね』

俺と桐斗の間でプライベートチャンネルが繋げられる。内容についての苦情は受け付けないぞ。

「あ、そのまま続けて。一マガジン使い切っていいよ」

「ああ、ありがと」

とりあえずさっきよりは幾分か落ち着いたように、桐斗は二発三発と空撃ちをする。俺はそれを眺めながら、どう間合いを詰めるかを考えていた。

「そういえば、シャルルのＩＳってラファール・リヴァイヴだよな

？」

ライフルを構えながら、桐斗がそうシャルルに尋ねた。
たしかに、山田先生の使っていたＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』はネイビーカラーに四枚の多角方加速推進翼（マルチ・スラスター）が特徴的なシルエットをしていた。それに比べてシャルルのＩＳはカラーだけでなく全体のフォルムからして違う。背中に背負った一対の推進翼は中央部分から二つの翼に分かれるようになっていて、紫燕と同じく機動性が上げられている。
そして何より違うのが肩部分のアーマーで、本来ついている四枚の物理シールドがすべて取り外されている。その代わりに左腕にシールドと一体化した腕部装甲がつけられていて、逆に右腕はすっきりとしたスキンアーマーだけになっている。

「うん、そうだよ。僕のは専用機だからかなりいじってあるけどね。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備（プリセット）をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてある。いま量子変換（インストール）してある装備だけでも二十くらいあるよ」

「二十！？　まるで歩く武器倉庫みたいだね……」

「ちょっと分けて欲しいくらいだな」

「あはは。あげられたらいいんだけどね」

俺たちからの羨望の眼差しを受けて苦笑するシャルル。
しかし、ＩＳの装備というのは同時に使えないので普通五つくらい、多くても八つくらいである。
それは当然わかった上でのこのカスタム仕様なのだろうから、シャ

ルルに何か特殊な技能があるのかもしれない。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわつきはじめたのは桐斗がちょうど一マガジン分一六発撃ち切ったところで、俺たちはその注目の的に視線を移した。

「災難は去りかけたときにまたやってくる」（前書き）

研修終わったー！！
短いようで長く感じた1ヶ月でした
さて、そういうわけで執筆の時間もつくることができてきました

それでは本編を、どうぞ！！

「災難は去りかけたときにまたやってくる」

弾を撃ち切った僕は、シャルルにライフルを返しながらアリーナ内に現れた人物に視線を移した。

「……」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

転校初日以来、クラスの誰とも関わろうとしないどころか会話さえしない少女。

もちろん僕も話したことはない。だっていきなり一夏に平手打ちをかましたのだから、気に食わない。その理由を知ってからはなおさらだ。

彼女が装備しているのは、呑み込まれるような漆黒にカラーリングされ、左肩に巨大な実弾砲を装備したＩＳ。

「おい」

「……なんだよ」

ＩＳのオープン・チャンネルで飛んできたラウラの声に、一夏が気が進まなそうに応えた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

何を言うかと思えば、戦闘狂か何かかアンタは。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

やっぱり、千冬さんがらみの件か……。

数日前、一夏や鈴から聞いた話だ。第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』、当時の千冬さんはその決勝戦にまで登りつめた。前大会の優勝者でもある千冬さんの二連覇に、世界中の多くの人々が期待した。しかし、決勝戦の当日に、一夏は謎の組織に誘拐された。

――どこかの安いドラマみたいな話だが、事実本当に謎だったらしいからそうとしか言いようがないそうだ。

その報せを聞いた千冬さんはＩＳを使って一夏を救出したのだが、もちろん大会は千冬さんの不戦敗となった。

千冬さんはドイツ軍の有する独自の情報網から一夏の監禁場所を探し当て、そのドイツ軍への『借り』を返すため、大会終了後に一年ちょっとドイツ軍ＩＳ部隊で教官をしていたらしい。

おおかた、ラウラは自分が心酔する千冬さんの栄光を邪魔した一夏が許せないといったところだろう。ここまでくるとある種の崇拝のようにも見れるな。

警戒を強める僕は、シャルルへとプライベート・チャンネルを繋げる。

『シャルル。ボーデヴィッヒさんが何かしたら一夏のサポートを頼めるか？』

『――わかった。気をつけてね、桐斗』

回線を切った直後、僕たちが予期していた事態はすぐに起こること

となった。

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

ラウラは漆黒のＩＳを戦闘状態へとシフトさせる。次の瞬間には、実弾砲が火を噴いた。

（！？　アイツっ――！）

僕はすぐに瞬時加速を使い、高速状態で飛び出した。

ラグビーボール並の大きさの実弾とのすれ違いざまに、《天蕾（あまつぼみ）》を抜刀する。

「！」

ラウラが息を飲んだように見えたが、それは一瞬で、すぐに僕の動きに合わせて右手を突き出してくる。

ゴガギンッ！

ジャギッ！

シャルルがシールドで実弾を弾くのと同時に、ラウラには僕の《天蕾》の金色の刃が、僕にはラウラのプラズマ手刀の高熱の刃が突きつけられていた。

「わかりやすい動きだな。やはり、あのような愚図の友人などやっているとそうなるのか」

「お前、いい加減にしろよ……」

嘲笑うラウラを睨みつける。だが、ラウラは余裕の表情で僕を見ていた。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

シャルルが六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開してラウラに向ける。

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化のめどが立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

僕たち三人の間で、静かな睨み合いが続く。

実力は知らないが、相手はドイツの代表候補生だ。さっきの反応速度からしても、やり合えばきっと苦戦を強いられるだろう。

でも、ラウラのことは気に入らない。あっちが一夏に手を出す気なら、こっちだってそれを全力で阻止してやるつもりだ。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの怒声が響く。どうやら騒ぎを聞きつけた担当の教師がやってきたようだ。

しかし、それもお構いなしに僕はラウラを睨む。対してラウラは、興が削がれたというようにプラズマ手刀を納めた。

「……ふん。今日は引こう」

「……」

仕方なく、僕も《天蕾》を鞘に納める。

あっさりと戦闘態勢を解除したラウラは背を向けてアリーナのゲートへと引き返して行った。

僕も振り返ると、一夏たちのところへと戻ろうとする。

『待て、そこの男子！　お前もゲートまで来い！』

「……はい？」

再び響いた教師の怒声に、僕は素直に首をひねった。

なんで……？

冷静になって、さっきまでの状態を分析してみる。ラウラが一夏に喧嘩を売って実弾砲をぶっ放したが、それをシャルルが防いだ。それまでは良かっただろう。だが、僕はラウラの至近距離まで行って武器を突きつけた。それはあっちも同じだが、あれは模擬戦ではなくたいしたルールもない喧嘩だ。もしかしたら、喧嘩両成敗ということなのだろうか。

――行くしかないか。自業自得みたいなものだし。

「……行ってくる」

「お、おう……。悪い、桐斗。俺のせいで……」

「違うだろ。あれは完璧にボーデヴィッヒさんが悪い」

申し訳なさそうにする一夏にそう言って、今度はシャルルの方を見る。すでに武装を収納（クローズ）したシャルルは心配そうに僕を見ていた。

「シャルル。一夏のフォローありがと。任せてよかったよ」
「う、ううん。いいよ、これくらい。それより、今日の訓練はもう上がりにする？　もうアリーナの閉館時間だし」
「ああ、そうだった。先に部屋に戻ってて。シャワーも先に使っていいから」
「うん。ありがとう、桐斗」
さっきまでラウラを警戒していたのとは全く違う、無防備な笑顔を向けられる。こっちがお礼を言っていたはずなのに、なんだか妙に照れくさくなった。
「そ、それじゃ。行ってきます」
それだけ言い残して、僕はゲートへと向かう。
きっと怒り心頭の教師が待っているんだろうが、適当に聞き流しておこう。それが得策だ。

「――つまり、ＩＳとはあくまでも兵器であるというのを忘れないこと。わかったか！？」
「はい」

「……」

僕は適当に返事を返すが、隣にいるラウラは直立不動まま先生の説教をスルーしている。

一度着替えさせられてこの指導室に連行されてからラウラはずっと無言で、僕どころか先生にも無視を貫き通していた。先生ももはや諦めたようで僕だけに説教しているみたいになってしまっている。

どうやら彼女がまともに会話するのは千冬に対してだけのようだ。

なんだか数日前の転校初日を思い出す光景だ。

「これに懲りたならもう喧嘩にＩＳを使うな。次にやったら罰則を与えるからな。今日はもう寮に帰っていい」

「はい。すいませんでした」

「……」

ガラリ、と二人そろって指導室から出て行く。結局、ラウラが口を開くことはなかったな。

しかし、別にそれに構う必要なんてない。むしろこっちから願い下げだ。

僕は逃げるようにラウラに背を向け、寮に帰ることにした。

「待て」

「……なに？」

数歩歩いたところで、背後から冷たい声をかけられる。数十分ぶりに聞いたそれに僕は若干の敵意を感じた。

心なしか、返事をする僕の声もいつもより低く感じる。

「貴様とあの男、一体どのような関係だ」

「……幼なじみで、相棒だよ。それが君に何か関係あるか？」

「下らん繋がりだな。そんなものに縋っているから、貴様らは弱いのか」

あざ笑うラウラの言葉に、僕の中で何かのスイッチが入りかける。振り返って、ラウラと向かい合った。

「相棒を守ったら弱いなんてことはねえだろ。それに、縋っているのはアンタだろ。千冬さんの影を追いかけて、勝手に一夏を汚点として決めつけて潰そうとしてる」

「当たり前だ。――教官は、私に再び私が在るべき意味をくださった方なのだ。貴様が何を知っているというのだ」

千冬さんの名前を持ち出すと、ラウラの眼光がさらに鋭くなった。どうやらこの子の中で千冬さんはかなりの扱いになっているみたいだ。

しかし、そんなことは関係ない。

「そっちの事情なんて知らないし、知ろうとも思ってない。でも、またあんなやり方で一夏を狙うなら、僕はアンタを許さない……」

「ふっ。貴様ごときが私を倒すと？　面白い冗談を言うな」

「言ってろ」

これ以上話していても意味はないな。
胃がムカムカしてきた僕は、再び振り返って今度こそ寮に向かって歩き出す。
「縋っているのは、一体どちらの方だろうな？」
明らかに見下した、そんな言葉が聞こえたが、僕は耳を貸すことはしなかった。

◇

帰り道でほぼ無理やりに機嫌をなおし、僕は部屋に戻ってきた。
「ただいまー。って、あれ？　誰もいない」
と思ったが、シャワールームから響く水音に気づく。
どうやら一夏かシャルルのどちらかがシャワーを浴びているみたいだ。
（――そういえば、昨日ボディーソープが切れたとか言っていたな……）

ふと、シャルルが言っていたのを思い出した。
一応、クローゼットを開けて予備のボディーソープを確認してみる。
以前に見たのと同じで、まだ補充されていないのがわかった。
（ふたりともうっかりしてるな。届けておくか。困っているだろうし）
そう考えて、ボディーソープを取り出す。とりあえず脱衣所まで持って行ってから声をかけてやればいいだろう。
僕は洗面所兼脱衣所へと繋がるドアを開けた。
ガチャ。
――ガチャ？
あれ？　向かい側のドアが開いたぞ。脱衣所にあるドアは僕が開けたばかりだから、残ったのはシャワールームのドアだけだ。シャワールームの中から誰かが開けたみたいだ。
「あっ、ちょうどよかった。はいこれ、替えの――」
「き、き、きり……と……？」
「はい……？」
シャワールームから現れたのは、見たことのない『女子』でした。
なんで女子だとわかったのかというと、答えは単純明快。胸に膨らみがあるのだ。衣類を一切纏っていないその姿では性別の隠しようがない。
濡れている、わずかにウェーブのかかったブロンドヘア。すらりとした体は脚が長く、腰のくびれが実質的な大きさ以上に胸を強調していてシャワーを浴びたばかりの若々しい肌が雫をちりばめた宝石

のように煌びやかにみせていてああああああああああああああああああっ！？

（二度あることが三度目を呼び寄せやがったぁぁあああああ！）

脳内の火山が大噴火を起こした。

「……」

しかし、僕の肉体は時間が停まったように固まったまま動かない。予想外すぎる事態を目の当たりにしたからか、なんだか意識だけが別のところに飛んでいったみたいだ。

ていうか、なんだかこの金髪碧眼の女子に見覚えがあるような……ん？　金髪碧眼――？

「きゃあっ！？」

ハッと我に返った女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに引っ込む。

大きなドアの音で僕もやっと我に返って、ざあざあとシャワーの水音が耳に戻ってきた。

「……っ！？　ご、ごごごっ、ごめ、ごめんなさいっ！　ボディーソープ置いときますっ！」

「あっ……！」

早口で言って、僕はボディーソープを床に置いてシャワールームを飛び出した。バタン！　とドアを閉め、部屋の隅で畳んである僕専用の布団の上で正座。この行動にまったく意味はないが、とにかく

落ち着かないとやっていけない気がした。
その場で何度も深呼吸を繰り返す。
……よし。ちょっと落ち着いたところで脳内整理のお時間です。
さっきの子、完璧に女の子だよな。ここは僕と一夏、それにシャルルが住んでいる校内唯一の男子部屋だ。
そういえば、あの子シャルルに似ていたな。普段は縛っている髪をほどいたらあんなかんじだ。少なくとも一夏であるはずがない。ていうかそうだったら正直キモい。って、そこは問題じゃないだろ。

（おいおいちょっと待て。おかしいだろ。なんでシャルルに胸があるのさ？　あの、胸――）

さっきの光景が、まぶたの裏でフルハイビジョンで再生される。あああぁぁっ！！　消えろ煩悩！

ガチャ。
ひぃっ！？　誰か来た！

「ただいまー。おう、桐斗。先に帰って――」

「今はダメーーーーーーーーーッ！！」

今更帰ってきた一夏が開けたドアを、勢いよく押し返す。なんで今このタイミングで帰ってきたのか気になるところだが、それどころではない。
今の状況は非常にマズい。そこに一夏まで入ってきたら、きっとさらにややこしくなってしまうだろう。だからここは、無理やりにでも閉め出す。

「おわっ！　い、いきなりなんだよ！？」
「頼む相棒。今だけは、今だけは入ってはいけないんだ！」
「意味がわからん！」
「わからなくていいんだよ！」
開きかけのドアの押したり押されたりを繰り返し、ドア越しにぎゃあぎゃあ騒ぐ。状況がわからないのは僕も一緒なんだから、ここはおとなしく引き下がってくれ！
「とにかく、今はダメ！　どこかで時間潰しでもしてくれ！」
「ちょ、ちょっと待て！　一体どういうことだ。なんか説明しろよ！」
「なら一夏。ひとつ答えてくれ」
「な、なんだよ……？」
「一夏は……男、だよな……？」
「……は？　当たり前だろ。なに言ってんだ？」
「ならそれが答えだ」
バタン！
閉めました。ええ、そりゃ容赦なく。
でもよかった。一夏はれっきとした男だった。いや、当たり前なん

だけど。
諦めたのか、はたまた呆れたのか。ドア越しで一夏の足音が離れていくのを聞き耳をたてて聞いた。スマン一夏。説明できたらするよ。用心のためにドアの鍵を閉めると、どっと疲労感が肩にのしかかってきた。とりあえず布団の上にまた正座する。
ああ、ヤバい。ちょっと冷静になって分析してみたら、この状況ってかなり危ないのかもしれないぞ。
ガチャ……。

「！？」

さっきまでとは違い、控えめに響いた脱衣所のドアが開く音。その音がいつもより大きく聞こえた気がしたのは、きっとこの緊張で張り詰めた空気のせいだ。

「あ、上がったよ……」

「あ、ああ」

背中越しに聞いたのは、やはりシャルルの声だ。僕はさっきからばっくばっくと跳ねまくる心臓を抑えるように息を止めて、ゆっくり振り向いた。

「――――――」

そこにいた人物は、間違いなく女子だった。

「暴露はいつだって苦いもの」（前書き）

遅くなりました！
試験があるくせに早起きして書いていました。ええ。わかってます、バカなんです自分（涙）

今回は長めです。内容はほとんど原作と同じですが、桐斗の秘密が……？

とりあえず本編を、どうぞ！！

「暴露はいつだって苦いもの」

「……」

「……」

く、空気が重い……。

目の前の女子――ていうか、シャルルと向かい合って座ってから、かれこれ一時間が経過していた。その間に会話はなく、視線も互いにさまよわせている。

しかしまあ、中性的な顔つきではあったが今のシャルルは完全に女の子だ。シャルルの格好はいつもと同じシャープなラインが格好いいスポーツジャージなのだが、バレてしまったからだろうか、胸を隠すための特別製コルセットをしていない。そのせいで体のラインがはっきりとしていて、胸があることが思いっきりわかってしまう姿なのだ。

「……えっと、あの」

空気に耐えられず、僕から声をかけてみる。すると女子シャルルはびくっと身を震わせた。ああ、ごめんなさい……。

しかし話しかけたものの、あまりいい話題が浮かばない。ええい、ままよ。

「えっと、その……さっきのだけどさ、大丈夫だからね？　僕、全然まったく、これっぽっちも見たりとかしてないから……」

言い訳かよ。

ていうか、ここまで言ったら逆に見ましたって言っているようなものじゃないか。
シャルルの反応はといえば、顔を赤くして上目遣いで僕を見ていた。なんだか、睨んでいるように見えなくもない。
「……じゃあ、胸にあるホクロも見てない？」
「え？　そんなの見当たらなかったけど――はっ！？」
しまったと思ったときには、シャルルは僕から胸を隠すようにして自分の体を抱いていた。
「……やっぱり見たんだ……桐斗のえっち……」
「ぐはっ！」
まさか、誘導尋問をしかけてくるとは。しかも変質者扱いである。ちくしょう、僕の馬鹿！　僕の馬鹿！
しかし気のせいだろうか、シャルルの眼差しには抗議だけではなく、なんだ恥ずかしいのにどこか嬉しそうな感じがある。
……いや、気のせいだろう。僕の気が動転しているからそう見えるだけだろう。
「ご、ごめんなさい……」
「も、もういいよ。騙してたのは、僕なんだから……」
「……シャルル――さん？　ちょっと、訊いてもいいかな？」
「いままで通りシャルルでいいよ。なに、桐斗……？」

姿勢を正したシャルルが後ろめたそうに僕を見る。なんだか尋問をしているみたいで、あまり気持ちのいいものじゃない。

「シャルル。なんで男のフリなんてしてたんだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」

「実家って、たしかデュノア社の――」

「うん。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」

実家の話をし始めてから、シャルルの表情が徐々に曇りだす。その様子から、決して家族の良い話ではないのを感じた。

そして、僕はシャルルの次の言葉で絶句する。

「僕はね、桐斗。愛人の子なんだよ」

その言葉の意味がわからないほど無知ではないし純情でもない。しかし、衝撃を受けるには十分だった。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適性が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、おそらくは言いたくないであろう話をそれでも健気に喋ってくれた。断片的に語られるそれを聞いていくうちに、僕の内側にある何かが刺激されていく。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と繋げられたシャルルの愛想笑いには、生きている感じがなかった。僕の胃の中では、行方のわからない怒りが湧きだしていた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？　でもデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界第三位なんじゃないのか？」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ。ＩＳの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

そういえば第三世代型の開発の話で、セシリアが自慢げにいくつか話していたのを思い出した。

イギリス、ドイツ、イタリアの三国の中から時期主力機となるＩＳを選定中らしい。その実稼働データを取るために、セシリアはＩＳ学園にやってきたのだとか。ということは、ドイツからのラウラが転入してきたのもその辺りの事情に絡んでいるのだろう。

「話を戻すね。それでデュノア社も第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なんとなく話はわかったけど、それがなんで男装に繋がるのさ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」

シャルルは僕から目をそらし、どこか忌々しげに続けた。

「同じ男子なら日本で登場した二人の特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

「それって、スパイ活動ってこと？」

「そうだね。白式と紫燕のデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕は、あの人にね」

あの人――つまりは父親のことだろう。シャルルは自分が一方的に利用されていることをよくわかっている。きっと、シャルルの中でその人はすでに父親ではなくっなっているんだ。

「とまあ、そんなところかな。でも桐斗にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルル。僕はそれを見て、なんだか鏡を見ている気になってきた。

「なんだ、そんなことかよ」

「え……？」

「そんな小さいことはどうだっていい。親が何だっていうんだよ。自分の子どもをどうにでもしていいはずがないだろ。生きているのは、結局は僕たちなんだよ」

「き、桐斗……？　どうしたの？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。僕の言葉は平坦で低く、威圧的に繋がれていたみたいだ。

「僕だってさ――捨てられたんだよ。父親に」

「あ……」

おそらく資料で知っていであろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルがきれいな青の瞳を揺らがせた。

しかし、僕の威圧を持った声はまだ止まらない。すべてここで吐き

出したくてたまらなかった。

「僕の家は貧乏でさ、母親は僕が生まれてすぐに死んじゃったんだ。それからは――まあ、僕の父親が働いてたんだけどね、この女尊男卑の時勢じゃロクな収入もなくてその日その日を食べていくのがやっとだったよ。それで中学に上がる直前に引っ越しが決まって、僕は離れた町に移ったんだ。最初は栄転だって聞かされてたんだけど、それが実は夜逃げだったって知ったのはその翌日で――あの男が、僕に借金を押し付けてどっかに雲隠れしたあとだった」

「……」

「そのあとは大変だったよ。いきなりひとりで放り出されたものだから、毎日バイトばかりしてさ。学校もロクに通ってなかったなぁ」

「あの……親戚とかは……？」

「母方の伯父がいたんだけど、迷惑はかけたくないからな。お世話にはならなかったよ」

伯父さんは自分の妹の忘れ形見である僕のことを心配し、うちに住まないかと勧めてくれた。

その言葉は痛いほどありがたいものだったが、伯父さんには奥さんがいて、娘もいる。そんな家庭の中に僕みたいな奴が入り込めるはずがない。いいや、入ってはいけないのだ。

「それからＩＳを動かせるってわかって、家に政府の人が来てさ。僕は何も言っていないのに、勝手にあっちから『学園に入学するなら経済面は全力で援助する』っていいだしたんだぜ？　一目見てあっさり貧乏ってわかるほどなんて、笑っちゃうよな」

「え……それじゃあ――」

「借金はチャラになって、学費も国に援助されているってこと。だから、一夏や箒とまた会えたのもそうだけど、ＩＳ学園にはある意味でも来て良かったよ」

「……」

そこまで聞いたシャルルの顔は、お世辞にも明るいといえるものではなかった。

言いたいことを吐き出した僕の頭に上がっていた血も下ってきて、だんだんと今の空気の気まずさを自覚していた。

僕の内心を悟ったのか、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「いや、僕の方こそ熱くなりすぎた。それに今となっちゃどうでもいいし、会いたいとも思っていない。それより、シャルルはこれからどうするの？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「僕が言っているのはそういうことじゃない。シャルルがどうしたいかを訊いてるんだよ」

「どうしたいかなんて、言うだけ無駄だよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

そういって見せたシャルルの微笑みは、痛々しいものだった。それを見ていた僕は、シャルルにそんな表情をさせる存在と、何もできない自分に腹が立ってくる。
友人を救うために僕にやれることなんてちっぽけなものでしかない。しかし、最初から絶望して大人しくしているのはもっと嫌だった。こんなとき、アイツならなんて言うんだろうか……。

「……なら、バレなきゃいいだけだろ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

記憶の引き出しを漁ったら、とてつもなく使えるものを思い出した。いやいや覚えさせられたテキストの文章が明確に頭の中に浮かぶ。

「――つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間は平気だろ？　それに三年も時間があれば、なにかいい解決策が見つかるさ。別に急がなくてもいいじゃん」

「桐斗」

「ん？　どした？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……正しくは、むりやり頭に詰め込まされたんだけどな」

「なるほどね。ふふっ」

千冬さんの地獄の課題を思い出している僕を見て、シャルルはやっと笑った。今度の笑顔には屈託がなく、十五歳の少女そのものだ。

（う、ヤバい、なんかグッとくる……）

改めて見ると、シャルルは顔立ちの良さもあるが何よりその優しい雰囲気がある。そのせいか僕の目にはとても可愛く写ってしまって、今更ながらその無防備さから目をそらしてしまう。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだからさ、じっくり考えなよ。あ。そうだ、一夏にはこのこと内緒にしておくか？」

「うん、そうしてくれると助かるよ。――桐斗」

唐突に名前を呼ばれて、僕は何かと視線を正面へと戻す。すると、ちょっと照れくさそうに微笑む上目遣いのシャルルが僕の顔をのぞき込んでいて、ばっちり目が合った。

「――庇ってくれて、ありがとう」

「えっ？　あ、あぐ……」

「ん？　どうしたの？」

「いや、えっと。その……」

僕の内心を知ってか知らずかシャルルは更に上体を屈めてくる。そ

うすると、さっきから襟元から見えていた胸の谷間がますます見えてしまって、僕の反応はたどたどしくなってきた。

「あ、あの……とりあえず、ね。シャルル、一回離れてください」

「？」

「いや、えっと、その……む、胸元が……」

指摘されて、シャルルの顔がかぁっと赤くなる。……たしかさっきもこんなことがあったよな。

「き、桐斗、胸ばっかり気にしてるけど……見たいの？」

「へ？」

「……桐斗のえっち」

ぐっはぁ！　何故だろう二回目の方がさっきよりもえぐるように突き刺さったような。もうだめだ、僕は完全にシャルルに『えっちな奴』として認識されたんだ……。

うう……なんか、急に前途多難な気がしてならない。

コンコン。

「「！？」」

「おーい、桐斗？　帰ってきたんだが、もう大丈夫なのか？　俺もそろそろシャワーを浴びたいんだが」

いきなりのノックと呼び声に僕とシャルルはふたりそろって身をす

くませる。

「おい。入るぞ？」

やばい。やばいやばい。これは非常にやばい。今のシャルルは完璧に女の子の姿だ。見られたらすぐに男装していたことがバレてしまう。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れて」

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めて――」

「おいおいっ！　なんでカーテンの裏に入るんだよっ。ベッドベッド！　布団の中で大丈夫だから！」

「あ、ああっ、そっか！」

ばたばたとあわただしく動く僕&シャルル。――ガチャ。ドアが開かれた。

「や、やあ一夏！　おかえりなさい！」

「え？　お、おう。ただいま。……ていうか何やってんだ、お前ら？」

絵的にはベッドに飛び込んだシャルルに上から布団をかける形で僕がのっかっている。やっと帰ってきたら同居人が布団の上に覆い被さっているのだから、それは珍妙な光景だったことだろう。一夏の

顔は、明らかにいぶかしげだった。

「あ、あの、シャルルがなんだか風邪っぽいみたいだからさ、布団をかけてあげてたんだよ。それだけだぞ、ははは……」

「……。俺の知る限りでは日本には病人の上に覆い被さるという治療法なんてものはなかったと思うんだが」

当たり前だろ。ていうか世界中どこの国にもないよ、そんなもん。

コンコン。

「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

「桐斗、いる？　ありがたいことに今日もアタシが夕飯に誘いに来てあげたわよ。開けなさーい」

うわあ。なんだこの集中的な追い討ちは。なんで今日はこうも不幸が重なるのだろう。

こっちの気も知らずに、ドアを開けたセシリアと鈴が部屋に現れた。

「や、やあ！　ふたりとも数時間ぶり！」

「はあ？　何言ってんのよ桐斗」

「き、気にしないで。それよりさっき夕飯って言ってたよな？　えっと、シャルルがちょっと風邪気味みたいで食欲ないみたいだから、夕飯は僕たちだけで行こうとしていたところだよ」

「え？　そうだったか？」

「そ、そうだよ。一夏ったら忘れっぽいなぁ～」
布団の中からシャルルのくぐもった声が聞こえる。ああ、もうちょっと風邪っぽい声を出してくれ！

「ご、ごほっごほっ」
あああ、なんというわざとらしさ。これは無理があるんじゃ……？

「あ、あら、そうですの？　では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ。珍しい偶然もあったものです」

「よく言うわ……。それじゃあアタシたちも行くわよ、桐斗」

どうやらだませたようだ。みんなが単純でよかった。
まあ、いまはこの三人を部屋から出すのが先だな。帰ってくるまでに、シャルルが再び男装していることを願うしかない。

「そ、それじゃあ行ってくるねシャルル。帰りにシャルルの分の夕飯も持ってくるよ」

「あ、ありがとう桐斗。ごほごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」

「お、おう」

「デュノアさん、お大事に」

「ちゃんと暖かくして寝てるのよ？」

がっ、と鈴に腕を取られて部屋を出て行く。セシリアも一夏の腕を組んでいた。ああー。一夏のやつ、箒に見つかったら１００パーセ

ント怒られるだろうな。
その現状をつくった張本人、セシリアは幸せそうに一夏に体を密着させていた。

「……セシリア。何故腕を組んでいるんだ？」

「何故と言われましても、殿方はレディをエスコートするものですわよ」

どちらかというと、エスコートされてないか？　一夏が。
されるがままの一夏を見ていたら、腕に何かが
さりげなく絡まってきた。
見てみると、鈴がちょっとためらいがちに僕の腕に自分の腕を組ませている。

「……何してんの、鈴？」

「う、うるさいわね！　男は女をエスコートするもんなんでしょ。
ほら、さっさと歩く！」

どうしてこうなった……。
ていうかこの状況、かなり恥ずかしいんですけど。このまま食堂に向かえと言いますか。しかし今は変に話をこじれさせるわけにもいかないので、恥ずかしいのをがまんして従っておこう。
大丈夫だ、理性を保てよ、僕。隣にいるのは幼なじみなんだから、変に考えすぎるな。小学校のときにはよくふざけておんぶだの肩車だのさせられていたじゃないか。
変な形で二人一組となって食堂へと向かうために階段を下りると、そこで叫び声と出会った。

「なっ、なっ、何をしている！？」
廊下の端からずんずんと早足でやってくる。それが誰なのかは見なくてもわかってる。……箒だ。
「あら、箒じゃない。今からアタシたち一緒に夕食なの」
先頭を進んでいた鈴がなんだか挑発的に見える。一緒に、を強制されたような気もするし。温度が上がってきた頭ではさっぱりわからない。
「それと腕を組むのとどう関係がある！？」
「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然のことです」
いや、だからこれ明らかに僕たちがエスコートされてるよね。……ああ、箒がすごい怒っている。まあ、好きな相手が別の人と腕を組んでいたら気分も悪くなるだろうな。……あれ？　なんか僕にまで睨んでない？　ちゃんと一夏の管理をしておけということだろうか。
「一夏っ、桐斗っ！　お前たちも、私が食堂で待っていたというのに、どういうことだ！？」
「いや、どういうと言われても……」
他にすることがたくさんあったんです。っていうか、僕のことまで待ってなくてもいいのに。
「ともかく、アタシたちはこれから夕食だから。行くわよ、桐斗」
「ささ、わたくしたちも参りましょう一夏さん」

「ま、待て！　それなら私も同行しよう。ちょうどこれから夕食だったのでな」

へ？　そうなのか？

「あらあら箒さん、一日四食は体重を加速させますわよ？」

「ふん、心配は無用だ。私はその分運動でカロリーを消費しているからな」

と言っても、所属しているはずの剣道部にはまったく顔を出していないらしい。先輩が泣いていたぞ。箒、一夏と一緒に放課後の特訓をしたいのはわかるけれど、たまには剣道部にも行こうぜ。ほら、会わない時間が愛を強くするっていうし。

「それに、実家からこれを送ってもらった。今日も後で居合いの修練をするからなにも問題はない」

そういって見せたのは――ひぃっ！　日本刀だ。鞘に収められてはいるが、見覚えがある。昔、箒の道場で見せてもらった真剣。たしか名は――緋宵（あけよい）。

箒のおじさん、まさか一高校生に真剣を送るとは。いや、ＩＳ学園は法律上でも国際上でも『どこの国でもない土地』だから大丈夫なんだけどね。

「で、では、行くとするか」

あれ？　あれれ？　なんで箒は僕と一夏の間に来るんだ？　――って、えぇっ！？

「……箒さん、何をしてらっしゃるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのが当然なのだろう？」

「……それで、なんで桐斗の腕まで取ってんのよ、アンタは？」

「ひとりだけ余ったらかわいそうだろう」

ただいまの状況。五人揃って連結するように腕を組まれています。ちなみに右からセシリア、一夏、箒、僕、鈴という順番となっております。

ていうか、ヤバい。流石にこれはかなり、ヤバい感触が両腕から……。

「あのな、通行の邪魔になるだろうが。なあ、桐斗」

「ハイ？　イチカ、イマナニカイッタカイ？」

「カタコトになってるぞ！　大丈夫かお前！？」

アハハハハ。ダイジョブニキマッテルジャン。

「桐斗、今日の中華定食は天津飯だって。これにしようよ」

ふよっ。

「今日の焼き魚定食は鰆（さわら）だ。美味だぞ」

むにゅ。

すごく失礼な感想かもしれないが、右と左で全然感触が違う。

一歩進む度に、女子特有の柔らかい感触が当たっているので、今に

も魂が口から家出しちゃいそうだ。

「き、桐斗、あまり無理しない方が……。顔が真っ赤だぞ」

心配そうな一夏の声が遠くに聞こえる。

うん。すごく逃げ出したいです。しかし、ここで騒いだら周りにいる別の生徒たちに迷惑がかかってしまう。いや、横一列に並んで無駄にスペースを取っている分、すでに迷惑だとは思っているけど。

落ち着け僕。心頭滅却すれば火もまた涼しっていうじゃないか。そうだ、何も考えなければ怖いものなんか――

「どうかしたの桐斗？」

「どうした桐斗？」

ふよよっ、むにゅにゅぅ。ふたり揃って僕の顔を覗き込んできて、それでまた密着度が上がってしまい、左からスレンダーだが滑らかで柔らかな感触が右から豊満な胸が腕に押し付けられる感触が伝わってきてこれは一体なんていうかあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　消えろ煩悩おおおおおおおおぉぉぉぉぉッ！！

その日、なんとか意識をつなぎ止めた僕は夕食のときの記憶をきれいさっぱり忘れていた。

◇

「た、ただいま……」

「あ、桐斗おかえり。――ってどうしたの？　なんだかふらふらしているけど。顔も赤いよ？」

「き、気にしないで……。大丈夫だから。それよりお腹すいたでしょ。焼き魚定食をもらってきた。一夏なら、今は箒とセシリアに付き合っているからゆっくりと食べていいぞ」

「うん、ありがとう。いただきます」

夕食を取った直後、気力を振り絞ってセシリアに「一夏をお茶会に誘ってみたら」とそそのかしたら見事に誘ってくれて、箒も意地になってそれについて行った。おそらく一時間は戻るまい。シャルルもすでに男装をすませているから、心配ごとがひとつ減ったわけだ。にっこり笑って僕からトレイを受け取るシャルルだったが、それをテーブルの上に置いたところで表情が固まった。

「？　どうかした？」

「う、ううん。いただきます……」

どこかぎこちなく返すシャルルを不思議に思っていたら、その理由はすぐにわかった。

「あっ……」

ぽろっ。

「あっ、あっ……」

ぽろっぽろっ。

おかずをまた落としてシャルルは情けない声をあげた。

魚の身をほぐす。そこまではいいのだが、どうもうまくつまめないらしい。そういえば、シャルルが箸を使って食事しているのは見たことがない気がする。

「もしかして、箸、苦手だった？」

「う、うん。練習してはいるんだけどね。あっ……」

また魚の身が落ちる。皿の上だからまた取ればいいのだが、シャルルにはそれが難しいみたいだ。

「ごめん。スプーンでももらってくるよ」

「ええっ？　い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

「難しいなら無理しないでいいよ。せっかくのご飯も冷めちゃうし」

「で、でも……」

「遠慮しないでいいって。もうちょっと他人に甘えてみないと、いつかぶっ倒れるよ」

「うう……」

「うーん。じゃあ、最初は僕に頼ることから始めてみない？　それならいいだろ？　ドンと来なさい」

「桐斗……」

しばらく迷っていたようだが、シャルルは観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの……」

「ああ。フォークも一緒に持ってこようか？」

「え、えっと、ね。その……桐斗が食べさせて」

モジモジとして言いにくそうにしているなぁ――と思ったら、予想外の言葉が出てきて惚けてしまう。そこにシャルルがアゴを引いた上目遣いで言葉を重ねてきた。

「あ、甘えてもいいって言ったから……」

「え、あ。えっと……」

「……やっぱり、ダメ？」

「い、いや全然！　や、やります。やらせていただきます」

ヤバい。混乱して変に腰が低くなってしまった。

だが、起爆剤を渡したのは僕自身なんだし、ここは責任を取ってやり遂げなければ……。

（いや、でもさ、あの上目遣いは反則でしょうよ……）

捨てられた小型犬が雨の降りしきる中、ダンボール箱から送ってくるかのような眼差しをしているのだ。動物好きとしては、正直ちょっとグッと来た。

シャルルから箸を受け取り、さっき落としていた分と合わせて鰆の身をつまんだ。

「で、では、えっと……あーん」

「あ、あーん」

今日は一体何の試練の日なんだろう。こんな恥ずかしいことが一気にやってくるとは、今日の僕はとことん厄日らしい。

もぐもぐと鰆を咀嚼シャルルの頬は心なしかわずかに赤い。

「ど、どうかな？」

「う、うん。おいしいね」

「そ、そうか」

「じゃ、じゃあ、その、次はご飯がいいな……」

「りょ、了解」

そしてまた箸で女子一口分ほどの量をつまみ、受け皿の手を添えてシャルルの口へと運ぶ。

「あ、あーん」

「ん……」

ぱくっと料理を食べるシャルルを見る度に妙にドキドキしてしまう。
うう、めちゃくちゃ恥ずかしい……。

「つ、次は和え物がいいな」

「よ、よしきた」

こうして結局最後まで僕が食べさせ、食事が終わった頃に一夏も部屋に帰ってきた。肉体的にも精神的にも疲労がたっぷりと溜まっていた僕は、すぐに布団にダイブして眠りに入る。
どうか、明日は少しはまともな日になりますように……。

◇

暗い。暗い闇の中にそれはいた。

「……」

いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれたときにはもう闇の暗さを知っていた。光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っていた。

（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由）

それは一条の光のようだった。
出会ったときに一目でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。
そして願った。
ああ、こうなりたい――と。
これに、私はなりたいと。
空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。
ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない。

（織斑一夏――。教官に汚点を残させた張本人……）

あの男の存在を認めはしない。そして、それを邪魔する男も。

（篭手川桐斗――。何者であろうと、邪魔する者には容赦はしない……）

ラウラにとっては、道を阻む石ころとなんら変わりない。ならば、踏み潰して退かすのみ。そして、あの男を――

（――排除する。どんな手段をつかってでも……）

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かにまぶたを閉じる。闇と一体になりながら少女は夢のない眠りへと沈んでいった。

「ブルー・デイズ」（前書き）

だいぶ涼しくなり、半袖ではちょっぴり厳しい時期になりました
この頃はコンビニのおでんが妙に恋しくなってきます。どうでもいいですが、自分の好きなおでんの具は餅巾着です（↑子どもか）

どうでもいい情報はさておき、今回はあのイベントの前のおはなしになります

それでは本編を、どうぞ！！

「ブルー・デイズ」

◇

「ふあああ……。眠い……」

月曜の朝、教室に向かっていた桐斗は大きなあくびとともにそんなことをぼやきだした。

「朝っぱらからなに言ってんだよ。お前、昨日はちゃんと寝てただろ」

「僕にもいろいろあるんだよ」

「あ、あはは……」

一緒に歩く俺の言葉にそう返す桐斗を見て、シャルルはどこか申し訳なさそうに苦笑していた。

そういえば、なんだか桐斗は昨日からやけにシャルルにかまっていた気がする。

俺が着替えようとするとすぐにシャルルをシャワー室に入らせたり、シャルルの身支度や風呂が終わるまでずっとドアの前で待っていたり、その間は俺を監視するように見ていたりと、一昨日までは見られなかった行動があったのだ。シャルルが俺たちと一緒に着替えたりしがらないのはわかっているが、なんだかおかしく感じていた。

もしかして、俺の知らないところでふたりの間に何かあったりしたのか？でもケンカしたようにもみえないしなあ。
内心で首をひねっていると、教室から廊下にまで漏れだしてくる騒がしい声が聞こえてきた。

「そ、それは本当ですの！？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

「なんだ？」

「さあ？」

「なんだろ？」

とりあえず俺たち三人はクラスに入ると、女子たちがドーム状に集ってなにやら話しているのを見つける。そこには、鈴とセシリアも混じっていた。

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなのよ？　月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君や篠手川君と交際でき――」

「俺たちがどうしたって？」

「「「きゃああっ！？」」」

な、なんだなんだ。普通に声をかけたつもりだったんだが、返ってきたのは取り乱した悲鳴だった。

「で、何の話だったんだ？　俺と桐斗の話が出ていたみたいだけど」

「う、うん？　そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアはあははうふふと言いながら話を逸らそうとする。なんだよ、聞いたらまずいことなのか？

「じゃ、じじゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！　わたくしも自分の席につきませんと」

どこかしらよそよそしい様子でその場を離れていくのふたりを筆頭に、他の女子たちも同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「ふあああ。……眠いなあ」

桐斗のやつ、今日は授業中に居眠りでもしそうだな。

◇

（な、なぜこのようなことに……）

教室の窓側列で箒は表面上平静を装いつつも、心の中では頭を抱えていた。

近頃なにか月末の学年別トーナメントに関する噂が流れていることは知っていた。

しかし、問題はその内容である。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏、篭手川桐斗と交際できる』。

（そ、それは私たちだけの話だろうっ！）

一夏や桐斗が言いふらしたとは考えられないので、どこからか情報が漏れたのだろう。今にして考えると、あの時はあまりの混乱で声がやや大きかったかもしれない。なにせ『二人とも』と言ってしまったぐらいだ。

「……」

それを今ではもうほとんどの女子が知ることとなっているらしく、さっきも教室にやってきた上級生が『学年が違う優勝者はどうするのか』『授賞式での発表は可能か』『ふたりと同時に交際することは可能か』などとクラスの情報通に訊きに来ていた。

（む？　ふたり、同時に……？）

気になるワードが頭をよぎり、次にはふわふわとした夢想が浮かんできた。
箒だけに優しく微笑みかけてくる一夏に桐斗。そのふたり腕を両腕に組む彼女の顔は、いかにも幸せそうな乙女といった表情だ。
子どもの頃を再現するようだがそれとは違う関係に進んだ、懐かしくも新鮮な光景。
これはちょっと――いや、かなりいいかもしれない。
しかし、直後にはっと我に返って、頭をぶんぶん左右に振る。名残惜しい夢想は煙のように散らばってなんとか消えてくれた。

（い、いや。それは一度置いておくとして……と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。今回はあのときのようには――）

ふと、意識が思い出したくない記憶をかすめて、箒はまた頭を振った。さっきとは違い、頭の中はひどく冷めている。

（あのときとは違う。大丈夫。大丈夫……なはずだ）

箒は小学校四年の時にも同じ約束を一夏と桐斗にしたことがある（その時もえらく混乱していた）。
そのときは剣道の全国大会だった。実家が剣術道場でもあったキャリアの差だけではなく、実力的にもずば抜けていた箒の優勝は間違いなかった。
それが、大会の当日に引っ越し、参加不能による不戦敗となったのは、実の姉・束のせいである。
束が発表したＩＳはその圧倒的な性能から発表段階ですでに兵器への転用が危ぶまれ、本人を含む親族の保護という名目で政府主導の転居を余儀なくされた。
その後も重要人物保護プログラムによって西へ東へ引っ越しをさせられ、更に一度一夏や桐斗から来た手紙にも『居場所が特定の第三

者にわかるのは困る』と言われ、政府からの圧力で返事をすることができなかった。
実の妹ということで箒は執拗なまでの監視と聴取を幾度となくされ、心身ともに参っていた。
そんな中、剣道だけは続けていたのも、それが唯一二人の幼なじみとの繋がりに思えたからだった。見事に技を決められて悔しがる一夏と、それを眺めて見よう見まねで竹刀を振る桐斗。竹刀を握っていればその姿が脳裏で蘇る気がした。
けれど全国大会で優勝という結果はあまり喜ばしいものではなかった。
理由は単純にして明快。それが『ただの憂さ晴らし』でしかなかったからだ。
――誰かを叩きのめしたい。
そう、思っていたからだ。
自分がやっていたのは試合ではなく、ただの暴力だった。強いとは言えない。強さとは、そういうものを指すものではない。それは何より自分が知っている。知っていると――思っていた。

「……」

三度目、頭を振る。さっきのようにこの粘着質の記憶もどこかへ行ってしまえばと願うが、うまくいかなかった。

（今度こそ、私は……強さを見誤らずに勝つことができるだろうか……）

いや、勝たなくてはならない。何より己自身に。
いつしか箒は一夏と桐斗のことよりも、己のなんたるべきかで意識を埋め尽くしていた。

◇

「うぅ……何でこんな時間に書類を書かなきゃいけないんだよ……」

休み時間に入ってすぐ、僕は山田先生に呼ばれて職員室に来ていた。昨日からの疲労をまだ引きずっていたので休み時間中は眠っておきたいのだが、紫燕の正式な登録に関する大事な書類らしいので後回しにもできなかった。なにより、本当なら昨日片づけることができた書類に手を着けられなかった理由は、ラウラとのことで説教を受けていたからである。そうなるとちょっと断りづらかったので、手っ取り早く終わらせることにしたのだ。

しかしこの書類、名前を書くだけの簡単なものばかりだったが少し量が多かった。

次の授業はＩＳの格闘技能に関する基礎知識と応用だ。授業中に寝たりしたら置いて行かれるのが目に見えているので、次の時間は気力で耐えるしかないか。

「山田先生、終わりました」

最後の一枚にできるだけ丁寧な字で名前を書き終えると、僕の後ろで授業の準備をしていた山田先生に声をかける。

山田先生はいつもと同じくゆるゆるの笑顔を向けて書類に目を通し

ていくと、小さく頷いて書類を抱えた。

「はい、確かに。お疲れさまです、篭手川くん。事務的な意味でのことでですけれど、これで紫燕の正式な登録者となりましたよ」

先生の言う事務的な意味というのがよくわからないが、まあこれまで通りでも特に問題ないだろう。

「あぁっ！　すみません、こんな時間までやらせてしまって！　もう次の授業までちょっとしかないですね」

時計を見た山田先生が申し訳なさそうに頭をペコペコ下げる。

確かに休み時間は潰れたが、必死そうな姿になんだかいたたまれなくなってきた。

「いや、大丈夫ですよ。走れば間に合いますから。それに、特にやることもありませんでしたし」

実のところ、僕がフォローしない間にシャルルの正体が誰かにバレないかという心配もあった。しかし考えてみればシャルルくらい頭のいい子だったらうまく回避しているだろう。

一番の不安要素であるボディタッチの多い一夏も、授業終了の直後にトイレへと直行した。学園内で男子が使えるトイレは三カ所しかなく、一番近い所でも中距離走レベルの距離がある。いまごろは折り返しにかかっているだろう。

とりあえず、今は早く教室に戻った方がいいな。

山田先生にあいさつをして職員室を出た直後、廊下の向かいから千冬さんがやってきた。

「なんだ篭手川、呼び出しでもくらったのか？　さては女子更衣室

に侵入していたのがついに見つかったか」

「なぁっ！？　そんなことするわけないでしょ千冬さ――」

ばしーん！

「織斑先生と呼べ。それと、いちいちこんな冗談を真に受けるな」

「は、はい……」

なんて理不尽な。だがこの人に頭など上がるはずがない。上がった瞬間にモグラたたきの要領で叩かれるから、たまったものでないのだ。

しかし一部に対して厳格な千冬さんが冗談を言うとは、少なからず機嫌が良い証拠だ。何か良いことでもあったのだろうか？

「さっさと教室に戻れ。このままだと、貴様は学年別トーナメントで予選敗退するぞ」

「わ、わかってますよ。はあ……一夏みたいに僕も頑張らないとなあ」

何気なくそうこぼす。

すると僕を見ていた千冬さんの呆れたような目が、なんだか哀れなものを眺めるようなものになる。さらには小さなため息まで吐いた。

「……まったく、貴様らは……」

「な、なんですか？」

「……いや、なんでもない。走るならバレないようにしろ。授業に遅れるぞ」

「は、はあ……」

いつもなら『廊下を走るな』と言ってくるのだが、どうやら見逃してくれるようだ。

でも、職員室に入っていく千冬さんの背中は、どこかうっすらと影をおびていた気がしていい感じはしなかった。

「レッド・スイッチ」（前書き）

申し訳ありません、遅くなりました！
念願のＴＯＸにハマってて、三日ほど目の下にクマをつくるような生活を送っておりました……
こんなんで大丈夫か……？

今回はキリの良いところまで持っていこうとしたため、長くなっております。たのしんでいただけたら、光栄です

それでは本編を、どうぞ！！

「レッド・スイッチ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「「あ」」

ふたりそろって間の抜けた声を出してしまう。時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

ふたりの間に見えない火花が散る。どうやらどちらも狙っているのは優勝のようらしい。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりさせましょうではありませんか」

ふたりともメインウェポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では――」

――と、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する。

「「！？」」

緊急回避のあと、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体がたたずんでいた。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情には欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

とん、と連結した《双天牙月》を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに、鈴とセシリアの両方が口元をひきつらせる。

「何？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそ

ういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？　犬だってまだワンと言いますのに」

ラウラのすべてを見下すかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いたふたりは、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見いだそうとする。

が、それはおおよそ無駄な労力であった。

「はっ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ――！

何かが切れる音がして、鈴とセシリアは装備の最終安全装置を外す。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。――セシリア、どっちがさきやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが――」

「はっ！　ふたりがかりで来たらどうだ？　一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬とそれに縋る屑を取ろうと躍起になるようなメスに、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発だったが、堪忍袋の緒が切れたふたりにはもはやどうだっていい。

「――今なんて言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にいない方々の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

得物を握りしめる手にきつく力を込めるふたり。それを冷ややかな視線で流すと、ラウラはわずかに両手を広げて自分側に向けて振る。

「とっとと来い」

「「上等！」」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……はっ！？」

周囲に複数の気配を感じて、僕は目を覚ました。

すると数人の女子がキャーと黄色い声をあげながらわらわらと散っていく姿が視界にうつる。

その後ろ姿から見える手に握られたケータイは、明らかに写真の撮影モードになっていた。
勝手に撮らないで。撮影料請求しますよ。
どうやら一昨日からの疲れのツケがきて爆睡していたようだ。
そうだ、今日も学年別トーナメントに向けての特訓があるんだった。
約束をしていた一夏とシャルルの姿をさがすが、教室にはいなかった。
そこで今更のように、机に貼り付けられていた紙切れに気づく。

『先に第三アリーナに行ってるね。少し休んでから来た方がいいよ』

紙切れにそう書かれた丸い筆跡は、最近見たシャルルのものだった。
どうやらシャルルが僕が少しでも休めるように気を遣ってくれたようだ。
しかし先にアリーナへ行ったということは、シャルルは僕なしで一夏とＩＳスーツに着替えるということになる。
ヤバいな……。一夏はシャルルとの壁をなくそうとして、日本男児の『裸の付き合い』的なものをのぞんでいるみたいだった。なにかあったら、シャルルが実は女子だということがバレてしまう。
ならばこうしてはいられない。早くふたりに追いつかなければ大変なことになる。最悪、一夏が性犯罪者として連行されてもおかしくないのだ。
僕は急いで荷物をまとめると、教室を飛び出した――――

ドスンッ！

「ごふぁっ！？」

――――直後に、右わき腹にのしかかってきた痛烈な衝撃。そして重たい何かが廊下に落ちる音。

予想だにしなかった出来事に僕の体は『く』の字に折れ曲がって壁に激突し、無惨に崩れた。
一体全体何事だ！？　どこからの襲撃だよ！？
なんだかこの学園に来てからこんな目に遭ってばかりのような気がするのは、きっと気のせいじゃない。

「はわわ～。こてやんー、大丈夫ー？」

こ、この声は……。
痛みをこらえながら視線を上げると、そこには無駄に余った袖をぶらぶらと揺らすぽや～っとした顔の女子が僕を見下ろしていた。正直、心配されているのかされていないのかよくわからない顔だ。

「の、のほほんさん……」

のほほんさん（一夏命名）は生死を確認するかのように僕の頬をつついてくる。
いや、「ぷにぷにだー」じゃなくてさ。

「い、一体なにが……？」

「ごめんねー。機材運んでたら転んじゃったのだよー」

機材？　のほほんさんが指差す先には、頑丈そうな作りのダンボール箱がある。おまけに若干膨らんでいて結構な重さがありそうだ。
――なんとなくわかったぞ。
のほほんさんはこのダンボール箱に入った機材とやらを運んでいたら見事にずっこけて、そのダンボール箱は僕のわき腹にぶつかったというわけだな。ふらふら歩いてきたのほほんさんの姿が目に浮かぶよ。

きっと僕のわき腹に食い込んだのはこいつの角だ。だって、めちゃくちゃ痛いから。

「気にしなくていいよ……。というか、そんな重いものどこに運ぶの……？」

僕は我慢して起きあがりかがむようにしてダンボール箱を指差した。このＩＳ学園で機材というからにはＩＳに関係するなにかしらの道具なのだろうか。

「ＩＳの整備用の機材なのだよー。これから第三アリーナまで行って使うのだよー」

「ＩＳの整備？　第三アリーナでやるのか？」

「うんとねー、かんちゃんが一人でやってるからねー、私も一緒に手伝ってあげることにしたんだ～」

……よくわからん。ていうか、のほほんさんって整備できるのか？　イメージ的に何か失敗して爆発でも起こしそうなんだけど。まあとにかく、のほほんさんの目的地も僕と同じ第三アリーナらしい。

「……じゃあ、僕も第三アリーナに行くから一緒に行こうか。これも僕が運ぶよ」

そう言って、ダンボール箱を持ち上げる。予想通り結構ずっしりとくる重さで、痛みがわずかに残るわき腹がうずいた。しかし、のほほんさんのうっかりで第二、第三のを犠牲者を生み出すわけにはいかない。ここはこらえてさっさと行こう。

「おおー、ありがとー助かるよー。こてやん意外と力持ちだね～。ヒューヒュー」

のほほんさん、その表現は多分間違ってる。

一緒に行くと誘ってから妙にテンションの上がったのほほんさんを連れて、第三アリーナの地下格納庫にたどり着いた。
ていうか、ここまで来るのにいい加減機材が重たいです。さっきから頑張りっぱなしの手が震えてるのが自分でもわかるくらいだし。
照明だけが頼りの格納庫内には訓練機である『打鉄』や『ラファール・リヴァイヴ？』が並んでいて、いつ来ても周囲のあらゆる機器に目移りしてしまう。
その一角に、背中を丸めた小さな人影がぽつんとある。

「おーい、かんちゃ～ん」

それを見つけたのほほんさんは手を振ってのろのろと人影に走り寄る。どうやら、あの人が『かんちゃん』さんらしい。
これでやっとこの重たい箱ともおさらばできる。
だが帰りも運ぶとなると大変だろうから次からは台車を使うようにのほほんさんに言い聞かせないとな。今度は怪我人がでるかもしれないし。
シャルルのことも心配だし、とりあえずほほんさんと『かんちゃん』さんの所に機材を持っていくとしよう。
しかし、彼女たちに近づくたびに僕はあることに気がついた。

「――あれ？」

のほほんさんと話す女子、『かんちゃん』さんの後ろにある鉄の塊。取り付けられた部品はところどころバランスが悪く、見た目はまったくぱっとしない。だがこの学園に来て勉強をして、僕に少なからず知識が身に付いていたおかげで、ここが格納庫だというヒントで、それがなんなのかわかる。

これは、未完成のＩＳだ。

（すごい……）

ここに来て自分が毎日のように動かしているＩＳが、作りかけの状態であるのだ。これには、少なからず感動してしまった。

しかし、引っかかる点もある。何故、このＩＳは未完成なのだろうか。

訓練機があるなかで、異色を放つ未完成のＩＳ。もしかして、誰かの専用機なのか？　でも、それだとますます理由がわからないぞ。

「……」

「あらら～……」

「……ん？」

声を発したのは、困ったようなのほほんさんと妙な視線を感じて目をやる僕。

そこには、さっきまでのほほんさんと話していた女子。この人が、例の『かんちゃん』さんなのだろう。セミロングの髪に、眼鏡をかけている。制服の襟に着けてあるネクタイの色から僕たちと同じ一

年であることがわかるが、初めて見る子だった。
その子が、僕を見ているのだ――のほほんさんの背後から、睨むようにして。というか完全に睨まれてます。

「……あ、あの……？」

「……」

僕が声をかけても『かんちゃん』さんは微動だにしない。それどころか、僕につきつける視線がさらに鋭くなったように感じた。レンズ越しで、まるで親の仇を見るような憎々しげな目は、明らかに僕を責めている。
訳が分からず、僕は押し黙った状態になってしまった。

「か、かんちゃ～ん……」

「……」

困り顔のほほんさんに呼ばれると、ようやく彼女は僕から視線を逸らした。それは嫌いな奴を無視するような素っ気なさで、僕の頭にはますます疑問符が浮かぶ。
気晴らしか、『かんちゃん』さんは格納庫にある備え付けのモニターの電源を入れた。
大抵の場合、モニターの映像はそのアリーナのステージを映している。今から映し出されるのは現在のステージの状況だ。
それを見て、僕はさらに絶句することとなった。
モニターに映し出されたのは、この第三アリーナで模擬戦を行っている三人の女子。そのうち二人の影が、爆発の煙を切り裂くように飛び出してくる。
「鈴、セシリア……？」

ふたりは爆発の中心部へと視線を向ける。そこにいたのは漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿だった。
よく見ると鈴とセシリアのＩＳはかなりのダメージを受けている。機体はところどころが損傷し、ＩＳアーマーの一部は完全に失われている。ラウラも無傷とまではいかないが、それでもふたりと比較してかなり軽微な損傷に見えた。
――ヤバい。このままだと、絶対にヤバい。
直感でそう思った僕は考える暇もなく、ダンボール箱を放って格納庫を駆け出す。
だってアイツなら、絶対こうするはずだから。

◇◇◇

「くらえっ！！」

ジャカッ！　と鈴のＩＳ『甲龍』の両肩が開き、搭載されている衝撃砲が最大出力の攻撃を放たれた。訓練機のアーマーならおそらく一撃で沈められるであろうその砲撃を、しかしラウラは回避をしようともしない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

衝撃砲の不可視の弾丸がラウラを目指す――が、その攻撃はいくら待っても届くことはなかった。

何かバリアーのようなものを展開しているのだろうか。ラウラは右腕を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化し、すぐさま攻撃へと転じる。

肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴のＩＳへと飛翔する。それは本体とワイヤーで接続されているためか、複雑な軌道を描いて迎撃射撃をくぐり抜け、鈴の右足を捕らえる。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のための射撃を行うセシリア。同時にビットを射出、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの狙撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、ラウラはまたさっきと同様に腕を突き出す。今度は左右同時、交差させた腕の先では目に見えない何かに掴まえられたかのようにビットがその動きを停止させていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙いすました狙撃は、けれどラウラの大型カノンによる砲撃で相殺される。すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリアを、ラウラは先刻捕まえた鈴をぶつけて阻害する。

「きゃああっ！」

ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩したふたりへとラウラが突撃を仕掛ける。その速度は弾丸並みで、間合いをわずか一秒で詰めた。

「『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』――！」

見間違えるはずがない。それは俺と桐斗の十八番、格闘特化の技能だ。

けれど格闘戦なら鈴にも分がある。それこそあの《双天牙月》による回転連撃を行うものと思っていた俺は、その連結を解いた鈴に驚いてしまう。

しかし、その理由はすぐにわかった。ラウラの両手首に装着した袖のようなパーツから、桐斗と対峙した時に見せた超高熱のプラズマ刃が展開、左右同時に鈴へと襲いかかる。

「このっ……！」

前進し続けるラウラに後退で距離を置きながら鈴は刃を幾度となく凌ぐ。だが再びラウラのワイヤーブレードが襲いかかってきた。しかも今度は両肩だけでなく腰部左右に取り付けられたものも合わせ

て計六つ、それが三次元躍動で接近してくると同時にプラズマ手刀の猛攻なのだ。いくら格闘戦に慣れている鈴でもそれら全てを捌くには難易度が高すぎる。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を射出する寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した。

「もらった」

「！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴に、ラウラがプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「やらせるか！！」

突然飛び出してきた影が、ラウラに突進して必殺の一撃を逸らした。紫色のＩＳに、聞き慣れた声。それに当てはまる人物は一人だけだった。

「桐斗！？」

「だああっ！」

桐斗のＩＳ、『紫燕』の折りたたみ式大型スラスターが展開されて『雷光演武』の金色のエネルギー波が最大出力で噴き出した。
鞘に納めた《天蕾》を盾代わりにして、鈴からラウラを引き剥がした桐斗は高速でラウラごと壁へと突っ込んでいく。

「屑が、邪魔だ」

だが叩きつけられる寸前に、ラウラはワイヤーブレードで紫燕のスラスター翼を絡めとり強引に軌道を狂わせる。ふたりの機体は壁に触れるギリギリの位置で不自然に急上昇した。
ラウラから制御を取り戻そうとして紫燕はぐちゃぐちゃの軌道を描きながら飛び回る。そうしているうちに、紫燕のスラスター翼から出ていたエネルギー波が途切れてしまった。

「くっ……！　だったらっ……！」

《天蕾》を抜こうとする桐斗を見たラウラはワイヤーブレードをほどいて元に戻すと、先ほど鈴やセシリアにやったのと同じように右腕を突き出した。
すると、瞬発力が売りである桐斗の動きもピタリと止まってしまう。
《天蕾》も半分だけが抜きかけの状態だった。
まただ。あの動作に対象の動きを止めるからくりがあるはずなのだが、それがまったくわからない。
桐斗もぴくりとも動かない自分の手を見て息をのんだ。

「えっ！？　な、なんで……！」

「この私になんの策もなく突っ込んでくるとは、予想以上の能なしだな。貴様のような屑には似合いの格好だが――そろそろ消えろ」

動揺する桐斗に、ラウラは容赦なく大型カノンの照準を合わせた。

「させませんわ！」

間一髪のところで桐斗とラウラの間に割り入ったセシリアは、《スターライトｍｋ？》をぶつけて実弾砲撃を逸らす。

同時に、桐斗がはっとしたように動きを取り戻した。

そして、瞬時にセシリアがウェスト・アーマーに装着された弾頭型（ミサイル）ビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガァァァァンッ！

半ば自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃。その爆発は桐斗とセシリアも巻き込み、ふたりは床へと叩きつけられる。

すぐさま、鈴がふたりの元へ駆けつけて安否を確認した。

「桐斗っ！　大丈夫！？」

「このぐらいなんともないよ。それにしても、セシリアも無茶するなぁ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

セシリアの言葉は途中で止まる。

「……」

煙が晴れ、そこに佇んでいるのはラウラだった。至近距離での大爆発ですら、ダメージはほとんど無かったかのように宙に浮いている。

「終わりか？　ならば――私の番だ」

言うと同時に瞬時加速で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を当てる。

「鈴っ！　セシリアっ！」

叫ぶ桐斗にも、ワイヤーブレードが襲いかかってきた。

紫燕のエネルギーも底をついたのか、急いで抜刀していた《天蕾》に輝きは無く桐斗はワイヤーで拘束され、さらに喉を締め付けられた。

「貴様はそこで見ているがいい。そして己の無力を嘆いていろ」

絶対零度の歪んだ微笑が、桐斗から鈴とセシリアに向けられた。

残った四つのワイヤーブレードが飛ばされたふたりの体を捕まえてラウラの元へとたぐり寄せられる。そこからはただただ一方的な暴力が始まった。

「あああああっ！」

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳がたたき込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告域（レッドゾーン）を超え、操縦者生命危険域（デッドゾーン）へと到達する。

「や、め……よ。やめ……ろ……！」

ぎりぎりと締められていく喉から絞り出した桐斗の声ははっきり聞こえているはずだ。しかしラウラは攻撃の手を止めないただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ＩＳアーマーを破壊してそれを桐斗に見せつけていく。

普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのを見た瞬間、俺の中で何かのゲージが振り切れた。

「おおおおっ！」

白式を展開、同時に《雪片弐型》を構築、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動させる。本体の倍以上になった実体剣から放出するエネルギー剣を、俺はアリーナを取り囲んでいるバリアーへと叩きつける。

ありとあらゆるエネルギーを消滅させる『零落白夜』によって切り裂かれたバリアーの、その間を突破する。

そして射程内に入ると同時に瞬時加速。本来なら『零落白夜』最大出力との同時発動は自殺行為だ。ただでさえ燃費の悪い白式のエネルギーをより圧迫することとなり、シールドエネルギーの消耗が倍化して桐斗の二の舞になってしまう。けれど、今の俺にはそれを考えている余裕は無かった。

「そいつらを離せ！！！」

鈴とセシリアを掴み桐斗を拘束するラウラへと、俺は刀を振り下ろす。

「ふん……。感情的で直線的、やはり絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届くその寸前で、ぴたっと俺の体が止まる。眼帯をしていないラウラの右目が上から飛び込んできた俺を正確に捉えていた。

「な、なんだ！？　くそっ、体がっ……！」

目に見えない腕に掴まれているかのように、体が言うことを聞かない。腕も振り上げたままおろせず、零落白夜のエネルギー刃は次第に小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、ぐるんと俺へと砲口を向ける。

――くそっ！

「一夏っ、離れて！」

シャルルからの個人間秘匿通信（プライベート・チャンネル）が聞こえて、同時にアサルトライフル二丁での弾雨が降り注ぐ。

「ちっ……。雑魚が……」

それまで俺を拘束していた見えない力が消え、体に自由が戻ってくる。

それと同時にラウラが鈴とセシリア、桐斗を手離した。

「一夏、セシリアを頼む！　僕は鈴を！」

「っ！」

桐斗の間で行われた個人間秘匿通信での会話は一瞬で、俺はすぐさまセシリアを、桐斗は鈴を抱きかかえた。

（頼む、白夜！　あと一回だけ瞬時加速を使わせてくれ！）

無茶な最大出力同時発動の弊害でエネルギーはほとんど残っていなかったが、俺の願いに応えるかのように背部大型スラスターにエネルギーが集中する。――よし！
俺と桐斗はなんとか発動させた瞬時加速でラウラから一瞬のうちに離脱した。
すぐさまシャルルが俺たちのカバーに入り、ラウラへと射撃を行う。速射性の高い火薬式のアサルトライフル、さらにシャルルの高速武装切り替えが弾切れを起こした銃とすぐさま入れ替えをして、ラウラに反撃を許さない。

「う……。桐斗……」

「一夏さん……。無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。桐斗、お前は大丈夫か！？」

「僕よりこっちのふたりだ！　早く保健室に運ばないと……！」

「私は、一度狙った獲物をみすみす逃がしたりなどせんぞ」

ラウラの冷たい声が聞こえて、俺はそちらに視線をやった。
弾丸を避け、あるいは防ぎ、さらに例の見えない力で止めていたラウラが、反撃に転じようと体を低くかがめる。おそらく瞬時加速を行うのだろう。俺たちは人を抱えたままで戦えない。しかし、ラウラは確実に追撃を狙っていることも理解していた。

「行くぞ……！」

「くっ！」

「このっ……！」
ラウラがまさに飛び出そうとしたその瞬間、俺たちの間に影が割り入ってきた。
ガギンッ！
金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、ラウラはその影に加速を中断させられる。
「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」
「千冬姉！？」
その影は、予想外の人物だった。しかもその姿は普段と同じスーツ姿で、ＩＳどころかＩＳスーツさえ装着していない。けれどその手に持っているのはＩＳ用近接ブレードであり、一七〇センチはある長大なそれをＩＳの補佐なしで軽々と扱っている。その上での横やりなのだから、つくづく常人離れしている。
「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
「教官がそう仰るなら」
素直に頷いて、ラウラはＩＳの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され、弾けて消えた。
「織斑、篭手川、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

あまりのことに惚けていたせいもあって、ついつい素で答えてしまう。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「……了解です」

「僕もそれで構いません」

返事をし直す俺に桐斗とシャルルも追従する。その言葉を聞いて、千冬姉は改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！　と千冬姉が強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

「扉の向こうにあったのは男の夢でした」（前書き）

最近ショックだったこと
近所の本屋さんから『ＩＳ』がなくなっていたことです。しかも自分が読んでいない中間の巻だけ……
もう第一部もいいところきてるのに……。ノリで簪さんも出しちゃったし……
結果・今度遠出して買うことにしました

まあ、そんな話は置いておきましょう

それでは本編を、どうぞ！！

「扉の向こうにあったのは男の夢でした」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……」

「……」

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。僕と一夏の前で、ベッドの上で打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

嘘をおっしゃい。さっきから訳もわからず拗ねたようにそう言っていたふたりに、一夏も嘆息した。

「お前らなあ……。はぁ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな――いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること事態無意味――つううっ！」

「ああ、もう。ふたりとも無理に動くなよ。痛みが引くまではおとなしくしてろって言われたばかりじゃんか。バカみたいだぞ」

「バカってなによバカって！　バカ！」

「あなた方ふたりこそ大バカですわ！」

ひどい反撃を受けた。なぜか巻き添えを食らった一夏も「なんで俺まで……」とか言っている。しかし、まあ、怒るくらいの元気はあるみたいなので若干ホッとした。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」「へ？」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。部屋に入るときに何か言っていたみたいだが、よく聞き取れなかった。

けれどそれはどうやら僕と一夏だけだったらしく、鈴とセシリアは何かをしっかりと耳にしたようで、かぁぁっと顔を真っ赤にしてみれば起こり始めた。

「なななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！　こここここれだから欧州（ヨーロッパ）人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

ふたりともまくしたてながらさらに顔が赤くなっている。……なんなんだ？　シャルルはどんな爆弾を投下したんだ？　反応からするとセシリアは一夏関連のことだろうが、鈴は一体どうしたのだろう？

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましょうっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくと飲み干す。赤くなった顔の温度を下げるためかやけに必死に見えた。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

ドドドドドドッ……！

「え？　な、何この音……？」

地鳴りに聞こえるそれは、どうやら廊下から響いてきている。しかもだんだんと近づいてきているように思うのだが、たぶん気のせいではないだろ――う！？

ドカーン！　と保健室のドアが吹き飛ぶ。……いや、比喩表現とかじゃなくて本当に吹き飛んだんだ。初めて見る衝撃映像を生で体感した僕たちは、全員その光景に面食らっていた。

「織斑君！」

「篭手川君！」

「デュノア君！」

保健室に文字通り雪崩れ込んできたのは数十名の女子生徒だった。ベッドが五つもある広い保健室なのに、室内はあっという間に人で埋め尽くされた。しかも僕と一夏、そしてシャルルを見つけるなり一斉に取り囲み、まるでバーゲンセールの取り合いがごとく手を伸ばしてきたのである。……ああ、スーパーでの買い物戦争で無数のおばちゃんたちと戦ったあの頃を思い出して軽く背筋が冷えたぜ。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたのさ、みんな。そんな慌てて……」

「「「これ！」」」

状況が飲み込めない僕たちに、バン！　と女子一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから！　とにかくっ！」

そしてまた一斉に伸びてくる手。ひいっ！　もはやホラーだよこれ。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組みなさい、篭手川君！」

「私と組んで、デュノア君！」

おい、ちょっと。なんで僕だけ命令形なんだよ。

ともかく、どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があったのかはわからないが、今こうしてやってきているのは全員一年生の女子だ（リボンの色でわかる）。学園内で三人しかいない男子とにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのが理解できた。しかし――

「え、えっと……」

そう、シャルルは実は女子なのだから、誰かと組むというのは非常にまずい。今後ペア同士での特訓も行うだろうし、いつどこで正体がバレてしまうとも限らない。そう思ってシャルルを見ると、数秒間だけ困り果てた顔でこっちを見たのがわかった。

僕と目が合うと、助けを求めているのがわかってしまうと思ったのだろう、すぐに目を逸らしてしまった。

相変わらずの遠慮さに僕は内心で苦笑すると、わあわあと騒ぐ女子全員に聞こえるようにはっきりと大きな声で言った。

「あれ？　そういえばシャルルは一夏と組むんじゃなかったか？」

しーん……。いきなりの沈黙の中で僕は必死にシャルルに目配せする。頼む、気づいてくれ！

「……あっ、ああ！　そ、そうそう、僕はもう一夏と組むことになったから！　ね、一夏！」

「お、おう、そうだ！　そういうわけだから、悪いが諦めてくれ！」

よし。ふたりも僕の言葉に乗っかってくれた。女子たちもそれを信じ、仕方なさそうに受け入れてくれたようだ。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

どうやら作戦成功のようだ。頑張って大きな声を出した甲斐があったな。

しかし、ひとりの女子の発言により僕は冷や汗を流す。

「あれっ？　それじゃあ篭手川君はまだフリーってことだよね？」

「……」

……忘れてた。

一夏とシャルルをフォローすることしか考えていなかったので、自分の身を守ることが頭から離れていたようだ。

室内を埋め尽くさんとする数の女子たちからの視線が、まるでトムソンガゼルを狙うチーターのそれに変わったのを感じた直後、気がつけば僕は保健室の窓をガラッ！　勢いよく開けていた。

シュバッ

「ああっ、逃げた！」

「追うわよ！」

「待って篭手川君！　私と組んで！」

「さっきは命令形でごめんなさい！　そっちの方が好みかなと思ったの！」

なんだか変な台詞が聞こえた気がしたが、きっと気のせいだ。うん、そういうことにしよう。

それよりも、シャルルにちゃんと詫びを言っておかないとな。

僕は中庭を走りながらも上体をひねって保健室の窓に声を飛ばす。

「シャルル！　ごめんだけど頑張って！」

「き、桐斗――！」

シャルルが僕に何か言いかけていたが、当の僕は追いかけてくる女子（トムソンガゼル）（チーター）の群れから逃走するだけで続きを聞いてあげる余裕はなかった。

◆◆◆

「はぁ……」

誰もいない剣道場の更衣室で箒はひとりため息をついていた。さっきからもう何度目になるかわからない。おかげで日課としている午後の鍛錬にも、いつもより力が入らなかった。
理由はひとつ。数時間前に起きた第三アリーナでの件のことだ。

（私だけが……何もできなかった……）

鈴とセシリアがラウラと戦った原因に、箒はそれとなく感づいていた。結果的には悲惨なものであったが、それでもあのふたりはラウラに立ち向かった。
そのふたりを助けるために乱入した桐斗。さらに一夏とシャルルも勝てるという保証も無いのにあの場へ飛び込んだ。
一夏も桐斗は友が傷つけられるところを見たくなかったのだろう。
だからこそ、考えるよりも先に体が動いたのだ。
その気持ちは、箒にもよくわかった。
しかし、同時に自分はその間に入って戦えないという事実を真正面から突きつけられた。
訓練機があったならば、勝つことはできなくともなんとかなったかもしれない。だがそれすらもない箒には、桐斗たちがいたぶられるのをただ見ているだけしかできなかった。
『自分は非力だ』という現実が、箒の心に深く、鋭利に突き刺さる。
それに加えて、箒はラウラを心底嫌っていた。一夏を狙い、桐斗を傷つけたこともあるが、それだけではない。

箒はラウラに抱いているのは――近親憎悪だった。
力が全てだと思っている姿は、かつての自分そのものに見えた。
まるで過去の醜悪な姿を見せつけられているかのようで、箒はイヤでイヤでたまらなくなる。

「……っ！」

頭の中でラウラの姿と自分の姿が重なり、ロッカーを乱暴に閉めた。
ガシャン！　という音は八つ当たりした箒を嘲笑うかのようだった。

（……今日はもう、寮に戻って休もう）

これ以上悩んでも余計惨めになるだけだ。
着替えを済ませるため、箒は胴着を脱いで片付けた。

ドドドドドドッ……！

「む……？」

地鳴りのような音が外から聞こえてくる。それはだんだんと近づいてきて、はっきりと聞こえるほどになってきた。
そして――

「ひぃぃっ！」

悲鳴とともに、更衣室のドアを開いて誰かが入ってきた。その人物は急いで開けたドアを閉めて、外を探るように耳をドアにくっつける。
そんなことをする必要もないくらいの声量の会話が、ドアの向こうから聞こえてきた。

『あれ？　どこいったの！？』

『くっ！　さすがに足が速いわね。もしかしたら道を抜けて校舎に向かったのかもしれないわ。行くわよ！』

『『『了解（ラジャー）ッ！』』』

威勢のいい応答が響き、あの地鳴りが次第に小さくなって聞こえなくなった。

それを確認した逃亡者らしき人物は大きなため息をついてドアに背をもたれる。

「……な、なんとかまいたか……。まさか団結してくると――は？」

「……」

その状態でばっちり、目が合う。逃亡者にして世界で二番目にＩＳを動かした男であり、自分のもうひとりの幼なじみ――篭手川桐斗と。

「え……？　ほ、ほほ、箒……？　なんで、その……」

着替え中だったので、箒は服を脱いでいて今は下着しか着けていない。

上下が揃いとなっている淡い水色の布地に包まれている豊満な胸の膨らみと、引き締まった腰回り。一度バスタオル一枚だけの姿を見たことがあったが、女性に対する免疫の少ない桐斗には十二分に刺激が強い。ぼんっと湯気が出そうなくらいに顔を真っ赤にさせた。

しかし、それは桐斗に限った話ではない。気恥ずかしさと怒りによって、見られている箒の顔にも急激に熱が上昇していく。
それからの箒には、すでにさっきまで考えていた自己嫌悪の念などどうでもよくなっていた。

「こっ、この――」

「い、いやっ！　これには訳があって、決して邪な目的があったわけでは……！」

「――軟弱者がああああああああぁぁぁぁ！！」

「ゴメンナサっ――」

箒の投げた鞄（教科書入りで約一キログラム）は桐斗の言い訳と謝罪らしき言葉を、彼の顔面と一緒につぶした。

「顔の傷は男の勲章だが理由は訊かない方がいい」（前書き）

急ぎ足で書いたから少しクオリティが低いです……
しかし、二巻もいよいよ後半戦。頑張ります！

それでは本編を、どうぞ！！

「顔の傷は男の勲章だが理由は訊かない方がいい」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……」

「……ゴメンナサイ」

箒との間に起きたあの事故（事故です。誰が何と言おうと、間違いなく事故です）のあと、僕は剣道場で正座をしていた。その正面に竹刀を装備して仁王立ちしているのは制服姿になった箒。

やっぱり箒って着やせするタイプ――って、わあああああぁぁぁぁバカ！！　想像するな！　ていうかこういうのは箒に惚れられている一夏の役目だろうがあああああぁぁぁぁ！

「桐斗、聞いているのか……？」

はっ！！　しまった、また頭のなかでミニマムサイズの僕が暴れていたようだ。

ドスの利いた声のおかげで箒の胸元にいっていた視線を彼女の顔に戻すことができた。

だが、そのことを僕は少し後悔する。僕の視線に感づいたのか、箒がまるで毘沙門天を思わせるかのような目で僕を睨みつけていたのだ。

しかも、その手に持つ竹刀は肩に担がれていて、いつでも僕の脳天

に向かって振り下ろせるように準備されている。
ヤバい……これは、ヘタをしたら殺される……！！

「きっ、聞いてる！　ちゃんと聞いてたよ！」

「……ふん」

怪訝そうにしていた箒だったが、しばらくしたら鼻をならして竹刀を降ろしてくれた。
どうやらバレてはいないようだ。よ、よかった……。

「……ま、まあ、わざとでないのなら、ここまでで許してやる。しかし、今後は事前に部屋を確認してから入ることだ」

「わ、わかりました」

「……そ、それに、少しは気が紛れたからな……」

ん？　なにか言っているようだが、ぼそぼそと小さな声で喋っているから全然聞こえない。
でも、またヘマをして逆鱗に触れたくないので今は追及しない方がいいか。

「反省したなら、早く寮に戻るぞ。そろそろ夕飯の時間だからな」

あ、本当だ。時刻はもう少しで午後六時になる頃。逃げ回っている間にかなり時間が経っていたようだ。
一夏たちもすでに寮に戻っているだろう。鈴とセシリアの怪我や、シャルルのことも気になるし、帰って確認しないといけないな。
一度寮の部屋に戻ってから、夕飯にしようかな。

「それじゃ、早く帰ろうか。食事の時間も限られてることだし」

「う、うむ。では、このままふたりで食堂に行くか」

「え？」

正座から立ち上がった僕の考えを打ち切る内容を箒が提案してきた。

「な、なんだ。私と一緒に食事するのに何か不満でもあるというのか！？」

さっきまでとは違う、どこか拗ねるような感じで睨んでくる箒。なぜか頬が赤い気がするが、練習のしすぎなんだろうか。

僕としては早くシャルルと合流したいのだが、もしかしたらこれは箒からのお仕置きなのかもしれない。どういうお仕置きなのか検討もつかないが、そうだとしたら僕に拒否権など用意されていない。

（ごめん、シャルル。もう少し頑張って……）

心の中でシャルルに謝罪を送る。帰ったらちゃんと説明しないと。

「ううん。それじゃ、行こうか」

「う、うむ。では行くぞ」

竹刀を仕舞って歩き出す箒の隣に立ち、僕たちは食堂に向かって歩き出した。

あ、そうだ。せっかくだからあのことについてお願いしてみるか。

少し申し訳ない気もするが、箒とならなんとかなりそうだ。

「ねえ箒。ちょっといいか？」

「な、なんだ？」

夕焼け空の下を歩いているからか、顔に赤みがかかっているように見える箒にそう切り出す。

「あの……もし、よかったらでいいんだけどさ。学年別トーナメントのタッグ、僕と組んでもらえないか……？」

「……え？」

三拍子ほどの間をおいて、箒の歩が止まった。

うわっ。いきなりどうしたの？

「……す、す、すすす、すまない。も、もう一度、もう一度言ってくれないか？」

「へ？　いやだから、学年別トーナメントのタッグで僕と組んでくれないかって。あ、もしかしてもう組む人が決まってる？」

僕としてはほとんど話したことのない女子よりも顔を合わせ馴れている箒や鈴と組む方がいい。それに二人一組ということは、ある程度の連携も必要になるはずだ。

しかし箒の反応から都合が悪いのか思ったと僕が訊ねると、頭をぶんぶん横に振った。あと少し速く振っていたら首がぐるんと回ってしまいそうだ。

「い、いや！　そういう訳ではない！　お、お前がどうしてもと言

うなら、組んでやらんこともないぞ！」

なんだか面倒な言い回しをされているが、これはＯＫということなんだろうか。

箒も本当は一夏と組みたがっていただろうが、そのチャンスは知らないところで僕が潰してしまった。せめてもの償いとして、優勝するための力になってあげないと。

「ああ。都合が合うならでいいんだけど、頼んでもいいか？」

「……！　し、仕方ないな！　そこまで言うのならば、私がお前の……ぱ、ぱ、パートナーと、なってやろう」

なぜか一瞬だけすごく嬉しそうに笑いかけた箒だったが、すぐにいつものように顔を引き締めてうんうんと頷いた。だが、まだ頬がつり上がっている。

頬も赤くなっている気がするが、何かあったのだろうか？

「そ、それでは明日からは学年別トーナメントに向けて本格的な特訓を始めるぞ。やるからには優勝を目指す！」

「りょ、了解」

先月の「付き合ってもらう」っていう約束のこともあるからか、箒はやる気まんまんに宣言した。どこか嬉しそうにしているのを隠せないそのやる気に、僕は若干気圧される。

何はともあれ、無事に僕のパートナーも見つかった。できる限りのことをして、箒を優勝に導いてあげないとな。

歩調を弾ませる箒の横顔を見ながら、僕はそんなことを考えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おっ。桐木」

「あ。一夏、シャルル」

「お、おかえり、桐木っ」

箒との夕食後、別れてそれぞれの部屋に戻ると一夏とシャルルのふたりと部屋の前で出くわした。
変わった様子は見られないから、どうやら心配していたようなことは起こらなかったようだ。

しかし、なんだかシャルルの語調には勢いがある。どうしたんだろ？

「ふたりとも、夕飯はもう食べた？　僕はもうすませたけど」
「おう、俺たちももうくってきたぞ。それじゃあ、明日からまた特訓もあるしさっさと着替えるか」

「うっ……」

一夏の言葉に、シャルルの表情がわずかに引きつったのを見た。

ああ、そういうことか。
シャルルは実は女の子なんんだから、一夏と一緒に着替えるわけにはいかないよな。
よし、こういうときは僕の出番だな。

「一夏、さっき千冬さんが探してたけど。何か用事でもあったんじゃないか？」

「千冬姉が？　なんだろうな？　わかった。ちょっと行ってくる」

「ああ。……ゆっくりな」

「え？」

「いや、何でもない。ほら、行ってこいよ」

「お、おう」

少し戸惑いながらも、一夏は寮長室に向かって行った。
しかし、千冬さんはまだ勤務中なので寮長室にはいないはずだ。こういうときに携帯電話を使わない一夏の律儀さは、ある意味尊敬すべきか。

「き、桐斗、今の話って本当なの……？」

「いや、とっさに思いついた。一夏がいたらシャルルが安心して着替えなんてできないだろ？」

「あ、ありがとう……」

照れているのか、頬を赤くしながらお礼を言うシャルル。それがなんだか小動物みたいに見えてしまって、頭を撫でたくなる衝動を抑えた。

「い、いいよそんなこと。手助けすると決めたからにはやれることはやるつもりだし、当たり前のことをやっただけだよ」

「そんなことないよ。それが自然と出来るのは、桐斗が優しいからだよ。誰かのために何かしようとするなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

……うーむ、さすがはブロンドの貴公子。選ぶ言葉の一つ一つにも品があって、なんだか妙に照れてしまう。僕はわずかに熱くなった頬を隠すように手でかいた。

「でも、保健室ではどうして僕と一夏がペアを組むようにしたの？」

「あ、ああ、アレか。一夏はボーデヴィッヒを倒したいみたいだから、シャルルなら心強いなって思って。ＩＳの相性もいいみたいだし。それに、何かあったら助けてあげられるだろ？」

「そ、そうなんだ。……僕は桐斗と組みたかったんだけどなぁ……」

「ん？　何か言った？」

「な、なんでもないよっ。それより、桐斗は誰と組むか決まったの？」

はぐらかすように話を変えたシャルルを不思議に思ったが、なんでもないなら知るべきではないだろう。

「それなら大丈夫。箒が組んでくれることになったから」
安心させるように笑って答える。
しかし、それを聞いたシャルルの雰囲気がどこか冷たく変化した――ような気がした。
「……ふーん、そうなんだ」
「え……あ、ああ。一時はどうなるかと思ったけど、なんとかなりそうだ」
「そう」
あれ？　なんでシャルルの言葉に刺を感じるのだろうか。表情がいつもと同じだから、余計にわからない。
呆れたようにため息をついて部屋に入るシャルルを追って部屋に入る。だが、僕はその先にシャルルがやることを予想して踏みとどまった。
「じゃあ僕外に出てる」
「えっ？　どうして？」
「いや、僕がいても着替えられないだろ？　ＩＳスーツの着替えも難儀してたし、しばらく部屋から出てるよ」
一夏がいるときもそうだが僕がいても同じなのだ。シャルルは表面上男子を装っているのでなんだかややこしい。

「い、いいよ、そんなの。桐斗に悪いし、その……僕は気にしないから……」

「い、いや、そう言われても僕が気にするんだけど……」

「そ、それに……ほら！　男同士なのに着替え中は部屋の外に出たりしたら、変に思われちゃうでしょ？」

「そ、そうかも……。じゃ、じゃあ洗面所の方に行ってる。着替え終わったら声をかけてくれ」

「だ、だからそんなに気を遣わなくてもいいってば！　ほら、普通にしてて。それに桐斗も着替えないといけないでしょ？　ね？」

ちょっと待ってくれ。部屋を出たりはしなくていいのはわかったが、それは僕にとってかなりハードルが高いぞ。でも、こうまで言ってくれるのをむげにするのは人としてどうかと思うし……。というか、シャルルはどうしてこんなに一生懸命なんだろうか。

ええい、ここは男らしく覚悟を決めるしかないか。

「そ、それなら、お互いに背中を向けて着替えよう」

「うん、そうして」

にこっとシャルルが笑みを浮かべる。今し方一生懸命話したからだろうか、その頬はわずかに上気して薄紅色に染まっていた。

再び僕の顔にも熱が上がってきて、バレないように着替えを準備する。そろそろ暖かくなってきたから半袖のシャツにしておこう。

ていうか、女の子と一緒に着替えるとか人生初じゃないか？　……ヤバい。意識したら混乱してきたぞ。いや、でも考えてみたら意識

しなかったら逆にシャルルに失礼なんじゃ――

「じゃ、じゃあ、着替えるね……」

「は、はい」

考え事をしているところにいきなり声をかけられたこともあって、僕はびくっと体をすくませてしまったうえに口調も敬語になった。それから数秒間の沈黙の後、するっ……とズボンを脱ぐ衣擦れの音が聞こえ始めた。

（う、ヤバい……。また何か甘い匂いがする……）

女子だとわかってからシャルルと同じ部屋にいるとふとした瞬間にやわらかな香りを感じるようになった。そう、女子特有のあの甘い匂いである。

（これってなんなんだろう……。男はこんな匂い一切しないから、もしや噂に聞くフェロモンなる物質か？　それにしても、一夏がこの匂いに気づいていなくてよかった……）

「き、桐斗？　着替えないの？」

「あ、ああ。き、着替える。着替えますとも」

言われてやっと自分がぼーっとしていることに気がつく。とりあえず上着から順に脱いでいく。

「……」

じー。

気のせいだろうか。なんだか背中に視線を感じる。

「……シャルル？」

「ふあっ！？　な、なにかな！？」

ものすごい驚いた声が聞こえて、こっちまでびっくりしてしまう。
その後の言葉も見るからに動揺が入り交じっていて、僕は訊きたいことを言い出しにくくて仕方がない。

「えっと……勘違いだったら悪いんだけど、もしかして……こっち、みてない？」

「そ、そんなことないよ！？」

「そ、そう」

全力での否定。それなら、僕の自意識過剰なんだろう。そんなことより早く着替えてしまおう。

「……」

じー。

……あのー、シャルルさん？

「男でも、覗かれるのは恥ずかしいんだけど……」

「ふえっ！？　い、いやっ、僕はそんなっ――きゃんっ！」
激しく狼狽したシャルルの声が小さな悲鳴にと変わる。それと同時にどたっという音が聞こえて、僕は反射的にそちらへと顔を向けてしまった。
「いたた……。足がひっかかっちゃっ……え？」
「え？」
「「え」」
僕の視線の先では、シャルルがズボンを足に引っかけて床に転んでいた。問題はその姿である。上は例の男装用コルセットだけを身につけていて、下は膝下でひっかかったズボン以外は下着――しかも女物のパンツだけの状態なのだ。しかも体勢を崩して転んだシャルルは、ちょうどお尻を突き出すような格好で四つんばいになっていて、形のいいお尻にきゅっと食い込んだ淡いピンク色のパンツはとても――ってうわあああああああぁぁぁぁぁぁぁ！　本日二度目じゃあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
「きゃ――」
しまった！　ここで女の悲鳴をあげられるとふたり揃って非常にまずい事態になる！
そう思った僕は上半身を裸のままで、シャルルの口を塞ごうと踏み込むが――
ガチャ。

「おーい、桐斗。千冬姉は俺のこと呼んでないって言ってた――」

――不運というものは重なれば災厄となる。このＩＳ学園に来て、僕が一番最初に知ったことだ。もちろん体験談で。

そして、それを対処する方法も僕は身を持って習っていた。

数学者もびっくりな速度で脳細胞を回転、神速の〇．二秒で正攻法を導きだす。

踏み込みの勢いを殺さず流すようにして体をぴったり９０。反転させる。そのまま意識を開きかけた扉へ、真に狙うはその向こうにいるであろう相棒だ。

だんっ！　と床から足を弾ませ、距離を詰める一息の速度で必殺の一撃を放つ。

「お帰りやがりませお客様あああああああああああああああああああああああッ！！」

げしっ！

「あごぉっ！？」

意味不明の怒号とともに繰り出した蹴りはドアを直撃し、力の法則によって再び閉ざされてその反対側にいた一夏に直撃する。

扉の向こうから聞こえてくるのは、誰かが力なく倒れたような音。

『あごぉ！？』と叫んでいたのできっとアゴに直撃したのだろう。

運良く気絶でもしてくれていればいいのだが。

これまでのところでシャルルの悲鳴が聞こえない。ということは、どうやら驚いて反射的に悲鳴を飲み込んだようだ。

しかし、そのときの僕はまだまだ勉強不足であった。災厄とは、一つでは終わらないもの。それが災厄が災厄たるゆえんであることを、僕は知らなかった。

波を乗り越えた油断から、僕は脱ぎ捨てていた上着を軸足で踏みつけていたことに気がつかなかった。上着の上で滑ったことで、僕の体はいきなり後ろに飛ぶようにして倒れ込んで落ちる。
――となったのが一秒前。今の僕は、反射的にもがいてしまった手が、掴んではならないものをしっかりと掴んでいるのだった。

「っ～～～～～！！！！」

手に返ってくるのはふにっとした弾力、それにしっかりとした肉感、滑らかな肌と質のいい布の手触り。……つまり、シャルルのお尻を鷲掴みにしちゃっているわけである。
柔らかくて暖かいというのが感想。――ああ、なるほど。死の覚悟をしていたらいつもみたいに混乱はしないのか。あまり知りたくなかった新事実だぜ。
しかも重力というのは融通が利かないことで有名だ。僕の体は今度は上から下へ縦移動。そうするとつまり、指先が引っかかっているシャルルの下着もするりと下に降りてしまって――

「わあああああっ！？！？」

どがすっ！！！

四つんばいの格好から思いっきりカカトを振り上げたシャルルの本能的カウンター。さっき僕が出した蹴りと比べて見事なもので、きれいに僕のアゴに直撃。
これが、因果応報ってやつなのか。
遠のく意識の中、僕はそんなことを思った――がくっ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……」

気を失った桐斗と廊下で倒れていた一夏をとりあえず介抱としてベッドに寝かせたシャルルは、まだ赤みが引かない顔のままで寝間着にと着替えた。

いつもは床に布団を敷いて寝ている桐斗を自分のベッドに寝かせたのは、気絶させてしまったことへの申し訳なさからである。

だが、シャルルの表情は怒っているようにも、そしてわずかに嬉しそうにも見えるという複雑怪奇なものだった。

「ま、まったく、桐斗ってば見かけによらず強引なんだから……」

しかしさっきのことが意図的にしているものではないことはわかっていたので、シャルルはまた一枚板にならない感情を持てあます。

あれが事故でないというならとんでもないことだし、けれど単なる偶然として片付けられてしまうのもなんだか腹が立つ。

「ちゃ、ちゃんと言ってくれれば、僕は別に……」

と、そこまでいってからハッと我に返る。その言葉の続きを自覚し

て、またかーっと赤くなった頬をまるで振り払うかのようにブンブンと左右に振った。

（ああもうっ、寝ちゃおう！　うん！　それがいいね！）

桐斗を視界から外し、シャルルは部屋の照明を落とす。ふっと暗くなった室内ではその明暗差にすぐに目が慣れない。
そんなこんなでちゃんと桐斗の顔が見えないのだが、それが不思議とシャルルを大胆にさせるのだった。

（ぼ、僕、何やってるんだろう……。一夏だっているのに……）

そう思いながらも、衝動に突き動かされるままシャルルは桐斗の顔をのぞき込む。じぃっと見つめる距離はわずかに五センチ足らず。
今でも呼吸だけでなく、その体温までが感じられて、シャルルは胸の高鳴りがさらに一段階強くなった。

「……」

ふと桐斗のことを考えて、シャルルの表情が真面目なものにと変わる。

『生きているのは、結局は僕たちなんだよ』

――初めて、そんな励ましを言われた。
母を亡くしてからずっと、居場所がなかった自分。血の繋がりだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。
いつしか自分が必要とされることさえ求めなくなって、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまっていた。

そして、父からの命令で日本に行くことが決まったときも、別段何も感じなかった。
それなのに――

（どうして桐斗は僕の心を揺り動かすんだろうね）

――出会ってしまった。目の前の少年と。
いつもは控えめながらも優しいそよ風のようにさりげなく、そうかと思えば雲を引き裂く稲妻のような強引さで入り込んでくる。けれどこちらから触れてみれば森の小鳥のように逃げていって、そのくせ木々の間からこちらを見守っているのだから手に負えない。

「ズルいよねぇ、桐斗は」

今もこうして目と鼻の先にいるというのに、ただただ眠っているだけで目覚めもしない。まるで『眠れる森の美女』だ、なんて思うと、シャルルは急におかしくなった。

（ふふっ。似合いそうでちょっぴり憎たらしいな）

それからしばらくシャルルは桐斗を見つめて、ひどく優しい表情を浮かべる。そして、まるで母親が我が子にするかのように、さっとそのキスを額に落とした。

「おやすみ、桐斗……」

冷めやらぬ体の火照りは桐斗が使っていた布団に入ったことで倍熱くなり、シャルルは長い長い夜を過ごしたのだった。

「予想外とは世の常」（前書き）

トーナメント直前のお話です

それでは本編を、どうぞ！！

「予想外とは世の常」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ＩＳ学園、職員室。学年別トーナメントを目前とした教職員たちは第一回戦が始まる前に全ての準備を済ませるために職員室の行ったり来たりを繰り返していた。
毎年のことながら、この慌ただしさは大したものである。

「……」

その息つく暇もないはずの空間の中に、寡黙に動こうとしない人物が一人いた。
元世界最強のＩＳ操縦者でありＩＳ学園教職員、織斑千冬である。
千冬は自分の席に座り、忌々しいものをにらむような目でディスプレイに写された表を見ている。
それに写るのは、今日から始まる学年別トーナメントの対戦表である。
急遽、ペアを組んでの大会となったことでついさっき完成したこの対戦表は、千冬としては嬉しくはない結果であった。
人を寄せ付けない冷たい表情でにらむ枠には、自分が担任を勤める二人の生徒の名前。『篭手川桐斗』と『篠ノ之箒』の枠である。
そこからちらりと視線をずらし、そのペアとは別のブロックにある『織斑一夏』と『シャルル・デュノア』のペアの枠を見る。
この結果は、千冬の予想をいい意味でも悪い意味でも裏切るものだ

った。
諦めてディスプレイを閉じようとしたとき、異変が起こる。
「……！？」
突然、ディスプレイが灰色のノイズに塗りつぶされた。
しかしそれは一瞬で、再び何事もなかったかのように対戦表が表れる。
だが、復活したディスプレイを見ていた千冬の眉が人にはわからないほど小さく動いた。
「……」
しばらく考えるようにして対戦表を見つめていた千冬だったが、やがてディスプレイを閉じて席を立つ。
職員室を出て行く彼女の目には、失望に覆われていたはずのかすかな希望が見え隠れしていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

僕と一夏、それからシャルルは例によってだだっ広い更衣室をさんにんで占めていた。
ちなみに、シャルルが着替えるまで僕は外で待っていた。一夏とはわざと時間をずらすようにして着替えたので、シャルルの秘密がバレることはなかった。

「しかし、すごいなこりゃ……」

「まったくだね……」

ＩＳスーツに着替えた僕たちは、更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他もろもろの顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「へぇ〜。なるほどねぇ」

「ま、ご苦労なことだな」

シャルルの説明に興味がなさそうな反応の一夏が考えていることが、僕にははっきりとわかった。シャルルにも筒抜けだったのか、くすっと笑う。

「一夏はボーデヴィッヒとの対戦だけが気になるんだよな」

「まあ、な」

鈴とセシリアはやはりトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得ない状況になっていた。ふたりは国家代表候補生でありその中でも選りすぐりの専用機持ちである。それがトーナメントで結果を出すどころか参加すらできないというのは、おそらくふたりの立場を悪くする要因になるだろう。
それを思うと、僕の中でふつふつと怒りが沸きだす。

「一夏。もし僕と箒がラウラと初戦で当たったとしても、必ず倒すよ。だから一夏もそうしてくれ」

「おう」

例の騒動を思い出し、僕は無意識のうちに右手を握りしめていた。
それがあまりに力がこもっていたらしく、シャルルがさりげなく重ねた手でそれをほぐしてくれる。
僕の心臓がシャルルの指の動きに合わせて跳ねた。

「ふたりとも、感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年のなかでは現時点での最強だと思う」

「ああ、わかってるよ」

これまでの特訓にシャルルはいつも付き合ってくれた。僕と箒のコンビネーションにアドバイスをくれたり、一緒に対ラウラ戦の作戦を考えたりもしたのだ。それにフォローすることもあって、シャルルとの仲はだいぶ親しくなっていた。
手を触られても、少しは恥ずかしさ耐えられるようになってきている。これって、女性が苦手な僕としてはかなりの進歩なのではないだろうか。

「それじゃ、気合いの入れ直しといこうか。一夏」

「おう。やろうぜ」

僕と一夏は互いの右拳をコツンと突き合わせ、そのリズムに乗って平手にした右手を景気よく打ち鳴らす。

僕と一夏の間で交わされるいつもの合図だ。

にっ、と笑う一夏につられて、僕の顔もほころぶ。その瞳に闘志の光が宿っているのを見つけ、少し安心した。

シャルルはいつものようにまた柔らかい微笑みを浮かべて、見守るようにそれを眺めていた。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

どういう理由なのかは知らないが、突然のペア対戦への変更がなされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。本当なら前日にはできるはずの対戦表も今朝から生徒たちが手作りの抽選クジで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

そう、一夏とシャルルは学年別トーナメント一年の部の頭から戦うのだ。

「だろうな。うらやましいぜ」

「え？　どうして？」

「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「その方が頭の中がすっきりしてていいんだよな。僕もそっちの方が気が楽だし」

「ふふっ、そうかもね。それにしても、ふたりって本当に似たもの同士だよね」

「まあ、相棒だからね」

少し照れくさくなって、ごまかすように適当にそうシャルルに返す。

「お、対戦相手が決まったみたいだな」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。僕もそれまでの思考は一旦停止して、そこに表示される文字を食い入るように見つめた。

「「――え？」」

出てきた文字を見て、一夏とシャルルは同時にぽかんとした声を上げた。

しかし、一番疑問を持っていたはずの僕は驚きで声を出すことができなかった。

一夏たちの一回戦の対戦相手はラウラ、そして――――なぜか、僕のペアだったのだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……」

「……」

アリーナ、Bピット。

一回戦を控えた僕とラウラは、整備科の生徒数人が声をかけられないほどの冷気を放っていた。

整備科の方々には申し訳ないが、僕だってこの状況にさっきまでのやる気をすべて削がれてしまったのだ。これくらいは勘弁してほしい。

あのトーナメント表を見た後、箒とともに千冬さんのところに抗議しに行ったときに聞かされた話を思い出す。

『このままボーデヴィッヒと組めって……？』

『ああ。どういうわけか知らんが、トーナメント表ではお前とラウラがペアとなった。だからそれに従え』

『そんな……！　そもそも、そのトーナメント表自体に誤りがあるではないですか！　今からでも訂正すればよいでしょう！』

『……篠ノ之、それに篭手川、先月のクラス対抗戦を覚えているな？』

『え……？』

『織斑と凰の試合に乱入したあの正体不明のＩＳ、あれは反政府組織によるものだ。あのような襲撃が一度だけとは限らん。今回のトーナメント表の改竄も同一犯の仕業である可能性がある。何の目的で動いているかはまだわからんが、ヘタに逆らうよりもまずは様子を見る方が得策だ』

『……つまり、犯人をあぶり出すための囮になれってことですか？』

『ま、そういうことだ』

『そ、そのようなことをしなくても私と桐斗で――！』

『わかりました、従いますよ』

『なっ……！　桐斗っ！？』

『……箒。僕から頼んどいて申し訳ないけど、僕は千冬さんに賛成だ。またあのときみたいなことになったら、みんなが危険なめに遭う。だから、箒には何かあったらすぐにみんなを助けられるようにしてほしいんだ。頼む……』

『……っ！　し、仕方ないな……。だが、お前はいいのか？　アイツと組むというのに……』

『正直超がつくほどイヤだけど、今回はそうも言ってられないよ。でも千冬さん、試合中に僕がボーデヴィッヒの邪魔をしても、文句は言わないでくださいよ』

『……ああ、好きにしろ』

千冬さんとの会話を思い出して、僕はラウラを見る。

今回の組み合わせが事故でないとしたら、それを行った犯人の目的は一体何なんだ？　思い浮かんだのは、この学年別トーナメントで僕たちのうち誰かに何かをさせることだ。でなければわざわざペアの改竄など行ったりしない。しかし、その何かがまったくわからないのだ。

（でも、今はそんなことよりも――）

「おい、貴様」

突然声をかけられて、僕は考えを中断する。

視線の先では、ラウラが眼帯のない冷たい右目で僕を見据えていた。

「何を考えいるか想像はつくが、一応忠告だけはしておいてやろう。貴様のような屑に、私の邪魔ができるなどと思わないことだな」

「……そういうのは忠告とはいわないし、アンタに従う気なんてさらさらないね」

「はっ……。まあいい。貴様がどうあがこうと、すでに結果は見えているからな」

互いに容赦なく鋭い視線をぶつけ合う。

そう、僕はこのラウラと組むことになったのだ。しかし試合中にどうしようと僕の自由。ラウラが過剰な行いをしたときのために、千冬さんから許可をもらうほどに。

（何かあったら、その時は――）

『お待たせしました。学年別トーナメント一年の部、Aブロック一回戦を開始いたします。出場する生徒はステージに登場してください』

組んだ腕にわずかに力をこめたとき、試合の準備を促すアナウンスが入った。

「ひび割れるのは彼の鏡」（前書き）

今回でいよいよトーナメントが始まります
このおはなしは大事な部分になるので、結構な難産でございました
……

それでは本編を、どうぞ！！

「ひび割れるのは彼の鏡」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

「桐斗。不本意だけど、やるからには本気でいくよ」

「ああ。受けてたつよ」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一――開始。

「「叩きのめす」」

俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

試合開始と同時に、俺は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を行う。この一手目が入れば戦況はこちらの有利に大きく傾く。

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。――来る。
ラウラの専用ＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、略称、ＡＩＣ。慣性停止能力だ。
直接戦った鈴とセシリアに教えてもらったこの兵器は、全てのＩＳの浮遊、加速、停止に利用されているパッシブ・イナーシャル・キャンセラー――略称ＰＩＣを停止させるものらしい。
俺の白式が持つ『零落白夜』なら切り裂けるみたいだが、前回はＡＩＣのエネルギー波を腕に当てて止められてしまった。
桐斗やシャルルを交えて対策を考えてみたが、結局確実な手段で慣性停止能力（ＡＩＣ）を破る方法は思いつかなかった。
それなら、手段は一つ。――意外性で攻める。

「くっ……！」

しかし、その程度の戦略など読んでいたのだろう。俺の体は腕を始めに、胴、足とＡＩＣの網に捕まえられる。押しても引いても動かない。見えない腕に掴まれたかのように、身動き一つ取れなくなってしまった。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私がつぎにどうするかもわかるだろう」

ああ、わかりたくないが、想像はつく。ガキン！　と巨大なリボルバーの回転音が轟き、白夜のハイパーセンサーが警告を発する。
『敵ＩＳの大型レールカノンの安全装置解除を確認、初弾装填――警告！　ロックオンを確認――警告！』

慌てるなよ。何も一対一って訳じゃないんだ。――な？

「させないよ」

シャルルが俺の頭を飛び越えて現れる。同時に六一口径アサルトカノン《ガルム》による爆破弾（バースト）の射撃を浴びせた。

「ちっ……！」

肩のカノンを射撃によってずらされ、俺へ向けてはなった砲弾は空を切る。さらにたたみかけてくるシャルルの攻撃に、ラウラは急後退をして間合いを取った。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へと移り、左手にアサルトライフルを呼び出す。光の糸が虚空で集まり、一秒とかからず銃を形成した。

これこそがシャルルの得意とする技能『高速切替（ラピッド・スイッチ）』である。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。それはシャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそ光る。

「僕のことを忘れるなよ」

ラウラへの追撃を続けるシャルルに飛びかかったのは、紫燕を纏った桐斗だった。唯一の武装である《天蕾》を抜刀すると同時に、素早い居合い切りを放った。

シャルルはその一閃を飛び越えるようにして回避し、上空からアサ

ルトライフルの射撃を行う。
降り注いでくる弾丸をアクロバットな回避行動でかわしていき、桐斗はその機動性をいかして徐々に間合いを詰めようとしていた。

「うまくなったね、桐斗。びっくりしちゃうよ」
「シャルルがわかりやすく教えてくれたおかげだよ。それで戦ってるっていうのは、なんかフクザツだけどな」

お互い緊張感を持ちながらも、ふたりは笑いあっていた。
桐斗のそんな姿を見て、俺は心が踊るのを自覚する。
いままで、俺と桐斗は戦ったことがない。四月のクラス代表を決める戦いは千冬姉に潰されたし、特訓のときは武器の相性が偏るからという理由で模擬戦などは行わなかった。
だから俺はやっと巡ってきた相棒と戦えるというこの状況を、不謹慎ながらも嬉しく感じていた。

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないとな！」
ラウラのＡＩＣから開放された俺はすぐさまシャルルの背中へと瞬時加速。ぶつかる瞬間、くるりとシャルルが宙返りをしてお互いの場所を入れ替えた。このコンビネーションは特訓の賜だといえる。

「いくぜ、桐斗！」

《雪片弐型》を振り上げた俺に、桐斗も威勢良く応えてくる。
――――そう、思っていた。

「！？」

現実では、桐斗は現れた俺を見るなりスラスターを逆噴射して急後退して行った。

「えっ！？　ちょ、ちょっと！」
呆気にとられた俺は逃げ出した桐斗を追う。
しかし、桐斗はさらに加速して俺の追撃から逃げ続けていく。
「おい、桐斗！　何やってんだよ、ちゃんと戦え！」
「っ……！」
俺の言葉を聞いたからか、なぜか桐斗は表情を歪めて動揺する。それから加速度がガクンと落ちたことで、俺は桐斗を射程範囲にとらえる。
桐斗が何を考えているのかは知らないが、勢いの止まらない俺はそのまま《雪片弐型》を振り下ろした。
「！？」
ふっと突然目の前の桐斗が消える。近接ブレードの刃はむなしく空を切った。――なんだ？　何が起きたんだ？
「邪魔だ」
入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードのひとつが桐斗の脚へと伸びていて、アリーナ脇まで遠心力で投げ飛ばす。どうやらさっきの緊急回避はこのワイヤーによる牽引だったらしい。
「ぐぅっ……！」

しかし、味方を助けたとはほど遠いラウラの行動は、本当にただ邪魔だからどかしたというだけだったようだ。床にたたきつけられた桐斗が苦痛に呻く。
しかし、当の本人は気にもとめない。すでに俺たちへの攻撃を始めている。プラズマ手刀を展開したラウラが左右から連続で斬りかかってくる。俺は斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃に、すぐさま押されだした。

「数の差で私が有利だな」

「たかが二倍じゃねえか！」

そうは言ってみたものの、このラウラ・ボーデヴィッヒの実力は確かに化け物じみている。今現在こうして俺との接近戦を繰り広げながら、同時にワイヤーブレードを駆使してシャルルを牽制、俺から引き離している。さすがに六つ同時には操っていないものの、上手く順番に射出と回収を行って連射による多角攻撃を繰り広げていた。

『シャルル、無事か？』

『一夏こそ。すぐにサポートに入るからね』

『いや、いい。このままの作戦でいこう』

『……。わかった』

プライベート・チャンネルで短くやりとりを交わして、俺たちはあらかじめ決めていた作戦へと移る。それは『桐斗を先に倒そう』作戦だ。――まあ、苦情はあとで受け付けよう。
この作戦を決めたのは単純な理由だった。とにかく、ラウラの戦い

方は一対多に特化している。つまりそれは、自分側が複数の状態での戦いを想定していないということだ。なので、まず桐斗を助けることはしないだろう。
それなら先に桐斗を撃破、一対二の状況でたたみかける。それでもラウラは前述したとおり一対多の状況で戦えるだけの能力を持っている。――けれど、そこが落とし穴だ。ふたり組というのは一足す一だが、答えが二とは限らない。
だが、気になることがひとつあった。俺と対峙したときに見せた桐斗のあの表情。
何かに対してのおびえと苦しみがこもったような表情は、初めて目にした。

（桐斗、一体どうしたんだよ……？）

今は悩んでも仕方ない。俺は頭にかかっていた霞を振り払い、《雪片弐型》を握りしめた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「くっ……！」

ラウラに投げ飛ばされてから、僕は急いで立ち上がり体勢を整えた。
さっきまで僕がいた地点ではラウラがプラズマ手刀で一夏に肉薄していた。

（何で、僕はあんなことを……？）

さっきまでの自分の行動に、自分で理解ができない。あれじゃあまるで、僕が何かを怖がっているみたいじゃないか。

（っ……！？）

一瞬、何かに心臓を掴まれるような圧迫感を感じた。ほんの一瞬のことだったが、僕は息苦しくなってすぐに立ち直すために奥歯を噛み締める。ぎりっ、という口内の音がやけに耳に残っていやになった。
そうこうしているうちに、シャルルが六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を手にこちらへ迫ってくる。

「休んでる暇はないよ、桐斗！」

「……わ、わかってるよ！」

急いで《天蕾》を抜刀し、シャルルに接近する。
ガギィンッ！　その金色の刃を、シャルルは瞬時に呼び出した近接ブレード《ブレッド・スライサー》で受け止める。そしてそのまま左の《レイン・オブ・サタディ》が火を噴いた。

「ぐっ……！」

射撃の印象が強いシャルルだが、とにもかくにもその能力の最大特徴は『器用さ』なのである。格闘も人並み以上にこなす上、そこへあの『高速切替（ラピッド・スイッチ）』。斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ちかえての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。押しても引いても一定のリズムを保ち、攻防ともに高いレベルで安定したその構えを突破することはできない。
その隙のない戦法に、紫燕のシールドエネルギーがどんどん削られていく。

「まだまだぁっ！」

しかし、僕は連射される弾丸の嵐からなんとか逃れると、シャルルに向かって小太刀を振るう。
刃はやはり《ブレッド・スライサー》で防がれ、《レイン・オブ・サタディ》の銃口が再びこちらに向けられる。
やっぱり簡単には攻撃されてくれない。だったら――押し切るまでだ。

「せやぁっ！」

右足を振り上げ、シャルルの左手にあったショットガンを蹴り上げた。
しかし予想していた範疇だったのか、僕の行動に慌てることなくシャルルは武器を持ち直す。

「このっ！」

シャルルに左手の《天蕾》の鞘を叩き込もうとするが、これも《ブレッド・スライサー》によって受けられ、返し刃のように攻められる。僕はこれを空中での旋回で紙一重でかわした。

そこから回転力を使って鞘におさめた《天蕾》を振り下ろすが、それも防がれてしまう。しかし、それだけでは終わらない。
蹴りや鞘での攻撃を繰り出してショットガンの発砲を牽制しながら、攻撃を続ける。

「まだまだ甘いよ桐斗！　それだけじゃ僕は落とせない！」

「何度も見てきたから、それくらいわかるよ。だから、ここで一発決めるっ！」

「！！」

どうやら気づいたらしい。――僕がさっきから《天蕾》を抜いて攻撃してこないことに。
密かに発動させていた『雷光演武』で、すでに《天蕾》のエネルギー充填は完了している。これを抜いて斬りつければシールドエネルギーを削り取り、一撃で勝負が決まるのだ。
それを警戒したシャルルは急後退で僕から距離を取り、『武装切替（ラピッド・スイッチ）』で武装を《ブレッド・スライサー》から《ガルム》へと変更する。
その引き金が引かれる直前に、僕は接近戦に持ち込むため瞬時加速で間合いを詰めた。
すぐさま《天蕾》を抜刀し、展開した刃から出現した金色のエネルギー刃をシャルルめがけて振るう。
しかし、さすがは代表候補生。必殺の斬撃はうまくかわされてしまった。
連続して切りつけようとするが、シャルルも至近距離からの射撃を狙って僕に照準を合わせてくるのでそれを牽制しなければならない。
だが、そんな集中力をいつまでも保てるわけがない。
しかもシャルルは隙を見て僕から距離を取っていくので、早いうちに打開策を立てなければ一斉射撃を見舞われるのはわかっている。

そうこう考えているうちに《天蕾》の凝縮されたエネルギー刃の光が小さくなり、それを見たシャルルはすぐにショットガンの引き金を引いた。連射される弾丸が紫燕のシールドエネルギーを着実に削っていく。ついには、左肩と右足の一部のＩＳ装甲が弾け飛んだ。

（くっ……！　こうなったら、意地でも一撃いれる！）

なかばヤケクソになった僕は、今度は背部の折りたたみ式大型スラスター翼にエネルギーを充填していく。瞬時加速の倍近くエネルギーを消耗するが、持久力は高い。これで加速しながら後ろに回り込んで、逆転を狙う作戦だ。

低い駆動音とともにエネルギーが循環していく。

全力の『雷光演武』の多用で、シールドエネルギーの残量が９０％を切る。あと一撃でもデカい攻撃をくらったら確実に負けるだろう。

だから、チャンスはこの一度きりだ。

シャルルが後退し、距離がまた開かれる。

――やるなら今しかない！

スラスターが展開し、加速状態に入る。ぐにゅあ……っと世界が一瞬スローモーションになるが、次の瞬間には倍速再生に切り替わった。

弾丸の嵐を抜けて、僕はシャルルの背後をとらえることに成功した。

「はあああっ！」

「！？」

遅れて僕の動きに気づいたシャルルが右手の《ガルム》をこちらに向けようと振り返り始める。

しかし、僕はすでに《天蕾》の刃を半分ほど抜刀していた。

――いける！

――が、僕の動きは突然停止した。
もちろんラウラにＡＩＣで動きを止められた訳ではない。あのときのような圧迫感ではなく、これは体中から力が抜けたかのように動かないのだ。
僕の視線の先にあるのは、シャルルの肩越しにラウラと戦闘を続ける一夏の姿。しかし、状況は明らかに一夏の絶体絶命だ。
ＩＳ装甲の三分の一を失った一夏の右手をラウラはワイヤーブレード二本がかりで拘束し、左肩にある大型レールカノンの砲口が照準を合わせている。

（一夏っ！――）

あれは対ＩＳアーマー用徹甲弾だ。当たり所が悪ければ一発で勝負がつくほどのシロモノ。それが今一夏に向けられている。
さまざまな感情が、濁流のように一瞬で走る。
ダメだ、負けるな。負けたらダメだろ。
ラウラを倒すって言ったじゃないか。鈴とセシリアをあんな目に遭わせて、自分勝手に千冬さんを語っている、一夏を逆恨みしているあいつを――一夏が倒すんだろうが！
一夏が負けたら、僕は――――

（……ちょっと待て）

――――今、何を考えた？

ここで一夏が負けたら、きっと箒は怒る。鈴だって、セシリアだって怒るだろう。シャルルは一夏を慰めるために、何か奢ったりするかもしれない。千冬さんは呆れて、またあの出席簿アタックが一夏の頭に炸裂するはずだ。

……じゃあ、僕はどうする？

一夏がこんな負け方をするなんて、今まで考えたことが無かった。

一夏が悔しがるのと同じように、僕も悔しがるのか。今までと同じように。

（今までと、同じ……？）

「――桐斗っ！」

我に返った僕が最初に見たものは、動揺したような表情のシャルルと、それより先に放たれた《ガルム》の爆発弾（バースト）だった。

「――っ！」

砲弾は直撃と同時に弾け、視界はすぐ赤く染まる。

襲いかかってきた衝撃でＩＳの絶対防御が発動し、シールドエネルギーはあっという間に０となって『戦闘続行不可能』の表示が現れた。

至近距離からの直撃。当然といえば当然の結果だ。

各部を損傷したＩＳ装甲を纏ったまま吹っ飛び、空中から床に降下する。

僕の敗北は、決定した。

「桐斗っ、一体どうしたの！？」

「……」

シャルルが声を飛ばしてくる。
試合中の対戦相手だというのに、シャルルの声は本気で僕を心配している風だった。
でも、今はそんな場合でわないのだ。

「……いいから、一夏の助けに入って！」

「え……。う、うん、わかった！」

若干ためらいがちのシャルルだったが、すぐに一夏の元へと飛んでいく。
ラウラの大型レールカノンが発射された瞬間、その砲弾をシールドで防いだシャルルはワイヤーを切り裂いて、見事に一夏を救出した。

「……」

いつもなら喜ぶはずの展開なのに、気持ちがさっきから沈んでいるのが自覚できる。
この時の僕は、わからなくなっていた――自分が今まで、何をしていたのかを。

「ファインド・アウト・マイ・マインド」（前書き）

今回は桐斗の核心に迫ります
正直ちょっと暗いですが、書きたかったお話なのです
主人公たるもの、やっぱりそれなりに影があるものですよね（？）

それでは本編を、どうぞ！！

「ファインド・アウト・マイ・マインド」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「こ、篭手川くん、一体どうしちゃったんでしょうか？　急に動きが止まったみたいですけど……」

教師だけが入ることを許されている観察室で、モニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は心配そうにつぶやく。

「もしかして、ＩＳに何か異常でもあったんでしょうか……？」

「墜ちた者は放っておけ。まだ試合は終わっていないぞ」

どこかとげのある口調で言う千冬に、真耶はおとなしく引き下がった。

よくはわからないが、気まずくなった空気を変えようとして一夏とシャルルを観察する。

「そ、それにしても織斑くんすごいですねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて。やっぱり才能ありますよね」

「ふん。あれはデュノアがあわせているから成り立つんだ。あいつ自体は対して連携の役には立っていない」

わかってはいたが、相変わらずの身内への辛口評価に真耶はやや苦笑気味になってしまう。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑くん自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ……そうかもしれないな」

ぶすっとした感じで告げる千冬だったが、真耶はそれが照れ隠しなんだと最近わかったので、別段気にはしない。それどころか『やっぱり弟さん想いなんだなぁ』としみじみ思う。

そのかたわら、桐斗にも同じように魅力があることを思い出した。思い出せる限りの魅力を頭の中で並べてみる。

「……山田先生、顔を赤くしたままぼーっとしないように。口も半開きだぞ」

「ひゃわっ！？　す、すみませんっ！」

千冬に指摘をされ慌てて口元に手をやる。危うくもう少しでよだれが出そうになっていたことに気づき、内心で千冬に感謝する。

「そ、そういえば、篭手川くんって篠ノ之さんとペア組んだって聞いたような気がしますけど……。いつ抽選の方に変えたんでしょうか？」

「……さあな。ガキは気まぐれで困るよ。それより、今は試合の状況把握だ」

「……？」

どこか冷めきった千冬の声色に妙な違和感を持った真耶だったが、さっきのように気まずくはなりたくない。ここは千冬の言うことに従うことにした。

「やっぱり強いですねぇ、ボーデヴィッヒさん」

「ふん……」

しみじみという真耶に対し、千冬は心底つまらなそうな声を漏らす。

「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だがそれでは――」

一夏には勝てないだろう。

しかし、その言葉はけして口にしない。言ったが最後、真耶にどんなことを言われるかわかったものではない。

ワアアアッ！

会場が一気に沸いた。その歓声が観察室まで直に響いてくる。

「あ！　織斑くん、零落白夜を出しましたね！　一気に勝負をかけるつもりでしょうか」

「さて、そう上手くいくかな」

「またまた、そんな気にしてないような態度をしなくても――」

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せっかくだ、十本ほどやろう」

「いっ、いえいえっ！　私はそのっ、ええとっ、生徒たちの訓練機を見ないといけませんからっ！」

慌てて首を振り手を振りと大忙しの真耶に、千冬は低い声でたたみかける。

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるように」

「は、はい……。すみません……」

真耶は見ていて可哀想になるくらいしぼんでしまう。それがあまりに可哀想だったのか、千冬はぽんと軽く頭を撫でた。

気を持ち直した真耶を確認して、千冬は映像に目を移した。

ステージの隅で膝をついている桐斗には、当たり前だが動くような気配はない。しかし、それ以前に桐斗からは無気力以外の何も感じられなかった。

（いい加減気づいたか、大馬鹿者……）

そんな少年を置いてきぼりに、試合は更に熱気を増していく。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

目の前が真っ暗だった。目に見えないエネルギーシールドの天井は陽光を遮断しないはずなのに、僕の視界は光を見つけることができなかった。
それどころか、音も聞こえない、何も感じられない。
まるで夢のように気が遠くなりそうだが、それにしてはあまりに現実味があってすぐ引き戻される。
世界の中で僕だけが、闇の中にいた。

（いつも、一夏と、同じように……）

さっきから頭の中を濁しながら巡る思考は、重りのように少しずつ僕の体にのしかかってくる。
そこから徐々に導き出される真実が己によって突きつけられ、だんだんと追いつめられていき、息をするのが辛くなった。

『縋っているのは、一体どちらの方だろうな？』

冷たく嘲笑するラウラの言葉が蘇る。

『ふたりって本当に似たもの同士だよね』

優しく笑うシャルルの言葉が蘇る。

（僕は、昔から……？）

小学生の頃の記憶が引きずり出されてくる。
僕と同じく小学生の姿の一夏が笑い合いって歩く、懐かしい光景。
あの頃から一夏は強くて、誰かを守るために動いていて、人を惹く

だけの魅力があって、いつもみんなと笑っていた。
そんな生き方をする一夏の背中を見て、僕は隣を歩くようになって
――

（――隣、を？）

一夏と同じように笑って、同じようにバカやって、千冬さんに怒られて、箒と遊んで、一夏と同じことをしようとしていた。
それはなぜか。
今度は一夏と出会う前の自分の姿が浮かぶ。
貧しいが故に何もない生活は苦しくて、不安の連鎖が続く毎日だった。家にいても仕事ばかりの父親（あいつ）はめった帰ってこない。
他人とは違う自分。人の群は自分たちとは違う異端を拒み、僕もそうして自然と人の輪から外されていった。
それが寂しくて、悲しくて、そうやって過ごすうちに、僕は何かを失うのが嫌になっていた。
心に風穴が空くような虚しい喪失感を味わうごとに、自分の価値もなくなっていくように感じ恐怖を覚えた。
――このまま消えるのは、イヤだ。
必死になって自分の何かを探しても、元から何もない生活からはみつかりゃしない。他人に求めたところで、出てくるものは何もない。
それまで欲しがることを知らなかった僕には、大きすぎる難題だった。
ありもしない自分を探すのに苦しんでいたそのとき、ある少年を見つけた。
クラスメイトの少年、織斑一夏。クラスの中心的な存在で、強い志を持っている。
あのときの一夏を見て、僕は思った。
――そうだ、あの人を見本にすればいいんだ。同じように生きれば

いい……。

「――っ！」

浮かび上がる記憶は数年前から進み、新しいものへと切り替わる。
セシリアから決闘を申し込まれ、圧倒的に不利な状態で戦ったとき。

（一夏なら、きっと逃げない）

クラス対抗戦で正体不明のＩＳが乱入し、それを迎撃したとき。

（一夏なら、絶対にああするはずだ）

シャルルの正体を知り、その本当の目的と出生の秘密を告白されたとき。

（一夏なら、見捨てたりしない）

第三アリーナにて、ラウラにやられそうな鈴とセシリアの助けに入ったとき。

（一夏なら、怒って戦うだろう）

一夏なら　一夏なら　一夏なら　一夏なら　一夏なら
一夏なら　一夏なら　一夏なら　一夏なら……。
僕行動のすべての基準は、僕が見てきた一夏によるものだったのだ。

（ああ、いまわかったよ）

そう思うと、嫌に納得してしまう。
いつも一夏と戦いたくないと思っていたのは、向き合うことでこの

事実を思い出したくなかったから。
一夏に負けてほしくないと思っていたのは、誰にも負けない存在だと思いこみたかったから。
つまり、僕は――

（僕はずっと、一夏になりたかったんだ……）

ワアアアアアァァァ！

「！？」

突然響いた鼓膜を震わせる歓声で、我に返る。どのくらい時間が経過していたのか、いつの間にか試合の戦況はガラリと変わっていた。ラウラとの間合いをゼロまで詰めたシャルルの、左腕と一体となっている盾の装甲が弾け飛ぶ。

「この距離なら、外さない」

中から現れたのは第二世代型最強と謳われる、リボルバーと杭が融合した攻撃的なフォルムの装備。六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》。通称――

「『盾殺し（シールド・ピアース）』……！」

初めて、ラウラの表情に焦りが見えた。それは、文字通り必死の形相だった。

「「おおおっ！」」

ふたりの声が重なる。シャルルは左手拳をきつく握りしめ、たたき

込むように突き出す。
しかも、この戦いの中で習得したのか、瞬時加速を使ってでの接近だ。これなら全身停止は間に合わない。ピンポイントでパイルバンカーを止められなければ、直撃だ。

「！！！」

ラウラはその目を集中して一点に狙いを澄ましたーーが、外した。
一瞬、ほんの一瞬だけシャルルが笑顔を浮かべる。それはさながら死を宣告する天使のようだった。眩いほどに、罪深い、その笑み。
ズガンッ！！！

「ぐううっ……！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれる。ＩＳのシールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごっそりと奪われる。しかも相殺しきれなかった衝撃が深く体を貫いたのだろう。ラウラの表情は苦悶に歪んだ。
しかし、これだけでは終わらない。《灰色の鱗殻》はリボルバー機構により高速で次弾を装填する。ーーつまり、連射が可能なのだ。
ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！
続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの体が大きく傾く。その機体にも紫電が走り、ＩＳ強制解除の兆候を見せ始める。
ーーそして次の瞬間、異変が起きた。

◆◆◆

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。しかし、それでも――

（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。
一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体Ｃ－〇〇三七。
人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。
――暗い。暗い闇の中に私はいた。ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。
知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるのかという戦略。
格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。
私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。
しかし、あの世界最強の兵器――ＩＳの出現により世界は一変した。
その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。
危険性は全くない。理論の上では、不適合も起きない――はず、だった。
しかし、この処置によって私の左目にある『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。
この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることとなる。

そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。
世界は一変した。――私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。
そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。
そして、強烈に、深く、あの人に――憧れた。
その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。
――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。
私はある日教官に訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。
私は、その表情になぜだか心がちくりとしたのを覚えている。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ていると、わかるときがある。強さとはどういうもの

なのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるなら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに――」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。
そんな風に教官を変えてしまう弟、それを認められない。認めるわけにはいかない。
だから――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると！）

動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。
そうだ。そのためには――

（力が、欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。
そして、そいつは言った。
『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！
だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ・・・・・Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ・・・・・Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ・・・・・Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ・・・・・Ｃｌｅａｒ．

Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒｅａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ≫・・・・・ｂｏｏｔ．

「黒ウサギのオワリとハジマリ」（前書き）

最近になってお気に入り登録のやり方を覚えた機械オンチの睦月でございます

今回で学年別トーナメントが終了します
ここからはちょっぴりシリアスな展開が続きますが、基本的には今までと変わらないかもしれません
まあ、暗いままで続ける自信がないだけですが……（汗）

そ、それでは本編を、どうぞ！！

「黒ウサギのオワリとハジマリ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あああああっ！！！」

観客席から試合を見守る箒、セシリア、鈴は、ラウラの身を裂かんばかりの絶叫を耳にする。と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、シャルルの体が吹き飛ばされた。

「ちょ、ちょっと、いきなりどうしたっていうのよ！？　――！？」

「！？」

鈴とセシリアが息をのむ。その視線の先では、ラウラが……そのＩＳが変形していた。

いや、変形などという生やさしいものではない。装甲をかたどっていた線はすべてぐにゃりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。

黒い、深く濁った闇が、ラウラを飲み込んでいた。

「なんだ、あれは……」

箒は無意識につぶやいていた。

一度ぐちゃぐちゃに溶かしてから再度作り直す粘土人形のように、

闇はひとりでにうごめいていく。
やがてシュヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラを完全に包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。それが大地にたどり着くと、まるで倍速再生を見ているかのようにいきなり高速で全身を変化、成形させていく。
そしてそこに立っていたのは、黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳに似た『何か』。
しかしその形状は先月の襲撃者とは似ても似つかない。
ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。そして頭部にはフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。さらにその手に現れた武器は、白式の持つ『雪片弐型』にどこか似た、ＩＳ用の近接ブレードであった。
次の瞬間、黒いＩＳが一夏に向かって飛び込んでいく。

「――！」

このままでは、一夏が、桐斗たちが危ない。
直感的にそう思った箒は、観客席から走り出した。

◇◇◇

「ぐうっ！」

さっきまでシュヴァルツェア・レーゲンの形をしていた黒いＩＳが居合いに見立てて放った必殺の一閃は、俺の構えた《雪片弐型》を大きく弾じいた。そして敵はそのまま上段の構えへと移る。これは――まずい！

「！」

縦一直線、落とすように鋭い斬撃が襲いかかる。刀で受けることはできない、それはもう間に合わない。刹那、俺は白式に『後方退避』の緊急回避命令を送る。

かろうじて避けることができたものの、すでにシールドエネルギーが底をついていた白式に俺を守るすべはなく、軽く刃に触れた左腕からじわりと血がにじんだ。

今の緊急回避が最後の力だったのだろう。白式は、光とともに俺の全身から消えた。

「……がどうした……」

けれど、今の俺には――どうでもいい。

あの黒いＩＳが、あいつが使っているのは――千冬姉のかつて振るった刀。《雪片》に酷似していたのだ。

似ているというレベルではない。まるでトレースだ。

それに、さっき見せたあの居合いの技。あれは紛れもなく、千冬姉の太刀筋だった。

「それがどうしたあああっ！」

激しい怒りに突き動かされて、俺は握りしめた拳を武器に黒いＩＳへと駆けていく。
――許さねえ。許さねえ。許さねえっ！

「うおおおおっ！！！」

拳が黒いＩＳに触れるその寸前で、俺の体がぐんと逆方向へ引っ張られる。
背中に衝撃を感じて気がつくと、俺を引き離したのは紫燕を装備した桐斗だった。

「……！」

俺と目が合うと、動揺したように目をそらされる。

「離せよ、桐斗……！」

威圧のある低い声とともに桐斗をにらみつけるが、桐斗は無言のまま目を合わせない。
俺の態度が怖いのか、桐斗からは脅えたような感じが見て取れた。
だが、そんなこと今はどうだっていい。
俺はあいつに対するこの怒りを抑えることができない。この拳にして、ぶちかましてやりたくて仕方がない。

「……」

いつもと違う桐斗のおずおずしたようううな反応は、俺の怒りのスピードを加速させた。

「離せって言ってるだろ！　邪魔をするならお前も――」
握りしめていた拳が、桐斗に向かいだす。
「何をしているっ！」
突然、バシーン！　と横方向から顔をはたかれた。それに驚いた桐斗は俺を床に落とし、その勢いで俺の体は横向きに転ぶ。
顔面に感じる痛みと触れた床の冷たさに、限界まで達していた怒りの頂点が折られた。
俺は殴った相手を見上げる。
「箒！？」
驚いたような桐斗が遅れてＩＳの展開を解除する。
箒はいたはずの観客席側から走ってきたのか、肩で息をして額には汗がにじんでいた。
「お前たちはさっきから何をしているのだ！　わかるように説明しろ！」
「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ」
「千冬さんのデータって、もしかして『モンド・グロッソ』の時の……！？」
「ああ。あれは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」
黒いＩＳはアリーナの中央から微動だにしない。どうやら武器か攻

撃に反応して攻撃する自動プログラムのようなものなのだろう。俺の拳は攻撃と見なされなかったらしい。

呆れたように箒がため息をつく。

「お前は……いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、わけわかんねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」

力は、強さは、攻撃力じゃない。そんなものは強いとは言わない。ただ暴力なだけだ。

「理由はわかったが、今のお前に何ができる。白式のエネルギーも残っていない状況で、どう戦う気だ」

「ぐっ……」

箒の意見はもっともだ。今の白式には一撃はおろか、展開するエネルギーも残ってはいない。

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は収拾されるだろう。桐斗、お前も一緒に安全な場所へ――」

「でも、一夏は……一夏はやるつもりなんだろ？　危ないってわかってても、お構いなしに……」
静かに、うつむきがちのまま桐斗がつぶやくように言った。表情は隠れてわからないが、いつものように笑ってはいないことが声の暗さでわかる。それが、どこか痛々しかった。

「桐斗……？」

「止めても無駄だよ、箒。それが『一夏がやりたいこと』なんだろ……？」

ようやく俺を見た桐斗の顔はぎこちない笑顔に変わって、俺はひとまず安心すると同時に心強く感じた。
やっぱりこいつは、俺のことをよく分かってくれてる。

「……その通りだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

「……！」

俺の言葉を聞いていた桐斗の表情が一瞬だけ小さく歪んだような気がしたが、直後には箒の怒鳴り声に塗りつぶされた。

「お前まで何を言っている！　そもそも、どうするというのだ！
エネルギーはどのみち――」

「無いなら他から持ってくればいいよ。僕になら、できるかもしれない」

「シャルル……」

さっきの電撃から持ち直したのか、シャルルはふわりと俺たちの元にやってくる。

「桐斗、大丈夫？　怪我とかしてない？」

「あ、ああ……それよりさっき言ったことって……？」

「うん。普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？　だったら頼む！　早速やってくれ！」

「けど！」

びしっとシャルルが俺に指を指して言う。珍しく、その言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら桐斗と一夏は明日から女子の制服で通ってね」

「えっ……？　あ、ああ。わかった」

「了承するなよ桐斗！　ちゃんと話聞いてたか！？」

軽いジョークを交えた会話に緊張がいい意味でほぐれる。いつの間

にか血が上がっていた頭も、今は適度に冷えている。

「じゃあ、はじめるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可」

リヴァイヴから伸びたケーブルはガントレット状態の白式にと繋がれ、そこにエネルギーが流れ込んでくる。ふつふつと湧き上がるような力の奔流。それを感じながら、俺は不思議な感覚を受け止めていた。

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」

その言葉通り、シャルルの体からリヴァイヴが光の粒子となって消える。

それに合わせて、白式は再度俺の体に一極限定モードで再構築を始めた。

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分さ」

防御なし。当たれば即死、良くて重傷。けれど、一撃を食らわせるだけのお膳立ては出来た。後は――俺次第。

「い、一夏……！」

さっきの一言以降傍観していた桐斗が、振り絞るように口を開いた。その目はどこか戸惑いがちに俺を見ていて、不安をはらんでいる。

「負けてもいいから、だから……死んだりするなよ」

「桐斗……」

重い声でそんなことを言う桐斗の肩に、箒が手を重ねる。

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！　私たちはお前が――」

「お前がいるじゃねえか」

「え？」

「お前が、お前たちが俺の背中を支えてくれてるんだ。だから心配も祈りも不必要だ。ただ、今までみたいに信じて待っていてくれ。俺も、お前を信じる」

――もう、強さを見誤ることはない。力ではない強さを、俺は知っている。誰かを守るために強くあり続けた人を、誰よりも深く知っている。

ならば――ならば俺も、誰かのために強くありたいと、そう願う。そして、相棒の信頼に、応えたい。

「じゃあ、行ってくる」

「あ、ああ！　勝ってこい、一夏！」

力強く俺を見送る箒と、言葉なく静かに頷く桐斗とシャルル。それだけで、十分だ。

「じゃあ、行くぜ偽物野郎」

俺の右手、そこに握りしめた《雪片弐型》が意志に呼応して刀身を開く。

「零落白夜――発動」

絶対無効の力を持った長大な光の刃が現れると、意識を集中させる。暗い闇の中、一束の光が射し込むイメージ。そしてそれをさらに細く、鋭く、尖らせていく。その集中が頂点に達したとき、雪片に変化が起きた。

雪片の本来の実体刃はすべて消え、柄から上には零落白夜のエネルギー刃が――まるで桐斗のＩＳ、紫燕の『雷光演武』のように集約していた。

（ありがとよ、白式。じゃあ――行くぜ！）

俺は刀を腰に添え、居合いの構えで黒いＩＳへと向かう。

それは千冬姉の教えに習い、箒の姿に学び、桐斗とともに見てきた、『一閃二段の構え』。

『いいか、刀とはその重さを利用して振り抜くのだ。手にするのではなく、自らの一部と思って扱え。無駄なく、隙なく、油断なく、それを振るえ』

『ええい、どうしてわからんのだ！　やってみせるからちゃんと見ていろ！』

『頑張って練習してればいつかできるよ。一人より二人でやれば、もっと良くなるかも。一緒にやってみようぜ』

腰を落として構え、刀を持つ手は己が背へと導く。その目はただ前を真っ直ぐに見据え、けして揺らぐことのない穏やかなる水面を心の中に思い浮かべる。
そして、全ての動作に反応できるよう、己の感覚を――その意識を、ただ一点、正面の敵のみにと閉ざしていった。

「……」

黒いＩＳが刀を振り下ろす。それは千冬姉がするのと同じ、早く鋭い袈裟斬り。けれど、そこには千冬姉の意志はない。ならばそれは――

「ただの真似事だ」

ギンッ！　腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く。
そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち斬る。
これこそが一閃二段の構え。一足目に閃き、二手目に断つ。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れる。そして、気を失うまでの一瞬であろう間に俺とラウラの目があった。眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。
それはなんだかひどく弱っている、捨てられた子犬のような眼差しに俺には見えたのだ。

「……まぁ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

力を失って崩れるラウラを抱きかかえて、俺はひとりそうつぶやい

た。それが果たして聞こえたかどうかは、ラウラだけが知るところだろう。

「一夏っ！　な、何をやっているか！」

「え？　いや、だってこうしないと落ちるだろ」

気を失ったラウラを抱きかかえる俺になぜか怒り心頭で詰め寄る箒。
その後ろで少し困ったように笑うシャルル。
だが、桐斗だけは離れた場所で俺たちを見ていた。その表情はまたどこか影を帯びているようで、俺はおかしく思った。

「……？」

それからすぐに、ラウラは駆けつけた数名の先生たちに担架で運ばれていった。俺たちも一緒に保健室へとつれて行かれることになり、そのまま誘導される。
そんな時に、俺は桐斗に笑いかけた。

「やったぜ桐斗」

「あ、ああ……」

ぎこちなさそうに頷く桐斗。
今回も、桐斗に助けられた。こいつはいつも俺を信じてくれた。だ

から俺は安心して前を向けるし、進むことができる。
俺が走りすぎる時には止めてくれるし、迷ったときは背中を押してくれる、心強いやつだ。
今までも、何度も力を貸してくれた。
だから俺は、改めてを感謝を言葉にする。

「ありがとよ、信じてくれて」

「――――っ！」

それを聞いた桐斗の顔がわずかにゆがんだが、一瞬でさっきまでの動揺したようなそれに戻る。
さっきからの桐斗の反応の意味がわからず、俺は混乱してしまう。
試合の時も、俺と戦わないようにしていた行動の理由も理解できていないままだった。
でも、今はこの達成感を相棒であるこいつと共有したい。
だから俺はいつものように笑って、右の拳を持ち上げて突き出した。

「ほら、やろうぜ。いつものやつ」

「――――！」

今度はわかった。小さく身をすくませた桐斗の瞳が、はっきりとその感情を表している。
――こいつは今、俺に恐怖した。

「……ごめん」

「え……？」

苦しげな謝罪の意味がわからない俺から目をそらし、桐斗は足早に誘導する教師についていく。
数十分前は確かに感じた感触が返ってくることはなく、虚しくのばされた俺の拳はただ脱力してだらりとぶら下がっただけだった。

◆◆◆

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかもわからねーやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか。どうして向かうか、さ』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ？』

そして、そいつは――その男は――ニヤリとして言った。

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

――では、お前は……？　お前はなぜ強くあろうとする？　どうして強い？

『強くねえよ。俺は、まったく、強くない。けれど、もし俺が強いっていうのなら、それは――』

――それは……？

『強くなりたいって想いを、支えてくれる奴がいるからさ』

――あの、お前の相棒のことか……？

『ああ、あいつが一番俺の強さを支えてくれてるんだ。だから俺も、あいつに応えてやりたい』

――。

『それに、強くなったら、やってみたいことがあるんだよ』

――やってみたいこと……？

『誰かを守ってみたい。自分のすべてを使って、ただ誰かのために戦ってみたい』

――それは、まるで……あの人のようだ。

『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやるよ』

そう言われて、私は――ああ、そうか。これが……そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの一五歳なのだと、ただの『女』なのだと。

――織斑、一夏。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

「戦女神と卑怯者」（前書き）

申し訳ありません、更新遅れました！
相変わらず暗いですが、ちょっとでも楽しんでいただきたいです

と、とりあえず本編を、どうぞ……

「戦女神と卑怯者」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

窓ガラスから差し込む赤い日差しは、廊下のいたるところに影を作っていた。しかし夕焼けは長くは続かない。すぐに日は沈み、夜が来る。
僕が声をかけられたのは、そんな夕焼けを見ていた時だった。

「盗み聞きが好きなところまであいつと同じようにするとはな。まったくつくづく愚か者だよ、お前は」

「……」

保健室から出てきた千冬さんの目は、お世辞にも優しいとはいえない。いつも刀のように鋭い視線は更に研ぎ澄まされ、僕を睨みつける。
しかし、言い訳はできない。すべて事実なのだから、仕方がないのだ。
千冬さんがたった今までいた保健室には今日起こった事件の中心人物、ラウラ・ボーデヴィッヒがいる。彼女たちの会話に、僕はこの保健室前の廊下で聞き耳を立てていた。
僕もさっきまで教師から事情聴取をされていたのだが、トイレに行くと嘘をついて抜け出してきたのだ。

「……お前がここに来た理由を当ててやろうか。発端は、今日の試合中にあった事件にある。お前ラウラにＶＴシステムについての話を聞くために来た。ちがうか……？」

皮肉をたっぷりと含んだ千冬さんの言葉が僕の内心を見抜く。しかし、その語調には溜まりきった苛立ちが込められているのがわかる。忌々しいものを見る厳しい瞳が、僕を突き刺した。

「……桐斗。お前、ＶＴシステムを欲したな？」

「――っ！！！」

杭を打ち込まれたかのような衝撃が僕を苦しめる。一瞬でも残酷すぎるほどの痛みに、だけど僕は抵抗できない。

今日の事件でラウラが変貌した原因、ＶＴシステム。その正式名称は、ヴァルキリー・トレース・システムという。過去のモンド・グロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）のＩＳ操縦による動きをトレースするシステム。それが、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに積まれていたらしい。らしい、というのは、僕がさっきまでドア越しに千冬さんとラウラが話しているのを立ち聞きしていたからだ。

あれがあれば、僕はあいつに――一夏になれるかもしれない。でも、本当はわかってるんだ。ＶＴシステムに使われるのは過去の部門受賞者（ヴァルキリー）のデータだ。公式試合に出たことすらない一夏のデータなんてあるわけがない。それに、そんなことをしても一夏にはなれないことはわかってる。

いや、一夏になること事態が僕には不可能なんだ。頭では理解しているはずなのに、気づけば、僕は嘘をついてまでこの場所に来ていた。

千冬さんは僕のことに気づいていたんだ。きっと、ずっと前から。

真っ直ぐ生きてる一夏がまぶしくて、誰でも惹きつける一夏が羨ま

しくて、僕に無いものを持っている一夏が妬ましかった。
数刻前に見た、一夏の姿が思い出される。

『ありがとよ、信じてくれて』

違う。違うんだ。
僕は一夏を単純に信じているわけじゃない。
一夏を信じないとそれを模して生きている僕がなくなってしまいそうで、だから根拠もない言葉を口にしていただけなんだ。

「……お前は昔からそうだ。自分を信じられないから見失い、そこから他人になろうとする。戦う前から現実から目を背けて逃げ続け、他人をだまし続けて……。お前のやっていることは、ある種の裏切り行為だ」

千冬さんは僕に視線を合わせようとするが、僕はそれから逃げ続ける。
結局、僕もラウラと似たようなものだ。誰かの影に依存して、それに縋る生き方をしてきた。
僕に至っては、そんな生き方しか知らないのだ。

「いい加減に己の道を見つけろ。いつまでも一夏の存在に縋って生きて、それではお前自身が――」

「僕自身ってなんだよ……！」

思わず、口が開いていた。力を込めた喉のせいで、声は妙に潰れている。

「僕だって知らないんだよ、そんなの……。たくさん持ってる一夏

や千冬さんと違って……僕には何もないんだ……！　己の道なんて全然わからないんだよ……！」

何かを欲したから、一夏になろうとした。一夏になれば、手に入れられると思った。そうしているうちに、僕は一夏になりたいとしか考えなくなっていたのだ。

わかってる。そんなのは歪んでいるということは。ただ、己の醜さを隠したいがために自分で自分に蓋をして、何年もの間目を背け続けていた。

その結果が、この有り様だ。

「……お前、悪い意味で変わったな。昔はもう少し自己というものを持っていたが、今は完全に一夏に依存しているだけだ。一夏と戦えば少しは改善されると思ったが、逆効果か……」

「……あのトーナメント表の改竄、千冬さんがやったんですか……？」

「いいや、あれについては事実を述べた。まあ、だいたいの見当はついているがな……」

忌々しい何かを思い出すかのような千冬さんの言葉は、僕の耳に入っても響きはしない。

「篭手川桐斗。――お前は誰だ？」

さっき保健室でラウラに訊いたのと同じ質問を、今度は僕に向けた。ラウラはこれに答えられなかった。だが、きっと彼女は近いうちに自分自身を見つけるだろう。生き方を知っているのだから。

でも、僕はそれすら知らない。

「……逆に、教えてほしいです。僕は、誰なんですか……？」

「……自分自身になることすら諦めたやつのことなど知るか。自身で考えて、自分で決めろ」

「それができたら、苦労しませんよ……」

「だとしても、やれ。お前にはもはやそうするしか道がないんだ」

落胆するようにため息をつかれる。

「最後に言っておくぞ」

今までとは違う、威嚇するような低い声で言われてから、千冬さんの鋭い目はしっかりと僕をとらえた。

その視線からまた逃げようと顔を逸らたら、襟を掴み上げて無理やり顔を自分側に向けられる。

間近に迫る瞳には、爆発寸前にまで膨れ上がった怒りが写されていた。

「お前は一夏にはなれない。ましてや、他の誰かになることなど今のお前に許されることではない。よく覚えておくことだ……」

そう言い切った千冬さんは乱雑に襟をはなし、廊下を足早に歩いていった。

その後ろ姿からは、話しかけるなという威圧が湧き出ている。

「……」

また、今までの自分を思い返す。
自分を失うのが怖いから、ずっと一夏になろうとして縋って生きてきた。
でも、もっと怖いことがある。
一夏に、こんな僕を見てほしくない。
一夏だけじゃない。みんなが僕の正体に気づいた時に、知られた時にどんな言葉を言われるのかがとんでもなく怖い。
一夏になろうとしていた僕ならわかるはずなのに、そのことを考えたら怖くなって想像することができなかった。
気がつけば、一夏と向き合っているだけで心に圧力がのしかかってくるようになっていた。
僕は一夏にはなれない。その事実は、彼の姉によって改めて突きつけられた。
なら、これから僕はどうやって生きればいい？

「……」

その場で腰を落とし、膝を抱える。
どうしようもなく惨めで悲しいはずなのに、流せる涙はとっくの昔に失っていた。

「もはや病気の……」（前書き）

すいません、とある事情により更新が遅れました！

しかもあまり進んでいないというこの失態……

と、とにかく本編を、どうぞ……！

「もはや病気の……」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

日が沈んで少しした頃、僕は体をずるずると引きずりながら寮に帰ってきた。
帰り道の途中で教師に見つかって、お説教込みで個別の事情聴取を行われたが、僕はほとんど生返事を返していただけだ。結局、事情聴取からは三十分で解放されたのだった。

「……」

先ほどから続く空腹感が鬱陶しい。行動しようとする気力はほとんどないのに、無情にも身体というものは正直だ。空気を読まないにもほどがある。しかも本能は生理現象に逆らえないときたから、尚更だ。
とりあえず、今から食堂へ行って夕飯にありつこう。食堂が閉まるまでまだ一時間ほど余裕があるはずだ。

「まったく一夏の奴め、だいたいあいつはいつもいつも――」

「ん……？」

食堂に向かっている最中、廊下の向かいからずかずかと歩いてくる女子を見つける。その見慣れたファースト幼なじみこと箒は、苛立

ちをあらわに歩を進めていた。

「ちょっとくらいは私のことを――っ！　き、桐斗！　お前、今まで何をしていたのだ！？」

僕に気づいた箒が、別の意味で怒りを表す。

しまった。今のこの脱力した状態がバレたら、間違いなくおかしく思われる。

瞬時にそう判断した僕は、いつも通りの対応を心がけた。

「い、いや。ちょっと先生と話してたら遅くなってさ……。それより箒、どうかしたのか？」

「むぅ……」

痛いところを突かれたかのように、箒が押し黙る。さっきまで怒っていた態度もいきなり小さくなっていたが、熱は残って頬を赤く染めていた。

すると、視線をうつむけて腕を組んみ、落ち着かないように制服の袖をいじりだした。

「……その……お、お前は覚えているか？　えっと、先月の……」

「先月？」

「私が部屋を移った日だ！　わ、忘れたとは……言わせんぞ……」

もごもごと口を動かしているので聞き取りづらいが、なるほどだいたい想像がついた。

先月の終わりにいきなり宣言された「付き合ってもらう」という言

葉。あれは学年別トーナメントで優勝したらという条件付きだった。
おおかた、というか確実に、一夏がその言葉の意味を履き違えて受け取っていたんだろう。「買い物くらい付き合うぞ」とでも言ったんだろうな、あの朴念仁は。
確信を持ててしまうあたり、僕の依存はかなり深刻らしい。

「そ、それで……お前はどうなんだ！」

「え？　あ、ああ……大丈夫。僕はちゃんとわかってるから」

「……言っておくが、買い物に行きたいわけではないぞ……」

わかってるって言っただろ。
せっかく頼まれたんだから、ちゃんと答えるべきだ。

「僕でよかったら付き合うよ」

「――――、買い物に行きたいわけでは――」

「だからわかってるってば。何度も言わなくていいよ」

「――！　そ、それでは……私と……！？」

「うん。むしろこっちからお願いしようかと思ってたぐらいだし」

「そ、そそ、そうだったのか！？　本当に、本当にか！？」

よっぽど驚いたのか、箒の顔が一瞬にして真っ赤に染まった。
なんだかさっきから疑われてばっかりだな、僕。

「あ、ああ」

「そ、そうかそうか。それならよかったのだ。うむ……」

視線をあちらこちらに泳がせるのと同時に両の手をもじもじと絡ませる箒の表情は、恥ずかしいと嬉しいが混じって詰め込まれたかのようなそれだ。

「いやあ、僕も心配だったし。ありがたいよ」

「そ、そうか！」

「それじゃあ箒、一夏とのデート頑張れよ」

「……。……、は？」

「いやだから、一夏と付き合うからサポーターとして付き合ってくれってことだろ？　今回はダメだったみたいだけど、買い物とかを口実にすればデートくらいできると思うから、草場の影からこっそり見守っておくよ。頑張れ、箒」

「……」

びきびきっ、びきぃっ！　と箒の表情がこわばる。しかもいつもより倍くらいの威圧を感じる。

ヤバい、ヤバいぞ、何でか知らないが箒ダイナマイトの導火線に火がついた。

「……ふたりそろって……」

「は、はい？」

「お前たちはふたりそろってそれか！」

ずどんっ！！！

「はぐぉっ！」

振り抜くような勢いで放たれた手刀。アバラに突き刺さったそれはミシリ、と骨を軋ませる。

「てやっ！」

とどめとでもいうような回し蹴りが、さっきと同じ箇所にクリーンヒット。

……おいおい、一瞬だけどスカートの中の白い布地が見えちゃったんですけど……。

「あ、あ、あぐ……」

苛立ちをそのまま足踏みにして去っていく箒を目で追うこともできず、僕はその場にくずれおちる。骨の中心までダメージが残っているため、しばらくは起きあがれそうもない。

そこに、僕に近づく二人分の足音が。

「ま、当然といえば当然の報いよね」

「まったく。ここまで重症だとわざとやっているのかと思うほどですわ」

ため息混じりの声は見上げなくてもわかる。鈴とセシリアだ。
「ど、どういう意味だよ、それ……」
「さあ？」
「自分で考えなさいよ」
それだけ言って、先ほどの箒と同じくどこか不機嫌そうに歩き去っていくふたり。
意味が分からん。僕が一体何をしたっていうんだ。いや、後ろめたいことはあるにはあるけど。
それから数分ほど経っても、アバラの痛みはまだ残っていた。
空腹のときにこれは堪えるなぁ……。
「あ、篭手川くん。ここにいたんですね。さっきはお疲れ様でした」
すると、今度は山田先生がやってきた。
ああ、やっと安らげるような人が――っ！？
「……」
「あ、あれれ？　篭手川くん、何で視線をそらすんですか？　そういう行動は社会ではあまり良く受けられませんよ」
「い、いや。あの……」
僕に言い聞かせるように顔をのぞき込んでくる山田先生。
さて、今の状況を簡単に整理してみよう。僕はまだアバラが痛むので微妙に屈んだ体勢となっている。対して小柄な山田先生がそんな

僕の顔をのぞき込むということは、やはり少し見下ろすような位置にいるわけで。自然と、決してわざとじゃないが、目線はそのたいそう立派な胸元にいってしまうのだ。
前の実習であんなことになってから、なんだか妙に意識してしまうので困ってしまう。
うぅっ。平常心だ、平常心。
しかし山田先生はそれに気づいておらず、僕の指導のためにさらに腰をかがめてくる。

「もう、また！　ちゃんとこっちを向いてください」

山田先生の教師魂に火がついたのか、ついには僕の肩を両手でつかんで強引に自分の方を向かせた。
その見た目からは想像できない力の強さは、流石は元代表候補生というところか。
しかも、たわわな胸は両腕に挟まれてますます存在感をアピールしてくる。
ぐはっ。や、ヤバい……これは健全な十五歳男子にはダメージがデカいぞ。
だ、誰か助けて。

「や、山田先生……ちょっと待ってください……」

――ギュゥッ

「痛たたたたたっ！？」

突然、背中に走る痛み。
頭だけを動かして振り返れば、そこにいたのはにっこりと黒い笑みを浮かべたシャルル。その手は、僕の背中をきつくつねっていた。

「シャ、シャルル。いつから、そこに……」
「さあ、いつからだったかな？　それよりも、鼻の下が伸びてるよ」
「なぁっ……！？　そ、それは誤解だよ！」
「ふん。どうだか」
つねるのを止めてはくれたものの、ぷいっとそっぽを向かれてしまう。
何でこんなに機嫌が悪そうなんだ。僕の周りの女の子はさっきからみんなこうだ。
「あれ、デュノアくん？　織斑くんと大浴場に行ったんじゃなかったんですか？」
先ほどあがった苦痛の声にびっくりした山田先生は肩から手を離し、僕とシャルルをきょとんといったように眺めていた。
「あ、いえ。忘れ物があったので戻ってきたんです。一夏には先に行っててもらいました」
「大浴場？」
おかしいな。男子が大浴場を使えるのは来月の話で、まだ女子だけのはずだ。
すると何かを思い出したように、山田先生が手をパチンと合わせる。
「そうでした！　織斑くんとデュノアくんにはもう伝えましたけど、

篭手川くんにはまだ言ってなかったですね。実は、今日から男子の大浴場使用が解禁なんです！」

「えっ、そうなの！？」

「うん。今日はボイラー点検があったからもともと使えない日だったんだけど、点検も早めに終わったから男子に使わせようってことになったみたい」

なるほど、納得だ。この数ヶ月シャワーばかりの生活だったので、湯船につかれるというのはなんとも嬉しいことである。
喜ばしいと同時に、シャルルが今ここにいる理由にも気がつく。
シャルルは実は女の子なのだから、一夏と一緒に風呂に入るというのは非常にマズい。しかも一夏はその事実を知らないので、ヘタをしたらあっさりと性犯罪者となってしまう確率は高い。
それを回避するためにシャルルは「忘れ物をした」という嘘をついて危機を脱したということだろう。
チラリとシャルルに目を向ける。
僕の考えていたことを察したのか、シャルルは少し困ったように頷いた。
ううむ。仕方ないな、ここはなんとかして切り抜けるか。

「あー……。それじゃ、僕たちも準備してから入ります」

「！？」

「わかりました。今日の疲れも肩まで浸かってしっかり取ってくださいね！」

驚いたように息をのんだシャルルに気づかないで、山田先生はその

まま大浴場の方へと歩いていった。よし、これで準備は万端だな。

「それじゃあ、あとは一夏が出るのを見計らってから大浴場に行こうか。……シャルル？」

返事のないシャルルを見てみると、うつむき気味になって指をもじもじと絡ませていた。表情は見えないがなんだか耳まで真っ赤にしている。どこか体調でも悪いんだろうか？

「きっ……桐斗は、その……ぼ、ぼぼ、僕と一緒に、大浴場に行きたいの……？」

「うん？　そのつもりだけど……」

「っ～～～～～～！！」

僕の言葉に小さく飛び跳ねるように反応するシャルル。やっと確認した彼女の顔は耳よりも赤く、熱を帯びているように見えた。

「さっきから変だけど、どうかした？　しんどいならお風呂入らずに部屋で休む？」

「えっ！？　う……ううん！　い、い、一緒に行く！」

意を決したのか、シャルルが力強く主張してきたのでその気迫に若干たじろいでしまう。まあ、いいならそれでいいんだけど。

「そ、そうか。なら、先に何か食べてきてもいいかな？　昼はあまり食べてなかったから、お腹空いてて」

「う、うん。だったら、僕も準備しておくから……へ、部屋で待ってるね？」

「わかった」

湯気が出そうなほど顔を上気させたシャルルは、寮の部屋へと走っり去っていった。先生に見つかったら怒られそうだな。

それはそれとして、夕飯をとって部屋に行くか。大浴場に行くのはその後だ。

それから僕は、一夏と鉢合わせないように、食事と準備にそれなりに時間をかけた。

「絶叫のデンジャー・デイズ」（前書き）

今回で第二巻のおはなしは終わりです
ながかった、ここまでくるまでながかった……！

今回は少し長くなっております

それでは本編を、どうぞ！！

「絶叫のデンジャー・デイズ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あ、二人とも遅かったですね。織斑くんはもう出てしまいましたよ」

「あ、いや。かまいません」

「……」

さっきから相変わらずの赤面状態で口数の少ないシャルルと僕は、幾分かテンションの高い山田先生に出迎えられた。

「大浴場使用が可能な時間はまだ残ってますからね。ごゆっくりどうぞ～」

そのまま笑顔で脱衣場に招かれて、パタリとドアを閉められる。そのまま訪れる沈黙タイム。シャルルが無言なので、やりづらくて仕方がない。

「……」

「……。シャルル」

「は、はいっ！」

うわっ、びっくりした。やけに興奮した返事がとんできたので、着替えを落としそうになった。

シャルルの視線は右往左往に泳ぎまくっていて、本気で身体の調子を心配してしまう。なら、ここは早く言うことを言っておくべきだよな。

「そんなに固くならなくていいよ。風呂に入るんだろ？」

「う……うん。あ、あのね……僕、こういうことって経験なくて……」

「初めてなの？　それなら、別に気を遣ったりしなくていいぞ」

「そ、そう……？　そ、それならいいけど……。僕、桐斗にだったら――」

「それじゃあ、ゆっくりくつろいできなよ。僕はここで適当に時間潰しとくからさ」

「……。……はい？」

真っ赤にしていた顔から一変して、シャルルはきょとんとしていた。漫画とかだったら、目が点になっているんじゃなかろうか。

「大浴場に入るの、初めてなんだろ？　僕は後で部屋に帰ってからシャワーを浴びるから、シャルルは風呂に行ってきたらいいよ」

「……桐斗。さっき言った、一緒に行くって――」

「ああ。別々に来たら山田先生に変に思われるかもしれないからさ。誤魔化すためにも、脱衣場までは一緒に来た方がいいかなって」

こうすれば怪しまれることもないだろうし、シャルルもゆっくりとお風呂を堪能できる。

それに大きいお風呂は初めてみたいだから、ここは今日の功労者であるシャルルに譲ることにしようという考えだ。湯船に浸かれないのはちょっと口惜しいが、シャルルに疲れを残してほしくないしな。

「……」

「……あ、あれ？」

何故だろう。シャルルが今度は冷たい目でこっち見ている気がする。僕、なんか変なこと言ったか？

「はあ……。そうだよね、考えてみれば当たり前だよね……」

ため息までついてしまった。やっぱり、かなり疲れているんだろうか？

とか思っていたら、次には何か思いついたように目を見開いて――

「――。……っ！」

すぐに顔をそらされる。心なしか、頬が朱に染まっていたように見えた。

さっきからせわしなさそうだが、どうしたんだろう？　調子がいいのか悪いのかさっぱりわからない。

「き、桐斗が入ってきてよ。僕が待ってるから。その……お風呂ってあまり好きじゃないし。桐斗は好きなんじゃないの？」

「えっ。えっと、その……好き、です……」

うーん。風呂が好きなのは当たってるんだけど、口に出して言うのは恥ずかしいな。年寄り臭いって言われるのもシャクだし――あれ？　なんでシャルルは妙にうっとりした瞳でこっちを見てるんだ？

「どうした？」

「ど、どうも！？　と、とにかくっ、桐斗はお風呂にどうぞ！　僕のことは気にしないでいいから、ね？」

「……えっと、いいのか？」

「う、うん」

「そっか。それなら、ありがたく受け取る。お返しに今度何かおごるよ」

こうまで言ってくれているのを無碍にするのは、気が引けるし無粋と言うものだ。それに、考え事をするなら湯船に入った方がラクになれる。

早速シャルルの視界に入らない場所まで移動して、そこから服を脱いで畳んでおく。これは中学時代の夏休みに旅館のバイトをしていた時についた癖で、急いでいないときはたいていこうしている。

「……」

大浴場に入る前にシャルルに声をかけようかと思ったが、今のタオルを腰に巻いただけの格好を見てやめた。だって、なんか恥ずかしいから。
そういうわけで、大浴場への扉をカラカラと開く。

「うわっ。すっげー……」

広い。とにかく広い。
大浴場は湯船大が一つにジェットとバブルのついた湯船中が二つ、加えて檜風呂が一つ。さらにはサウナ、全方位シャワー、打たせ滝までついている。
なんという充実の設備。これが国立の本気というやつか。てっきり町の銭湯のようなものを想像していたので、衝撃的な光景だった。
一夏のやつは、これを見てはしゃいだに違いないだろう。

「――また一夏、か」

無意識に大声を出しそうになった自分に嫌気が差す。
また一夏と同じことをしようとしていた。いや、あるいはすでにやっているのかもしれない。
小さなため息をつき、ひとまずお湯で体を流してボディソープで体を洗う。だが普段は心地よく感じるものも、今はどこかに虚しさがあった。

「――お前は何者だ、ね……」

さっき、千冬さんに突きつけられた言葉をつぶやく。
今までの僕は一夏をまねして生きてきただけの存在だ。この数年間、僕はずっと一夏になろうとして過ごしてきた。
そんな生き方は、卑怯で醜い。そんなことはわかっている。だけど、

僕はそんな生き方しか知らない。

――なら、僕はこれから何をして生きていけばいいんだよ……。

『いい加減に己の道を見つけろ』

知らない。そんなの僕は持っていない。

僕には何もないんだ。

「……」

気づけば、いつの間にか髪まで洗っていた。いくら難しいことを考えていても、手に染み着いた習慣は意志とは関係なく動いてしまうので恐ろしい。

髪に着いた泡を流して、いよいよ湯船に入る。

数ヶ月ぶりに味わう温もりが全身に染み渡り、一日のゴタゴタで張っていた筋肉もほぐされていく。それに身を委ねて、静かに風呂を堪能した。

こうしているとなにもかもがどうでもよくなってくるが、そういうわけにもいかない。胸の内にはまだドロドロした感情が残っているのだ。

カラカラカラ……。

（……？　なんだっけ今の音。脱衣場の扉を開けたときに聞いた気がする……）

しかしぼーっとしているのと暗い思考のせいで、まともに興味を示せない。

ぴたぴたぴた。

裸足で歩く足音まで聞こえるような気がする。

しかしこれにも大した興味がない。

「お、お邪魔します……」

かわいらしい声が聞こえてきたがこれにも興味が――――って、

「はいいいっ！？」

湯船に沈んでいた肩を跳ね上げさせる。湯煙の向こうから現れたのは、一糸まとわぬ姿のシャルルだった。

その体には当然タオルを当てて隠しているが、所詮薄手のスポーツタオルではその向こうの肌色がうっすら透けて見えていてさらにボディラインは逆光のせいもあってはっきりくっきり見えているので隠しきれてはああ！？

（おいおい、ちょっと待てよシャルル。一体なに考えてんだ、やめろよ）

そう言いたかったのだが、神経はすでにショート寸前のため「お、おいっ、おいっ……！？」としか言えなかった。

うわ、情けねぇ……。

「……あ、あんまり見ないで。桐斗のえっち……」

「！　ごっ、ごごごっ、ゴメンナサイっ！」

ああああああああああ、ヤバい、ヤバいヤバいヤバい！

とにかく回れ右して脱出しよう！ああいやダメだ、今湯船から出たらシャルルに裸体をさらすことになる。見るのも恥ずかしいけど見

られるのもとんでもなく恥ずかしい！八方塞がりとはこのことか？

「どうする？　どうするよ僕！？」

「き、桐斗、声に出てるよ……。ぼ、僕が一緒だと、イヤ……？」

「いや決してまったく全然そういうわけではありませんけどねハイ！」

イヤなわけがない。だがしかし、これはかなり恥ずかしい。僕だって健全ないち十五歳男子。人並みに異性に興味があるし、その……こ、興奮も、してしまうわけで……。しかもこういった事態に対する免疫が無いので、どうしたらいいのかわからない。
ああヤバい、心臓がバクバクいいすぎていて口から飛び出そうだ。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。――め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いやいや、上がるなら僕が――しまった無理だった……！」

１０秒前の記憶まで吹っ飛んでいる。これは重傷だぞ。

「そ、それじゃあ、あのね、話があるんだ。大事なことだから、桐斗にも聞いて欲しい……」

「……は、はい……」

脱出ハ不可能。現状ヲ維持セヨ。
しかし大事な話と言われたら、聞かないわけにも行かない。すでにシャルルには背を向けていて、その姿は見えない。

ゆっくり深呼吸して自分を落ち着かせる。

「その……前に言っていたことなんだけど」

「前って……もしかして、学園に残るって話？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

「そ、それに？」

「……」

返ってきたのは沈黙。呼吸の音だけがかすかに反響する大浴場が、やけに頼りなく感じる。

なんだ？　シャルルは一体なにを言おうとしているんだ？

ちゃぷ……。

「へ……？」

妙な水音が耳に入ったが、振り返るわけにもいかない。

そのよりもこの状況をどうにかする策を探ってみるが、そんな考えは次の瞬間に吹き飛んだ。

ぴとっ……と、僕の背中にシャルルの手が触れてきた。

「なっ！？　えっ、ちょ――」

そのまま、手は後ろから僕を抱きしめる。背中に華奢な体が密着して、温かくて柔らかい感触が確実に肌からえええええええええええっ！？

今度こそ心臓が口から飛び出たかと思った。

「桐斗が、僕は親とは違うって言ってくれたから。そんな桐斗がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「……」

返事をしたいのに、言葉が出てこない。思考回路もうまく働かないので状況分析もまともに行えない。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ。僕のあり方。桐斗が教えてくれたんだよ？」

「え……？」

シャルルの、あり方……？

――シャルルも、自分の何かを見つけたのか。

一夏、箒、鈴、セシリア。みんな自分自身の何かを持っている。シャルルもラウラも、新しく自分らしい何かをつかんだ。

（僕とは、大違いだな――）

僕には掴めない。見つけられない。行く先には、何も落ちていない。

「だから、だからね……」

シャルルの温もりが、僕を現実に引き戻してくれた。

「僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？　ふたりきりのときだけでいいから」

「そ、それって……」

「僕の本当の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「……しゃ、シャルロット……」

「ん」

嬉しそうにシャルル――いや、シャルロットが返事をした。それはまるで子供のような無邪気さで、あのいつもの屈託のない表情がすぐに想像できた――が、正直僕はそれどころではない。

「シャルロット」

「ん」

いや、『ん』じゃなくて……。

ポタ、ポタ――

「シャルロット……」

「ん……」

なぜか声に艶やかさを込めたシャルロットが抱きつく力を強くしたのが、トドメとなった。

「……もう、限界――」

「え？」

ボタボタボタボタボタ――

視界がぐらりと揺れる。

鼻から滝のように流れ出る赤い液体で濁った湯に頭から突っ込んで、ざっぱあんと派手に波を立てた。

「ちょっ、桐斗！？　しっかりしてぇ！」

焦ったシャルロットの声を最後に、僕の意識は手放された。

――後にこれは、『ＩＳ学園　地獄風呂事件』と呼ばれることとなる。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

学年別トーナメントから翌日。俺は朝から、非常に気まずい空気の中にいた。

「……」

「……」

隣の席に座る相棒が、ちっとも目を合わせようとしてくれない。昨日のトーナメント終了のときからずっとこうだ。

あいさつはほとんどいつも通りなんだが、それ以外の会話にはいると視線をそらされて口が減ってしまいあげくの果てには黙り込んでしまう。それなら何か笑える話題をと思い、昨日大浴場で気絶した話を持ち出してみたら、なぜか顔を真っ赤にさせて頭を抱えていた。

昨日の夜、俺と入れ違いで風呂に入った桐斗はいきなり倒れたのだ。シャルルと山田先生が救援として俺を呼んできたから、俺もその現場を見た。

自らの鼻血で湯に浸かるまま意識を失った桐斗を見たときは、何かサスペンスドラマの撮影中かと思ってしまった。

箒や鈴も心配して部屋までかけつけてくれたが、結局は疲労による貧血という診断になったのでひとまず安心したのだ。

一緒に風呂に入っていたらしいシャルルに詳しい事情を聴こうとしたが、顔を真っ赤にして会話もしどろもどろになるので、原因はわかっていない。

桐斗も一時間ほど経ったら目を覚ましたので、それ以上の追求はやめておいた。

しかし、なぜこれほど避けられているのかがわからん。俺、何かしたか？

聞き上手のシャルルに相談しようと思ったが、教室には姿がない。『先に行っててて』というので食堂で別れたのだが、何かあったのだろうか。

一度ぐるりと教室を見渡すと、シャルル以外にラウラもいなかったが、これはまあ昨日の負傷で休んでいるんだろう。それとたぶん、事情聴取もあるだろうし。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します」

考え事をしていたら、いつの間にかホームルームが始まっていた。
いかんいかん、大事な話のようだからしっかり聞かねば。
「転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」
なにやらふらふらの山田先生が説明を続けるが、よくわからない。
……何？　転校生？
クラスのみんなもそこに反応したらしく、一斉に騒がしくなる。
「じゃあ、入ってください」
「失礼します」
え？　この声って――
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」
ぺこり、スカート姿のシャルル――改め、シャルロットが礼をする。
俺を始めクラス全員がぽかんとした。
――え、何これ？　どういうことだ？
「ええと、デュノアくんはデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」
なるほど、山田先生の憂いはそこにあったのか。
……て、待・て・よ？

「え？　デュノア君って女……？」
「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、織斑君と篭手川君、同室だから知らないってことは――」
「ちょっと待って！　昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」
ザワザワザワッ！　教室が一斉に喧噪に包まれ、それはあっという間に溢れかえる。
――あ。まずい。桐斗もだけど、俺もまずい気がする。
バシーン！　教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く。
「桐斗ぉっ！！！」
どどんと登場、凰　鈴音。その顔は烈火のごとく怒り一色。背後には昇竜が見える。ああ桐斗、このままだとこの中国四千年の歴史に葬られるぞ。
ＩＳアーマー展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。
「えぇぇっ！？」
悲鳴をあげるが、それで許すような鈴ではない。衝撃砲は唸りをたてて発射を――
「――って、ちょっと待て！　この射線上だと俺にもあたるじゃねえか！」

鈴の奴、桐斗しか目に入ってねえのか！

「死ね！！！」

構わずに、衝撃砲は発射される。

――あー、これは、死んだなぁ――。

明日の朝刊の一面は決まりである。

『哀れ高校一年生男子ふたり、同学年女子に殺害される。死体は原形をとどめておらず、クラスメイトは悲しみの声を漏らす』

「牛：豚―５：５のミンチでした」

「トマトケチャップとキムチでした」

「地面に落ちた柿とイチジクでした」

「破裂した缶コーラでした」

「あるいはコ●・コーラでした」

おい、最後のやつは一緒――

ズドドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴がいる。その姿は毛を逆立てて怒る猫のようにも見える。――って、あれ？　俺……生きてる？　俺

生きてる！？
よく見れば、桐斗にも傷一つ無い。間一髪、だったのかどうかはわからないが、俺たちと鈴の間に割って入ったのは――なんとあのラウラだった。
その体には黒いＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っている。おそらく、衝撃砲を得意のＡＩＣで相殺したのだろう。しかし、よく見るとあの大型レールカノンがない。

「た、助かったよ、ボーデヴィッヒさん。……っていうかそのＩＳもう直ったのか？」

「コアはかろうじて無事だったからな。予備のパーツで組み直したのだ、同志（とも）よ」

「へぇー。そうなん――は？　とも？」

桐斗のきょとん顔をスルーして、ラウラは俺の方を向く。そしたら――――――

「――むぐっ！？」

いきなり。である。
いきなり、俺はぐいっと胸ぐらを捕まれ、ラウラに引き寄せられ、そしてあろうことか――唇を奪われた。

「！？！？！？！？」

驚天動地。何が起こったのか俺にわかるように教えて欲しい。桐斗や鈴を始め、その場の全員があんぐりとしている。誰だってしている俺だってしている。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁？　婿じゃなくて？」

混乱のあまりそんな冷静なツッコミが出てしまう。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

「いや、それは一部の方々による使い方で一般的ではないんだけど……」

桐斗のツッコミに、ラウラはどうだとばかりに胸を張っていて応えない。というかさっき同志（とも）とか言われてたよな、こいつ。

――ぞくり

「はっ――！？」

鋭い殺気を感じて、俺は身をひねる。

ビシュンッ――！

次の瞬間、鼻先をレーザーがかすめる。

「ああら、一夏さん？　どこかにおでかけですか？　わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがありまして。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」

血管マークが少なくとも五つはついているセシリアが、ゆらりと立ち上がった。その手に握るは《スターライトｍｋ？》。遅れて、ＩＳアーマーが全身を包み込む。

いよいよもってまずい！

俺は廊下へと脱出するため出口へと向かおうとするが、そこではさらなる修羅場が展開されていた。

「桐斗ぉっ！　こっちの話はまだ終わってないわよ！」

「ちょっ、ちょっと待て！　それにはちゃんと事情があるんだ！」

「似たようなことがある度にそんな言い訳を聞くこっちの身にもなってみなさいよ！！！」

「……桐斗。もしかして、今までにもこんなことがあったの？　だとしたら僕、びっくりだよ」

シャルロットの瞳から光が消え、にっこりと微笑む。しかし、その背後には巨大な影がゆらゆらと威圧を放っている。

だがウブな桐斗がそんな質問にあっさりと答えられるわけもなかった。

「え……。いや、そのぉ――」

「あったのかな――？」

「あ、あの……シャルロット？　だからすべては事故であって、決してわざととかでは――」

「あったんだ……？」

「……」

「にこっ」

黙り込んだところで、シャルロットは天使の笑顔とともにＩＳを起動させた。
『高速切替（ラピッド・スイッチ）』――はどうやら必要ないらしい。
パンッ！　と軽く音が響いて左腕の盾がパージされる。そこにあるのは六九口径パイルバンカー《灰色の鱗（グレー・スケール）》。通称『盾殺し（シールド・ピアース）』。

「マジっすか……？」

「うんっ。大マジだよ」

涙目の桐斗に、シャルロットはそりゃあいい笑顔で死刑宣告。確かにこれは怖い。
しかし同時に俺の退路は限定された。
こうなったら廊下への脱出は諦めて、思い切って窓へ向かう。ここは二階だから飛び降りても大丈夫だろう。最悪の場合、白式を展開すればなんとか――
ダンッ！
目の前にいきなり日本刀が突き立てられた。え？　ここって戦国時代？　戦国ＩＳ学園、とか？
俺に対してそんなことをするのは、言わずもがな、ファースト幼なじみの箒さんです。
そのファースト幼なじみが放つ羅刹のごとき気迫に気圧されて、俺は後ずさる。
とすん、と背後からぶつかったのは同じように後ずさってきた桐斗の背中。
つまり、まあ……逃げ場がなくなった、ということである。

「……一夏、桐斗。貴様ら、一体どういうつもりか説明してもらお

うか」

「納得がいくまできっちりと、話していただきますわよ……？」

「とりあえず、覚悟決めなさい」

「大丈夫。痛いのは一瞬だから。ね――？」

まさに四面楚歌。絶体絶命。

「は、はは、ははは……」

「あは、あはははは、はは……」

男子二人の渇いた笑いが木霊する。

だって、もう笑うしかないだろ？　この状況って――。

ドカアアアアアンッ！！！

その日のホームルームは轟音と爆音、そして絶え間のない衝撃でクラスが文字通り揺れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「むーん……」

そこは奇妙な部屋であった。
部屋の至る所には機械の備品がちりばめられ、ケーブルがさながら樹海のように広がっている。
ここは――篠ノ之束、その秘密ラボである。

「お～……」

篠ノ之束。その姿はこれまた異色そのままであった。童話の『不思議の国のアリス』さながらのエプロンと背中のリボンが目を引く真っ青なワンピース。バストを留めるボタンはギリギリまで引っ張られ、白いブラウスの隙間からは妖艶な大人の肌色がのぞいている。
それに加えて頭のカチューシャに機械的なウサギの耳がついているのだから、かなりの問題である。
アリスも白ウサギも同居している。言うなれば、一人『不思議の国のアリス』状態だ。
そんな意味不明ファッションに身を包む彼女の顔立ちは箒と似てはいるが、寝不足によって染み着いた不健康そうな印象は落ちることがないようにも見える。

「あー、終わっちゃった」

ナノ単位のＩＳのプラモデルを完璧な形で完成させてしまった束は、『暇つぶし』を失った。
それを一瞬にしてがらくたの山に変えて独りごちた時、空間に別の音が介入する。

ぱらりろぱらりらぺろ〜♪

「こ、この着信音はぁ！　トゥッ！」

ゴッドファーザーのテーマをかき鳴らす携帯電話にダイブする。がっしゃーんと何かが倒れた音がしたが、束は微塵も気にせずにすぐさま携帯電話を耳に当てる。

「も、もすもす？　終日（ひねもす）？」

「……」

ぶつっ。――切れた。二重の意味で。

「わー、待って待って！」

束の願いが通じたのか、携帯電話は再度鳴り響いた。

「はーい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに――待って待ってぇ！　ちーちゃん！」

「その名で呼ぶな」

「おっけぃ、ちーちゃん！」

「……はぁ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？」

「んー？　何のことかなーん？」

「ＩＳ学園で行われた学年別トーナメントについてだ」

「ああ、あれだね。　ウッフフ～。すごいよねぇ、あのＩＳ学園のデータにハッキングしてトーナメント表を改竄した天才がいたっていうんだもん！　一体どこの天才の仕業なんだろうね～。とんでもない天才だよね～」

「……お前が桐斗に手を出すとは思ってもなかったが、何か気になることでもあったのか？」

「キリト？　誰それ？」

「お前が偽物と呼んでいる奴のことだ」

「はて？　そんな奴いたかなー？　まあ、いたとしても束さんとちーちゃんの間にある愛には関係ないよね！」

束はとぼけているわけでも、ふざけているわけでもない。本当にわからないのだ。

彼女にとって興味のある人間は三人だけ。その中に、そのような名前の人物は存在しない。だから彼女にとっては存在しないも同然の、どうでもいい名前なのだ。

「……なら、ＶＴシステムについてはどうだ？」

「ああ。あれ？　うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？　私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？

すなわち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

「……」

「ていうか忘れていたけど、つい二時間ほど前にあれを作った研究所はもう地球上から消えてもらったよ。……ああ、言わなくてもわかっていると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単――ていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？　私だけ？　あれ、おかしいなぁ」

うふふふ、と笑いを付け加えて、束はつらつらと話す言葉を一度区切る。

「そうか。邪魔したな」

「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんのためならいつでもどこでも二四時間フルオープン、コンビニなんか目じゃないね。五〇六〇喜んで！」

「……では、またな」

ぶつっと電話が切れる。束は名残惜しそうに一度携帯電話を眺めたが、二秒後にはけろっとしてそれを放り出した。

ちゃらら～♪　ちゃらら～♪　あんたら全員、覚悟しいや。バキューンバキューン！　ぐあああっ！　ああっ、兄貴っ兄貴ぃ！　おっだらぁ、タマとったらんかぁ！

しかし突然鳴りだす携帯電話の着信音――しかし、『極●の妻たち』の劇中会話を含めた部分までをも着信音に設定しているのは、流石

にどうかと思われても仕方ないだろう。ついでに言うと束は当作品のファンではない――に、千冬のとき以上の反応を見せる束。なにせこの電話が鳴るのは、初めてのことなのだ。相手は、出る前からわかっている。

「やあやあやあ！　久しぶりだねぇ！　ずっとず――――っと待ってたよ！」

「――。……姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？　君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティヴ・ゼロ）、箒ちゃんの専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能（ハイエンド）にして規格外（オーバースペック）仕様。そして白と並び立ち紫を導くもの。その機体の名前は

『紅椿』――――」

「絶叫のデンジャー・デイズ」（後書き）

ご閲覧ありがとうございます！

「閃光の刃」、皆様の応援のおかげで二巻まで終わらせることができました

ついに、ついに書きたかった三巻目のおはなしが書ける！　ああでも最近オリジナルのネタが出てきたからそっちも整理したい！

……と、こんな中途半端な作者ですがよかったらこれからもよろしくお願いいたします。

さて、第三巻ではついに臨海学校がはじまります！

今までの自分とこれからの自分に悩む桐斗はどうするのか？　一夏やヒロインたちとの関係は？

お楽しみに！！

【主人公・ＩＳ設定】（前書き）

１２／１７更新
これからも少しずつ更新していく予定です

【主人公・ＩＳ設定】

篭手川（コテガワ）　桐斗（キリト）

イメージキャラクターボイス：梶　裕貴

身長：１６９ｃｍ

クセのないさらさらの茶髪。生まれつきである女顔は母親似らしい。ＩＳを動かせる二番目の男として、政府から借金を全額援助するという条件つきでＩＳ学園に入学する。

明るい性格で物腰も柔らかいが、ずっと貧乏生活をおくっていたため金には目ざとい。怒ると人の目を気にせずに行動してしまうふしがある。何も考えていないようだが実は色々考えている、とは本人談。

よく学園内で一夏の写真を売るなどして商売をしているが、儲けのほとんどは千冬に没収される。

女性への免疫はほとんどない。今まで年齢を偽って数々のアルバイトをやってきたので、ＩＳ以外のことならほとんどこなせる。とくに料理が上手で、その腕は一夏にも引けを取らない。休日にはときどき教師の目を盗んで日雇いのバイトをしているらしい。

母親は桐斗が生まれてすぐに亡くなり、父親は中学一年のときに桐斗に借金を押し付けて出て行ったため事実上では両親がいない。小学校卒業の頃の引っ越しは実は夜逃げだったのだが、桐斗は知らなかった。父親のことは完全に見限っている。母親の兄である伯父がよく様子を見に来ていくれていた。実はその伯父の娘で同い年の従姉がいる。

ひょんなことからアルバイト中に見つけたＩＳを偶然動かしてしまいＩＳ学園に入学したが、一夏よりも遅れて世界に公表された。

小学校時代は一夏、箒、鈴と友達だったが、小四のときに箒が引っ越し、さらに小学校卒業と同時に桐斗自身が引っ越してしまった。一夏からは「相棒」という位置づけにされていて、嬉しく思っている。

一夏に憧れを抱いているが、鈍感なところには素直に呆れていて「朴念仁」や「唐変木オブ唐変木ズ」と称している。

しかし、女はみんな一夏のような人間に惚れると考えているからか、自身も女性からの好意には鈍い。箒のことを応援している節がある。実はその憧れは小さい頃から続いている一夏への依存からきているものであって、貧しいがゆえの喪失感から一夏になろうとしてきた。本人はその現実から逃避し続けていたが、学年別トーナメントの事件をきっかけに今までの自分に気づくこととなり、罪悪感と自己嫌悪に苦しむ。

それからは表面上は平静を装おうとしているが、一夏のことは無意識に避けている状態となっている。

ＩＳスーツは一夏とは色違いで、深い灰色に黄色のラインが入ったものを使用している。

◇専用ＩＳ『紫燕（しえん）』

桐斗の専用機。

細身で機動性を重視されたＩＳ。スピードと加速度を筆頭に機体のスペックが『白式』並みに高い。桐斗が初めて装着したとき、通常の専用機なら行われるはずの最適化（フッティング）が謎のロックによって機能されなかったが、千冬は桐斗自身の中にある『戦闘意欲』が鍵になって

いたと考えている。
『白式』ともども、謎の多い機体。
機体カラーは紫。
待機状態は紫色の錠前のついたチェーン。

――近接特化ロッド　《天蕾（あまつぼみ）》

紫燕の主力武器。
刀剣だが、鞘と一体として扱われるため近接ロッドとして表示される。
ＩＳ用の装備としては短い。『雷光演武』使用の際には鞘に納めた状態でエネルギーの充填を行い、金色の刃がスライドするようにして展開させ凝縮されたビーム刃を作り出す。速攻性にも優れている。
桐斗はこれを逆手一文字に構えた我流の居合い切りを得意とするが、箒からは「邪道」と言われた。

――『雷光演武（らいこうえんぶ）』

紫燕の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）。
エネルギーを循環、機体の一カ所に充填・圧縮させることで生み出される、『反エネルギー能力』。もうひとつの『バリアー無効化能力』ともいえる。
《天蕾》に充填させる他、スラスターに充填させて速度を上げるという柔軟性をもつ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5258u/

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉―閃光の刃―

2011年12月17日11時46分発行